
玄武国物語 「私と王様」

mizuka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

玄武国物語 「私と王様」

【Nコード】

N5196T

【作者名】

mizuka

【あらすじ】

金髪美少年のせいで異世界に落ちてしまった橘深雪二十三歳平凡OLと玄武国のぐうたら王様の恋の話 第3章弟の襲来始めました。此処から読んでもOK

落ちた私（前書き）

このお話は青龍国物語シリーズと同じ世界のお話ですが読まなくても大丈夫です。

落ちた私

ここは四神国の一つ玄武国

他の三国に比べてのんびりとした平和な国で亀甲族も人間も仲良く暮らしていました。

何故なら王様は呑気で面倒くさがり屋で争い事が大っ嫌い

そんな人間が何故一国を背負う事が出来るか甚だ疑問だ

しかし王様は天帝様に次ぐ巨大な力を持っていた為、自分に逆らう者や争う者達を力でねじ伏せ黙らせてしまい、その内に誰も争うの止め国中の亀族も人間も王様に習いのんびり気楽に暮らすようになる。

歴代の王がそうだった訳でなく今の王は特別

亀甲族は神族の中でもかなりの長寿で普通でも千年以上は生きるのだが王様は既に千五百年以上生きており、まだまだ若く後二千年は寿命がある。

人間の時は金の髪を引きずるように伸ばし海のように深い紺碧色の双眸を持った精悍な青年でお年頃だが、恋をするのは面倒くさいとばかりに丞相や側近が勧める娘に見向きもしなかった。

そして周りがあまりにも伴侶を持てと煩いので、転神した姿、山ほどの大きさの巨大な亀の姿のまま暮らすようになり、政務の殆どは丞相や側近達に任せて、年に数回だけ人間の姿に戻って仕事をする

だけ、後は王都の人々の生活を眺めながら暮らすと言うなんとも怠け者

因みに王都の側にそびえ立つ高い山が王様

だけど国の全ての民が王様が大好きだった。

何故なら王様が見守ってくれているお陰で平和で豊かに暮らせるのを知っていた。

これはそんな王様の恋の話

「キヤアアアーーーーーアッ」

玄武国の亀王^{きもつおう}、チョングウイは今日ものんびり日光浴をしていると空の上から一人の少女が悲鳴と共に落ちて来た。

かなりの高度から落ちて来たのだろう、凄い速度でチョングウイの鼻さきにめり込む様に落ちた為にかかなりの激痛を感じ鼻先を見ると無残に体の骨が折れて息絶え絶えの人間がいるのが伺える。

このままではこの子は死んでしまい鼻先で腐食して行く事が容易に予想でき、それでは臭くてオチオチ昼寝も出来ない。それは困る
と思い、その子にチョッとばかりの神力を流して体の傷んだ場所を

全て治して上げた。

親切心と言うより死体を捨てるのが面倒なだけだった……

私こと橘深雪二十三歳職業OLは絶賛落下中

バンジージャンプもパラシュート降下の経験もないがこれだけはハッキリ言える。

絶対それらより過酷だと！！

今の私の恰好と言えば部屋着のキャミソールとお洒落な花柄ステテコ

こんな薄着の為に外気と風圧を体感してしまい、風圧が半端無く痛くて体が凍るように寒い

それだけで死にそうなのに下を見れば地上が見えて来て落ちれば確実に死ぬだろう

水面に落ちたとしてもこれだけの高さから落ちればコンクリ同様の硬さだと聞いた事があるので何処に落ちようと死亡決定

私死んじゃうの！！！！

何がいけなかったんだろう

死ぬ間際に走馬灯のように人生を振り返ると言うが今がその時

平凡な両親と兄と弟の五人家族で何の変哲もない人生を送って来た、平凡レベルの小中高大学と順調に進み、就職難のこの時代により好みせず地方の中小企業に就職し早一年……あまりに何もなさ過ぎて自分でも虚しく感じ始める。その間に大恋愛か大失恋、家族の崩壊一家離散など経験していれば少しは花が添えられたのだろうか……

「自分で言うのなんだけど、なんて何にもない平凡な人生なの――
――！」

そう平凡な人生をそれなりに幸せと感じていて不満もなかった。

敢て不満と言えば恋人が一度も出来なかった事

平凡な両親からは平凡な子供しか生まれないのだから容姿は普通で不細工では無いけど告白もされる事もなくした事もない。

私から積極的にアプローチすれば一人は持てたかもしれないが面倒くさかった……会社務めをしていれば婚期に焦った男の一人でも釣れればいいかと樂觀視していたのがいけない

処女のまま死ぬのかと思いながら落ちるまでの経緯を思い出す。

親元を離れアパートで独り暮らしで其の日も何時ものように会社帰りにスーパーで消費期限ギリギリ半額のお弁当と500mlのビールを買って帰宅しシャワーを浴びて夕食を済ませたのは確か八時過

ぎ、テレビで「タケイの家庭の医学」を見ながら自分の健康チェックをしていたのを覚えているが、自分の座っている場所が突然ポツカリ穴が開き落ちてしまったのだ！

その時入れ違いに金髪に金の目の美少年とすれ違う

「あれれ？ ゴメンね、人がいるとは思っていなかったから穴を開け……………」

最後の方は落ちて行った為聞き取れなかったが美少年は私の部屋に入って行くが見えたが直ぐに小さくなって見えなくなり暗闇の空間をひたすら落ちて今に至る

絶対あの美少年のせいなのは確かだ！！！！

責任とって助ける！

死んで呪ってやる

益々地上が近づき平城京な街並みと大きな山がそびえ立っているのが迫って来ており、もう駄目だと目を閉じ叫ぶしか無かった。

「キヤアアアーーーーーアアッ」

グチャ！ ボツキツボツキ……

自分の体がひしゃげ骨が折れる音と壮絶な激痛が襲う

せめて綺麗に死にたかった……見るに堪えない死体を想像し意識が途絶える。

グウ~~~~~ウ

自分のお腹の音と空腹で目が覚める。

「あれ??　ここどこ?」

何故か柔らかな地面に横たわっている自分

確か空から落ちて体がグチャグチャになった筈なのに体はどこも異常がなく痛みもない

「もしかして夢落ち??」

アレが夢だとしたらかなりリアル……夢ならアパートの部屋で目覚めるはずだが残念な事に外で目が覚めたのは確実

夢じゃ無ければ現実しかない

私は落ちてしまったのだ、何処か知らない場所だが地球である事を願うしかない。

今流行の異世界トリップなんて冗談じゃない

平凡な私がそんな目に会うはずがないのだ!!

今でも十分非凡な目には会っているが……

辺りを伺うと夜のように空にはチャンと月が浮かび星が輝いていた。そして下を見ると街の灯りが煌々と輝いており電気の光のようで地球の何処かに落ちたのだろう

だけど私がいる場所はかなり高い位置に居るのが分かるので今無暗に動くのは危険そうで、日が昇るのを待つ事にする。

グウ~~~~~~~~ウ

又してもお腹が盛大に鳴ってしまう。

ハッキリ言ってももの凄い空腹で喉も少し渴いている。この飽食の時代飢えるなんて体験しないと思っていたが正に飢えた飢餓状態、幸い太る体質で無かったのでダイエットの必要のない私にお腹がすぐ状態が長時間続くなど経験がなかった。

落ちる前に食事を終えた筈だけど、丸一日は何も食べていないんじゃないだろうかと思うくらいお腹がすいている。

お腹が空きすぎて身悶えしてしまい、せめて飴玉一個でも欲しい

辺りに何か食べるものが生えていないかと手探り捜すが草一本生えておらず、やたらブニュブニュした変な地面だ。

「あの糞ガキ！　せめて非常持ち出し袋ぐらい持たせろ」

女の一人暮らしなのでもしもの為に用意した持ち出し袋を玄関に置

いていたがこれでは役に立たないと気付く

万が一なんて何時起こるか分からないのだ！

寝ている時、お風呂に入る時、テレビを見ている時の油断した時に襲ってくるのなら、家に居る時は常に非常袋を背負っていないと意味がなかったのだと思い知る

もし家に無事戻れたら常に持ち出し袋を携帯する事を心に誓うのだった。

思考が変だと自分でも思うが全ては空腹のせい

お腹を空かせながら眼下の街を見下ろす。

かなり大きな街だから大勢の人が住んでいるのは確実なので助かるだろうけど、問題は言葉だ英語も怪しいがその他の言語など論外

「日本語は無理でもせめて英語圏でありますように」

自分の今の状況が怖くて涙が出て来るが我慢する。

ここで泣いては体から水分が失われひいては体力も損ない街に降りる為の体力が損なわれるのは避けたい

なぜか冷静な自分と変になってしまいそうな自分がいる。

全てはあの糞ガキのせい

私の平凡な日常を利子を付けて返せと叫びたい

今はこの現実から目を逸らす為にも寝る

腹が空きすぎても根性で寝る！！

寝て翌日の朝日を浴びてあの街に降りて無事私のアパート……は止めて実家に戻る。

それが私の目標

目を閉じて体を丸めて眠りにつく

せめてもの救いはこの地面が温かく気温も暖かい

山は気温が低いはずなんだけど、この際いろいろ無視を決め込む事にするのだった。

そして私は根性で寝た。

落ちた私（後書き）

亀のお話なので亀更新で月に2, 3回になります

非常持ち出し袋と私（前書き）

亀更新のつもりでしたが思いのほか此方を書くのが楽しいので更新します。

非常持ち出し袋と私

翌朝目を覚ますと非常持ち出し袋を枕にして寝ていた。

「!! 何で……これがあるの??」

もしかして神様が私を憐れに思い願いを叶えてくれたに違いない!

今は非常事態なので無神論者の私もこの際、神を信じてしまう

有難う神様!

喉が渴いていた私はペットボトルの水を最初に取り出し一気に飲むと、あつという間に半分になってしまい慌てて止める。

「あつ危ない… 大事に飲まないと」

水は500mlのペットボトルが3本しかないので、これからの事を考えて飲まないといけない。次に缶詰のパンを取り出し急いで蓋を開ける。

パッカン

中にはフカフカのしっとりしたパンが入っている。いまどき乾パンなど入っておらず、長期保存米と言うアルミパックの保存米に水を入れるだけで炊き込みご飯が食べられるという優れ物まで入ってい

るが、今は手っ取り早くパンを食べる。

カプリツと一口づつ味わいながら食べる。

「うつ……!!　　美味しい……」

あまりの美味しさに涙が出てくる。否、これは今の状況が不安で出ているんじゃない!　このパンが美味しすぎるから感動の涙だと自分に言い聞かせる。

そうしないと挫けそうだ

だって目の前は断崖絶壁!!　こんな場所からどうすれば降りられると言うんだろ?

あいにく持ち出し袋にロープは無かった…　一万八千円もしたのに役立たず

何がこれさえあれば安心よ!

金返せ!!

思わず叫びたかったが心の中に収める

だって叫んだ後が虚しそうだったから

これがハイキングなら童心に戻り山びこを楽しんでも良かったが今はそんな気にもなれなかった。

空腹は少し治まり、袋の中身を一応チェックしていくが圧倒的に食

料が少ないような気がする。ガサゴソと中を漁っていると入れた覚えのない手紙が入っていた。

「何だろう??」

よく見れば会社からくすねて来た封筒だった。

「こんなの入れたっけ？」

ガサガサと手紙を開けて中身を取り出せば矢張り会社のロゴが入ったくすねた便箋

そこには筆で書かれた綺麗な楷書体で書かれており、兎に角読んでみる。

「欲しがっていた非常持ち出し袋を持ってきました。ぐっすり寝ているようなので起こすと悪いので置いておきます。追伸、暫らくお部屋を借ります 天帝様より ハート ??????????」

直ぐには意味が分からず目が点状態

天帝様って誰？

もしかしてあの金髪美少年？

待ってくださいよ…… 何故私が非常持ち出し袋を欲しがっているのを知ってるの

それは私の声を聞いていた!!その場に居た

しかも私の部屋に態々取りに戻ったと言う事がこの文面から推測出来ないだろうか

「なんじゃそりゃーーーーー!!!!!!」

私は生まれて初めて雄たけびをあげ、手紙を真っ二つに破り丸めて崖から投げ捨ててやる。

そこまでしてくれるなら何でも私を連れ戻さないの!!

起こすのが悪いと思うくらいなら元の部屋に戻せ

それに人の部屋を使うってどういう事?!

悪意を感じる:

底知れない悪意がああ美少年からぶんぶん臭う

絶対に腹黒だ

その場にいない人間に当たる事が出来ないので地面に八つ当たりする。

地面を思いっきり踏みつけようと足を振り下ろす。

「美少年だからって何をしても許されると思うなーーーー!」

ボスッ!

自分が裸足だという事を忘れていたが、柔らかい地面に足首まで食

い込む。

グニュグニュ

「何この地面… 気持ち悪い」

急いで足を引き抜き踏みつけてみるとポニョポニョした弾力があり変な地面

このまま裸足も危険なので非常袋からスリッパを取り出して履く

流石に一万八千円もしただけはある。

そして改めて辺りを見渡すと眼下には大きな平城京のような四角い升目のように整備された街が見下ろせ中央には宮殿のような大きな建物が見えた。

とても日本には見えない

背後を見れば大きな岩のような切り立った岩の山でこれをよじ登るのは無理そうだし、降りるのも無理そう

岩山から突き出たようなこの場所からどうすれば降りれるのか途方に暮れていると、いい加減尿意をもようして来る。

「人間排泄も大事だよね…」

我慢はいけないのですしかないんだけど、こんな時の為の非常持ち出し袋！！

流石に一万八千円！

携帯トイレ付きなんですよ！ 奥さん！これを買って良かったとつくづく思うので皆さんもお一つ如何ですか？

なんてふざけた事を思ってる場合ではない……

取り出したこの携帯トイレは袋式で袋の口に付いている受け口を局部に当ててするという代物、小学校でした検尿を思い出してしまうのは私だけだろうか……

男性なら良いけど女性にこれはきついですよ！

凄く恥ずかしい！！

周りには誰もいないのは分かっていてもこれだけオープンな空間で排泄なんてした事がないけど、とんでもなく羞恥心を感じてしまう

何これ… もしかして一人羞恥プレイ！！

だけど尿意は結構ひっ迫しているので女は度胸とばかりにステテコとパンティーを降ろし目を瞑りながら携帯トイレで用を足して解放感でホッとしたのもつかの間

ティッシュを出していない事に気付く！

「うっ嘘でしょ」

袋は3m先

なんとなく食べ物が入っている袋の側でしたくなかったのよ

仕方ないのでステテコとパンティーを膝までずり下げたまま移動して袋からティッシュを取り出し素早く作業を済ませて携帯トイレのチャックを閉め、ついに取り出しておいたゴミ袋に入れてからし
ばる。

「こんな姿を誰かに見られたらお嫁に行けない……」

虚脱状態で一人呟くしか無かった。

「なんじゃそりゃーーーーー!!!!!!」

奇声で目を覚ましてしまう。

辺りを見れば日が昇ってまだ幾らも立っておらず、何時も昼まで寝
ているのでまだ眠い

眠いがもう一度寝るのも面倒だし起きるのも嫌だなくと悩んでいると

「美少年だからって何をしても許されると思うな――！」

今度は奇声と共に頭に突き刺さるような痛みを感じどうやら踏みつけられたのだろうか？？

静観しているとなにやらゴソゴソとして聞いた事の無い言葉を呟いていた。

どうやらこの世界の者でないらしい

だから空から落ちて来たのかと納得した。

異世界の少女に興味が出て来たので目を開け上を見ようと思ったが見えない……鼻先なら良かったのだが目の上の方に移動しているようだ。

面倒くさいが神眼を使って観察する。

女は見た事のない衣装を着ておりかなり露出の激しい服だ

数百年ぶりに見る女の肌は染み一つなく美しかったが、いかんせん胸が寂しかった。

まだ子供ならこれから大きくなるかもしれないと少し期待してしまう

顔は美人でも不細工でもない平凡な顔立ちだが、見た事もない黒い髪と瞳を持っているので久しぶりに驚く

勿体ない事に黒髪は肩辺りで短く切られ内巻きに可愛くカールしていた。余なら長く伸ばさせて毎日梳いて上げたい

黒い瞳は大きくは無いが丸くってクルクルして可愛いし、小さな小じんまりした鼻も可愛いし、それに少し厚ぼったい唇も可愛い

何だろ???

この子の全てが可愛くて仕方が無い

ところが、その子はなにやら袋の中を物色して奇妙な袋を取り出しソワソワし始めると突然下穿きのような衣服をずり下げ下半身を露出してしゃがみ込む!!!!!!

なっ、なっ、なっ、なっ、なっ、／／／／／／／／

どうやら小用を足すようだ……余の頭の上で!!

どうやら先程の袋の中にするようだが、うら若き乙女のそのようなあられも無い姿を見てはいけないとは思いつつも見てしまうのは男の性

可愛らし白い桃のようようなお尻を突き出し恥ずかしそうに頬を赤める姿がなんとも愛らしく欲情してしまう。

あのお尻に頬ずりしたい ／／／

こんなにムラムラするのは久しぶり過ぎて何時だか忘れてしまった。

少女は紙を忘れたらしく下穿きを下げたままの状態で袋の側まで移動する時に下腹部に茂る柔らかそうな陰毛が見え、興奮のあまり鼻血が出そうなほど興奮してしまう。

おっ、おっ、おっ、おっ、おっ、おっ、おっ、
~~~~~

この少女は思ったより大人なのかもしれない

ならば余が抱いても問題ないだろうが、この亀の姿では無理だ。

人間の姿に戻ると丞相が口煩いので嫌だが、この娘を王宮に連れて帰れば少しは静かに過ごせるかもしれない。何より早く王宮に連れて帰り思う存分可愛がって甘やかしてあげたい

怠惰な余が他人の世話をしたいと思うのは生まれて初めて

これが恋というものだろうか？！

早く声を掛けて名前を知りたかつたがもう少しこの娘の様子を見守り堪能する事にする事にしたのだつた。



## 非常持ち出し袋と私（後書き）

ほのぼの路線のコメディにしたかったのに下ネタ系になってしまう  
…何故？

不快に感じた人ゴメンなさい。

## 崖っぷちな私

トイレを済まして羞恥心から何とか立ち直り、袋を漁りながらラジオを点けてみる事にした。

何処かのラジオ放送局の電波を拾って使用言語を聞けばある程度の情報が分かるかもしれない！

しかし一つ問題がある……ラジオなんてハッキリいって初心者。

「ラジオなんてどうやって使うの？ スイッチを入れるだけで良いんだよね」

昨今、情報源は携帯があれば十分な時代……ラジオの利用者なんてどれだけいるんだろう？

取敢えず、スイッチを入れてみると変なノイズしか聞こえない

ガッーーーーッガガッーーーーー

どうやらスイッチを入れただけでは無理なようなので説明書を読むしかないようだ

面倒くさ……

ラジオの入っていた箱から説明書を取り出して読んでみると割かし簡単な物

どうやらこのダイヤルを回して周波数を合わすようだけど、AM? FM? 何それ???

よく分からない事は無視してダイヤルを少しづつ回しながら周波数を探る

ガガガキュ—————キィ—————ギィ—————ガツガ—————  
———

10分程粘ってみるけれど全然合わない、もしかして放送局もない辺鄙な場所なの?

でも眼下には大きな街並みが見える。

ラジオは本来の役目を果たさず、嫌なノイズしか聞こえない

ガガガツ—————ガガガツ—————ガガガツ—————ガガガツ—————  
———

うるさい!!

使えない、使えない、 内の課のリストラ寸前の課長より使えない

うるさい雑音が課長を連想させる

この間のミスを私のせいにして皆の前で怒鳴られた事を思い出してしまい、ムカついたのでラジオをおもむろに掴みあげて、課長の顔

を思い浮かべ

「このアナログ頭の役ただず！」

思いっきり地面に叩きつけてやる。

パッコーコーン コロコロコーン

ラジオは壊れたかと思ったが、柔らかい地面にバウンドしながら転がりとうとう崖から落ちてしまった。

まるで未来の課長のよう

少しだけ罪悪感が湧く

確かに課長は嫌いだったが、業績不振で内の課から一人リストラ者が選ばれたのが課長だったのだが……今思えば50代で失業で妻子にも逃げられる予定の可哀想な親父

もう少し優しく……？……いや待って何かに引っかかるのは何？

会社、そう会社だわ

昨晩は火曜日で今朝は水曜日……！！

無断欠勤してしま……

どうしよう、携帯が無いから会社に連絡が出来ないと言うより、ここから帰れるかすら分からない状況

このままでは、リストラされるのは私なの!!!

あの口ばかり達者で仕事が出来ないチビでデブで唯一髪がふさふさなのが取り柄の親父の代わりに私がリストラなの??

「あの課長を救ってしまったの!! 嫌—————」

せめてダンディーなおじ様ならまだ許せたけど

あいつの代わりなんて~~~~

此処へ来て何度目かの絶望感が襲う

順風満帆の平凡人生がこんなに儂い物だったなんてしらなかった。

今は青い空を茫然と見るしか無かった。

空はどこまでも青く雲は白い、この空の下の何処かに日本があるはず

「……………」

暫らく空を眺めるしかなかったが、太陽は私の間上まで昇り何時までもそんな非生産的な事をしていても仕方が無いので、取敢えず降りる努力をして見る。泣くのはもう少し努力してからしようと思う母は子共の頃泣く私に『いい深雪、泣いたからって何も変わらないの、泣く前に考えて行動してそれで駄目なら泣きなさい。そして又立ち上がるのよ!』と事あるごとにスポコンのアニメのセリフのような事を良く言った。

実際泣いたからといって、玩具も買って貰えなかったし、弟の世話も減らないし、お小遣いも増えなかった。家の親に関しては泣き落としては効かないと小さい頃から教え込まれ、大きくなるにつれては可愛い女の子しか男に泣き落としては効かないと思い知った苦い思い出のある私

だから私が泣くのは最後に駄目だと思った時に決めている。

あの課長の陰険な小言にも涙一つ見せ無かった私は女子社員に賞賛されたが、課長には虐めがいのある女だと目を付けられた気がする。だから私は努力して、女子社員のネットワークを使い秘書課のお姉さま方に上層部の方々にそれとなく課長のミスなどや女子へのセクハラ、パワハラを小耳に入るぐらいに囁いて貰ったのだ。その成果なのかリストラの筆頭リストに載った。

地味な入社一年の女子社員が課長のリストラに暗躍しているのを知っているのは極一部の女子社員だけ、それだけあの課長が嫌われているだけなんだけど。

リストラ勧告された課長の怒鳴り声も私相手に増えたような気がしたけどもしかして感ずかれていたのだろうか？

ハッ！

思考が課長に戻ってしまった、今はこの山から降りる事が先決！

非常袋から軍手を取り出して手に嵌め、足に包帯を巻き付ける。そして目の前にそびえ立つデコボコした岩山を横に移動しながら下に降りられないか試す事にする。

体力は普通だと自負しているけど岩山を命綱無しで降りられるかな？  
まずは練習として目の前の岩に登ってみる事にした。

「こんな事なら友達に誘われたフリークライミングジムに行けば良かった」

先ずは手で岩を掴みよじ登って見るが軍手だと思ったより掴みずらいのが分かったので指先を救急セットの鋏で切り落としてやってみるとさつきより使い勝手がよかった。

「これなら登れそう」

唯一痩せている事が自慢の私は支える体が軽いので何とか二メートルまで登り次に降りてみただけでかなり体力を使い、喉の渇きと空腹が酷くなってしまう。

グウ~~~~~

「これは体力と食料がある内に何とかしないと確実に餓死だわ……」

レジャーシートを敷いてその場に倒れ込む。

最悪は降りている最中に力尽きて落ちて墜落死、下は森なので木に引っ掛かり助かる可能性はあるけど無傷とはいかないだろうし

どうやら私の選択肢は餓死か墜落死、運が良ければ助かるの三つしかないみたい

グウ~~~~~

危機的状況でもお腹は空くらしい

非常持ち出し袋からパンの缶詰とアルミパックの長期保存米を取り出して、アルミパックの封を切ってから水を注水線まで入れて60分置くだけで五目御飯が食べられるけど時間が掛かるのが難点

パカッ

その間待ってられないのでパンの缶詰を開けて齧り付くとあつという間に胃袋に納まってしまい、水を少し飲む。

「食料は長期保存米が2パックと氷砂糖100g、水がペット2本……」

食料を考えると降りるとしたら明日かも

この際降りた時の食料は考えない事にする。側には大きな街があるので働き口を見つければ何とかなるし、最終手段として体を売れば何とかなるかと思っている。

女として今一魅力に欠けているのは理解してるけど少しは需要があるはず

少し空腹が治まったのでもう一度岩登りにチャレンジする。

生死が掛かっていれば人間努力を惜しんでられない

今回は3mまで昇りそれから降りてみるが、矢張り降りる方が難しい



これが直角の絶壁なら無理だったけど傾斜がある分足場があつて何とかなる。

それを二回繰り返して降りるコツを何とか掴み止めておく。後はご飯を確り食べて寝て明日に備える事にする。

運動の後の冷めた五目御飯は美味しかった！

夜はエビピラフで朝はワカメヒジキご飯を食べ角砂糖は非常用にする事にした。

今は雑念を捨て、岩山を降りるイメージトレーニングに勤しむのだった。

空から落ちて来た可愛いあの娘は見えていて飽きない

表情をクルクル変え、赤くなったり青くなったりしているさまも愛らしい

大きな袋から色々な物を取り出してとても興味深く、銀色の小さな箱から変な音が鳴り何をする物なのかと見ていたが突然、娘は痙攣を起して投げつけ下に落ちてしまったので結局何の道具か分からず仕

舞い――後で拾っておこう

その内、何やら余の甲羅を登ったり降りたりと遊び始める……矢張り幼いのだろうか？

そのあどけない姿を楽しみ、早く声を掛けたかったが今のこの姿では無理な話で言葉も通じないだろう。心話を使えば良いのだが余の精神波は大きすぎ人間の少女の精神を壊してしまいかねない

何としても少女と意思疎通がしたいチョングウイは少女が時折こぼす言葉と自然と漏れ出て来る思念を探り少しづつ言葉を理解して行った。

何といってもチョングウイは神様、やれば出来る男だが如何せん怠け者で全てが面倒くさいのだから、少女の言葉を理解しようなど天変地異の如く変事なのだった。

少女は遊び終わると食事を始めそれはそれは美味しそうに食べるので、久しぶりに空腹感が襲う

そう言えば最後に食べたのは三カ月前に王宮で食べただけで、それも丞相が食べると煩く言うので仕方なく食べたのだ。

神様なんだから別段食事をしなくても生きていられるのに

「そんな訳ないでしょう！ 陛下の場合は食い溜めしてるだけですから！！」

と怒られてしまった。

本当にうるさい奴だが余の代わりに国政を取り仕切ってくれているのであまり無下にも出来ない。

この少女が毎日食べさせてくれるなら毎日三食をきっちり食べよう

『チョングウイ様、あゝんして』

箸に摘まんだ料理を口に持って来てくれそれを食べる余

パツク

『美味しい?』

可愛く微笑みながらそんな事言われたらご飯を何杯でもいけるだろう。

妄想が膨らみあんな事もこゝんな事したくなる。

そして本日二度目の排泄行為!!!!!!

誰も見ていないのにやたらと恥ずかしがる姿がなんともいえない

うつゝゝゝゝゝゝ 堪らん!!

直ぐにでも押し倒したい!!

我慢が出来ずこのまま少女を王宮に連れて行き余の閨で思う存分味わいたいが……王宮には大勢の男がいるのを思い出す。誰にも見せたくない!

しかも口煩い丞相が少女に色々干渉してくるのは、目に見えており面倒くさいし、奴は余ほどではないが美形：他の男に気を取られては堪らない

確か後宮には数人の側室がしぶとく残り我が物顔で幅を利かしおり、魑魅魍魎女達の巣くう巢窟などにあんな可憐な少女を連れては行かない

王宮も危険なので何処か離宮を建ててそこで二人で住めば良いではないか！

自分の思いに浸っている内に何時の間にか少女は就寝していた。

体には銀色の布のような物が掛けられ袋を枕に気持ちよさそうにスヤスヤ寝息を立て寝ている。

ああゝ 添い寝したい！

余は魂の一部を切り離し人型の幽体になり少女の側に降り立ち、暫らくの間、あどけなく寝る少女の寝顔を堪能してから王宮に向かう。

王都から離れた場所に少女の離宮を建てさせる為に丞相に会いに行くのだ

少女の事を知られないようにどう誤魔化して離宮を建てさせようかと考えながら夜空を飛んで王宮に向かったのだった。



「五月蠅い！ そんな事言うなら亀のままだ」

「冗談です！ 本当に政務にお戻り頂けるのですか……」

「余に二言は無い」

「オォー——屈折二百年この日が来るのをどれだけ待ち望んだか……うっううー」

突然泣きだす。冷静沈着な男だったと思ったがよる年波には勝てないのだろう…年を取ると涙もろくなると言うしな。

「しかし条件がある」

「条件ですと？」

「政務をするにしても王宮では心休まらず寝れない、王都の側にある湖に離宮を建て夜はそこで休みたいのだ」

「分かりました。それなら明日より直ぐ着手しましょう」

この男がこう言えば大丈夫だろう

「任せたぞ。明日又来る」

それだけ言い残しサッサとあの少女が眠る実体である亀の姿の元に戻るのだった。

残された丞相ルイングウィは一人考え込む

「可らしい… これは何か陛下に隠し事があるに違いない」

ぐうたらな陛下が態々私の所に来て離宮を作れなど変な話だ、何時もなら心念を送り呼び付けるのが通常、しかも政務もして離れた離宮へ移動して寝るなど面倒くさがり屋の陛下が考えるなどあり得ない！！ 指一本すら動かすのを億劫がるあの陛下が……

「何かあるな」

二ヤリ

仕事のし過ぎで疲れ果てた顔に人の悪い笑みを浮かべるのだった。

## 崖っぷちな私（後書き）

持ち出し非常袋は非常持ち出し袋でしたので訂正しました。



## 再び落ちる私（前書き）

色々と汚い表現があり不快になるかも知れませんがご了承ください。

## 再び落ちる私

遭難？から2日目の朝を迎えたのだけど生憎の曇りで肌寒い、念のためアルミ保温シートを掛けて寝ておいて正解、薄くて軽いのに保温性は抜群

今の季節は日本の初夏ぐらいで朝晩はキャミソールは矢張り寒いので銀色のシートをショールのようにはおりながら朝食の用意

メニューはワカメヒジキご飯だけど水を入れて一時間待たないといけない。

待っている間は体のストレッチをするが昨日の運動での筋肉痛は無いようだ。

高校時代は陸上部に所属してマラソンをしていたが成績は芳しくなかったけど体を動かすのは嫌いじゃなかった。大学時代は友達に誘われ演劇のサークルに入り裏方に回されたが小道具造りや準備など仲間と騒ぎながらそれなりに楽しめ、今思えばあの頃が一番生き生きしていたかも

舞台の裏方が一番輝いてたなんてどんだけ地味なんだろう

ストレッチをしながら落ち込んでしまう。

どんよりとした空を見ながらたそがれているが時折吹く風の音しか  
せず小鳥のさえずりさえ無い

うゝ誰かと話したい

一日以上誰とも会話しないなんて耐えれない！

地味な印象のせいか初対面の人には大人しいと思われがちだがおし  
ゃべりは大好きなのだ、だから携帯電話は一人暮らしの私には必須ア  
イテムなのに何故あの時、手に持っていなかったんだろう……

持っていたとしても電波が届いたか疑問、ラジオ局さえないようだ  
から。

ここが日本じゃなかったら圏外で先ず通じないけどね

矢張り、恨むべき相手はあのガキ！！

「あの金髪少年戻って来い！ 責任とって迎えに来るのが筋でしょ、  
子供だからって何でも許されるなんて甘い事考えるな！ 親連れてお  
詫びに来るのが筋つてもものよ#\$%・……………」

……………感謝料十億円だー

「……………バカやろー」

ゼーー　ゼーー　ゼーー　ゼーー

自分の持ちうる貧しいボキャブラリーを使いあのガキへの文句と恨  
みを叫んでやったが喉が渴いてしまい仕方なくペットボトルの水を

一口だけ飲む。

「いけない、貴重な水が無駄に消費するだけだった…」

もっと飲みたかったけどこれから山を降りる事を考えると我慢し、代わりにご飯を味わって食べる。

「これが最後の食事？」

せめて此処に冷えたビールの1缶でもあれば少しは救われるのに

食べられるだけ感謝するしかない

ご飯を食べ終わってからシートやゴミを片付けていると、忘れていた生理現象がもようして来る！！

わっわっ　　忘れていた　

どうしよ…　どうしよ…　どうしよ…　どうしよ…

此処は我慢するしかないと判断したが、あちらの方は治まってくれず益々排出を促すようにお腹が痛くなる。

これは出すしかないよう

我慢して漏らしたら目も当てられない上に下着を汚しても替えはないのだから仕方がないと自分に言い聞かせる。

だけど…　だけど…　だけど…　○糞なんて出来ない！！

小の方は許せるけど大だけは嫌！

断固拒否します！！

しかし

「うっ！ 出ちゃうー」

私は持ち出し袋から携帯トイレと紙を取り出し切羽詰まった便意を開放すべくあらゆるものに目と心を閉じた。

[illegible]

終わってしまった――

なんか女としての何かを捨ててしまったような気がする……女は出産を経験すると面の皮が一枚増えると母が言っていた。

此処は厚い皮をかぶりスルーするしかない

古来人間は普通に○糞をしていたんだから恥ずかしい事じゃないと自分に言い聞かせる。

私はこれまでに使用した携帯トイレをまとめてから3重の袋で封印して、この汚物の処理をどうしようかと悩でしまう

此処に置いて行くべきか持つて降りるか

もしこの汚物を他人に見られたら憤死もの！ 誰にも知られない為にも土に埋めて末梢したいけどこの岩山では不可能く

サバイバルって女を捨てるしかないんだと悟ってしまう

汚物の袋を最期の一枚でもう一度包んで袋の一番下に入れてからアルミシート、スリッパ、懐中電灯、アウトドアナイフ、マッチ、ろうそく、ティッシュ、水、氷砂糖だけを入れて後は置いて行き、なるべく身軽にする。

「何が悲しくて自分の汚物を持ち歩かなきゃなんないの……」

持ち出し非常袋はリュック式なのでそれを背負うと何故か少し温かいような気がするのはいのせい

もう私泣いてもいいよね！ 十分頑張ったし―― ○糞はかなり精神的負担を負わせるのだった。

少し泣いてから両手で頬をぴしゃりと叩き活を入れる。

ピシャッ！

「女は度胸よーー！」

そして岩山を慎重に降り始めるのだった。

一歩一歩ゆっくり岩山を降りて行くけど、手より足が痛くスニーカーが欲しい

現代人の足裏は繊細なのだ、ゴツゴツした岩はかなりのダメージで一応は包帯を巻いているが痛いものは痛い

痛いのを我慢し、腕が疲れてプルプルしても何とか半分ほどまで降りて来られ、目を下に向けると森の木々が一本一本確認できる。

これなら無事降りられそうだと安心した瞬間だった。

ビュウウウー——————ウウ

突然強風が吹いて私の貧弱な体を持ち上げる。

「キャア—————」

手に力を入れるのも間に合わず体は舞い上がりそのまま落下する。

お終いだ

今度こそ死ぬんだろうかと最初に落ちた時の衝撃を思い出す。

アレ？ あの時自分の体の骨が何か所も折れる音と激痛を感じたはずだけど目を覚ましたら無傷で骨も折れてなんかいなかった

何で??????

目の前に木々が迫り疑問はそれどころでなくなり恐怖だけになる。

「ヒーーーーー 死んじゃう!!!」

目を閉じ衝撃に備えるしか無かった。

余はあまりの衝撃で思考が停止してしまう。

朝からつぶさに少女を観察し、愛らしい姿を堪能しているとそれは突然起こった。

少女は○便しようとしていたのだ……

普通なら忌避すべき行為で他人の物など見たくもないはずなのに

少女が○便をしている姿に最初は見てはいけないと神眼を閉じたが、見たいと言う欲望に負け神眼を開け飛び込んできた今まさに排○する姿……!!



ぶっ――――

思わず興奮しすぎて鼻血が出てしまう

ウォ――――

何故か興奮しすぎて初めて思考が停止するのを経験してしまったのだ。

その為、余は少女が危険を冒して甲羅から降りようとしているのに気がつかなかったのだった。

「キャア――――」

「ヒィ―― 死んじゃう!!!」

放心していた意識に少女の悲鳴が聞こへ、意識を取り戻すと少女は森に落ちていくところ

「何たる失態!!!!」

余は慌てて神力を使い少女の体を空中に浮かせ何とか地面には激突しなかったが、木の枝に体をぶつけ怪我をして血が出て気を失っているようだ。

亀の姿を辞め人間の姿に急いで変わり、空中に浮いている少女を静

かに抱き上げる。

初めて直に触れるとあまりの軽さに驚くと共に間に合った事に安堵する。

いくら余でも死んだ人間を生き返らす事など出来ないのだ

余の失態でこの少女を失っていたかと思うと胸が潰れるように苦しくなる。

「間に合って良かった……」

痛々しい傷は神力で消し去ると美しく瑞々しい柔らかい色の肌が蘇り、露出の激しい服のせいでその肌の温もりを直に感じ、ささやかな胸の谷間が見えて興奮する。

「このまま王宮に連れて行くしかないのか？」

王宮はまだ連れて行くのは不味い

絶対に邪魔されるのは目に見えていた。

暫らく少女と二人で過ごしたいのが本音

そしてある場所を思い出す。

遙か昔、海辺に建てた別荘があった筈だ、あそこは誰も知らない余の秘密の場所

あそこにしよう

少女の体は華奢で少し力を加えれば折れそうでそっと抱きしめる。

これは余のもの

二度と手放さない

間近でみる少女の顔は一層愛らしく、厚ぼったい赤い唇は余を誘っているようで堪らなく余の唇を少女の唇に重ねる。

ポツタ

少女の顔に数滴の血が落ちる????

「うっ： 鼻血が!!」

何たる事だ：唇を重ねただけで興奮してしまった。

これ以上するにしても少女が目を覚ましてから： 先ず少女に我が伴侶になって貰う事を了承して貰ってかだ。

昔、余を育ててくれた爺やが言っていた。恋には手順が必要で無理やり事に及ぶと女性は嫌がると教えられた。 今までの女は向こうから勝手に来たので手順も何もあったものでは無かったが今回は違う。無理やりやって嫌われては立ち直れそうにない。

今だ気を失う少女を大事に抱きしめながら瞑道を開ける。

瞑道は場所と場所を繋ぐ狭間の道

森の中にポツカリと真つ暗な穴が開き、そこを少女を抱きかかえながら潜り二人の愛の巣となる別荘に向かうのだった。

## 女神様と私

波のさざ波で目を覚ますと私は天蓋付きの大きなフカフカのベッドで目を覚ましていた。

「?????」

しかも横を見れば金髪ロン毛の壮絶に綺麗な女の人が私を抱きかかえるかのように寝ている。

「何なのこの状況?????」

確か私は岩山から降りる時に突風にあおられ落下し、木々の枝にぶち当たりもうお終いだと目を閉じた筈……

多分死んだんだよね??

あっ!! 成程!

此処は天国に違いない、女神様のような美しい人や部屋が高級ホテルのロイヤルスイートのようで女性なら一度は彼氏とお泊りしたいみたいな夢のようなシチュエーション

断崖絶壁から高級ホテルの部屋……

きっと私はあの悪魔のような金髪美少年に地獄に突き落とされ、憐れに思った女神様が助けてくれたに違いないと思い込む事にした。

何故なら、次々起こる異常事態に私の思考は逃避しか選べない――

――  
そう此処は天国なのよ！

死んでしまったのなら、此処で幸せな第二の人生を送るしか道もなく、横には女神様が付いている！

幸せは保証されたも同然よ

グウ~~~~~~~~

安心したせいとお腹が鳴る

「お腹すいた… 喉も乾いた…？」

死んだにしては生きているようにお腹もすくし五感もある。

「考えるだけ無駄、それより何か食べるものが欲しい…せめてお水だけでも」

私は食欲を満たす為にも女神様の腕を外しそっと女神様の体から抜け出し起き上がる。目を覚ますかと思ったがぐっすりと気持ちよさそうで起きる気配はないのでそっとしておく

女神様の美しさは後でじっくり堪能する事にして、取敢えず飢えと渴きを満たす方が先だった。

ベットから降り部屋を降りようとした時、ベットから女神様の黄金に輝く長い髪は床まで垂れ落ち床にとぐろを巻くように置かれ。これを真直ぐ伸ばしたらゆうに5mはありそうだ

「何これ凄——い 生ラプンツェルだよ！ 生！」

流石に女神様、髪まで只者ではない

まるで蜂蜜のように艶やかで美味しそう

思わず舐めたくなる。

髪は流石に食べれないので早く食料をさがそうと部屋を物色するけど、豪華な家具は揃っているが全て空っぽで何も入っておらず、ルームサービスを呼びたくても電話もない

そもそも此処がホテルかは疑問—— 天国だし

女神様を起こして食べ物を出して貰おうかと考えたけど、私がこれだけガサゴソしても一向に目を覚まさないので熟睡しているのだろう

起こして女神様のご機嫌を損なうのは得策ではないので止めておく。

なので部屋を出て誰か人を捜そうと廊下が続くであろう扉を開け廊下に出るが、人の気配が全くしないのでどんどん進んで行くとサンルームのホールのような場所出る。

ガラス張りの大きな窓からは青い海が一望できて正に高級リゾートホテル、波の音で海の側だと思ったけど…天国にも海はあるんだ

「綺麗だけど、私はお腹を満たしたい」

こうなったらキッチンを探して其処で食べ物を貰うしかないけど今のところ女神様しかこのホテルには居ないのではないかと思いはじめている。そんなに大きくないホテルなので直ぐに目的のキッチンらしい場所を見つけた。

「うゝゝ 何もない…」

キッチンには冷蔵庫もなくコンロや水道の蛇口すらない????

戸棚など調べても食器や調理器具はあるけれど肝心の食料品は何も無い！

見付けたのは昭和レトロな井戸水をくみ上げるようなポンプ

試しにポンプを漕いで水が出ないかやってみるがなかなか水は出てこないけど、此処で諦めても喉の渴きは癒されないので数分頑張ると漸く水が出る。

ゴッポ… ゴゴッポ… ジャーッ ジャジャザーザー…

「やった！ 水が飲めるわ」

念のため数分間水を流し続けてから戸棚にあるカップを拝借して、水を汲んで何杯も飲む。

「おっ美味しいゝ 水がこんなに美味しいなんて…」



しかし水を幾ら飲んでもお腹は膨れない

仕方が無いので女神様が起きるのを待つしかないようだ。

とぼとぼと部屋に戻ると女神様は今だスヤスヤと寝ているので、ベツトに登りその寝顔を眺める。

「本当に綺麗な人、今まで会った中で断トツの美人さんだよ… 女神様の前だと私なんか普通以下のレベルかも」

こんな美女の横に並ぶの絶対嫌だな〜と考えていると突然パチリト女神が目を覚ます。

「「！！」」

なんて綺麗な目

女神様の瞳は海のように澄んでいて蒼く深い色をして、引き込まれそうになる。

目を開く事によって、より一層神々しさを増す美しさ

ああー！ 私もこんなに綺麗に産まれたかったと思わずにはいられない

妬んでしまうのは仕方がない、きっと世界中の女達がこの女神様の美しさを妬み男ども媚へつらうに違いない

だけど美しすぎるのは、ある意味目に毒で直視するのが辛い

そして女神様は固まったように目を見開いたままだ???

此方から声を掛けてもいいのかな?

「あっあゝのゝ」

すると私の声に驚いたようにビクッと体を震わせたかと思うと顔を真っ赤にさせて私から離れるように跳びはねてベッドの端に体を移動させた。

「えっ?!」

それは一体どういう反応??

それは男に襲われる乙女の反応であって、私は胸はささやかながらあるれっきとした女なんですけど

決して強姦魔ではない!!

しかし良く見れば女神様は中々逞しい体つき

浴衣のような一重の水色の絹の着物を着た女神様の胸元は大きく肌蹴っていたが私より胸が無かった。

よし! 胸は勝った!!

と心でガツポーズをとるがあまりにも真っ平らだ…まさか男?

違うよね、こんな綺麗な男がいるはずない

いたなら女の敵だ！

女神様は顔を真っ赤にさせたまま口を酸欠の金魚のようにパクパクさせるだけで何が言いたいのか分からない

頭が弱いのだろうか？

この状況を前進させる為にも私が動くしかないみたい

早く空腹を満たしたかった。

「私の名前は橘深雪と言います。女神様助けて頂き有難うございました。助けてもらった上に厚かましい……………えっ！！」

愛想笑いを浮かべながら取敢えず名前とお礼を言い、本題に入ろうとした時女神の鼻から鮮血がほとぼしる。

まさに鼻血が噴き出し口の周りや胸元が血でベツタリと染まり、まるで生肉を食べた食人鬼のようで綺麗なだけに鬼気迫る

こっ怖い……………

この人、変！

だけど命の恩人だし、ご飯が欲しい

機嫌を損ねてはいけない

「大丈夫ですか…… 血を拭きたいので側に寄ってもいいでしょう

か？」

なんだか怖がられて？ いるようなので恐る恐る聞いてみるとコクリと頷いてくれるので、言葉は通じているようで安心する。

日本語が理解されるという事は地球上の何処かのはず

ゆっくり側に行くとかかなり背の大きな人だと分かり驚く：私は161?なので180以上は確実にある。私が膝を付いて立ち女神様が座った状態で視線が合う、多分人種的問題かな

拭く物といえ体には掛けられた布団の上掛けしかないので引きはがしてそれで鼻からの血を拭いて行くけど、渴いた布ではあまり綺麗にならない

「ちょっと待っていて下さい、水を持って来ますから」

急いでキッチンに行き、鍋に水を入れて運ぶついでに包丁も拝借する。

布を切るためだけど万が一の護身用に：

部屋に戻ると女神様は微動だにしていなかったかのようにそのままの位置で大人しく待っていたが、私の姿を見ると下に俯いてしまう

人見知り？

布団カバーを切り裂き、切り裂いた物を鍋に入れて濡らして絞った物を5つぐらい作ってから女神様の顔を綺麗にしていき、次に胸元を拭くが、着物はどうしようも無い。

そしてマジマジと見れば見る程胸が無い……肌に付いた血を拭いて行くと白い肌が段々赤く染まって行き、何とも色っぽい

どうやら女神様は人見知りで恥ずかしがり屋のようだ

そして何やら酷く視線を感じてしまう……

お互い俯いているが女神様の顔は私の頭の上にあるので見られている。

こんな美女にガン見される程の顔でもないはず？　せめて化粧でもしていれば少しはマシだけど生憎今はスッピン

どうせ私は普通以下よ

フン！　胸は私が勝ってるんだから！

虚しい事を心の中で毒づくしかなかった。

女神様は無口らしく一言も話さずもじもじするばかり

人見知りで、恥ずかしがり屋で無口……絶世の美女となると欠点が奥ゆかしい美点に見えるのは何故だろう？

胸も拭き終わり、そろそろご飯をおねだりしてもいい頃あい……お腹が空いて堪らず恥も外聞も無く堪らずおねだりをする。

女神様の顔を見上げ甘えた調子で言う私。

「女神様お願いします。ご飯を食べさせて下さい」

私は目の前にいる人が本物の女神様だと信じて疑わなかった…

きっと魔法のように美味しそうな料理を出してくれると思ってワクワク期待していると

アレ？

ポッスン！

何故か私は女神様に押し倒される？？？？？

これはどういう事でしよう……

気絶した少女を抱きかかえ瞑道を潜り抜けると懐かしい海の別荘にたどり着く。

幼少のみぎり、両親が避暑のため私に建ててくれた別荘で海岸から少し離れた切り立った岸壁の小島に建っている為に人間は近寄れない隠れ家のような場所

誰にも邪魔されず少女と二人っきりで過ごすには打ってつけの場所なのだ

多分此処を訪れるのは六百年以上ぶりだが、屋敷には静止の術を掛けてあるので朽ちる事無くそのままの姿で残されている。

玄関の前に立ち静止の術を解くために扉に神力を流し解除すると急いで寝室に少女を運び寝台の上に寝かせる。

そしてうつとりと少女を眺める。

早く目が覚めないかと待つうちに眠くなってきたので少女の横に潜り込みその華奢な体を抱きしめてみる。

「うっ……う」

抱き締めただけでいってしまいそう……じゃなく心臓がバクバクと波打ち鼻血が出そうになるが耐える内に少し慣れて来る。

少女を抱きしめているだけで心がフワフワと幸せな気分になって来てそして何時の間にか寝入ってしまったのだった。

人の気配で目が覚める。

「「！！」」

目に飛び込んでくるのは余の顔を覗き込む少女の瞳

なんて綺麗な目だろう

時が止まったように黒い水晶のような目に魅いる。

「あっあの」

少女の小鳥のさえずりのような声で呼びかけるので驚いて思わず跳びのいてしまう!!

自分でもみっともない反応に恥ずかしく、言い訳しようと口を開こうとするが言葉が出なく、焦れば焦るほどただ口をパクパクするしか無く、少女に呆れられると思っていると少女は優しく微笑みながら自己紹介を始める。

可愛い頬笑みを向けられ心臓がギュツとしたかと思うと一気に血流が頭に昇り鼻がツンとしたかと思った瞬間鼻血が吹き出る

終わった……

こんな醜態を晒してしまい少女に嫌われたたと思ったが少女は優しく気遣うように声をかけてくれる。

「大丈夫ですか…… 血を拭きたいので側に寄ってもいいでしょうか？」

なんと思いやりのある少女

声が出せないので頷くと、たおやかに近づき血を拭いてくれる!!!



感動の嵐が吹き荒れる。

[illegible]

そして何時の間にか水を汲んで来て濡らした布で手際よく顔や体を拭いてくれ、余は少女の俯き加減の顔をつい凝視してしまい目が離せない

なんて柔らかい肌の色、  
細い首筋に吸いつきたい

押し倒したい欲望を抑えていた余だが

少女が余の顔を見て甘えた声で囁く

「\*@^¥ 食ベ…て下さい」

たっ食べて下さいとはそう言う事だろうか！！！！！！！！！！

据え膳食わぬは男の恥

余は一氣に欲望のまま少女を押し倒すのだった。



## 獣と美女と私

女神様は男でしかも獣だった。

ご飯を食べさせて欲しかったのに反対に私が食べられてしまった…  
…???

しかも経験値レベル共に0の私が一気にレベル99を体験してしまい、女神様…もとい獣は私を貪り尽くし体が離れたのは夜明け間近で私は瀕死の状態

顔は神々しいばかりの美形で金髪碧眼、体は脱げば凄いですよ張りの細マツチョに私の始めてが奪われ、人によっては『なに、その美味しい話』だろう

別に処女を本当に愛した人に捧げる為に二十三年間守った訳でもなく、その機会がなかっただけ

処女なんて重いしサッサと捨てたかったけど、拾ってくれる男がいなかった。

こんな美形に拾って貰えて良かったじゃん！

そう思えばいいんだろうか？



ぐう~~~~~  
ぐう~~~~~  
ぐう~~~~~

盛大な腹の虫の音で目が覚める。

「お腹が空いた……」

お腹が空きすぎて眩暈がする。節々が痛いがこのままでは餓死しそうですねので体を起こすと布団から現れたのは全裸の私だけで、部屋にはあの獣はいなかった。

別に甘い朝を期待していた訳ではないけど

クソー~~~~~ やっぱりやり逃げされた！

贅沢は言わないから、せめてご飯ぐらい食べさせて欲しかった。

自分の服を捜すが見当たらず、体を見れば至る所につけられた鬱血の痕が何かの病気のように気持ち悪い

処女の頃は友達が点けているキスマークに憧れたけど、是はそんな可愛いもんじゃない

せめて水だけでも飲もうとキッチンに向かう為に布団掛けを頭からかぶり、幽霊のようにふらつきながら歩く

歩く度にあそこが熱を持っているのか擦れて痛い

一体何回したのよ

悔しくて涙が出て来る……自分が惨めだ、まるでボロ雑巾にでもな  
ったようだ

這いずりながらキッチンに着き、怒りに任せてポンプを漕いで水を  
出してポンプの口に頭を突っ込んで水を浴びてそれから水を自棄飲  
みする。

ゲッホッ ゲッホッ

むせて咳き込む。

水を飲んでお腹がパンパンになるけど飲み続けたが、流石に逆流し  
そうなので止めた。

「これがお酒だったら良いのに」

水では酔う事も出来やしない

冷たい石の床に座り込み布団掛けで体を包み込んでこれから如何し  
ようか途方に暮れる。

ガチャ

ビク！！

キッチンの扉が開けられ、あの獣が捜しに来たのかと体が強張る。

『誰カイマスカ？』

女の人の声で、耳慣れない言葉が聞こえる。

そーっと顔を調理台から覗かせるとモスグリーンの髪綺麗な女の人が立っていた。

否：待てよ私、昨日も女性と勘違いして酷い目にあってるので警戒してしまう。

ひとまず此処は逃げようと床をしゃがみながら逃げようとしたら、何時の間にか前に廻り込まれ目の前に立ちふさがっていた

『大丈夫デスカ、才嬢サン』

「ひいえー お助けを私は被害者です。獣に襲われ身ぐるみ剥がされたんですー」

パニックってしまった私は目の前の人の足に縋りつき泣き付く

すると女の人は屈んで優しく私の頭を撫でながら良い匂いのするハンカチで涙を拭いてくれる。

珍しいモスグリーンの髪にはひと房の白いメッシュが施され、瞳もエメラルドのように美しく白皙の美貌の女性、思わず女かどうか確認の為に胸を触るとDカップはありそうな胸の隆起があった。

そんな失礼な私の行動にも怒らず、優しくそうに微笑みながら話しかけて来る

『貴女ノオ名前ハ？ 一体ココデ何ヲナサレテイタノデス？』

話し掛けてくれるけどチンプンカンプン、英語、ドイツ語、フランス語でも無いようで全く分からないんだけど

日本人特有の愛想笑いでごまかしているとお腹の虫が鳴く

ぐう~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~  
ぐう~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~

『オ腹ガ空イテイラッシャッタノデスネ。今直グゴ用意致しマス  
ノデ、アチラノ広間デオ待チクダサイ』

美女さんは私を立ち上がらせようと手をとるが体力の限界の私はふらつき倒れそうになるのを、抱きとめたかと思うとそのまま横抱きする。

ええっ!!

あっという間にお姫様だっこされる私

なんて怪力な女性

チョッと抵抗をしようとしたけど体がいう事をきかず、美女さんの腕に身をゆだねる事にした。

しかも私の体重を感じないかのように軽い足取りで私を運んで行き、サンルームのある部屋の座り心地が良いソファーに座らせてくれるとまるで待っているように手振りで示す。

私は頷き静かに待つ事にしたが、食事は程無く運ばれてくる。まる



であらかじめ用意していたかのように次々と豪勢な見た事のない食事が並べられ思わず口からよだれが出る。

ズリュズルルツル

美女さんが箸が差し出され受け取るや否や皿を抱え込んでがつつく

グチャクチャ、ごつくん、ムシヤムシヤ、ガツガツ

乙女の恥じらいも無く料理を次々に胃袋に納める姿を唾然と見詰める美女

それだけ体が飢えていたんです。見逃して下さい！

そして漸く満腹になりお箸をテーブルに置いて手を合わす。

「御馳走様でした」

久しぶりに食べる料理は美味しく夢中で食べた所為かどんな料理かさえ覚えていないけど、日本食と中華の混じったような味付け……此処はどここの国なんだろう？？

気分が落ち着くと目の前の美女さんの観察をする。髪の毛はモスグリーンという自然では有り得ない色：きつと染めているんだろう、そして顔立ちは北欧系だと思うが、着ている服が着物に似ている！

ズルズルとした打ちかけのような着物を羽織っているが内側には一重の着物にロングスカートのようなのを穿いていて何処の民族衣装って感じ

私の記憶にある限りではこんな衣装の人を見た事も無い

嫌な予感がする

混乱する中美女さんは話し掛けて来る。

『オ食事ハ満足頂ケマシタカ。　オ風呂ヲ用意シテアリマスノデ  
オ入りニナツテクダサイ』

??　初めて聞く言語は理解できず、コミュニケーションが取れないので自分の今の状況が理解できないのが辛いけど、先ずは自己紹介

「橘深雪　深雪　深雪」

自分を指しながら名前の深雪を繰り返してみると美女さんが私を指さす。

「ミユキ？」

「オー　イエス！　深雪！」

何故か英語調になってしまいが相手は分かってくれたようで、次に自分を指しながら名前らし単語を繰り返す。

「ルイングウイ　ルイングウイ　ルイングウイ」

何かやたらと発音しづらい名前、言えるかな

「ルイングーウイ？　ルインベイ??　ルイン……??　難しいかも……」

美女さんは発音がずらいと察してくれたらしく

「ルイン、ルイン」

どうやらルインだけで呼ぶのを許してくれたらしい

「ルイン」

「ミュキ」

「ルイン」

「ミュキ」

二人で名前を呼びあっているその時背後で凄いい音がする。

ガンガラガララーラー！

振り向くと強姦魔が驚いた顔で立っており、足下には落したらしい重箱と其処から零れ落ちた食べ物のような物があった。

思わず美女さんが座るソファの陰に隠れると怖い顔で睨んでくる強姦魔は殺気まで放っていてかなり恐ろしい

怒りたいのはこっちよ！！ この獣め

と心の中で叫んでソファの後ろに隠れる。

しかし美女さんは立ち上がり余裕の美しい微笑をうかべ、強姦魔に

何かいう

『コレハコレハ、陛下漸ク才越シデスカ…ミユキ様が才腹ヲ空カセテオイデダッタノデ私ガ御用意シタ料理ヲ召シ上ガツテ貰ッタトコロデスヨ』

『ミユキダト！！　オ前ガソノ名ヲ呼ブナ！　ソレヨリ此処ハ余ト　ミユキ　ノ愛ノ巢ダカラ邪魔モノハ出テイケ！！』

なにやら私を巡り言い合いが始まり険悪な雰囲気の中

空気の読めないあの生理現象が起こる。

どうしよう…水をがぶ飲みしたせいだわ

トイレに行きたいが場所が分からず、聞こうにも二人は言い合いに夢中で私には気にも留めていないようだ。

ソファアの陰に隠れてトイレを捜すべく部屋を出るのだったが、巻き付けた布団掛けがずり下がりに歩きにくい

いい加減服が欲しい…

今の私には早くトイレを探し出す事しか頭に無かった。

ぐう~~~~~~~~ぐう~~~~~~~~

余の横であどけない寝顔で寝る少女からお腹の虫の音が聞こえて目を覚ます。

どうやらお腹を空かせているようだ。考えてみれば昨日の朝に何やら変わった物を食べていたので、丸一日近く食べていないはず。昨夜はかなり無理をさせてしまったのは自覚している……あまりに少女が甘く啼くので我を忘れ貪ってしまった。しかも余が初めての相手と知り益々興奮してしまった。

目が覚める前に美味しい物を持って来て上げようと急いで寝台を抜け出し王都に戻る。

そして戻って見れば寝台の上は空で、慌てて屋敷の中を捜すと大広間の方から声がし急いでいくと

「何故丞相がいる!!」

しかも女に化けているのはどうしてだ???

「ルイン」

「ミュキ」

「ルイン」

「ミユキ」

しかもお互いの名前を呼び合っている……！！！！

ガ  
ア  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
ン  
！

あまりの衝撃に持って来た料理を落としてしまう。

余でさえまだ名前を読んで貰っていないのに何故他の男の名を呼ぶ丞相も丞相だ！ いけ図々しくも我が伴侶の名を余より先に呼ぶは何事だ！！

しかも少女は余を恐れるように丞相の陰に隠れるので目の前が怒りで真っ赤になり、丞相を射殺さんばかりに睨みつけてやる。

「これはこれは、陛下漸くお越しですか：ミユキ様がお腹を空かせ  
おいでだったので私が御用意した料理を召し上がったて貰ったところ  
ですよ」

睨みつけてもまるで意に介さないように余裕の笑みで返して来る。

「ミユキだと!! お前がその名を呼ぶな! それより此処は余とミユキの愛の巣だから邪魔ものは出ていけ!!」

初めて少女の名前を呼ぶが自分の迂闊さにも腹が立つ。

あの時ミユキが名前を覚えてくれた事をすっかり抜け落ちていた……

「かなりあの少女に入れ込んでいるようですが、どういう素姓の者かお教え下さいませんか、伴侶として迎えるにしてもお世話の者や色々用意をせねばなりません」

「お前が知る必要はない、サッサと帰れ!!」

「陛下のように自分の世話すらお出来にならない方が人のお世話が出来るのですか？ お可哀そうにミュキ様は厨房で水を飲んで飢えを凌いで泣いておられました。しかも衣服も無くあのような惨めな恰好をさせるなど酷い話です」

泣いていたと聞き胸がえぐられたかのように傷む

「うっ…… だから余は急いで料理を取りに行っていたのだ」

「それにミュキ様とは合意の上なんでしょうね… 先程の陛下を見た時のミュキ様の態度は解せません」

「ミュキは確かに余に食べてくれと強請った」

「恐れながらミュキ様は此方の言葉が話せない御様子ですが」

「余がミュキの言葉を覚えたのだ」

「聞き間違えられたのでは？ ミュキ様は何日も食べていないかのようにお料理を召し上がっていましたので、もしかしたら食べさせてくれと仰ったのでは」

丞相にそう指摘され、もしかしたらそうだったかもしれないと不安

になる。

ミユキを抱こうとした時少し抵抗していたのを思い出す…初めてなので恥ずかしがっているのだ、初めてだから痛がついているのだと勝手に解釈していたのだが違った???

「余の勘違い?!」

そうだとすればミユキに対して酷い事をした事になる!

嫌われた?????

確認するためにも椅子の後ろにいるミユキと話がしたかった。

「ミユキ、出て来てくれ」

だが丞相が前を塞ぎ邪魔をする

「ミユキ様は後宮できっちりお世話致しますので、私がお連れします。陛下は確り政務にお励みください」

「煩い、邪魔だ退け」

丞相を退けようと腕を振り上げるが軽くかわされてしまうが、その隙に椅子の後ろに回り込んでミユキを抱きかかえようとするがそこに愛しいミユキの姿は無かった。

「ミユキがない!!」

「ミユキ様が!」



二人でミュキがいた場所を咄然として眺める。

もしかしたら元の世界に戻ってしまったのではないかと慌てる

「丞相捜すのだ!! 屋敷中を隈なく!」

「はい、陛下!」

そしてミュキを捜すべく二人で屋敷を掛け回るのだった。

## 現実と私（前書き）

『』は異界語としますが、王様視点の場合に限り「」も異界語にします。

それに伴い前話も修正しました。

分かりにくいかもしれませんがご了承ください。

## 現実と私

「気分爽快！ まさに此処は天国」

漸く捜しだしたトイレは洋式トイレに近く四角い形の壺のようで陶器製の染付の幾何学模様の施された高級感溢れていた。

少し躊躇ったけど切羽詰まった尿意の前で体に巻いていた掛け布を剥ぎ取り全裸で用を済ました時の解放感は正に戦場から安息の地を見付けたかのようにだった。

しかもちゃんと紙まで常備されている。

折り紙ぐらいの少し強めの紙の束が陶器の器に置かれていた。

あそこが昨晚酷使され腫れているので紙を柔らかく揉み解してから抑えるようにして拭き、天井からつり下がった紐を引っ張ると予想通り水が流れた。

「文明万歳！」

感動のあまり万歳をしてしまう私……水洗トイレで人類最高の発明だと実感する。

此処に居れば取敢えず水とトイレには困らない

トイレを済まし便座に座りながら僅かな幸せに浸っていたがソロソロ現実に戻らないといけない

お腹も満たされ、排泄も済ました。

次に望むのはやっぱりお風呂!!

昨夜はかなりドロドロのデロデロ状態で一応強姦野郎が鍋の水を使い体を拭いてくれたけど気持ち悪い、匂いに慣れた私の臭覚は当てにならず、体からは奴の精液の匂いと体臭などが色々臭っているに違いない

!!  
どうしよう! さっきの美女さんに臭いと思われていないだろうか

今さらながら恥ずかしくなる。

全裸で便器に何時までも座っていられないので立ち上がり布を巻きつけようとしたその時  
ガチャ!

「えっ?!」

そして飛び込んできたのは金髪強姦魔

「ミユキーーーーー!!」

目を血走らせて跳びかかってくるので、まさかトイレでプレイ!!

アレだけやってまだするとは…どんだけ性欲旺盛なの!

「させるか！」

相手の顔目掛けてパンチを繰り出そうとしたが血吹雪が飛ぶ

ぶっー

パンチが当たった感じは無かったのに血が何故

少し血を浴びて顔や体にも付着して最悪

そして前にいた筈の金髪強姦魔は床に倒れ鼻から血を噴いて倒れていた。

??????

チョンチョン

足先で小突いてみるが完全に気を失っている。良く理解できないないけど今がチャンス

「逃げない！」

急いで布を体に巻き付け、男を跨いで廊下に出る。

だけどルインさんはどうしたんだろう？ 普通はあっちの巨乳美人を襲うんじゃないの???

世の中、色々な趣味の人間がいるから貧乳マニアなのかもしれない

「どうせ私は小さいわよ!!」

なんてムカつく男だ、絶対許さないんだから

取敢えずご飯をくれたルインさんを捜す事にする。多分彼女は私の味方になってくれるに違いない。言葉が通じないのが難点だけど彼女しか頼る人間がいらないのだから仕方ない

だけど会う前にお風呂に入りたい……絶対臭いよね私

取敢えずお風呂を探索しながらルインさんも捜す。

一番端の方に行くと漸く目的のお風呂場を捜しだし狂喜乱舞

「何この大浴場!! キャー 総大理石の上に噴水？」

湯気が立ち込める中、円形のお風呂の中央には噴水のようにお湯が湧き出ている。もしかしたら温泉!?

急いで体に巻き付けた布を取り去り、子共のようにはしゃいでお湯に浸かると少し温めだけど心地よいお湯の感触が全身を包み込み癒される。

「無色透明、無味無臭の単純温泉と見た。まさかこんな良い温泉に入れるなんて」嫌な事が吹き飛んで行く」 極楽：極楽」

湯船の深さは1m以上あり潜ってみたりして温泉を堪能するが、生憎シャンプーも石鹸も無く布を引き裂きタオル代わりにして体をこするだけだったが、十分さっぱりとして風呂から出ると脱衣所には何時の間にかルインさんが立っていた。

「えっ!! 何時から??」

『 ミュキ様、才湯カゲンハ イカガデシタカ? 今才体ヲ才拭キ  
シマス 』

何かを話し掛けながら大きな布を広げ裸の私の体を手際よく拭いてくれるのを成すがままにされる。

ひえゝゝゝ 見られた、貧弱な胸アゝンドキスマークだらけの体  
ガーーーーンーーーーー

こんなナイスバディーな美女に全てを見られ自分が惨め過ぎる!!  
あまりのショックに固まっている内に何時の間にか服を着せられて  
行くのにも気が付かない

『トテモ良クオ似合イデス。今度ハ赤イ内掛けヲ御用意サセマス 』

「……」

『 ミュキ様? 』

はっ!! ルインさんの呼びかけで我に返ると着物を着せられている。  
る。

絹の白い襦袢にピンクの白い紗の着物を着せられヒダヒダのワイン  
レッド色のロングスカートのような物を穿かされ、その上に濃いピ  
ンクの内掛けのような着物を着せられようとしていた。

「ピッピンクー、似合わない！絶対似合わない！」

ピンクは好きだけど、ピンクなんて可愛い色は小学校以来苦い思い出と共に封印してきた色、思い起こせば小学3年生の春に母がバーゲンで買って来てくれたピンクの可愛いワンピースをウキウキしながら翌日に学校に着て行った。しかし教室に一步踏み込んだ瞬間それが絶望に変わる……クラス一可愛い栄子ちゃんと同じ服を着ておりクラスの数人が取り囲み可愛い可愛いと誉め讃えている真っ只中……そしてクラスの男子が目敏く見付け「おっ！橘も同じの着てるぜ」その一言でクラスの視線が私に集中し数秒の沈黙……あそこで誰かが正直に「栄子ちゃんのが可愛い、深雪ちゃん似合わない」とハッキリ言ってくれた方が笑い飛ばせたのに、心優しいクラスメート達は微妙な空気が漂いピンクのワンピースの話題は打ち切りな

った。

その優しがある意味、私にはピンクのワンピースは似合わない可哀想な同情をヒシヒシと感じてしまったのは被害妄想だろうか

先生が同情の目で見るのは気のせい？

その日一日は顔で笑い心で泣きながら授業を受け二度とピンクは着ないと心に誓った。

『 ミュキ様 オ袖ヲ通シテクダサイ 』

濃いピンクの内掛けを差し出しにこやかに袖を通すように促しているであろうルインさん

拒否したいが贅沢は言えない立場



仕方なく袖を通し羽織り、たそがれるしか無かった。

『マー トテモ可愛ラシイ〜 陛下モ オ喜ビナサイマス 』

何か言っているけど意味不明だけどお似合いですね〜と心にも無い事を言っているんだらうとスルーしておく

『ソレデハ、今カラ王宮ニオ連レイタシマスカラ全テ私ニオ任せクダサイ。ミユキ様ハ何モセズ陛下ニオ仕エクダサルダケデイイノデスヨ』

「ルインさん？」

何か話し掛けるけど全く意味が分からない、当分此処にお世話になるとしても少しは言葉を覚えた方が良さそう

ルインさんは私の手を取り歩き出すし、壁に手を当てるとポツカリと真っ黒なトンネルが現れる。

「エッエー！ー！！ 何これ！！ 超魔術？？」

しかもルインさんはそのトンネルに入って行き手を取られた私は付いて行くしか無いのだけれど未知の物を怖いと思うのは当たり前

「ルインさん、そんな得体の知れないトンネルになんか入りません！ 止めて下さい！」

拒否しようと立ち止まろうとするが、凄い力で引っ張られ真っ暗なトンネルに引きずり込まれる。

『大丈夫デスヨ、怖イノデシタラ私が運ンデサシアゲマス 』

何かを言ったと思ったら、あっという間に抱き上げられお姫様だっこされながら光も無い暗闇の中をルインさんは迷う事無く歩いて行く。まるで宇宙空間のように上下左右が感じられず方向感覚が麻痺してしまいただ怖くルインさんにしがみつくしかない

そして此処が地球では無く漸く異世界だと知る。

本当は最初っから気付いてはいたのかもしれない

だけど平凡な私は受け入れられず此処は地球だと思いこんだ。

だってそうしないとやってられない実際

全てはあの金髪美少年に穴に落とされたのが運のつき

遭難するは、金髪の強姦魔に遭うわ踏んだり蹴ったり

地球に戻るんだろうか……

この真っ暗なトンネルのように、これからの人生お先真っ暗だと感じながら今は目を瞑るのだった。

ミユキが姿を消して慌てて別荘を捜し回っていると不浄場より声が聞こえ急いで戸を開ける。

「ミユキーーーーー!!」

直ぐさま抱きしめようとするが、便器から立ち上がろうとする姿は全裸

しかも昨夜余が付けた鬱血の痕が白い肌に花卉のように散っており、何とも艶めかしく

ミユキの可愛いらしいめくるめく痴態を思い出し思わず興奮し鼻から大量出血と共に気を失い倒れてしまった。

何たる不覚

後悔先を絶たずとは此の事

意識を取り戻せば別荘はもぬけの殻

丞相がミユキを後宮に連れて行ったに違い無い!!

あんな妖怪婆達が住む後宮に連れていかれたら、ミユキが虐め殺されてしまう。

直ぐさま瞑道を開けて王宮に戻りミユキを取り戻さない

こうなれば邪魔な丞相は始末するのもやぶさかではない

「見ておれ丞相、人の恋路を邪魔する者の末路を！」

## 丞相の眩き

何とも貧相な娘

第一印象はそう感じた。

稀に見る黒い髪と黒い瞳以外は平凡な顔で体も細くまだ少女の体

しかも服を着ておらず布を纏い髪はずぶ濡れ

だが露出した肌には至る所に赤い鬱血の痕が至る所に散っている

あのマグロの陛下が自ら少女の体を貪った証

どうやら陛下はこの少女に本気だと確信する。

あの夜、陛下が去った後直ぐに密偵に陛下を見張るよう命じた翌朝、直ぐに報告があった。

陛下の体から落ちた少女を助け何処かに立ち去ったという

指一本動かすのを億劫がる怠け者の陛下なら、普段は見捨て放置するようなお方が助けた上に何処かに連れ去るかなり手間の掛かる事をなさるのど私の知る限りないと断言しよう。

離宮を建てようなどと仰ったのは伴侶様のためなら納得する。

陛下がとうとう伴侶をお選び下さったかと喜んだが、王宮にお連れしてくれるものとばかり思っていたら昼になっても姿を御見せにならない

焦れた私は陛下を捜すが、瞑道をお使いになった為に行方が知れない

一日が経って漸く突きとめた陛下の居場所は幼少時代のお気に入り  
の場所に連れて行くとは……陛下が自ら封印した思い出の場所

陛下の御心を動かした少女

断然興味が湧く

念のため陛下の嫉妬を買わないように女性の姿で別荘を訪れば陛下の気配はないが微弱な人の気配はする。

気配を探りながどんな美しい少女かと期待して捜しだしたのがこの少女

平凡でしかも言葉を解さない

この世界の言葉は多少発音が違うが共通語、他の言語などあり得ないはず。

どういう事だろう??

最初はガツカリするが陛下の心を動かしたのは紛れも無くこの不思議な少女

何かあるのかもしれない

そして突然少女のお腹から響き渡る腹の虫

多分お腹が空いて食料を捜しにこの厨房を訪れたのかもしれない：  
：陛下は何をしておられるのだ？ 伴侶にしようとしている少女を放置したままなどと

昔から気の利かない鈍いお方だから致し方ないかと諦め、代わりにこの少女に食事のお世話をしたのだが

一体この細い体の何処にあの大量の料理が消えて行くのかという勢いで全てを食べつくしてしまう：一応陛下の分もあったのだが

少々下品な食べ方ではあるが、これからの教育でなんとでもなると目を瞑っておく

そして自分をミュキだと名乗る。 ミュキ、何とも不思議な響きの名前で初めて聞き、私の名を告げると発音がしずらいらしい

一体どこの国の人間なのだと疑問ばかりが湧いてくる。

お互い名を呼び合っていると目の前に現れる陛下

その目は嫉妬で燃え上がり私を射殺さんばかりの殺気

足下には少女の為に用意したであろう料理が散乱している！！

あの陛下が他人の為に食事を運ぶ！！

信じられないが目の前の少女が陛下の伴侶になるのは間違いない

だが、ミュキ様は陛下を確認するや否や脱兎の如く私の後ろに隠れてしまい、陛下を恐れている様子？？？

昨夜はお互い愛を確かめ合った者同士には到底思えない

それとなく陛下に質して見れば陛下の勘違いが判明

どうやらミュキ様にとって無理やりな行為だったと推察される。

しかし陛下に迫られながらなびかない女がどのようなとは：

兎に角このミュキ様をこちらで押えれば陛下は真面目に政務に就かせられる。

ミュキ様に漬け込むなら今しかないだろう

どうせなら男の姿で誑し込んだ方が良かったかもしれないと後悔しながら陛下とやり合っていると、何時の間にか消えてしまった。

なんとも変わった少女

忽然と消えうせたミュキ様を二人で捜していると



不浄場で鼻から血を出して気を失っている陛下を見付け驚くが命に別条は無いようなので放置しミュキ様を捜すと浴場で呑気ん湯浴みをしている。

まさかミュキ様が陛下を！！？？

臆病かと思えば大胆

全く掴めない少女だ

それなりの衣装を着せると少しは見れるようになり、可愛いと言えるくらいにはなる。化粧を施せばそこそこにはなるだろう。

まだ女性としては未成熟だが後数年すれば化ける可能性もある。

それまでにこの国の王妃様としてトコトン磨き上げねば

折角陛下がその気になった少女

逃がさないように絡め捕えよう

取敢えず陛下の手元から引き離せたので、この隙にミュキ様に取り入るのが先決

これからの事を思うと腕が鳴る

これで念願の陛下の御子様のご尊顔を目にする事が出来るのかと心躍らせるのだった。



## トラウマと私

あれからルインさんにお姫様だっこをされて辿り着いた場所は何とも雅な場所だった。

トンネルと抜けるとそこは正に平安京の貴族の屋敷のような立派な木造建築の建物

どうして先は洋風だったのに此処は和風？？

でも日本でもホテルと旅館があるんだからこういうのもアリかもしれないと納得しておく

だけど私が通されたのは離れのようなけど、実家の5LDKの家より遥かに大きな建物で通って来た庭も正に日本庭園……もしかしてタイムスリップ？？ にしては金髪やモスグリーン色の髪は可笑しい

ルインさんに色々質問したくても言葉が通じない

折角おしゃべりしたくとも話せないなんてストレス

こういう時は甘い物が食べたい。

さっきの食事にはデザートが無かった……そう言えば非常持ち出し袋に氷砂糖が入っていたっけ……？？ あれ……？？ あれ……？！

しまった……！

私は大変な事を忘れていたのに気付く、あの中にはビニール袋で封印した物があったのを

「キヤー ルインさん降ろして下さい！ アレを見られた大変なんです！！」

『ドウサレタノデスカ、ミユキ様？』

綺麗な黒光りする床に降ろされると、脱兎の如く外に飛び出し非常持ち出し袋を捜しに行こうとして気付く

元いた場所が分からない……

そもそも此処が何処なのかすら分からない状況で捜しようが無い

多分落ちた時に木に突っ込んだ時に枝に引っかかったんだろう

私はその場にへたり込んでしまい一気に気分はブルー

「ウツウェーン もう嫌！ 何が悲しくて自分の汚物を捜さなきゃなんなのよー ウツウウ…… こんな所嫌…… 家に帰りたい！ 此処は私の世界じゃない…… ヒック ヒックエエー…… エンエンエー……」

私は恥ずかしい事に子供のように泣いてしまう

もう訳の分からない状況にパニック一度泣いて不安を吐き出すしかない

泣いてやる！

泣きじゃくる私にルインさんは優しく抱きしめてくれるとDカップの胸に丁度顔を埋める位置

これは中々気持ち良いかもしれないと泣きながら顔を擦りつけ感触を楽しむ

せめて私も此の半分でもあればと思うとまた悲しくなり涙が出て来る。

『 ミュキ様 ソンナニ泣イテハ私モ辛イノデ泣キ止ミマシヨウ 』

ルインさんが優しく慰めてくれて背中を撫でてくれるけど、言葉が分からなくて又悲しくなりまるで涙のスパイラル

「ヒィィィン 涙が止まらない うええええん ええん」

久しぶりに大泣きしたせいか止め方が分からない

そこに又してもあいつの声が外から聞こえる。

「ミュキィィィ」

しかも私の名前を呼んでいる！！？？

するとピタリと涙が止まる。

心身共に傷ついているのに又あんな行為を強いられて堪らない



後50?の間合いの時に強姦魔は突然動きを止め私を凝視したので  
チャンスとばかりに頬を張り倒す。

バッチーン

「あんたなんか大っ嫌い!! 側に寄るな」

あいつは真っ青な顔になり信じられないような顔になる。

思い知ったか、平凡を舐めるな!

これだけの芸術的に美しい顔を打つなんて美への冒瀆に感じるけど、  
きつと私が初めて

私の処女とこいつの顔を打つ事を秤にかけたら他人はこいつに同情  
するだろうけど、人間は平等!

「幾ら顔が良いからどんな女でもあんたに抱かれないと思ったら間  
違いなんだからね! このすつとこどっこい!」

「ミユキ…」

情けない声で私の名前を呼ぶ、だけど私はいつの名前すら知らない  
いし、一体どこの誰? って感じでムカつく!!

「私に名前すら教えないで、私の名前を勝手に呼ばないでよ!」  
するとハッとした顔になる。

「済まなかった… 許してくれ…」

そう詫びると、男の海のような蒼い目からまるで水晶のように美しい涙が零れる。

普通ならこの美しい涙を見て全ての人間が許してしまうだろうけど、私のトラウマが発動する。

忘れもしない中二の時だった。栄子ちゃんと久しぶり同じクラスになったのが運の尽き、更に可愛さを増した栄子ちゃんは学年のアイドルに登りつめ、休み時間には他のクラスの男子が見に来るぐらい。一方私は其の辺の女子中学生だけど友達と普通に学校生活をエンジョイしていた。中二となればお年頃、私にも片思いだけどクラスに好きな人が出来て色気ずいていた。

しかし幸せは続かない、それは文化祭準備中に起こる：床で劇の背景の絵を描いていたので、筆を洗うバケツも側に置いてあった。それを栄子ちゃんが誤って倒してしまったせいで、私も水を被った上に絵まで水浸し：思わず涙ぐんでしまうと栄子ちゃんが大きな瞳を潤ませポタリポタリと真珠のような涙を零し泣きはじめる。「ごめんなさい：深雪ちゃん：わざとじゃないの：許して：」この状況で怒る訳にもいかず良いのよと言おうした時、憧れの矢沢君が間に入ってきて「泣いてるだろ！許してやれよ！」私の涙は綺麗にスル―されてしまい栄子ちゃんを慰める矢沢君！！好きだった男子は栄子ちゃんが好きだったらしくその後付き合う事になった二人！私はずぶ濡れな上に悪者にされ、苦い失恋を味わい踏んだり蹴ったり、涙は女の武器なんて嘘っぱちだと思い知った日だった。

今日の前でハラハラと泣く男の顔が栄子ちゃんの泣顔に重なる。

ムカつく！



心の狭い人間と言われようが私は許さない

私はこいつに強姦された被害者

栄子ちゃんの時も私が被害者であって、決して加害者では無いのに被害者と加害者の立場が逆転してしまうのは不条理よ！

美形は正義なの！！

「男のくせに泣かないでよ！ 泣けば皆が許してくれると思わないで！」

男はそれを聞いてビクリとしてから、慌てて袖口を涙を拭う姿が少し可愛いと思ってしまう。

はっ！ いけない見た目で絆されたら負けよ！

これだから美形は油断ならない

「私はルインさんにお世話になるから、私に付き纏わないで！ 行きましょルインさん」

何故か笑いをこらえているルインさんの手を取り奥に入って行くのだった。

ミュキを連れ去られ逆上した余は丞相の神気を辿りながら瞑道を開けて急いで追いかける。

以外にも後宮では無く丞相の屋敷のようなので一安心する。

しかし何故自宅に????

はっ!!

まさかミュキのあまりの可愛さに自宅に囲う気か!!

「ミュキーーーーーーー」

丞相めー 妻がありながらミュキを愛人にしようなど

しかも気配がするのは本宅では無く離れ

囲う気満々ではないか!!!

離れに入り廊下を突き進むと丞相に抱きしめられている。

しかもその顔は泣きはらしたかのように瞼が腫れており、丞相に手籠めにされそうになったに相違ない!!

一気に詰め寄り丞相に攻撃しようとする、卑怯にもミュキを自分

の前に突き出す。

「うっ！　／＼／＼」

目の前に跳び込んできたミュキの姿は正に可愛い花の精霊のように愛くるしい装い

そのまま抱きしめようとするミュキが泣きながら余の顔を平手打ちにする

バツチーン

「あんたなんか大っ嫌い！！　側に寄るな」

ガ――――ン！！

完全にミュキの言語を理解した余には、まるで静止の術がかけられたように時がとまる。

「幾ら顔が良いからどんな女でもあんたに抱かれないと思ったら間違いないからね！このすつとこどっこい！」

「ミュキ……」

「あんたの名前すら教えないで、私の名前を勝手に呼ばないでよ！」

そう言われ、始めてミュキに自分の名前や素性すら知らせていない事に気付く

「済まなかった… 許してくれ…」

余はあまりにもミュキの意志を蔑ろにしてきたのかもしれない

名すら知らない男に突然襲われたら誰もが嫌なのは当たり前だと今さらながらに気が付く

ミュキに嫌われていると思い知り絶望感が襲い

両親が死んで以来の涙が頬を伝う

しかしそれは更にミュキの痛に障ったようで更に怒鳴られる。

「男のくせに泣かないでよ！ 泣けば皆が許してくれると思わないで！」

確かに男のくせに泣くなど女々しい……

急いで袖で涙を拭うが、どうすればミュキに許して貰えるのか考えねば

今まで他人の機嫌などといった事が無いのでどうすればミュキに好かれるかなどとは思いつかない

「私はルインさんにお世話になるから、私に付き纏わないで！ 行きましょルインさん」

そして無情にもミュキは振り返りもせず余の前から丞相の腕をとり立ち去って行く

その代わり丞相が振り返り声をかけて来る。

『陛下、ミュキ様ノ事ハ 私ニオ任せ下サイ。 必ず私が ミュキ様ノオ心ヲ陛下ニ向クヨウニ致シマスノデ。 ミュキ様が落ち着イタラ王宮ニ戻リマスカラ、王宮デオ待ちクダサイ 』

余裕の笑みでそう言う丞相

癪だが今のままでは嫌われるばかり……丞相に任せるしかない

懷からミュキが着ていた服を取り出しミュキの代わりに抱きしめて匂いを嗅いで寂しさを紛らせる……

余にはどうしていいのか分からず、取敢えず王宮で大人しく丞相を待つしかない

ミュキに出会い、生まれて初めて知った喜びは一気に苦悩に変わってしまったのだった。

## お屋敷と私

強姦魔は私に言われた事がショックだったのか追ってこない

きつと産まれて初めて女にすげなくされて落ち込んでいるのかもしれない。しかも私のような普通な女に振られるなんて相当なダメー  
ジだろう

平凡な人間は挫折だらけだけど、あいつは今までそう言う事味わった事のない人種だ

フッフッフッーざまあみろ！ 少しでも優越感に浸れる。

どうせ私は卑屈よ

でも人間なんてそんなもんよと開き直る

○糞を経験した私は一皮むけた

通された部屋は太い柱は黒い漆塗りのように黒光りし壁は白い漆喰のような土壁、床は畳みではなく板張りだがこちらも黒い漆が塗られていて美しく磨かれ渋い光沢を放っている。

中央には巨大な切り株の輪切りを使用したテーブルに木製の背もたれの無い椅子が置かれていてそこに座るよう促される。そして用意されていたお茶のセットでルインさんは楽しそうに私に急須でお茶を入れてくれている。

『ドウゾ オ飲ミクダサイ ミユキ様 』

「ありがとうございます」

相変わらず言葉は分からない

アレ？ そう言えば強姦魔は言葉が通じて会話もしたような？？？

どういう事？

訳が分からない

取敢えずルインさんが淹れてくれたお茶を味わうと、それは正に煎茶の味と香り

煎茶はやっぱり日本のお茶、心が落ち着く

目の前ではニコニコ美しく微笑んでいるルインさん

考えてみればこの人も得体の知れない謎の人物

さっきも助けてくれるのかと思えば私を盾にした様な気がしたのは気のせいかな

所詮は美形、油断していると足下を掬われるかもしれないけどこの世界で頼れるのはルインさんしかない

日本人必殺技、曖昧スマイルで対応して乗り切ろう

『 ミュキ様    コチラデ少々オ待チクダサイ    オ世話ヲスル者ヲ連  
レテマイリマス    』

「？」

ルインさんが何か話すのを取敢えスマイルで対応すると立ち上がり部屋を出て行く

他人の家なので勝手に動き回る訳にもいかずお茶を飲みながら待つしかない

本当に此処は異世界らしいけど、どうすれば元の世界に帰れるんだろう

あの金髪美少年なら私を確実に元に戻せるけど、今一当てに出来ない気がする。

そもそも私の世界に何の用があるんだろう？

しかも私の部屋を使うってどういう事？？

このまま私が会社に出勤しなければ、会社から実家、実家の母がアパートに確認に来るだろうからその時私の失踪を知り大騒ぎになるはず。その前に戻りたいけど既に無理だろう

アパートを訪れた母が金髪美少年と出くわし私の事を問い詰め、反



省した少年が迎えに来るのを待つしかないのかもしれない

まさに人生の落とし穴に落ちた気分

平凡だった人生が如何に幸せだったか思い知るのだった。

あれやこれやと考える内に一時間程過ぎた頃だろうか、ルインさんが戻って来てその後ろには高校生ぐらいの綺麗な女の子が背後にいた。

女の子の髪は今時の茶髪に目の色は緑、普通レベルの美人さん

もしかしてこの世界の顔のレベルはかなりのハイスペックなのだろうか

これじゃ私は普通以下のレベルじゃないか

私の卑屈さが増しそうで嫌になる。

『お待たせしましたミュキ様 この者はミュキ様のお世話をさせていただくリユーリンです』

『リユーリンです。ミュキ様 不束者デスガ精一杯才世話サセテ頂キマス』

少女の最初の言葉がリユーリンと名前っぽい

「リユーリン？」

『はい、ミュキ様』

呼んでみると返事をしてくれるので正解のようだ

よく状況は飲み込めないけど笑ってこの場を流すしかないのだった。

こうなったらなる様になれと、この状況に流さを身を任す

久しぶり戻った王宮の余の寝室に戻った途端、誰かが扉を叩いて開けると煩いので結界を張って誰も入れないようにする。

勿論、雑音も入ってこない

ミュキに嫌われ生きる気力すら湧かず、寝台にミュキが着ていた服を綺麗に伸ばして並べその上で横になり少しでもミュキを感じたかった。

どうすればミュキを手に入るんだろう

一度はこの手に抱いたのに

爺や言う通り手順を踏まなかったのいけなかった

余の名前すら告げず

愛しているとすら一言も言わなかった事を今さらながらに思い出す。

だけどあんなに気持ち良さそう何度も絶頂を迎えていたからミュキも余と同じ気持ちだと勘違いした。

ミュキに叩かれた頬がまだ痛むようだ

産まれて初めて他人に叩かれたがミュキが許してくれるなら何度でも打たれたい

毎日打たれたっていい

こうなったら最初っからやり直さないと

先ずミュキに謝り、自己紹介をしてから愛の告白をしよう

余を受け入れてくれるまで何度でも愛していると囁こう

その為にも丞相が来るのを待ち、ミュキを宥めて貰って会わせて貰うのだ

丞相に借りを作ると扱き使われそうだが致し方ない

全てはミュキを得るため

ひとまずは丞相が戻ってくるまでミュキの服の匂いを満喫しながら眠りにつく事にするのだった。

ミュキ様を侍女に任せ陛下の下に急ぐ

しかしミュキ様は面白いお方、あの陛下のご尊顔を何の躊躇いもせずお打ちになるとは中々剛毅なお方

クツクツクツクツク

今でも陛下の間抜けな顔が笑える！

今頃落ち込んでいらっしやるだろう……これを機に積年の鬱憤を晴らさねば

その為にもミュキ様をとりいらないとならないが、ミュキ様との言葉の遣り取りが出来ないのは問題だ

陛下は既にミュキ様が操る言語を解しているご様子なので、言葉を訳す為の神具を作って戴こう

瞑道を陛下の寝室に繋げて行くと案の定寝台で寝ている。

全く惚れた少女にすげなくされて泣いているかと思えば寝ているとは……陛下らしいと言えば陛下らしい

よく見れば何か小汚い布を抱きしめているが見え、興味に惹かれその布を取ろうとした瞬間、陛下の手が私の手を掴み取るので驚く

ガシッ！

「！！陛下！起きておいでだったんですか！驚かさないで下さい」

陛下はガバリと起き上がり、布を大事に抱きしめ怒ります。

「おのれ！ミュキのみならず、ミュキの服まで奪うつもりか！許さんぞ」

ミュキ様の服？？？ どちらかというと下着に見えるが

「恐れいますが陛下…何故ミュキ様の服を抱きしめていらっしゃるのですか」

「ミュキの代わりだ…本人に拒否された以上、余にはこれしか残されていない」

怒りから一転、肩を落とし項垂れさめざめと言う

一見一途に見えるが実情は少し変態臭を放っているのは気のせいかな？  
しかし陛下の趣味がミュキ様のような普通の少女だったとは盲点  
道理で国から集めた美女に見向きもしなかったのかと納得する。

「ところで陛下、ミュキ様とはどうやってお知り合いになったのですか？」

「空から落ち着てのだ……」

「人間が空から降ってくるなど面妖な… 誠ですか」

「異界から落ちて来たようだ」

「異界人！ それなら言葉が通じない訳なのですね」

あの黒髪も黒い瞳も異界人ならば納得する。

しかしどうやってこの世界に落ちて来たのだ？ 神力もない普通の人間が

不思議な少女としか言いようがない

「ところでミュキは如何して居る？ 余の事を何か言っていないかったか？！」

「言葉が通じないので分かるはずがありません。そこで提案なのですが陛下はミュキ様の言葉を解されるなら、ミュキ様の為に此方の

言葉を話せるようになる為の神具を贈られたでしょう。きっとミユキ様もお喜びになりますよ」

「ミユキが…… いや、駄目だ 造らん！」

「何故ですか!？」

「そんな事したら大勢の者とミユキが会話してしまうではないか! ミユキと会話出来るのは余だけで十分！」

「陛下…… そんな風ですと益々嫌われますよ」

「うっ そうなのか!？」

「そのように束縛されると女性は男性を鬱陶しく感じるもの、逆もしかり、陛下がミユキ様以外の女性にほかの女性と口を聞くなの言われたらどう思われますか？」

普通の女性なら陛下にそんな事言われれば腰砕けものだろうがミユキ様には逆効果な気がする。

「そんな女は御免だ……!! ミユキもそうなのか」

情けない声を出す陛下。 此处で畳みこんで神具を造らせねば

「そうです! ミユキ様も言葉が分からず難儀しているご様子。そこで陛下がお造りになった神具をお贈りになればミユキ様も陛下を見直すはずです」

「成程……」

「言葉が通じればミュキ様に如何に陛下が素晴らしいお方か私共がお教えいたします。いかがですか？」

「分かった！ 余はミュキの為に神具を造るぞ！」

陛下は叫ぶと両手を合わせて神力を練り始め徐々に掌を離していくとその空間に金色の光が凝縮していき、一つのリングを形成して行き再び両手を合わせて閉じ込めて口から呪語を呟く

「 $\alpha \dagger \S \Xi \Phi E \Psi \theta \S \circ ? \S \Theta \S \Theta \nabla \circ ? \S \Theta \Xi \Phi E \Psi \theta$   
 $\S \Theta \nabla \dagger \S \Xi \Phi E \Psi \theta \lambda X$ 」

私にも聞き取れない

再び掌を開くとそこには金色に輝く一つの腕環

陛下はそれを私に差し出す。

「ミュキに渡すがよい」

「必ずミュキ様に」

「必ず余からだと伝えるのだ」

「分かっております」

「それとミュキの前では男の姿に戻るな！ 赤子であろうと男を近づけてはならん！」



「はいはい」

あまり長居しない方が良いでしょうだ

「近日中にミュキ様を陛下の下にお連れしますので暫しの御辛抱を」

「頼んだぞ丞相」

「それでは陛下失礼致します」

預かった金の腕輪を大事に懷に仕舞い、瞑道を開けミュキ様の待つ屋敷に帰るのだった。  
瞑道の暗闇の中、金の腕輪を懷に陛下のミュキ様に対する執着は驚かされるばかり

少し甚振ろうかと思ったがあまりにも陛下がお勞しいので止めておいた。

あの少女の何処にそんな魅力があるのやら??

兎に角陛下がその気になったのは喜ばしい

何とかミュキ様に陛下を受け入れて貰わねば

しかし陛下のあのご尊顔を目にしてなびかないとはある意味驚嘆する。

顔しか取り柄のない陛下

どうミュキ様にお勧めしようか悩むところ

矢張り顔か？

## 金のプレスレットと私

アレからリユーリンちゃんに家の案内をして貰い、トイレと風呂の場所を脳に確り叩きこむ。今の状況に陥り始めてトイレの重要性を知った私

○糞がどれだけ精神的ダメージを人間に影響を与える事か！

だって、した物がそのまま、悪臭を放ってそこに存在し続けるなんて有り得ない！！

汚物は水と共に流れて行くのが常識の現代

小学校の検便だって母親に頼んだ私

泣き落としが効かない母に弟の保育園のお迎え3ヶ月と引き換えにして貰ったくらい

それ位嫌なのよ〜

昔は汲み取り式なるトイレが存在していたらしく、便を溜める大きなタンクと便器の穴がモロ繋がっており下を見下ろすと家族の汚物がもろ見えだったらしい

それを知った時の衝撃は言葉では表せない

現代に産まれた事をどれだけ感謝したか！

古代でも川に丸太を組み立てそこで用を足して天然の水洗トイレが存在していたのに

恵まれ過ぎた現代の私には○糞なんて許容できない行為！！

でも○糞を経験してしまった私

おかげで？トイレの便座が冷たいなんて許せないし、臭うなんて以ての外だった私が、この世界では便座と水洗である事だけで神に感謝してしまう

人間変われば変わるものだ

しかも此処の浴槽は憧れの檜風呂！！

しかも微かに香る硫黄の匂い

天然温泉！！

まるで高級旅館

これだけで、あの強姦魔にされた事を洗いながせる事が出来てしま  
う安い私

しかも今日の前で振舞われている豪華な料理の数々

少し残念なのはアルコールが無い事だけど、これで文句を言ったら  
罰が当たる。

言葉を覚えるとしたら真っ先にお酒と心に決める。

お酒こそわが人生の最大の友

平凡な人生の鬱憤を晴らしてくれる良き友だ。もちろん人間の友達も大事だが言葉の通じないこの世界で友を作るなどかなり先の話だよ  
ね

強姦魔とは言葉が通じるらしいから奴に教えて貰うのが手っ取り早い  
見てくれが極上過ぎてあまりお近づきになりたくないのが本音

しかも自分のあんな姿やこんな姿まで見られた相手……

自力で覚えるか悩ましいところ……どうしょ？

『 ミュキ様、お口に合いませんか？ 』

私が箸を止め考え込んでいると心配げに何か問いかけてくれる。

「リユーリンちゃんありがとう」

取敢えずニッコリと笑いお礼を言っておくとリユーリンちゃんもニ  
ッコリと微笑む

直感的にこの子は良い子だとわかる。

くそっく 可愛いじゃんっ！！

そこヘルインさんが戻ってくる。

しかもかなりご機嫌な様子で、まるで咲き誇る薔薇が舞っているよう

『 ミュキ様 陛下からの贈り物をお持ちしました 』

何かを話しながら、私の右手をとり懷から出したきた金のブレスレットを手首に嵌めてくれる。凄い！ 金？ 純金？ ずしりと重い  
感触

アクセサリーはあまり着けないので本物が判断できないけど、細かい文様が刻まれ高価なものに思える。

「こんな高価なも貰っても良いんですか!？」

「ええ、それは陛下からミュキ様への贈り物ですから遠慮なくお受け取りください」

「陛下から？ 陛下って!!!」

エッ!!!!!!

今ルインさんと普通に会話した????????

「陛下って何方です？」

恐る恐る、確かめる為に問いかけてみる。

「この玄武国の王であらせます」

「そうであらせますか??」

思わず変な言葉になってしまったけど、おおー 言葉が分かる!?

「ルインさん!! 何故突然言葉が通じようになったんですか!??」

「今、ミユキ様が右手にお着けなさった腕輪のお陰ですよ」

「この金のブレスレットが!! 凄い翻訳機!?! こんな小型の高性能な翻訳機があるなんて結構文明が進んでいる??」

「翻訳機とはよく意味が分かりませんが、その金の腕輪には陛下が施した術によってミユキ様が此方の言葉を理解して話せるようにしたのです」

「えっ! 私って今日本語喋ってないの???」

「はい、ちゃんと此方の言葉をおしゃべりなってますよ」

自分では日本語を喋ってるし、ルインさんも日本語にしか聞こえない  
いや……既にこれは異世界トリップのセオリー

考えてはいけない

「有難うございますルインさん。言葉が通じなかったのですごく  
助かります!」

「いえ、これは陛 「ルインさん本当に有難うございます」…」

あえて厄介な名称は無視するためにも矢継ぎ早に質問をする。

「それより……ルインさんは日本なんて国知りませんよね？」

「日本？　この世界は四神国と海洋国しかありません」

分かっていても落ち込んでしまう……

「信じて貰えないでしょうが私は違う世界から落ちて来たんです。本当なんです！」

頭が可笑しい子と思われそうだけど、今の私の現状を理解して欲しいくて打ち明けるが、ルインさんの反応は予想と違っていた。

「ミユキ様が異界の方と言うのは分かっていました。でもどうやってこの世界に落ちてこられたんですか？」

ええっ！分かっていたの。それなら話は早いしかも。しかも落ちた理由をよくぞ聞いてくれました。

ここぞとばかりに話し始める。

「聞いて下さいルインさん！！私がこんな目にあったのは全て金髪美少年の所為です！　仕事から帰って部屋で寛いでいると私の座っている所にポツカリと穴が開いたんです。信じられます床に突然穴が開くなんて、私は成す術もなく真っ暗な穴に落ちてしまったんです。せめて50cm横に座っていれば落ちなかったのに、50cmが私の運命を変えてしまった……そして私が落ちる瞬間金髪美少



年とすれ違ったんですけどそいつなんて言ったと思います??」

「はぁ……何と仰ったのです」

「人を穴に落として置いて『あれね? ゴメンね、人がいるとは思っていなかったから穴を開けた』ですよ! 全然悪いと思っていない軽い口調で、そもそも悪いと思ったんなら落下する私に手を差し伸べて引きあげるくらいしそうなのにサッサと私の部屋に上がり込んで私は落ちて行くしかなかったんです。酷いでしょう!! 絶対あのガキは確信的に私の下に穴を開けたんじゃないかと思うんです。ルインさんもそう思いませんか!!」

「金髪の美しい少年?」

「はい、一瞬のすれ違いですけどあの顔は生涯忘れません! 目の覚めるような金の髪に金の瞳の少年で、最初は天使かと思ったけどあいつは悪魔です!!」

「まさか天帝様?!」

「そうです天帝と名乗るふざけたガキなんですけど……えっ? お知り合いですか?」

あの悪魔はこの世界の人間だったの! だから私がこの世界に落ちたのかと納得する。

「天帝様の名を知ってるのですか!!」

「それが酷いんですよ! 私が落ちたのは変な岩山だったんですけど仕方なくそこで一晚寝て過ごしたんですけど、朝目を覚ますと非

常持ち出し袋が置いてあったんです!」

「非常持ち出し袋ですか??」

「地震や災害があった時に役立つグッズの入った袋なんですけど、その中に手紙が入っていて差出人に天帝って名前が書いてありました。信じられます!一度戻って来て置いて私を元の世界に戻すどころか、私の部屋を借りるってどういう事です!! 私はあの岩山に一人取り残されて大変な目に遭うし、山から自力で降りようとすれば風に吹かれて落ちちゃうし!助かったと思えば女神様だと思った金髪碧眼野郎にレイプされ、もう何が何だか……うっ……」

段々感情が高まって来てしまい、涙ぐんでしまい、そしてタイミン  
グ良くルインさんが私の手をとる。

「お辛い目に一杯遭われて来たのですね……でもこれからは私が確  
りミユキ様のお世話をさせて貰いますから安心してお任せ下さい」

「ルインさん! 甘えて良いんでしょうか?」

「はい」

優しく頷く姿はまるで観音様のように後光が差している。

「有難うございます…… ビェーンエンエン」

この世界に来てから泣いてばかりいるなと思いながらも久しぶりに  
人に甘えて泣かせてもらった私

そして泣きながら子供のように寝てしまったのを知ったのは翌朝目

が覚めてからだった。

ミュキ様の話により天帝様が関わっていようとは思ってもよらなかった。

天帝様が故意にミュキ様をこの世界に落としたかは疑問だが、一度は戻られたのは助ける意志があつての事だと思いが敢てミュキ様をこの世界に残された気がする。

もしや陛下の伴侶とし適した者と判断されたのだろうか？

私の腕に泣き疲れて眠るミュキ様

見た目は大人しそうだが、良く喋るお方のように色々予想を裏切る。

「ミュキ様の寢床は整えてあるか」

「はい、直ぐにお休み出来るようにしてあります」

「宜しい、ミュキ様は当分この離れでお暮らしになりますから失礼があつてはなりません。確りお仕えしなさい」

「はい ルイングウイ様」

リユーリンは人間ながら良く気の効く娘、下手に亀族の娘など世話役にしては危険だ

用意した寝室にミュキ様を横たえさせて母屋に戻り妻にミュキ様の事を説明しなければならぬ。離れに少女を住まわしいらぬ誤解をされては堪らないし、陛下を嫌っているらしいのでミュキ様のお心を何とか陛下に向けて貰える助けをして貰わねば……

女同士の方が良からう

しかし陛下をそれまでどう扱うか

ぐうたら寝ていてくれた方が事を運びやすのだが、ミュキ様への執着は凄まじく暴走すれば誰にも止められない。

ミュキ様を何時までも私の屋敷に留めるといらぬ嫉妬も買いそうなので、早く離宮の建設を始めた方がよさそうだ。

後宮には今だ三人の側室様が留まっており、ミュキ様が危険な目に遭うのは分かり切っているので最初っから諦めている。

あのお三方にミュキ様の存在が漏れるのは時間の問題なので何かが起こらない内に安全を計らなければ、人間のミュキ様は脆く脆弱な体、ミュキ様が傷付けば陛下が荒れ狂いどんな被害がでるかも想像がつかない。伴侶になれば陛下の力で守られれば安心なのだが……まだまだ先だろう

何れも亀族の有力者の姫ばかりで当分死にそうもないので、一層の事始末した方が簡単

だがそれでは親達が黙ってはいないだろう。

何れも国の重職につく者ばかりで全く面倒だ

ミユキ様が普通の少女なら陛下に一目ぼれして実に簡単な話なのだが

伴侶になれば誰も文句を言えない

妻なら何とかしてくれないかと綴るような思いで、ミユキ様をリリースに任せ母屋へと急ぐのだった。

## お嬢様な私

目を覚ますとリユーリンちゃんの涼やかな声が降ってくる。

「お早うございます。ミユキ様」

えっ！！ リユーリンちゃんが日本語話してる？？？

寝ぼけた頭で漸く、金のブレスレットのお陰で此方の言葉が理解できるようになったの思い出す

「おはよう リユーリンちゃん……」

頭をポリポリ掻きながら昨夜はルインさんの胸で泣いてそのまま寝てしまったらしい

だけど服は浴衣のような着物に替えられていた。

どうやら色々迷惑をかけてしまったみたいで申し訳ない

「お顔をお洗い下さい」

洗面器のような物を膝の置かれ水差しを持つリユーリンちゃんに促され両手を差し出すと水差しから水を注いでくれるのでその場で顔

を洗い、直ぐさま手拭が差し出され顔を拭く。

なに??？ この至れり尽くせり!!

庶民の私には馴染めない行為

「ありがとう、だけどこれからは自分で水場で洗うから」

するとリユーリンちゃんの顔が青ざめる。

「申し訳ありませんミユキ様、何かいたら無い事があったのでしょうか」

その場に跪くりユーリンちゃん

ゲッゲッ！ なにこの反応は??？ そう言えば私の事を様づけだー！

「そうじゃないのよりユーリンちゃん、怒ってるわけじゃないから」

そう言うのと安心したようにリユーリンちゃんが立ち上がり、着替えや朝食の世話を甲斐甲斐しくやってくれる。

私の世界の女子高生とは大違いだ、きっと良いお嫁さんになるだろう

どうやらリユーリンちゃんは私に付けられたメイド設定なんだろう……  
ルインさんはきつとかなり高い身分だと思うし、私はそのお客様扱いなんだと推察する。

弟の嵌っているラノベでよくある設定だと、異世界に落ちた男女は

美形平凡分けへだてなくハーレムに状態に陥るらしい。実家に偶に戻るとシスコン気味の弟が良く異世界トリップの素晴らしさ？に熱弁を奮い、何れ自分も体験したいと痛い事を言う弟を生温い目で見守った。お互い平凡に産まれた為にラノベのような設定で自分がチートな力を得てハーレムを体験したいのだろ……その気持ちは痛いほどよく分かるけど現実を見て欲しいと常々思っていたが

まさか自分が体験してしまうとは……出来るなら弟と代わりたい

そうになると、弟がああ金髪美形にレイプされるの……

おおー BLだ……！

それは私より不憫かも……男の身で穴を掘られ……私より色々な意味で痛いかもしれない

あくまでも仮定だけど、ああ金髪強姦野郎はこの国の王様で、これまたありがちに見た目平凡な私に一目惚れ

そして将来はこの国の王妃様になって幸せに暮らしましたとさ……  
おしまい

なんて有りがちな設定

寒すぎる……！！！！

これはあくまでもラノベの異世界トリップのセオリーであって私に当て嵌まるとは限らないのだ。先ずはこの世界の知識を知るべきだろう



目の前でお茶を入れてくれているリユーリンちゃんに質問する事にする。

「リユーリンちゃんは私の事をどう聞いているの？」

「遠い異国からいらっしゃった大事なお客様だと伺っております」

無難な回答

「そうなのよ、だから私この国の事何にも知らないんだけど教えてくれない」

「申し訳ありません。ルイングウイ様に止められているのでご容赦を」

ルインさんが？ 何故だろう…不都合な事でもあるのかもしれない

「いいよー いいよー ルインさんに直接聞くから」

一介の使用人でしかないリユーリンちゃんが主人には逆らえないだろうから、問い詰めては可哀想だろう

一年しか働いていないけど縦社会の辛さはよく分かる。私の働いていた会社はもろ同族会社で上層部はお貴族様と皮肉られていたくらいで上の命令は絶対だった。あの課長も親族だったらリストラには上がらなかったろ

「お茶をどうぞ」

「ありがとう」

「それでは御用がおりでしたらこの呼び鈴をお鳴らし下さい」

そう言ってハンドベルの小さいのをテーブルに置いて部屋を出って言った。

リユーリンちゃんは良い子だけど、私との関係はかなり隔たりがある。

言ってみればお嬢様とメイドのように対等ではない。

どっちがメイドかって？

フン！ どうせお嬢様とは言い難い容姿と物腰、私の方がメイド役だろうけど生憎お嬢様役の私

だから、幾ら私がフレンドリーに接してもリユーリンちゃんはメイド役に徹する。

プロだ！！

私としてはもっと親しげに付き合いたいけど無理を言っでは可哀想だろう

お嬢様役は暇だ、普段なら目覚ましに起され慌てて身だしなみを整え菓子パンとコーヒーで朝食を済まして満員電車にもまれて通勤してデスクでお仕事中的はず

それが優雅に今は暇を持て余している。

これからの事を考えようにもこの世界を知らないのにどうすればいいか判断できない

ルインさんが来ればもう少し状況を掴めるんだけど

そこへリユーリンちゃんが戻って来て来客を告げる。

「ミユキ様、奥方様が御出でした」

「奥方様??」

どうやら新キャラ登場のようだ

きつとまた美形だろうと想像し、どんどん自分の容姿のレベルが低辺に下がるのを覚悟するのだった。

「ミユキに会いたい！ 会いたい！ 会いたい〜」

広い寝台の上でゴロゴロ転がりながら悶えていると髪が体に巻き付

いてしまい身動きが取れなくなってしまう

「くうく　なんて鬱陶しい髪だ！」

意味もなく伸ばし続けた髪だが流石にこの長さになると邪魔だ

一体何時から切るのを止めたんだろうと思い起してみる。

そうだった……爺やが死んで以来誰にも切らさなかったのだ

「爺やが居てくれれば……きっとミュキの事に親身に相談してくれたのに」

余の父親は人間だった為に、亀族の姫だった母親と婚姻を結んで命の半分を分け合った為に余が子共の頃に死んでしまってから爺やが育ててくれた。

爺やが死んで全てがどうでもよくなった気がする。

王にだってなりたくなかった

怠け者の余が王になどなってしまったのもあの根性の腐ったいじめっ子の天帝の所為だ！

ああくく　ミュキが側に居てくれたら頑張って王様をするのに

何時もミュキが横にいて余が亀王印を押す手にミュキが手を添えてくれば幾らでも押すのにくく

金の髪です巻き状態の情けない姿で顔をデレデレさせていると流石の美麗な姿も一歩引いてしまう

「陛下……何をしておられるのですか… 王宮に戻られたなら少しは仕事をして貰わないと困ります」

声の方を向けば丞相が不機嫌そうに突っ立っている。

「おおゝ 丞相、ミユキはあの腕輪を喜んでくれたか！」

髪を直ぐさま振り解き、丞相に跳びかかる！

「はい、言葉が話せるようになったミユキ様はそれは嬉しそうに色々話して下さいましたよ」

色々！ しかも嬉しそうに！！ 許さん！

「おのれゝゝ 余を差し置いてミユキの全てを知ったのか！！」

絞め殺そうと手を首にやろうとすると一膳の箸が突き付けられる。

「これはミユキ様がお使いになったお箸ですがどうしましょう？  
いりませんよね」

ポイ！

あろうことか後ろに向かって放り投げるので、床に落ちる寸前でそれを受け止める。

「なんと情けない姿…」

「お前がさせたんだろう！」

箸を懷に大事に仕舞いながら丞相を睨みつける。

「防衛策ですよ、陛下を訪れる度に嫉妬で殺されてはたまりませんからね」

「煩い！ それよりミュキの話をせよ」

「それが、ミュキ様の話を聞くと驚いた事に天帝様がお関わりなっていたようです」

「何故天帝が！？」

丞相の話を聞きミュキは天帝の所為でこの世界に落ちて来たらしい

「余は初めて天帝に感謝したぞ〜」

「そんな事ミュキ様に言わないで下さい。本人はいたく天帝様に立腹の御様子」

「そうなのか……」

「それと陛下にもかなりご立腹されており、陛下のお話をしようとする話を逸らされてしまいます」

「うっうううう　丞相何とかしてくれ〜〜〜」

泣きついて縋り付く

「今、傷ついたミュキ様のお心何とかしようと妻に手伝って貰って

おりますので陛下はそれまで決してお会いにならないでください」

「そんな~~~~」

「王都の外に陛下とミュキ様の新居を急いで作らせますので、それまで御辛抱を」

「嫌だ！」

呆れたように溜息をつく

「はぁ…… そのように子共のようではミュキ様にも呆れられますよ」

自分でも子供ポイとは思うがミュキ限定だ

「うるさい！ ミュキに会わせろ！ 何とかミュキと会えるようとり図れ！」

子供のように駄々をこねると、丞相は案外簡単に了承する。

「わかりました」

「え？ 本当か！」

「その代わり今まで溜まった書類に王印を押して貰います」

「仕方あるまい……この部屋に持って来るが良い」

矢張りタダではなかった、きっと余の要求を見越していたに違いな

いがミユキに会う為ならそれ位なんでもない

「それでは直ぐに持って参りますのでお待ちください。それとそれが終わるまではお会いできませんから」

「分かっておる」

数分後、丞相は山のような書類の束を持ちこみ、余が唾然としている内に風のように去って行った。

「くくくくく 絶対三日で終わらしてやるくく」

書類の山を目にして王印を押し続けるのだった。



## お嬢様な私（後書き）

補足 四神国の神族が正式な婚姻を結ぶ時お互いの寿命を等しく分けあいます。人間と神族の場合人間はかなり寿命が延びますが神族の場合寿命を半分近く減らす事になります。もう少し詳しくはムーンライトノベルズ投稿の「龍王の伴侶」を読んでみて下さい。

## 牡丹の君と私

リユーリンちゃんが案内してきた奥方様なる人物は予想道理の美形キアラ

真っ赤な燃えるような髪を結い上げ宝石の散らばった髪飾り、蒼い愁いの含んだ目も色っぽい、立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花まさに牡丹の君と呼びたい

本当にこの世界は美形しかないの……

もしかすると私のような平凡の方が希少価値なのかもしれない

「初めてお目にかかりますミユキ様、私はルイングウイの妻でアンチヨングウイと申します」

お声まで美しい！

しかもルイングウイさんってルインさんの事では????? しかも妻

えっ~~~~~ 女同士の婚姻が認められた世界

つまり男同士もあり！なんて性におおらかな世界

ルインさんと牡丹の君、ビジュアル的にも十分いける。

薔薇の世界に片足突っ込んで、百合の世界はあまり興味は無かったけど思わず胸がドキドキする。

妄想の世界に浸ってしまいボーっとしてしまい牡丹の君が呼び掛ける。

「ミユキ様 どうかなさいましたか？」

ハッ ！！ いけない

「すみませんー 牡丹の君があまりにお美しくて見惚れてしまいました」

「まゝ 牡丹の君とは私ですか…… ミユキ様にそのように褒めて頂いて嬉しいですわ」

頬を染め恥じらう姿は色っぽくて可愛い

ルインさんの時といい少しこっちの道に目覚めて来たのだろうか

そう言えば以前小説で男にレイプされ男性恐怖症になった女性が同性愛者の女性に誘われそっちの道に進み幸せに暮らすというのを読んだ事がある。その時はあまり共感出来なかったけど今なら少し分かるような気がする。

「はい、どうか牡丹の君と呼ばせて下さい！」

「そうですか……どうぞ好きにお呼び下さい」

少し戸惑い気味だけど了承してくれる。

「ところで私に何の御用でしょう」

「ミユキ様が退屈しているのではないかと話し相手にといい参りましたの」

「はい、非常に退屈でした」

「オホッホッホッホ ミユキ様は面白い方」

「この世界の事を知りたいので色々教えてください」

しかしスムーズにコミュニケーションがとれるって素晴らしい！

全てはこの金のブレスレットのお陰、陛下Ⅱ強姦魔の造ってくれた物らしいが慰謝料代りに有り難く受け取っておくわ

そして牡丹の君から得た情報は正にファンタジー

しかもあの金髪のカキはこの四神国の創造神で一番偉い神様らしいが、あんなのが最高神なんてこの世界も終わりだなと思ったけど牡丹の君の前ではおくびのもしない。

天帝は普通崋山という大陸の中心にある死海と言う大きな湖の真ん中に天を突き刺すようにそびえ立つ崋山に住んでいるらしい……全く自分の世界をほったらかしにして私の世界に来るなんてなんて迷惑な神様だ！

牡丹の君にも天帝の目的は分からないらしい

そして驚くべき事に目の前に居る牡丹の君も神様！！

何でも亀の神様らしい

亀と言うより花の精霊みたいだけど

この世界には大陸は一つしか無く国が四つにわかれており、私がいる玄武国、青龍国、鳳凰国、白虎国になっており、海には海妖族が住んでいる。そしてそれらの国を治めているのが各国の神族で国民である人間を支配しているようで、人間は一般的にリユーリンちゃんのように茶髪に緑の目が一般的で私のような黒い髪に黒い目は殆どいないらしい……やっぱり

異世界トリップの定番だ

しかも四神国なんて有りがちな設定で、あまりにも独創性のない世界、もしかやこれは自分の妄想の世界かもしれないと疑ってしまうが、弟のようなラノベの世界にどっぷり嵌っていないし平凡を愛する私が異世界トリップを望んでもいない

「そしてこの玄武国を立派に治めている亀王きおうであらされるのがチョングウイ様です」

なんか話題がヤバイ方向に行きそうなので逸らそう

「へーそうですか。……それより牡丹の君、私は元の世界に戻りたいんですけど方法を知りませんか？」

一番知りたい事を聞く

「帰りたいのですか？」

「当り前です。好きでこの世界に落ちて来た訳では無いですし、向こうには大事な家族もいますし仕事もあるんです」

「恋人はいたのでしょうか？」

何故そんな痛い質問を？

「うっ…… 産まれて二十三年間一度もいた試しがありません」

絶世の美女に見えを張っても空しいので正直に話す。

「ええっ！ 今なんと!？」

それはどういうリアクションでしょうか……

「えー 産まれて二十三年間一度も」

「ミュキ様は二十三歳だったのですか!?!?!」

「? 正真正銘の二十三歳ですが」

恋人より私の年齢にひかかったらしい……これはもしやアジア人特有の童顔という奴だろうか？ でも私は年相応にしか見られた事が無いんですが？ 一体何歳だと思ったんだろう

「一体何歳くらいだと思ったんですか？」

「失礼ながら十五歳くらいだと」

そしてさり気無く見られる胸……もしや胸で判断されたかと思うと情けない

確かに今時の中学生より発育が悪いが、有り得ない

もしやあの金髪強姦魔も私を少女だと思ってやったんならロリコンだったのか？

だから巨乳美女のルインさんでは無く私を襲ったのかと納得した。

「因みに牡丹の君とリユーリンちゃんは御幾つなのでしょう？」

「私は八百九十三歳になりますが、リユーリンは確か十四歳でしたか」

聞くんじゃなかった、牡丹の君は二十代後半と見ていたんだけど八百歳越え流石神様、しかしリユーリンちゃんが十四歳なんてあり得ない！ しかも既に立派に働いてるなんてこれが日本なら労働基準法に引っかかる犯罪だよ

私の弟は高3で受験生ながらラノベの世界にトリップしているお気楽者

リユーリンちゃんの半分でもしっかりして欲しい

「そうですか… 兎に角、既に私は成人していますのでそのように扱って下さい」

子供扱いは凹みます

「私共は決してミユキ様を子供扱いしておりません。ミユキ様は陛下と結ばれて女性としての幸せをお知りになったんですから」

「！！ ゲッホン、ゲッホ ゲッホン」

「まゝ ミユキ様大丈夫ですか」

牡丹の君そう来たか：

態とらしい咳であいつの話を回避

「すみません。むせてしまつて……それより話を戻しますがルインさんも牡丹の君も神様なら私を元の世界に戻して欲しいんですが」

「…… 多分異界に渡るには瞑道を通らなければなりません瞑道を開ける者は玄武国では陛下と夫のみです」

「それじゃあ、ルインさんに頼めば帰れるんですね！」

「それは難しいかと、瞑道は狭間の世界で闇の世界：場所と場所を繋いでおり無限にあるとも言われる異界とも繋がっております。ミユキ様に自分の住んでいた異界の場所を教えて貰わない限り無理かと思われます」

「そうですか……」

少し希望が見えたと思ったら直ぐに消えてしまった。



そう簡単に帰れるはずが無かった。

こうなったら私の世界にいる天帝が戻ってくるまで此処に居座るしかないだろう

私は立ちあがり牡丹の君に頭を下げお願いしてみる

「牡丹の君、橘深雪二十三歳なんの取り柄もありませんが一生懸命働きますので此処に置いて下さい」

「ミュキ様……」

庶民の私は平凡に生きるのを良しとしていて、異世界トリップでさえ許容範囲を超えているのに超美形な王様なんて面倒くさそうな人間と関わりたくない。

牡丹の君は困った様子だけどスルーだスルー

そして取敢えずルインさんと改めて話す事にしたのだった。

「終わらん！ 何故書類が減らん〜？」

「当り前です。一体どれだけ政務をさぼられていると思ってらっしゃるんですか」

「煩い、だから今しておるであろう」

次から次へと運び込まれ寝室は書類の海だった。

「こんな書類、余の王印を押すだけ、丞相が押せばよいではないか！」

「天帝様がから賜った御璽は、王にしか押せず私が使っても印は写りません。他の政務は私が全て引き受けて陛下は決済をするだけでしょ」

「絶対天帝の嫌がせだ！」

「早く終わらせないとミユキ様にお会いできませんよ」

丞相は何かにつけミユキを持ちますが、本当に会わしてくれるのか疑わしく感じる。

働かせるだけ働かして余を過労死させ心算では！？

そして腹黒い丞相が可愛いミユキを愛人にしようと画策しているのかもしれない

そう思うと考えが止まらなく丞相に殺意が湧く

「もう我慢が出来ん！！　こうなればお前を殺してミュキを奪い去る」

立ち上がり手に剣を取り出し斬りかからうとすると

「金髪強姦魔」

ピタリと剣を止める。

「なっなんだそれは？」

「ミュキ様が陛下につけられた名前です」

ニツコリと笑いなが更に続ける。

「うっうううう　　ミュキが余をそう言っておるのか？」

「はい」

「すまないミュキ　余が悪かったかから許してくれ……　うっうううー　　シクシク……」

書類の上でさめざめと泣いていると丞相が声をかけて来る。

「泣いていたも書類は消えませんかよ」

「お前は鬼か！　余が悲しんでいるのに臣下として慰めよ」

「はいはい、仕方がありませんから今度ミュキ様がお使いになった敷布でも持って参ります」

「本当か！」

「ですからお仕事頑張ってください」

そう言い残し丞相は帰って行った。

そして一人取り残され、懷からミユキの使用済み箸を取り出し匂いを嗅いでから口に入れ至福の時を味わう。

「敷布より下着の方が良かったかもしれない……」

そう呟きながら箸を大事に仕舞い、書類に王印を押すのに励むのだった。

## ミイラ取りな丞相と私

「プッハーハー 五臓六腑に滲みるとはこの事ね」

その晩私は久しぶりのお酒を味わう事が出来て感無量

図々しいと思いながら、思いきってお酒をおねだりしてみると数種類のお酒とおつまみを用意してくれ、しかも両脇には絶世の美女を二人も侍らせて私が男ならウハウハの状態だろう。

一人はモスグリーンの髪をした知的美貌ながら巨乳を持つルインさんともう一人は赤い髪の色っぽい人妻の牡丹の君

まさに花を愛でながら飲むお酒は美味しい！

チョツとオヤジっぽいけどもうどうでもいい、ここは異世界無礼講よ

「さーあ ミュキ様、此方は麦で造った蒸留酒ですよ」

そう言ってルインさんが私の小さなガラスの器に注いでくれるとそれは琥珀色の液体で匂いを嗅いでみるとウイスキーに似ており舐めてみるとやっぱりウイスキー

どうせなら氷を入れてハイボールで飲みたいけど贅沢は言えない

グイッと一気に飲むと食道が少しピリピリ焼ける感覚が堪らないそして胃に到達する

「美味しいです！」

「まゝ ミュキ様はお酒にお強そう。 今度は私のお飲み下さい」

次に私は牡丹の君が勧めてくれるお酒を新しいグラスで受けると今度は透明な液体で匂いは日本酒に近い、一口飲んでみるとさわやかな香りが広がり非常に飲みやすい。

「なんか日本酒ポイです。これは何のお酒ですか」

「テヤと言う穀物を麴で発酵させたもので玄武国では一般的なお酒です」

まだこの世界に来て間もないけど日本酒に似たお酒を飲み思わず懐かしくって嬉しくなる！

「牡丹の君お代りお願いします」

「はいどうぞ」

「あっ 次は私が注ぎます」

牡丹の君から急須のような物を取り上げ二人のグラスに注ぐ

「さゝ 皆で乾杯しましょ」

「乾杯とは何ですか？」

「そうですね……私の世界でお祝いの時や出会いなどの時にお互いのグラスを触れ合わせてからお酒を飲み干して喜び合うんです」

「ま…… 楽しそう。 貴方三人で乾杯しましょ」

牡丹の君を愛おしそうに見詰めながらルインさんも賛同する。

「それではミユキ様と陛下の出会いに乾杯いたしますか」

陛下……私は不穏な名詞を無視する為に音頭を取る

「二人ともグラスを上にあげて乾杯と言ったらグラスを合わせて下さいね」

二人は酒の入ったグラスを傾きながら上に掲げてくれる。

「それでは、私とルインさん牡丹の君の出会いを祝して乾杯!!」

「「 乾杯!!」」

カッキーン!

微妙に二人の顔はひきつっていたが同時にお酒を飲み干しそれから次から次へとグラスを空けて行き宴会気分を楽しむ。

美味しい料理にお酒があれば幸せだ

辛い仕事の後のビールが大好きで、最近では第三のビールだったけ

ど十分美味しく疲れた心を癒してくれた。異界の地であろうが地球の未開発の地でもお酒が存在している限り生きていける様な気がする。

いや、水洗トイレとお酒に訂正しよう。

勧め上手な二人の所為で酒豪な私もほろ酔いき気分では最高

異世界に落ち着てから味わったストレスを一気に解消出来、気もユルユルなそんな時だった。

「ところでミユキ様は陛下の何処お嫌いなのでしょう」

突然ルインさんが強姦魔の話を振ってくる。何時もの状態ならスル―してしまうけど酔った私の口は通常の二倍はたがが外れる。

「あいつは最低です！ それにあの顔が許せない！！ 男のくせにあんな綺麗な顔なんて女の敵です。あんなのが居たら私なんて女の価値ゼロじゃあないですか、男の半分以上はゲイになっちゃって出生率の低下、敢ては人類衰退の危機です！ ルインさんや牡丹の君のような美女ならいいですけど世界の大半は私のような普通の容姿なんですよ、それを化粧をして髪形を工夫し、少ないお給料から自分に似合う服を買い日々努力しているのに、あの男はスッピンでありながらあそこまで美しいなんて女を冒とくしてます。それに何ですあの金の髪は、まるで蜂蜜を溶かした様な艶やかさ！！ 私だつてロングに憧れてるけど伸ばすとかせ毛が酷いせいで伸ばせないし、毎朝寝癖を伸ばすのに朝を10分も早起きするんです……朝の10分は貴重なんですよ、それなのにあいつはあんなに長いのに絡まりもせずサラサラなんてあり得ない」



「……つまり、陛下の容姿がお嫌いなんですか？」

「別に嫌いじゃありませんよ。美しいものは誰だって好きです……分かってます、これが僻みだって。私がせめてリユーリンちゃんぐらしいの容姿なら此処まで卑屈にならないんですけど……この世界の人には美形ばっかでレベルが高すぎ」

「まゝ 私はミユキ様はとてもお可愛らしいと思っております」

牡丹の君は私の右手を両手でしっかり握りウルウルとした目で見詰めて来るのでドキドキしてしまい、私も牡丹の君の手を確り握りしめ合う

「ありがとうございます。牡丹の君も大層お美しいです！！ 私が今まで会った女性の中で断トツ一位 人妻でなかったら私が求婚したいくらいに」

「まあゝゝ 〃〃〃」

しかし見詰め合いはルインさんによって邪魔される。

「アンチヨングウイは私の妻なので口説かないで下さい。それより此方の蜂蜜酒はいかがです、美容に良いとされ妻も愛飲しております」

美容にいいと聞き直ぐさまグラスを差し出し注いで貰うと、一気に飲み干す。

「甘いですねー 確かに女性好みのお酒。食前酒にいいかも」

「しかしミユキ様がこのようにお酒の好きな方とは思いませんでした」

「はい！ 私の場合はご飯よりお酒の人間。お酒を飲まない人間なんて人生の半分を損してますよ絶対。何れ結婚するなら私のお酒に付き合ってくれる人がいいと常々考えていたんです。だけど酒乱で泣き上戸とか愚痴るタイプは絶対嫌：そうそう聞いて下さい私の上司に嫌な奴がいたんですけど飲むと更に愚痴りだしてネチネチ言うんですけどアレは絞め殺したくなりますね：だけどそう言う訳にもいかなので私が犠牲になりせつせと課長のグラスに酒をついで酔い潰してから課の皆で逃げて置いてきばりにしちゃいました。後日寄り一層目を付けられちゃいましたけど」

「あら〜どういたしましよ：陛下は下戸でいらっしゃったはず」

「これ、いらぬ事を言うでない」

「プッププププー あいつ下戸なんですか！！！ こんな美味しいものが飲めないなんて御子様ですね。否、御子様の割にはやる事はやってくれたわ〜 最初私は女神様だと思ってたのに突然野獣に変わるからビックリですよ！！ そりゃあアレだけの美形迫られれば即OKだけど私は二十三歳ながら処女だったんです。初めてだから色々手順を踏んで欲しかったと我儘言う訳ではありませんが、せめて私はヤル前にお風呂が入りたかったんです！！」

「おっお風呂ですか！？」

「そうお風呂です！ この世界に落ちてから数日着の身着のままで風呂も入らず汗や埃まみれで垢だらけの体を舐めまわすんですよ！ それだけでも信じられないのにあるうか、あんな所まで、女とし

てどれだけ恥ずかしかったか分かりますか？ 幾ら私が其の辺の石だとしても綺麗に洗って欲しかったんです！」

「分かりますミュキ様！」

「えっ!？」

まさか同意されるとは思わなかったので驚いていると、牡丹の君が溜めこんだ物を吐き出すように言う。

「聞いて下さい、ルイングウイもそうなんです。私が湯浴みをしてからと言っても聞き入れてはくれず、私のそのままの匂いを味わいたいとか恥ずかしい事を言って事に及ぶんですの！ 嫌だと言っているのに殿方には繊細な女心を全然分かってくれません」

殿方？ ルインさんは女性なのに何故殿方になるんだろう？

……まあいいか？

「これアンチヨングウイまで何を言いだすのです！ 酔っているようだからもう下がちなさい」

すかさずルインさんが牡丹の君を席を外させようとするのでそうはいかない、こんな面白い展開は逃せない

「待って下さいルインさん、牡丹の君を愛しているのならそう言う独りよがりな行為は嫌われます。セックスとは愛する二人がお互いを尊重し合い愛を確かめる行為なんです。嫌がる姿がそそるとか腐った思考は今直ぐ捨てるべきです」

「だがアンチヨングウイはその方がより感じて気持ち良さそうだが……」

「酷い…貴方」

「今の牡丹の君を見て喜んでいるとは酷い言い草です。確かに体は喜んでいるのかもしれませんが心では自分の意志を尊重してくれないルインさんに悲しんでいるんですよ！ それに今の言い方では牡丹の君を淫乱だと言いたいんですか、直ぐ謝罪を求めます」

牡丹の君は悲しげに俯いているのを見て不味いと思っただらしくまさに妻の機嫌をとる夫の姿のルインさん

「すまない。アンチヨングウイがそのように嫌がっていたとは気付かなかった…許しておくれ」

「それではこれからは湯浴みの後にして下さいますか？」

「わっわかった。愛する妻の意志を尊重しよう」

残念そうに言う姿に少し哀愁が漂っており男に見えてくる？？？

気のせいだろう

「それでは二人の仲直りを祝して乾杯しましょ！！」

今日はトコトン飲む心算でお酒をなみなみと注いだグラスを注いで差し出す。

「はい、ミュキ様！」

「……」

牡丹の君は嬉しそうグラスを掲げるのに反しルインさん苦虫を潰した様な顔だがどうでもいい。かなり酔った私の思考は飲んで喋れば何でもいいのだ。

「二人の正常な夜の営みに乾杯！」

「乾杯！」

「……」

それから美味しいお酒とおしゃべりを堪能して夜は更けて行った。

何故か陛下の話が我々の夜の営みに話が及んでしまった??

なんだあの女は……見かけにかなり騙されてしまった。

自分を平凡だというが、異界の女は全員ミュキ様のような感じなら、向こうの男達の苦勞が忍ばれる。

一を言えば十は返ってくる言葉

我が愛しい妻までミュキ様に意気投合までしてしまったのは誤算だ  
そのせいで嗅ぐわいい妻の体臭と可愛らしく恥じらう姿を当分堪能  
できなくなってしまった。

お酒を飲まして色々聞き出したり、心の緩んだ所に陛下の事を吹き  
込もうとしたのに、とんだ藪蛇だ

酔い潰れたミュキ様を寝室に運び後をリユーリンに任してきた。

妻も珍しく酔い潰れ甘い酒の香りを漂わせながら私に横抱きにされ  
ている姿を眺めていると男の性が疼いてくる。

しかし先刻約束したばかりでは事に及ぶ訳にもいかず溜息が出る。

「はぁ…… ミイラ取りがミイラになる気分とはこの事ですか？」

そして美しく美味しそうな妻を横に寝かせながら一人悶々とするの  
だった。

## 可愛い侍女と私

「リユーリンちゃんお水を頂戴」

「はいミユキ様、ただ今お持ちします」

朝起きると酷い頭痛と二日酔い、一体私は昨晚どれだけ飲んじやったの??

ハッキリ言って安い居酒屋の薄い酒を喜んで飲んでいた私には昨夜の高級酒のアルコール度数は薄めない分高いのを忘れ飲んでしまい産まれて初めての二日酔いを経験してしまう

リユーリンちゃんは水差しからグラスに水を注いで渡してくれる。

「ありがとうリユーリンちゃん」

受け取るや否や一気に水を飲み干しお代りを貰おうとグラスを差し出すと何も言わないでも気の効くリユーリンちゃんはお代りを注いでくれる。

全く出来た子だ。

水を飲んで漸く一息つく……しかし昨晚は私は一体何を話していたんだろう? ハッキリって記憶があやふやだ

確か他人様の夫婦？事情に口出ししていたような気がする。

お世話になっているのになんて失礼な事を言ってしまったんだと今さらながら後悔

お酒を飲むと気が大きくなって口が滑ってしまい何時も失敗しているので気お付けていたのに……

追い出されたら路頭に迷ってしまう……どうしよう

真面目に働く事を考えよう

我が弟と違い賢いリユーリンちゃんに私が働き口を捜そうと聞きだせば、何も話さないだろうからそれとなく聞くしかない

「ねえ……リユーリンちゃんは何時から此处で働いてるの？」

「はい、私は八歳の時に人買いに売られたのを運良くここのお屋敷の侍女頭のスイさんに買って貰い働かせて貰ってます」

嬉しそうにとんでもなくヘビーな境遇を言うリユーリンちゃん

「もしかしなくても売ったのは親？」

「はい、そうですが」

まるで当り前のように言う事は親が子売るのが日常茶飯事と言う事、つまり一般人の生活はそれ程豊かではない事が推測できる。



多分、ルインさん亀族が支配階級の貴族であの強姦魔がその頂点の王様か

階級制度は仕方ないけど子供を売るほど生活をひっ迫させるのは政治が悪いのだ、あの強姦魔は無能な王に違いないわ、もしかするとリユーリンちゃんは奴隷?!

「もしかして奴隷なんかいたりする」

「遙か昔にはいたようですが人間を不当に働かせるのは禁止されますし、私もお給金を貰って家に仕送りも出来てこのお屋敷で働けて幸せです」

不当雇用では無いらしいけど何て健気な少女なんだろ!!

十四歳で既に家に仕送りをしているなんて十七歳で親の脛をかじりラノベを買っている弟は違う。もし戻ったらアルバイトをさせて少しは社会の厳しさを教えないといけない!

戻れたならばの話だけど……

「偉いんだねー うちの弟に見習って欲しいわ! いやーお嫁さんに欲しいかも」

「そっそんな…私如きがミユキ様の弟君の花嫁など滅相もない!!」

弟君!!

そこを真面目にとらないで突っ込んで欲しいんだけど…それにどちらかと言うと弟の方がリユーリンちゃんに勿体ない

「そう言えば女の子の結婚適齢期って何歳」

「大体十五歳から十八歳の間に結婚するのが普通です」

ガーーーーーン!!

何!!!!!!!!!!

それじゃあ、二十三歳の私は完全な売れ残りで賞味期限切れの廃棄処分じゃない!!!!!!!!!!

今のところ若さだけが売りだったのに……思わずたそがれる

「そっそうなんだ」それじゃありゅーりんちゃんにはもう彼氏いるのかな」

気お取り直しておばちゃん根性で聞いてみる。

「いいえ、私には弟と妹のために働いて仕送りをしたいので当分結婚はしません」

何て地に足のついた立派な言葉に感動してしまう。これで十四歳なんて、矢張り生活環境の違いだろうか？ 弟の為にも私より異世界トリップして苦勞すれば現実を確り見詰められる子になったに違いない

可愛い子には旅をさせろと言う諺もある。

「そうだわ！リゅーりんちゃんが早く結婚出来るようにルインさんにお給料を上げて貰うように交渉するわ」

気立ても良く器量よしのリユーリンちゃんが往き遅れるなんて忍びない

此処はお姉さんが一肌脱がねば

「いいえお止め下さい！ ミュキ様付きの侍女になったお陰でお給金も上りますから」

「えっ そうなの？」

「はい、ですから御主人様には何も言わないで下さい。叱られてしまいます」

必至な顔でお願いしてくる。

どうやらいらないお節介をしてしまったらしい、

「ゴメンなさい、リユーリンちゃんを困らせて」

少し落ち込んでしまう。

「ミュキ様は私の為に仰って下さったので嬉しいです。これからもお世話をさせて下さい」

「リユーリンちゃん 可愛い！……！」

ガバッ！

「キャッ  
／／／  
」

あまりの健気さで思わず抱き締めてしまふ、現代日本でこんな十四歳の少女がいるだろうか：悲しい事に殆ど絶滅危惧種と言っているかも知れない

まっ：人の事は言えないんだけどね

しかしこの世界の人間は発育がいいよね。抱きしめるリユーリンちゃんには161?の私とほぼ同じだが胸は確実に私よりあってお尻もふくよかでとても十四歳には思えず確り女の体だ。婚期は十五歳と言ふ話も理解できる。

お姉さんはショックだよ……

「ありがとう リユーリンちゃん 成るべく迷惑かけないようにするから」

年下に面倒見て貰うなんて大人として駄目駄目でしょう。

「それは困ります。精一杯お仕えますので何でも遣らせて下さい」

確かに私の世話が仕事だから、仕事を取り上げる事になり存在価値を否定するのと同じなのかも知れない：そう言えば入社した当時は仕事が出来なくて肩身が狭かったのを思い出す。

庶民な私には侍女なんて面倒だがリユーリンちゃんのお給料アップに貢献しなければ

「それじゃー 朝御飯をお願い」

「はい、ミユキ様！」

嬉しそうに返事をし、部屋を出て行く姿を見て可愛い妹を見るように微笑ましい、実際妹が居たとしてもあんな可愛く育つはずが無いんだけど

しかし此のままでは上げ前据え膳着替えも手伝って貰い私は何をすればいいんだろう？

テレビも携帯電話も無い世界

暇つぶしとしてはアナログな本が妥当か？

この世界の知識を得る為にも本をリユールンちゃんに頼もうと考えるが、字が理解できるかが問題

言葉は翻訳されているが字の方は確認していない

最悪この年で字を覚えなければならぬのかと思うと、二日酔いよりも一層重く感じるのだった。

二日酔いながら、美味しくご飯も食べるとする事のない私はリユールンちゃんにお願いした本を受け取り表紙を見て既に挫折しそうになる。

表紙に書かれているだろう文字は漢字ではなくまるで記号のよう…  
…地図記号に近い気がする。

このブレスレットは言葉を同時翻訳してくれるけど字までは解読してくれない、これ位のオプションを考えて欲しかったと気の効かない強姦魔に心で毒づく

「リユーリンちゃんは字が読める」

隣に控えているリユーリンちゃんに聞いてみる。

「申し訳ありません」

十四歳で読めないと言う事は習わないのだろうか？

「学校とか無いの？」

「学校？ 学問所の事でしょか」

「そうそう、学問所は誰でも行けないのかな」

「はい、学問所に行けるのは街に住む裕福な家の子供達だけで私のような農村部の出の者は往く事も叶いません」

どうやら識字率が低い世界らしい、これは字を覚えれば働く時に有利かもしれない、一応ソロバンも二級だけど持っているからこれは武器になりそう！ 小学校の頃にパソコンの時代にアナログなソロバンなど習わされたけどこんな時に役立つとは、産まれて初めて母に感謝したよ。色々減茶苦茶でいい加減な母親で苦労し就職して家を出て解放されたけど今思っても当分会いたくない人物だ。

「誰かに字を教えて欲しいんだけどルインさんか牡丹の君に聞いて来てくれない」

何をするのにもリユーリンちゃんを使うのは気が引ける。

どうやら私はこの離れから出る事を禁止されているので私からは母屋に居る二人に会いに行けない。言わば監禁に近い

引き籠りなんて嫌だけど、リユーリンちゃんの事を思うと無理やり外に飛び出すわけにいけないので辛い、せめて今度庭の散策を許して貰おう

リユーリンちゃんのような可愛い子を私の侍女にするなんて、これはルインさんの策略なのではないかと深読みしてしまう

お互い知り合って数日だがルインさんは絶対腹黒だ

この屋敷を抜け出すにしても常識と字ぐらいいは覚えておきたいしそれまで御厄介になるしかない。

それらの費用は強姦魔に慰謝料代りに請求するようルインさんに書き置きを残せばいいだろう

「字を覚える前に金髪美少年のお迎えがあればベストなんだけど」

今だに無駄な期待を捨て切れずにいるのだった。

朝、目を覚ますと一人ボッチで寝台で寝ていた。

寂しい……

父上も母上も爺やも死んでしまっただけで誰か側に居て欲しかったけど余に近寄ってくるのは気に入らない者ばかり

漸く見付けたミュキには嫌われてしまうし

「余は不幸だ……」

バシ！

頭を小突かれ見上げると鬼のような顔をした丞相が余を睨んでいる  
???

「私の方が余程不幸です！ 陛下の所為で政務の全てを押し付けられて愛妻と過ごす事すら俟たないんですよ」

「余の所為ではない、天帝が余を亀王にするのが間違っておるのだ。本当は丞相に王位を譲りたいのに天帝が許さない」

「私では力が及ばないと言う事でしょう。それならサッサと次期亀王となりえる御子様をおつくり下さい」

「もしかやミュキが許してくれたのか!？」



「今だご立腹のようです」

子供と意味深な事を言うから期待したのに更に落胆してしまう。

「一体何時になったらミュキに会えるのだ、そなたが取り持つてくれると言うから余は我慢しておるのだぞ」

何時もは不機嫌でも腹黒い笑みを浮かべているのに今日は隠そうともせず怖い顔をしている。

「流石に陛下が見染められた女性、　どうやら一筋縄ではいかない御様子なのでこの際無理やり会って婚姻を結んでしましましょう」

丞相らしからぬ乱暴なやり方にいぶかしむ。

「何かあったのか？」

「ミュキ様が陛下に心を傾けるのは難しいと昨夜の会話で良く分かり、小細工を弄しても無駄。　たかが人間の身寄りのない小娘など力で押せばどうとでもなります」

「嫌だ！　余はこれ以上ミュキに嫌われたくない」

「大丈夫です、陛下はミュキ様にこれ以上嫌われ無いくらい嫌われております！」

あまりの言葉に絶句し、悲しくなり泣きたくなる。

「うっううう……　ミュキ……」

「泣きたいのはこちらです……妻が朝からミユキ様ミユキ様とかなりミユキ様に傾倒しているのですよ！！　何なんですかあの女は我が愛妻を口説こうとするんですよ」

「何？　ミユキはそっちの方だったのか！！　では余が女になれば良いのだな！」

バシ！

「バカですか陛下は」

「余は王だぞ！」

「女一人をものに出来ず何が王ですか。近日中に我が家で宴を開きますからそこで必ずミユキ様をものにします。分かりましたね」

あまりに無礼な振舞いの数々だがミユキに会える事になったので取敢えず許そう

……チョツと怖いし

「わっ分かった」

丞相の妻の溺愛ぷりは有名な話だったが嫉妬に狂った顔を見て改めて認識した。

「朝食はそちらに用意されてありますのでちゃんと召し上がって、仕事に励んで下さい」

「それより昨日言っていたミュキの使用済み　「ありません!」  
そっそんな〜」

「私も忙しいのでこれで失礼します」

冷たくそう言い捨て呼び止める暇も無く瞑道を開けてサッサと出て  
行ってしまふ。

一体ミュキは丞相に何をしたんだろう????

あの丞相を此処までいらつかせるとは余以上かもしれない

取敢えずミュキに会える事になったので嬉しい!!

そして、矢張り女になった方がミュキの心をつかめるんじゃないか  
と色々考えるのだった。

## それぞれの想い

午後になると牡丹の君が美味しいお菓子をお土産に遊びに来てくれ、字の先生はもう少し待ってくれとの事、そしてルインさんからの伝言を聞く

「私の為に宴を開くんですか！」

「はい、ミユキ様を歓迎するために内輪の信用出来る者達だけを集めて開くそうですわ」

牡丹の君は楽しそうにそうに話してくれる。

私の為にと言うのが凄く引つかかる

今までこの離れから一步出れず、この屋敷で顔を合わせた人間はルインさんと牡丹の君にリユリンちゃんの三人と限られその他の人の気配すらなく、私の存在は隠されているんだと感じていた。

それなのに宴を開くなんて不自然

ルインさんはあの強姦魔と私の中を取り持とうとしているのは見え見え

絶対あいつが来るだろうと確信する。

「それは楽しみですね！」

「ええ、それで今日はミユキ様の衣装を色々ご用意致しましたの。別室に用意してありますから一緒に選びましょ」

いつ何時の間に?? そんな気配全く感じませんでした……神様だから魔法のようにパツパツと出したのかもしれない。

「でも既に着物を沢山用意して貰ってますからこれ以上は必要無いと思うんですけど」

「それは普段着ですから、宴用の衣装を整えなければなりませんわ」  
今着ているのも絹の高価な物が普段着?!

そうなのだリユーリンちゃんに見せて貰った衣装部屋には色取り取りの着物が十着は用意されていて驚いていたのに、宴用の衣装を作るなんて、金持ちの感覚はついて行け無い

どうせ強姦魔に見せるのに今ので十分

あまり会いたくは無いけど何時まで無視する訳にもいかない。勘違いでなければロリコン強姦魔は私に気がある。

痛い女と思わないで

私だってあんな壮絶な美形が私のような平凡な女に惚れるなんて信じられませんよ

だけどこれは異世界トリップ

ラノベのセオリーでは、トリップしてきた主人公に惚れてしまう美形達

一種呪いのようだと弟のお勧めラノベを読まされた感想

あの強姦魔もそのトラップのような呪いにかかったのだろう

そして目を覚まさせて慰謝料代りに私を元の世界に戻して貰う手立てを考えさせるのだ

あの金髪美少年を当てにするよりは確実な気がする。

そう思うとあの強姦魔に会うのが待ち遠しく感じてしまうから不思議

人間、気の持ちようで結構変わるのだ

短時間ではあるけど強姦された傷は結構癒えてしまっている図太い私

この年で処女を捨てたのは遅いくらいで向こうの世界で今回のスキルを生かしたい

なにせ一晩で数種類の体位を経験してしまったんだから

それに、あの美しさは目の保養にはなる

ルインさんや牡丹の君でさえ人間離れした美しさなのにあの強姦魔は更にその上に行く美貌。自分でもよくあの顔を平手打ちに出来たと今さらながらに感心してしまう。

「どうかなさいましたミユキ様」

別室に移り牡丹の君が持って来た衣装を眺めていた。

「今から宴が楽しみだな」と考えてました。やはり珍しいお酒とが出るんでしょうか」

「ええ ミユキ様のために他国のお酒も取り寄せましたのよ」

「本当ですか！ 有難うございます」

「また乾杯をいたしましょう！」

どうやら牡丹の君はいたく乾杯がお気に召したようだ。

更に楽しみが増え嬉しいけど飲み過ぎには気お付けよう…昨晚のよう  
うに喋りすぎ何を言ってしまうか自分でも怖い

口は災いのもと

確り肝に銘じるのだった。

今晚も珍しく夫が早く帰って来てくれて嬉しい

夕げを共にしながらお願いしてみる。

「あなた　お酒で乾杯しましょ」

夫は優しく微笑み頷く

「それでは愛しいアンチヨンと私の安らかな一時に」

「「乾杯」」

カッキーン

二人で杯を上げて触れ合わせ、私は甘い蜂蜜酒を飲み干す。

酒の杯を一気に飲み干すなど女性としてはしたないのだけど、夫は許してくれ本当に優しい心が幸せで満たされるのだった。

これも全てミュキ様のお陰

陛下が度々亀の姿のままなので夫は政務に追われてしまい顔さえ見れない日々が続き何度枕を涙で濡らしたか：

ところがミュキ様が現れてからは夫と長く過ごす事が出来て、まるで新婚の頃のように

最初は夫が離れに人間の少女を囲ったと聞いた時は絶望のあまり家



を出る覚悟をしたけれど、夫が直ぐにミュキ様は陛下の伴侶候補だと説明してくれたので家を出ずに済みました。

そして夫に陛下の良さをミュキ様にお教えするよう頼まれ初めてお会いした時はあまりに珍しい黒髪に黒い瞳に驚かされてしまいました。だが、私の事を牡丹の君と愛称を付けて貰った時は何故か嬉しさが込み上げてしまう。

亀族の姫として生まれた私は常に多くの者にかしづかれ会う人々に美しいと誉め讃えられてはいましたが、皆一歩さがったような態度で何処かよそよそしかった。

同じ亀族の御婦人方も夫が丞相という高い地位にある為に心から打ち解けて話してくれる人もおらず、私の機嫌を取り顔色を伺う者たちばかり

友と呼べる者など八百年の間一人も得られなかった私

寂しくもあり、高い地位にある亀族の姫として生まれた者の定めだと諦めておりました。

でもミュキ様は私の目を確りと見てくれ、何の裏の無い言葉で話してくれる。

そしてミュキ様が二十三歳だと知った時は驚かされましたけど

小さいながら丸い可愛らしい瞳をクルクル動かし表情豊かで幼い華奢な体、なんだか妹のように思えて益々ミュキ様を知りたくなってしまい、陛下の事を色々話さなければならぬのにすっかり忘れてしまっている私

ミユキ様が働きたいと仰ったり、陛下の話になると逸らすのが不思議だったのですが、三人でお酒を飲んだ時にその疑問は解消しました。

まさか陛下が無理やりミユキ様と事に及んだなど

女にとって殿方に初めて抱かれる時どんなに不安か

私も愛する夫と初夜を迎える時は恥ずかしさと怖さが入り混じり逃げだしてしまいたかったのを思い出す。そんな私を夫は優しく扱ってくれましたけど初めは痛くって辛い行為……

それなのに……それなのに……

身を清める事すら許されず無理やり奪われるなんて、同じ女としてお勞しく、陛下に殺意まで湧きました。

恥ずかしい話しながら我が夫も度々湯浴みもしていない体を所望され嫌でした……

実家の母に夫に従順な妻であるよう教え込まれた私は夫に否とは言えず、羞恥心に耐えながら抱かれ夫が喜ぶならと我慢しました。

だからミユキ様の事が我が事のように思え、お酒の勢いもかりついミユキ様に夫の事をグツチてしまう妻として有り得ない事をしたのに、ミユキ様は夫に対し私の代わりに弁護して下さったので驚く

その姿が凜々しく思わず胸がときめいて、ミユキ様を思わずお姉さまと呼びたくなりました。／／／

なんて不思議な感覚

だけど気丈なミュキ様はそんな暗い影も見せず明るく、それからもお酒を楽しみながら、ミュキ様が向こうの世界のお話を色々して下さり夫と共に大変楽しい一時を過ごし、はしたなくも酔い潰れてしまい実家なら母にきつい叱責を受けてたでしょう

ああゝ　なんて幸せ

ミュキ様が現れ私の生活は花が咲き誇るように明るく彩られたようミュキ様が陛下を嫌われるなら此のまま私の友として屋敷に留まって欲しいと思うのは我儘でしょうか

眉目秀麗な夫と可愛らしいミュキ様

二人と暮らせたたらどんなに幸せかと夢見るのだった。

今夜は早く帰宅し昨晚の欲求不満を解消する為にも妻の機嫌を取る

「あなた　お酒で乾杯しましょ」

艶やかに微笑みまさに牡丹の花のよう…ミュキ様の我が妻を牡丹の

君と呼ぶ趣味の良さには感服する

「それでは愛しいアンチヨンと私の安らかな一時に」

「「乾杯」」

カッキーン

昨晚の乾杯が余程気に入ったのだろう：無邪気な妻の姿を目で楽しみ近年は寂しい思いをさせていたので申し訳ない。

それも全部あの怠け者の陛下の所為だ！！

「ミユキ様は宴の事は如何仰ってたかい？」

「はい、大変楽しみにしているご様子で宴用の衣装を二人で選んだのですがミユキ様たら私にばかり服をお当てになって宴には深緑の物を着て欲しいとお願いされてしまいましたの　／＼　あなたもそれで宜しいでしょうか…」

「……」

怒！！

妻は頬を染めながらも心配そうに私に伺いを立てる様子に嫉妬が湧きあがる。

何時もアンチヨンの着る物は私の好みの物を着ているので、赤や水色、若葉の色の物が多くその色の衣装は持っていない

「その色は少々地味ではないか」

「そうですか……」

寂しそうに俯く妻を見ると心が疼く

「いや：アンチョンが着たいなら明日にでも仕立てなさい」

「まゝ 有難うあなた」

私が許可するとまるで牡丹の花が咲き誇るように喜色満面になり、甘えるようにしな垂れかかってくる。

以前に比べ自分の感情を素直に言い甘えるようになって来たのはミユキ様の影響だろうか

嬉しい半面苛立たしさが増す

アンチョンの心にミユキ様がずかずかと入り込んで来ているのが許せない

早く陛下とくっ付けて追い出さないと危険だ

女同士なのに危機感が襲うのは何故か？ 自分でも不思議だ

ミユキ様を平凡と思い侮っていたがなかなか頭は廻る方の様なので油断が出来ない

妻には言っていないが、多分：ミユキ様は宴の場に陛下がいらっしゃるのに気が付きながら楽しみだと仰ったのだろう

何を考えているのか私でさえ読めない異界の女

案外陛下とお似合いかもしれない

この二人をくっ付けてしまえば、私も人並みの夫婦生活が待っているだろう

そして食事も終わりアンチヨンの耳元で呟く

「今夜はじっくりそなたを味わいたい」

瞬時に耳を真っ赤に染めこっくりと頷き、そのまま抱き上げ寝室に連れ込もうと行動しようとする前にアンチヨンが立ち上がる。

「／／／ それでは先に湯浴みをして支度をしてきますのでお待ち下さい」

恥じらいながら立ち去って行くアンチヨンの姿を指を咥え見送るしかなかった……

「おのれあの女―― いらぬ事をしておって!!」

湯浴みをしてしまったてはアンチヨンの芳しい匂いが薄まってしまいうでは無いか

しかし昨晚約束したばかり

約束を破ればアンチヨンが悲しみ、ミュキ様に益々傾倒して行くの

は目に見えているので、ここは自分が涙で耐えるしかない……

自分で連れて来たのだが、とんだ誤算だ！

絶対追い出すと心に誓うのだった。

ミユキに会えると思うと興奮して寝れない

矢張り女の姿で会うべきか男の方がいいかとズーツと悩んでいるので尚更寝れないのだ

それによって衣装も造らねばならないし早く決めないといけない

少しでも身ぎれいにしてミユキに見て欲しかった。

アンチョングワイが好みなら矢張り女？

明日にでももう一度丞相に相談しようと思うチョングワイだった。





## それぞれの想い（後書き）

前話でブレスレットと指輪を取り違えていたので修正しました。

補足 牡丹の君は亀王の正妃候補として厳しく育てられた生粋のお姫様だったのですが丞相が一目惚れしてあの手この手を使い手に入れた最愛の人。なのでかなり嫉妬深く溺愛設定

## 自虐と私

宴が開かれるその日は朝からお風呂に入れられたり隅々までリユリンちゃんに磨かれる。

これまでは何とか断って来たのに今回は上からの命令らしく譲らない

「自分で洗うから大丈夫！　お願いだから一人で入らせて」

しかしリユリンちゃんは夫の操縦法心得た妻のように私を攻めてくる。

「やはり私のような者がミユキ様にお仕えするのは相応しく無いの  
でしょうか……御主人様に他の侍女に……洗って下さい……」  
「はい！」

綺麗な瞳に涙を溜めて言うものだから拒否できない。

ハッキリ言って嫌だ

二十三歳の貧相な体を十四歳のナイスバディーな少女に晒すなんて、  
どんだけ羞恥プレイなのよ

洗髪なんて美容院だと思えばいいし、体を洗って貰うのもエステだ

と思えば許容できるかもしれないが…大人な自分よりも大人な体の少女にして貰うとなると変なプライドが疼いてしまう…

自分の発育不良な体が恨めしい…

結構大食漢な私は友人「痩せの大食い、なんて羨ましい体質」と羨ましがれたけど寸胴な体はコンプレックスだった。

母と父は標準体型なのに一体誰に似てしまったんだろ…

リユーリンちゃんに優しく体を洗われて心はすっかりブルーだ。

なにせブラのサイズはA A 6 5 ?でAカップに僅かに足りない、決してA A Aを無理してA A カップにしていませぬ絶対に

そんなの変わらないだろうって！ 私のは大いに違います！

ああ…世間の目は無情だ…

シク シク シク シク

リユーリンちゃんはそんな私の心の葛藤も知らず頭から足のつま先まで嬉々として懇切丁寧に洗ってくれる…まさか私の事を年下なんて思って無いよね。

否…この際年下と思われた方がいいのか？

今から年齢の話題は出さないよう気お付けよう。

そして精神的ダメージを深めながら漸く解放されたかと思えば次は

着付けをされる。

此方には基本地球のようなブラやショーツが無く、浴衣のような白い肌着を着せられるだけなので異和感が拭えない、ブラはいらないからせめてショーツが欲しい。生理が来た時如何するのかは近づいてから聞くしかないけど、絶対ナプキンなんて有ろう筈が無い……不便すぎ、如何に現代日本が恵まれているか実感。

しかし、リユーチンちゃんに生理があるのを驚かれたらどうしよう……立ち直れないかも

うっう……早く帰りたい！

その為にも今夜が勝負

あの強姦魔を説得しなければならない。

如何に自分が勘違いしているかを分からせない。ルインさんや牡丹の君を私の両脇に並べれば数段も下に色落ちるであろう、それで駄目なら実年齢をばらせばロリコン趣味の人間は高確率で引くはず！

我ながら自分を貶めるなんて自虐的な作戦

それでも駄目なら自棄酒飲んで暴れてやる！！

その姿を見て引く可能性もある。

「ミユキ様 何処か痛いでしょうか」

私が浮かない顔をしているせいか髪に着け毛を付けているリユーチンちゃんが自分の不手際の所為だと思ったらしい。

「チョツと疲れただけ、それよりこの着け毛はどうしたの？ 確か私のような黒い髪は殆どいないんでしょ」

「はい、そうなんです。でも御主人様が特別に茶色の髪の着け毛を黒の染料で染めさせたようです。その所為か少々ミユキ様の地毛のように艶やかさがいまいちですがとてもお似合いです」

今まで一度もロング―ヘヤーにした事が無いので新鮮だ。平安時代のお姫様のように美しく真直ぐ垂らされ、絹の美しい水色に白い花の意匠に金糸が施された着物を着せられ女としては嬉しい。鏡の自分が五割増しに綺麗に見えるから不思議。

これで化粧をすればそれなりに見えるのではないかと自分でも錯覚してしまいが、鏡に映る自分とリユリンちゃんを比較すると溜息が出そうになるのを我慢する。

早く帰れないと卑屈な人間になってしまいそうだった。

「まゝ ミユキ様なんて愛らしいお姿！」

私を迎えに来てくれた牡丹の君は私を見るなり誉めてくれる……こ

んな美女に綺麗と言われればうがった見方をしてしまいそうだが、子供っぽいが愛らしいという表現は素直に受けいられそうだ。

「牡丹の君も今日は益々お綺麗ですよ。 やっぱりこう言う渋い色合いの衣装の方が華やか髪とお顔をひきたてさせ色っぽいです！」

「まゝ ミュキ様ったら 〃〃〃」

はにかみ頬を染める牡丹の君は益々色めく

まさに眼福

牡丹の君の衣装は深緑色に萌黄色の蝶の意匠に金糸銀糸が施された見事なもの

本当は黒い地に真っ赤な牡丹をあしらったのを着て欲しいかったけどチョツと婀娜っぽくなりすぎるような気がしたので此方の色を勧めてみたが正解のよう。 否、これだけの美女なら何を着ても似合うのかもしれない

私と牡丹の君、二人並べば男がどちらを選ぶかは一目瞭然

だが相手はロリコンの変態

こんなに色っぽいと逆効果？

変態の気持ちは分からないのでいまいち読めない……保険として小さい女の子が居ればいいのだがお酒の席では望めないだろう

「今日は一体何人ぐらいいらっしゃるんですか」

「それが主人が場所も人数も全てが秘密だと教えてくれないのです」

「えっ？ それじゃあどうやって行くんですか」

迎えに来てくれた牡丹の君が知らないなんて変な話

私が不思議がっていると牡丹の君が懐から黒いビー玉のようなものを取り出し見せてくれる。

「これは瞑道を開ける神力を練った黒玉です。これを壁にぶつけると瞑道が開かれ特定の場所に繋がてくれますの」

どうやら魔法の玉らしく私がこの世界に落ちる前に通った狭間の世界を開くらしい……もしかしてこれを使えば帰れる！！

思わずその玉を凝視してしまったせいで牡丹の君も察したようで申し訳なさそうに言う。

「狭間の世界は暗闇で迷えば永久に彷徨う恐ろしい場所。私にも危険な場所ですので決して自分の世界に戻ろうとは思ってはいけません」

「はい……そうですね……これ以上私も迷子にはなりたくないです」

悔しいが何の力も無い人間の取るに足りない女でしかない私

誰かの力を頼らないと帰るなんて出来ないのだ。

早く強姦魔に諦めて貰って私を元の世界に返してくれるよう説得するしかないのだ

平凡な日々が懐かしい

異世界トリップをするならトリップに憧れる弟にして欲しい。それ  
かせて魂の入れ替わりと言うパターンもあるらしいからこの際私  
と弟が入れ替わるそれでも良いよ

項垂れる私に慰めるように手を取り言う牡丹の君

「さあ、宴には珍しいお酒や料理が用意してありますので楽しみま  
しょ」

「そうですね。 思いっきり楽しみましょ」

私が笑顔で応えると安心したように微笑む牡丹の君は、黒玉を壁に  
投げつけるとそこに暗いトンネルの入り口が開き、牡丹の君に手を  
引かれてそのまま瞑道に入る。

そこは本当に真っ暗な闇が広がっており何も無く恐怖が湧いてくる  
が牡丹の君の姿だけがポツカリ浮かび上がって手を引かれていなけ  
れば上下左右の感覚も分からず慌てたかもしれない。

「本当に真っ暗ですね……牡丹の君は道が分かるんですか？」

「いいえ、でも迷わずま直ぐ進めば出口が見えるのです」

その言葉通りに出口らしき光が見えて来て安心し、そして確かに私  
では自分の世界に戻れないのを納得してしまう。

「さあ着きましたよ」



手を引かれたまま闇を抜けると眩しさで一瞬目の前が真っ白になるが直ぐに目が慣れるとそこは着飾ったルインさんが立っていた。

「貴方、ミュキ様をお連れ致しました」

「有難うアンチョンー——ようこそ御出くださいましたミュキ様」

にこやかに歓迎してくれ、無難に返す。

「今晚はルインさん。ご招待有難うございます」

「今宵のミュキ様はとてもお美しいですよ」

腹黒そうな微笑んで一？も思っただけ無言の空々しく言う

「有難うございます。ルイン様もとてもお綺麗ですわ」

大人な私は微笑んで返す。

この場合ルインさんも牡丹の君に負けず劣らず麗しいので嫌みにならないのが悲しい……

「それでは皆様がお待ちかねですので此方にお出下さい」

私はわざと大袈裟に喜び牡丹の腕を取って組み急かすように言う

「さあ牡丹の君急ぎましょ。皆様を待たせては悪いですわ」

「そうですわね、一緒に参りましょ」

それに楽しそうに応えて来る牡丹の君は可愛い

ルインさんの背中は嫉妬で燃え盛ってるのが伺え楽しいけど程々にしないと後が怖い。なにせお世話になっている人なのでまだ路頭に迷いたくはない

そして案内された場所は広い部屋で総板張りの床に赤い毛氈が敷かれておりコの字型に並べられたテーブルには左右には着飾った物々しそうな人々が十人程座っていたが、私達が現れると一斉に立ち上がり恭しく頭を下げる。

思わず背筋に冷たいものが流れたように緊張する。

絶対に変、これはただのお酒を楽しむ宴ではないのを直感する。

これはヤバイ！ 直ぐさま逃げ出したい衝動にかられて踵を返そうとするが何時の間にか後ろに回っていたルインさんが前に立ちはだかる。

何時の間に！！！？？

立ちはだかるルインさんの顔を見上げれば、その顔には黒い笑みを浮かべて本性を現し始めた。

「主役のミュキ様がどちらに？ 主賓席をご用意させて頂きましたのでどうぞ此方へ」

グイと右手を掴まれて問答無用で引きずられる。

やっぱり腹黒だった!!

「貴方！ ミュキ様をどうするのです!？」

牡丹の君は青い顔をしてルインさんを信じられない顔で見ていたので牡丹の君がグルでないのがせめてもの救い

「これは国家の大事、陛下の伴侶のお披露目でもあるのですからアンチヨンの口出しは控えなさい」

牡丹の君は悲しそうに顔を歪めるが何処ともなく現れた簡易な鎧のようなものを着た女性兵士二人によって退出を促される。

「申し訳ありませんミュキ様」

「牡丹の君……」

すれ違いざま涙を流し謝りながらその場を退出させられて行ったのを見ているしかなかった。

矢張り陛下の伴侶って私か??

一体何時私が了承したんだろう……ルインさんの後姿を睨みつつも此処で喚いても仕方ないので元凶と対峙するしかないよう。

多分この場にいる人々はこの国の大臣クラスの重鎮達が私を見定めに来たのかもしれないが今ルインさんの考えが分からない

私が強姦魔を嫌っているのを理解しているはずだからこの場で私を引き出すのは強姦魔とくつつけたがっているルインさんには不味い

ような気がするのだけど

確実に私がこの場をぶち壊すのは目に見えているのだから

そして中央の席に立っている人物の目の前に突き出される。

「陛下、ミユキ様をお連れ致しました。

私は強姦魔を睨みつけるべく前を見て目が点になってしまい思わず叫んでしまう。

「なんじゃそりゃーーーーー」

そして部屋は静寂に包まれるのだった。

## ごり押しと王様

「陛下…… その恰好は一体……」

「丞相、どうだ似合うであろう」

何故か丞相は魂が抜けたような表情で余を見詰めているので、あまりの美しさに言葉が出ないのであろう。これならミュキも余を好きになってくれるであろうか？

「ではミュキのもとへ参ろうか」

喜び勇んで丞相を促す。

ドッカ！

「ぬっわぁー！」

背中に衝撃を覚えて前のめりになるが何とか耐える。なにしろこの日の為に設えた衣装が汚れてはミュキの印象が悪くなるではないか。

「おのれ丞相何をする！ 折角の衣装が汚れるではないか！！」

「何を考えているんですか!! 王とあろうものが女装など前代未聞」

「女装ではない、ちゃんと体も女に変えておるので丞相と一緒にであろう」

全く煩い奴、余の方が美しいから嫉妬しているに違いない。

この日の為に選んだのは金箔を貼った煌びやかな地に百花繚乱の花をあしらった華やかなもので丞相より数段上だ

「そう言う問題ではありません、そのお姿で本気でミュキ様とお会いする心算ですか」

「ミュキは女の方が良いと丞相が言ったのではないか……余はアンチョングウイより美しいからきっと余の方を好きになる」

ボッカ!!

「ウツグ!」

突然頭を思いっきり拳骨を食らう

「酷いぞ! 何故殴る」

「よくも抜け抜けとアンチョンより美しいなどとふざけた事を言うのはこの口ですか!」  
あろうことか余の口に左右の人差し指を入れ思いつき横に引っ張られ引き伸ばされる。

「いひゃ…にゃーに…しゅ…る…」

丞相の顔は悪鬼のように目を吊り上げて怒り心頭――アンチヨング  
ウイの事となると見境をなくすのを忘れていた。

「そんな変な顔で二度とアンチヨンより美しいなど仰らないでくだ  
さい！」

変な顔にしたのはそなただろうと言いたかったが丞相の機嫌を損ね  
てミュキに会えなくなつては困るので謝るしかない

「わるかった……アンチヨングウイの方が余より美しい」

「全くその通りです」

何が全くだ、元々アンチヨングウイは余の後宮に入る予定の娘を横  
取りしたのではないか……もし余が欲しいと一言言えば妻になど向か  
い入れなかったのだから少しは感謝してもいいはず。

亀王として敬う気持ちが全く無い困った奴だが、余の代わりに国を  
動かすには無くてはならない存在

何気に余の方が立場が下……？。

まっ……そんな事はどうでもいい

「それよりミュキを待たせてはならん早く行こう」

「…… 本当に着替えなくて宜しんですね」

「しつこいぞ」

余も散々悩んだ末に女の姿になったのだ（丞相に相談したかったが機嫌が悪く出来なかった）

それに女どうしの方がミュキも気を許してくれるかも知れない

そう思うとワクワクと胸がはずむのだった。

瞑道を開けて案内された場所は何処かの屋敷のようだ。

「何処だ此処は？」

「私が所有している領地の別荘の一つです。主だった家臣は既に来ております」

「余とミュキの他に???」

「はい、王宮でも良かったのですが後宮の女達に嗅ぎつけられては厄介なので王都から離れた場所に致しました」

「何を企んでおる……」

「此のままミュキ様が陛下に心を傾けるのを待っていては埒が明きません。重職にある亀族達の前でミュキ様を伴侶として向かいれる



事を明言され、即刻後宮の側室達を追い出して正妃として入内していただくのです」

「そんなに巧く行くのか!？」

そもそもミュキが了承してくれるだろうか

「三人の側室の親もこの場にいますので一人ぐらい犠牲にすれば喜んで娘達を引き取るでしょう。なにしろ何の役にも立たず国庫の予算を食いつぶすぐ潰しもいいところ……反対にこれまでの経費を請求したいところです!」

真っ黒な笑いを浮かべる丞相が怖い!!

確かにあの者どもの浪費は目に余るものがあり、偶に人間の姿に戻ると後宮の経費が膨大で早く一人に決めろと丞相に追い立てられていた。

どうしてかと言うと、王が正妃を迎えた時は後宮を一旦解散させ正妃だけ残し側室は宿下がりさせ、正妃が子を産むか十年間子が出来ない場合は側室を入れる習わしだったからだ。

勿論、余はミュキ以外側に置くつもりは無い

子供など出来ずとも別段問題ではなく、王など言うのは一番神力の強い者が天帝に認められ王位に就くのだから血など関係無いのだ

「それでは陛下、ミュキ様が来る前に重臣共に優しく説得でも致しましょうか」

「そうだな、久しぶりの余の尊顔を見せてやるとしよう」

考えてみれば百年以上は顔を見せていなかったかもしれない……ソロソロ奴等の悪い虫が芽生えぬうちに余の力を見せつけておかねばならない

「それと もう一つ助言ですが、ミユキ様は情に脆い方の様ですからその辺りを攻めて行くと宜しいですよ」

「うむ、分かった」

そして余に忠実な臣下の下に赴くのだった。

通された部屋には確かに十名の各府の府官長が首を揃えて待っていた。

余の気配を察して全ての者は既に立っており頭を下げ静かに待っておるが腹の底は真っ黒な爺どもだ、余の隙を狙っては悪巧みをして利益を得ようとする佞臣ばかりだが優秀なものには変わりなく余が樂をするために必要な人材なのだ。

余が絶大な力を示す限りは大人しく従っているので多少の悪事には

目を瞑っているのが現状

中央の席に行き椅子に座り声をかける。

「皆のもの久しいの、面を上げ着席せよ」

「「「「「「 御意に 亀王様 「「「「「」

むさ苦しい男共が一斉に着席し余の顔を見ると皆が呆気にとられた表情で、中には見惚れて欲望を含んだ目で見る者さえいる。

これ程の美貌の女を目にして当然の反応

男の姿でも余に懸想する男共が多いのだから女の姿ならば尚更の事——当然の反応だが

どうでもいい相手の気を引いても意味がなく、ミユキにはこの美貌になびきもしない

何故だろう?????

「此の度、そなた達を呼び付けたのは余の伴侶を正式に決めた事を報告するためだ」

途端にどよめきが起こり、そして特に三人の側室の親が色めき立つ

「それは真ですか!?!」

「一体誰でしょうか!?!」

「三人の側室様の内の一人」

やはりと言おうか勘違いをしておる…誰がそなた達の性悪娘達を選ぶものか。

「そなた達に悪いが余の選んだ伴侶は人間だ」

そう言った途端に予想通り反対意見が飛び交う

「人間！ たかが人間をこの国の正妃にしようと言うのですか！」

「そのような話は我等が納得致しません！」

「伴侶はしかるべき亀族の姫をお迎えください」

「人間など伴侶にすれば陛下が侮られてしまいます」

一斉に臣下達は意義の言葉を次々と喚きだして鬱陶しい事この上ない

「そなた達誰に意見しておるか！ 余は既に決定した事を言っただけ。異を唱える者は前に出るがよい」

一括し、艶然と微笑んでやると皆一様に顔を青褪めさせるが娘を側室にしている大理府長官が声を振り絞り言う

「でっですが…それではこれまで長きにわたりお仕えしていた側室様達があまりにも憐れでなりません。どうかご再考を…」

何が憐れだ、後宮で贅沢三昧をし好き放題に居座っていただけの存在……体の関係があったが全て此方が襲われた被害者だ

昼寝をしていたら何度上に乗られた事か———恐ろしい女達だった。

「長年仕えたとは面白い事を仰いますね大理府長官。どの側室様も陛下の寵愛を既に受けなくなり二百年以上たっており御子様の一人産んだ訳でも無いのに後宮に居座るなど厚かましい限り。此处は潔く身を引く事をお勧めいたします」

丞相が冷たい声で提案するが往生際が悪く尚言い募る。

「我が娘は陛下の正妃になるのを夢見ておりました。どうかご慈悲を」

「何を勝手な事を それなら我が娘も同じ事！」

「私の娘の方が美しく正妃にふさわしい！」

終いには三人の親が争い始めるので呆れるしかないが何時まで見守る程気は長くない

煩い者は消してしまえばいいのだと思ひ三人の真下に瞑道の穴を開けてやるとズボリと穴に落とさせ首まで落ちたところを穴をすぼめさせると、床に首が三つ突き出た形になりまるで切られた生首状態

「丞相、その目障りな者達の首を刎ねよ」

「御意」

丞相は余の命を受け一人の頭に剣を突き立てる。

「残念ですよ貴方のよな優秀な人材を失うのは、でも安心して下さい後には優秀な者が大勢控えていますから」

ニツコリと微笑み他の家臣たちにも何時までも自分の地位が安泰でない事を知らしめる。

「「「ひえゝゝゝ」 お許しを――」 娘達は直ぐ引き取ります！  
「「」

三人の府長官はその後直ぐに引きずり上げて改めて側室達の引き取りを確約させた。

他の者達も顔を青褪めさせ部屋は静まり返っており、当分は余に逆らおうなどと考えないだろう。

「それではこれから余の伴侶を紹介したいが今だ到着せぬ。暫し待つがよいが、一つだけ忠告しよう……余の伴侶に不快を感じさせたら即刻瞑道の闇に落すと覚悟せよ」

「「「「「「「」 御意に……」 「「「「「「」

重臣どもを睨みつけ釘をさしておく

もしこ奴等の態度が悪くミユキに悲しい思いをさせたら八つ裂きにしてくれよう

ミユキを泣かしているのは余だけ……否、泣かしたい訳ではなく笑って欲しい

そう言えば笑顔を見たのも一度つきり

ああゝゝ もう一度見れるだろうか……

無理やり伴侶にすればより嫌われるのは分かっているが……止められない。

丞相がミユキを伴侶にごり押しするお膳立てに便乗してしまった今、突き進むしかないのだった。

## ごり押しと王様（後書き）

王様は神力に物をいわせた暴君です。そうでなければ亀の姿で寝てばかりの王様なんて家臣がついて行くわけがありません。それも丞相のサポートがあつての事なので頭が上がないという設定



## 王様と私と呪い

私は我が目を疑う……目の前には絢爛豪華なド派手に女装をした強姦魔

一体この男は何を考えてこんな金ぴかな衣装を着てるの????

悪趣味だし女装の意味が分からん!!

思わず叫んでしまったが二の句が告げれない。

啞然していると強姦魔は金ぴかの衣装に負けなくらい眩い笑顔  
を私に向けるので目がチカチカする。

「ミュキ！ 会いたかった—— 今日是一段と可愛いぞ〜〜〜」

目が眩んだせいでつい抱擁を許してしまい抱きしめられ、ハッとす  
る。

「ちょっと離しなさい！ このロリコン強姦魔」

怒鳴りながら手が自由にならないので足を思いっきり踏みつけてや  
るが、あまり効果が無いようで離そうとしない

「ロリコン??? 余の名はチョングウイだ。どうかそう呼んでお  
くれ」

「何がチョンほにゃららよ！ あんたなんかチョン……そうチョン

マゲで十分」

あんななんかバカ殿のチョンマゲだ!!

プツ 笑えるかも

「チョンマゲ?? それは余に付けてくれた愛称!!!」

何故か感激し一層きつく抱きしめてくるので苦しくて堪らない

ぎゅうっ——————う ギシッ ギシギシ……

「ウツ…… くっ苦し… い……」

此のまま絞め殺されるのかと思ったらルインさんがたしなめてくれる。

「陛下、ミユキ様は人間ですから力加減を間違っては直ぐに死んでしまいます」

「そうであった!」

パッ!

それで漸く私が死にそうになっているのに気付き慌てて両手を離し解放されたお陰で新鮮な空気を肺に取り込んで呼吸をする。

「一瞬あの世を見かけたは……」

「すまぬ……つい嬉しくて…」

見れば肩を落としシュンとしている。

こんな悪趣味な衣装でも美形だと様になるから不思議よね…全く美形はずるい

しかし何時までも怒っていてもしょうがない。今日はスッパリ私を諦めて元の世界に戻して貰うよう交渉をしに来たのだ。

強姦魔は此方の顔色を伺うように見ておりイニシアティブは私にあると見た。

思いつきり営業スマイルで話しかける。

「王様今日は私にどの様な御用でしょうか。確か歓迎の宴のはずですがなんだか物々しいですね」

ルインさんは陛下と呼んでいるけど私はこの国の人間でも家臣でも無いので王様と呼ぶ事にした…本当はチョンマゲと呼ばたいが呼ぶ度に笑ってしまいそう

「／／／ 実はそのミユキに… 余の… だな…」

もじもじ頬を染めながら一向に話しが途切れ途切れで進まずイライラして来る。

見かねたルインさんが話の説明し始めた。

「僭越ながら私からご説明します。今夜この宴にお出で頂いたのはミユキ様を陛下の伴侶として国の重臣を集めお披露目する事にした

のです」

伴侶??? 何ですかそれ??

「伴侶とは王様の花嫁と言う事ですか?!」

「そうです。ミュキ様はこの国の王妃様になって戴きます」

「一体何時そんな事を私が了承したんですか」

「この際ミュキ様の意志は関係ありません。陛下が望められたその事実が全てです」

駄目だ、ルインさんは聞く耳持たない状態

どうやらすっかりルインさんを敵に回したみたい：やはり牡丹の君にひつつき過ぎたのが良くなかったのゝゝ 私は必要以上に煽った行動はしていなかったはずだけど失敗したとしたら酔った時に何かやったのかも知れない

まさに酒は飲んでも飲まれてはいけない。

牡丹の君はいないし味方はいない

最初からこの王様に掛け合うしかないんだけど、顔を赤らめモジモジする本人に向き直し問いただす。

あくまでも冷静に

「私は初耳ですが王様は何時結婚を申し込んだんですか」

「そっそれは…まだだが　　／／　　今する！　　どうか余と婚姻を結んでくれないか……」

目の前で顔を真っ赤にさせプロポーズして来る金髪碧眼の神々しいばかりの女装男

産まれて初めてされたプロポーズはかなり微妙だ

これ程の美形なら女装癖があらうとロリコンであらうが殆どの人間が一つ返事でEYSと返事しただらうけど、例え玉の輿だとしても乗る気にはなれない

「お断りします」

「ミュキ……　うっううう…ううえ…うう…」

キッパリ断った途端に目に一杯の涙を溜め此方をみつめるが如何せん上からの目線では萌えない、これが下から見上げながら目をウルウルさせられたら堪らなかったかも

「そもそも王様は私の何処が好きなんです。会ったのも私が岩山から落ちて助けて下さった短時間で」

まさか一目ぼれされる容姿だとは思っていない。

「それは、ミュキが落ちて来て余の上で目覚めた時にあまりの可愛さに目が外せなくなったのだ」

王様の上に???　　岩山から落ちた時の事だろうか

しかし私が可愛いとは矢張りロリコンだからか

「つまり一目惚れ!! この私に!」

「／／／ そうだ: 余はミュキに一目惚れした。絶対幸せにするからお願いだ」

私に一目惚れなど信じられない……矢張りこれは呪いだ

これを真に受けて王子様が呪いが覚めた時バカを見るのは私

それに私は元の世界に戻りたい

「そんなの私は信じられないわ、そもそも王様は幼い少女が好きなんでしょうが生憎私は成人した女性で二十三歳です」

「???…ミュキが大人なのは良く知っておるし、余に幼女趣味はない」

「えっ… そうなの??! でも王様が私が好きなんて可笑的、やっぱりこれは呪いのせいです」

ロリコンで無いのなら呪いで話を持って行くしかない

「呪い???」

そうよ、呪いの所為にして巧い事王様を丸めこむ作戦に変更!

何事も臨機応変に対応するのが社会人

でないと理不尽な上司の要求には応えられない……ま……その場しのぎの誤魔化しとも言う。

「そうです！ これは私が異世界トリップをしたせいで起こった呪い、私の世界では古くからの言い伝えで異世界を渡りし者は初めて会った者に庇護を得るため呪いを無意識のうちに発動してしまうんです。それは恋と言う呪いが……」

「それでは余の恋は呪いだ」と

「はい、だから今直ぐ目を覚ます為にも私を元の世界に戻すんです。そうすれば恋の呪いが解かれ、私のような平凡な娘など見向きもしくなくなるはず」

王様信じるんだ！ そして私を元の世界に戻すのよ。そうすれば平凡で私に相応しい人生が取り戻せる。

「余に呪いを掛けるなどあり得ん、ミュキは人間でしかなくそんな力など無いのだから」

「異世界の人間を嘗めないで下さい王様、私達全ての生命が生まれた星地球の慈悲深く大いなるアースの力で護られているんです」

うっ…… 我ながら苦しい言い訳、こんな事なら弟のお勧めを沢山読んでおくべきだったのが悔やまれる。

「ミュキが言うように呪いだとしても余はミュキを愛してる信じてくれ！」

／／／ うっ！！」

熱い眼差しで愛していると言われ心ときめかない女がいるだろうか  
：だけど此処で負けては面倒な生活の日々が待っており私なんか直ぐ飽きられ後宮の片隅で惨めな生活を送るに違い無い

一時の華やかな生活より地道ながら小さな幸せな家庭を夢見たい

美形に負けてはいけない！ 平凡の意地を見せるののよ

そして演劇サークルで培った演技力を見せる時（裏方だったけど練習様子を良く見ていただけ）

「私には王様のその言葉を素直に信じられず呪いによって愛されてもそんな偽の愛なんて私は受け入れられません。だから私に対する想いが本物だと証明して欲しいのです」

「信じてくれるなら何でもする」

ふっふっふふ 罠に掛かったな

「では私と共に元の世界に戻ってもう一度私と向かい合い愛しているかどうか考えて欲しいのですが、王様は私の世界に行く事が出来ますか」

「余の愛を受け入れてくれるならミュキの世界に行こう。天帝の気を探ればそんなに難しくは無い」

やった！！

思わず万歳三唱をしたいのをぐっとこらえるがルインさんが横やり



を出して来る。

「陛下騙されてはいけません！ ミユキ様は地味な顔ながら中々のお方。それはご自身が元の世界戻る為の策略です」

糞： ルインさんめゝ 地味な顔ながらってなによ！

しかし此処でくじけてはいけない。私は今女の必殺技が使えるのだ。

他の男には無理でも王様には効くはず――その名も泣き落とし

今こそこの技を使い長年のトラウマを払拭する時だった。

私は大袈裟に両手で顔を覆い泣きだす （さすがに演劇サークルの裏方では涙は出せない）

「うっうう……酷いわ……私はただ王様の真実の愛か知りたいだけなのです……ヒック……こんなずるい私を許して……シクシクシクシク」

サークルの看板女優の演技を思い出しながら真似をするが、こんなので騙されるか少し不安を感じる。

「おおゝ ミユキ 丞相の事など気にする事は無いぞゝ それではパッパッと行って余と愛を確かめ合おうぞ！！」

しかし見事騙される王様

ぬっおおお――感動！！！！

屈指二十三年初めて女の武器を使いこなしたあまり本気で涙が出て来てしまう

「有難うございます王様！」

私は涙流しながら女神様を拝む様に手を組んで見上げると締めりのないデレデレとした王様の顔はやっぱり美形だ

「なりません陛下！　こんな下手な芝居引っかからないで下さい」

しかしルインさんがしぶとく邪魔をして来るので私は王様に抱きつき急かす

「私の世界では思い立ったが吉日と言います。早く行って確かめましょう」

そうすると更にデレデレする王様はルインさんを無視して私の言うがまま

「分かった。では早速行こうぞ」

しめしめ：我ながらこんなに上手く行くとは思わなかった！！思わず心の中で細笑む

もしかして王様ってバカ？　ころりと騙され思わずこの国の行く末が心配になる。

王様は壁に手をかざすと牡丹の君と通って来たのと同じ穴がポツカリと空くとかさばる衣装を着た私を軽々と抱え上げる。

「狭間の世界は迷いやすいので余が抱いて行こう　／＼／」

おおー　お姫様抱っこ　／＼／

例え女装をしていてもこれだけの美形にお姫様抱っこなんて私でも  
ばーっとしてしまいドキドキと心臓が波打つ

そしてボーッとしている内に王様はトンネルに入って行き目の前が  
一気に真っ暗闇

突然の暗闇に驚きその胸に顔を寄せると何故か弾力を感じる。

「ん???」

手でその感触を確かめるべく胸を押してみるとムニユゝとした柔  
らかさなので揉んでみる。

モミモミ　ぷにゅぷにゅ

「／＼　ミユキ積極的なのは嬉しいが向こうに着くまで大人しく  
してくれるぬか…後でなら…」

不穏な発言は無視して驚く

「何で胸があるの???!!　この間は無かったはず!」

なによこれはルインさんには及ばないがCカップは絶対にある。こ  
の間までは洗濯板のようにまっ平らだったのに!!!　何か入れて  
いるにしては自然な感触

「ミユキの好みに合わせて女の姿に変化させてみた」

つまり女体化！！！

流石神様、性別も変えられるとはさすがファンタジー！ うん…？  
?? 私好み??? ??

「何故私の好みが女？」

首を傾げ聞いてみる。

「違うのか？ 丞相がミユキがアンチヨングウイを口説いていたと妬いておったぞ…男が良いなら直ぐにでも戻るが！」

口説く?? どうやらその所為でルインさんを敵に回してい待ったのだ知るが、一体何時そんな事をしたか思い浮かばない???

それより男の姿に戻られるのは危険なので速攻断る

「女の姿のままです結構です」

「そうか……」

シュン………

男に戻った途端襲われては堪らないので断るとシヨンボリとする姿に可愛いと思ってしまう——やばいかなり絆されてきたような気がする

早くお別れしないと

こいつは私をレイプした最低野郎なんだと心に言いきかせるのだった。

幸せだ~~~~~

ミュキが余に抱かれて大人しく身を任せてくれている!!!!!!

なんて愛おしい存在

ミュキは余の気持ちを呪いから来るものだと言っているが呪いでも何でも良かった。

こんなに幸せな気分になれるなら呪いなら何度でも掛かりたい!

ミュキの世界にいったら余の気持ちは本気だと理解してくれるだろう。

余として神! ミュキの世界の神に劣るはずが無い

絶対ミュキと愛を確かめ合い余の伴侶にするのだ。

しかし向こうの世界には天帝が居るのが引つかかる……人に嫌がらせするのが生きがいのような最悪な生き物

いない事を心から願うのだった。

## 王様と私と呪い（後書き）

このまま最後まで玄武を更新して龍王は暫く休みます。多分後数話で終わらす予定ですが続編も考案中。

龍王が終わったら続編を書きたいと思います。  
もうしばらくお付き合いください。

## 重臣達の模索

「丞相様、これは一体どういう事でしようか……」

勇気ある重臣の一人が恐る恐る不意機嫌に青筋を立て静かに怒っているルイングウイに声を掛けるのを他の就寝達が賞賛の目で見守っていた。

重臣達は困惑していた……突然招集を受けこの別荘に呼ばれたのは良いが、最初に驚かされたのはルイングウイの女装。

誰もが突っ込みたかったが後が恐ろしく口を噤んだ。何故なら後からしかけられる報復を恐れたからだ

だが次に驚かされたのが亀王チヨングウイの女装！！！！！

圧倒的な美しさに誰もが息をのみ見惚れ押し倒し我が物にしたい衝動にかられたが、その欲望は本当の亀王の姿を知っているので直ぐに鎮まる。

亀王チヨングウイの本来の姿は恐怖の対象だった。

自分の意に沿わない人間は即座に殺し異を唱えるなど許さない、そんな横暴を許されるのも圧倒的な力にある。この世界の創造神であ



る天帝様に次ぐ神力の持ち主

この世界で亀王チョングウイに適う者など天帝様しかないのだ

どんな理不尽な事を命じられても従うしか無く亀王チョングウイが王位に就いた時は凄まじい粛清の嵐だった。前王は人の良いのんびりした亀王だったので政務は家臣達の言うがままだったので佞臣が蔓延していた。先ず、チョングウイは何の官位も持たず成人すらしていない幼馴染のルイングウイを政治の最高職である丞相に任命する無謀ぶりに反発した重臣全ての首を問答無用で斬り捨てたのを皮切りに次々と改革を行って行き逆らう者は死の恐怖で王宮を支配して行ったがルイングウイは事のほか優秀で才長けた若者で国の全てを把握し治めて行った。国民達は内乱も起きず不当な税の取り立ても無く人間の地位の向上され多くの者が新王を歓迎した。

しかし国を治めているのは実質丞相ルイングウイであり王は傀儡だと裏で噂されたが二人は気にする事無く国を治めていった。

なにせチョングウイは怠け者なので殆どを丞相ルイングウイに押し付けていたので事実傀儡政治と言って過言でなかったからだった。

そして後宮には当初数多くの美姫が送られたがチョングウイは見向きもせず午前中の政務を済ませて日々寝てばかりで子供が出来そうにも無いのを見かね丞相が後宮の側室を昼寝する王の下に遣わし事に及んでいたが後宮の女達の苛烈な争いと露骨な誘いが繰り広げられ収集がつかなくなり始める。

暴君であるチョングウイも女には強く出れない弱点があったのだ：  
：育ての親の爺やが幼いころから女性は子供を産んでくれる大事な存在で無暗に虐げたり殺してはいけないと教えられていたからだっ

たので、その辺も後宮の女達をつけあがらせてしまったのだが、周りの重臣達も子供を作れと煩く辟易した亀王はどうとう亀の姿の転神して過ごすようになってしまったのだ。

そして後宮の側室達も徐々に姿を消して行きとうとう三人だけになったのだが誰も亀王は正妃を選ばず終わると考えていた所に正妃の内示があり、事のほか驚愕したのだった。

### 亀王の伴侶

それは正に青天の霹靂で一生涯正妃を迎えないと高を括っていた者達は驚き慌てる。

普段なら絶対に異など唱えないが相手が人間

何れ我が娘に御子を産ませ正妃の地位につかせ丞相の地位の取って代わり権力を思うままに操ろうとしていた者達は恐怖を忘れて異を唱えてしまったのだ。

そしてわが身の命を危うくして漸く思い出す……

“ 亀王には逆らってはいけない ”

再び恐怖に身を引き締める重臣の前に現れた王の伴侶を見て驚かされる。

### 先ず第一にその容姿

黒い髪に黒い瞳！ この世界にこんな色彩を持つ者など聞いた事も見た事も無かった上にその容貌は平凡の一言

誰もが亀王が惚れこむ程の容姿には思えず内心疑問ばかりが湧き起  
こる……

この者が真に王の心を射止めたのかと

第二に伴侶様の陛下に対する態度！

王を恐れず話す言葉も不敬としか言いようがなく、自分達であれ  
ば即刻首を刎ねられているはず

しかし王は怒るところか平凡な少女の顔色を伺い機嫌を取っている  
始末で我が目を疑う

自分達が知る王とはまるで別人

平凡な少女に骨抜き状態なのが直ぐさまに読み取れる。

しかも会話の中には強姦魔や異界、幼女趣味やら呪いなど展開が良  
く理解できず

茫然と遣り取りを見守っていると亀王は少女を連れ消えてしまい混  
乱ばかりが残り如何すればいいのか丞相に助けを求めるのだった。

「貴方達には伴侶となるミュキ様を紹介したかったのですが……陛  
下と共に愛の確認に行かれた様なので今夜は皆さんで陛下とミュキ  
様の将来を祝し宴を進めて下さい。日を改め正式にミュキ様を伴侶  
として公式の場でお披露目します」

心の中はミュキ様の口車に乗りまんまと異世界へ行ってしまった陛下に対し怒り心頭だが心沈め応えるが一人の重臣が愚かにも質問を返してしまう。

「陛下は何時お戻りに……」

「私に分かるはずが無いでしょ……」

そんな事を一々私に聞くのでイライラして睨みつけてしまう。

「ヒィー―― 申し訳ありません」

ミュキ様が関わると思ったように事が運ばないので気が立って、残された重臣達に当たってしまいそうだ。

「私も少々疲れましたので失礼ながら下がらせて貰います。他の方々は無礼講でお楽しみ下さい」

とてつもない疲労感を感じこの場にいるのも疎ましいので愛しい妻の元に行く事にするが先程の事があり顔を会わしづらい

しかしあのミュキ様が黙って伴侶を受けいるとは思っていいなかったが、まさか呪いなどと言いだすとは……だがミュキ様のような平凡な顔立ちの少女に陛下が一目惚れするなど信じられないのは確かだ。

これまでどれ程の美女を見ても欲望を抱かなかった陛下がミュキ様を抱いたと知った時は陛下の趣味がこう言う普通の娘なのかと納得したのだが

…呪い……

何故かそう言われた方がしっくりする気がする。

だが呪いが掛かったにしろ陛下がミュキ様を愛しているのは事実

陛下がむぎむぎとミュキ様を逃すはずがないだろう。

普段は何もせず寝てばかりいるがある意味手段を選ばないお方

幾ら小賢しい娘とはいえ、陛下から逃れるのは無理だろう

陛下達が戻る前に後宮を一掃して綺麗にしておかないと…

そうだ！

アンチヨンに後宮のミュキ様の部屋の調度や衣装の用意をしてくれるよう持ちかければ機嫌が直るだろう

ミュキ様を後宮に入れてしまえばアンチヨンが会う事は滅多にない、これで陛下が少しは政務をして貰えれば時間の余裕が出来、子作りに励めれる

アンチヨンを娶り既に三百年近くがたとうとしているが今だ子が出来ず心を痛めているのを知っているので私達夫婦の為にミュキ様に陛下を確り操縦して貰わねば

幼い容貌ながら中身は中々の人物

ミュキ様に付けた侍女に対する態度も分を弁え好ましい

今いる側室達の美しさに遠く及ばないが王の伴侶とは生涯王に安らぎを与える存在

美しさなど二の次、それに陛下の御子様ならそれなりの美貌と神力を持って生まれるだろう

この場合異界のミュキ様の血がどう出るかも楽しみ

だがそれより先に私達夫婦の子供を造らねば

子作りに励む為にも妻の元に急ぐのだった。

宴会の場に残された重臣達は己が派閥で固まり酒を酌みあっていた。

重臣A「一体我等は何しに呼ばれたんでしょうか」

重臣B「陛下の伴侶のお披露目でしょ」

重臣C「まさかあの陛下が伴侶をお迎えになるとは何か良くない事の前触れではないかと不安が過ぎるんですが気のせいだろうか」

重臣A「いいえある意味好機かもしれませんよ。見なさいあちらを：娘を側室に送り込んだ大理府長官達の青い顔。今まで娘達の威光をかさに大きな顔をしてましたが陛下が伴侶様を迎えその威光も地に落ちるでしょう」

重臣B「確かに、今度は我々が伴侶様に取り入れればいいわけですね：」

重臣C「フッフッフ：伴侶様は幼げなご様子で取り入りには好都合」

重臣A「しかも陛下はかなり伴侶様にご執心なご様子：伴侶様に気に入られれば丞相をも蹴り落とすいい機会かも」

重臣B「漸く我等の時代が訪れますね」

三人の重臣はお互いの顔を見やりながら低く囁い合う

そしてそれぞれの重臣達が各々未来を模索し夜が更けて行くのだった。





私と王様と……

王様に抱かれなが暗闇を進んで行くけどまるで宇宙空間のように上下左右の感覚がないせいか可笑しくなり乗り物酔いのように気分が悪くなって来た

「王様まだ着かないんですか……気分が悪い……」

「大丈夫か!! 直ぐ神力を注ごう」

「神力？」

王様がそう言った途端体がふわりと温かいものに満たされると気分がすっきりする。

「凄い! 流石神様」

「／／／ これ位なんでもない何時でも言ってくれ」

照れる様はまじ可愛いく感じるが如何せん面倒な立場な上に美形……せめて地味な顔なら横に居ても良いんだけど、王様の横では自分が惨めになるだけだ。

しかし幾ら進んで行っても真っ暗闇で何処に私の世界に繋がって

るのか不安になる。

「まさか迷子になったとか？」

「心配いらぬ、天帝の気が此方の世界とミュキの世界を繋いでいるので迷う事はない。恐らく天帝の存在が大きすぎるので異世界に拒絶されるので魂の一部を切り離しミュキの世界に渡ったのだろう」

魂を切り離すなんて何て器用な人…じゃなく神様か…それじゃあ私が会った金髪美少年は幽霊??

その割には存在感があった。

「後どれ位で着きます」

「そんなに離れた世界では無いのもう直ぐだ」

つまりご近所さん

「やっぱり他にも色々な異世界に繋がってるの？」

「余も良く分からぬが無数な世界があるとされておる。だから一旦異世界に落ちれば自分の世界を捜すのは容易ではない…余とて天帝の軌跡が無ければミュキの世界がどこかすら分からなかっただろう」

どうやら金髪美少年のお陰でギリギリ戻れたようだけど一体私の世界に何しに来たのか、もし会えたらとっちめてやらねば。

しかし向こうに着いたらどうやって王様を追い返すが一番の問題

本当に呪いが解けたように私を好きでなくなれば話は楽なんだけどだからと言って此のまま王様と別れるのチョツと残念…だって、これから私がこれ程の美形に迫られるなんて絶対ないと断言出来る。まあー 初体験の相手が王様なのは幸運だったが意味不幸だったのか

何しろ最初がこんなゴージャスな相手では次に付き合う男が例え有名俳優でも色あせてしまうんじゃないだろうか？ 向こうの世界で目が肥え過ぎてしまったが、自分の容姿がそのままなのが悲しい所私では並みな相手しか望めないのだから

なんだか相手をより好みをして結婚出来るのか不安になった来る…どうしよう…

そんな私の不安をよそに能天気な王様は嬉しそうに話し掛けて来た。

「やはり向こうの世界に行ったらミュキの御両親に挨拶した方がいいのだろうか」

「!… いいえ、王様が両親に会いに行ったら腰が抜けて大変だから止めて。それより先ず私の世界に行って愛を確かめてから考えましょう」

「そうだな」

如何しよう王様は私と結婚する気満々

騙しているので良心が咎める

否…王様は私をレイプした酷い奴

気を病む事なんてチツともない！

「漸く着いたようだ」

王様がそう言うが目の前は真っ暗闇で何も無いので小首を傾げ聞く

「何処にあるの？」

「狭間を裂かねば分からないのだが、見てるがよい」

得意げにそう言うのと左手を前に突き出すとそこにポツカリと穴が開いたかと思うと懐かしい天井が見えて来る。天井には見なれた人の顔のような染みが浮かんでいる（これのお陰で格安で借りれた）ので間違いなく私の部屋！

嬉しさのあまり王様の首に抱きつく

「きゃあゝゝ 有難う王様！！」

「／／／ ミュキゝゝ！」

そしてそのまま穴に入ると私の部屋に出た途端穴がふさがり辺りを見渡すと部屋の様子は変わっていないが窓から射す赤い光で夕方だと伺える。

「ここがミュキの世界？」

王様は部屋を物珍しそうに眺めているがあまり変化かないようで呪いは解けていないよう…本当に呪いだった良かったのに困った。

「王様そちらに座って下さい。今お茶を淹れますね」

部屋は6畳にベットとタンスにテーブルが置いてありかなり手狭でソファーなんか無いのでベッドに腰掛けて貰う。

私の感覚で異世界トリップしていたのは十日間なので水道ガス電気は止められていないはず。王様にはベッドの上に腰掛けるが狭い部屋の格安家具に囲まれているのは可なり場違いで私の部屋がより一層みすばらしく見えるのは気のせいだろうか……

今着ている衣装はかさばり狭い部屋では動けないので内掛けを脱いでハンガーに掛け、一層の事普段着に着替えたいが1Kの部屋では諦めるしかなく、打ち掛けを脱いでも尚かさ張る衣装で狭いキッチンに入りお茶を淹れるべく薬缶に水を入れてコンロに掛けると何故かホッとしてしまう。

ガスコンロの火を見ながら帰って来たんだと実感する

一人暮らしも間もないので湯のみとマグカップも1つずつしか無いので仕方なくそれに緑茶を淹れる。王様には失礼かもしれないが無いものは無い

お茶を持って部屋に行くと王様はキョロキョロ部屋を見渡しながら大人しく座っており、王様だけが異様にキラキラしている。

もしかして王様はここを物置だと勘違いをしているかもしれない。

なにセルインさんの屋敷のトイレ程しか無いんだから絶対してるな……風呂場はもっと広かったから

「お茶をどうぞ、狭い部屋ですが寛いでくださいね」

「……… 否、中々良い部屋だ！」

明らかに動揺している…チョツと面白いかも

しかし今は何時なんだろう??

携帯を机の上に置いたはずなのに見当たらず、飲みさしのビール缶やお弁当の空も無いので恐らく家族が行方不明でアパートに来たのかもしれない。

アパートがまだ引き上げられていないだけマシだったろうか

もしかして搜索願いが出されてたりしてたら笑えない…早く公衆電話で連絡しないと

取敢えずテレビを点けてみると時刻は6時3分でニュースをしているけど日にちまでは分からない、確かトリップしたのは6月7日の火曜日8時過ぎだったから私の計算上では6月17日辺りのはずなのに暑い！ まるで真夏のような暑さに冷房のスイッチを思わず入れると王様がテレビに張り付くように見ている。

「ミユキ!! この箱はどうなっておる?? 小さな人が入って話をしておるーーー」

思った通りの反応……お約束すぎて笑えもしない

「これはテレビと言うもので電波を飛ばして映像を伝えるものなッですが詳しい事は私にも分かりません」

「テレビか……神力も使わず絵を箱に映し出すとは摩訶不思議」

いえいえ私達には王様の方が摩訶不思議な存在なんだけど

「このリモコンで操作すると色んな絵が見れますよ」

子供に玩具を与えるようにリモコンを渡すと目を輝かせボタンを操作して夢中だ……まるで未開の地の子供

私はその間に如何しようか考えるが答えが見つからない

王様が本気になれば私なんかどうにでも出来る力があるのに、そうしないのは王様の優しさなのだろう

だけでやっぱり私はこの世界で暮らしたい

此処は矢張り誠心誠意謝って王様一人で帰って貰うしかないだろう。誤魔化しなんて効かない

私は正座をして王様に向き直る。

「王様……お話をしましょう」

私は神妙な顔をして綺麗な王様の顔を見詰める。クッ…… 何て男のくせに綺麗なんだ!!

……否、今は女だったけ？

「良いぞ、お互いを知る為にも思う存分話し合おう」

王様は美しく微笑み意気揚々と応じて来る。

「私の世界に來た訳ですが、やはり王様の気持ちは変わりませんか」

「勿論だ！余にはミユキしかない！！ 呪いだとしても余の愛は変わらなかった。どうか伴侶になって欲しい」

真直ぐな目でそう言われるとたじろいでしまい息をするのも忘れ固まってしまうが次の瞬間顔が噴火したようにドッカーンと顔に血が昇り真っ赤になってしまう

愛の告白に免疫のない私に十分な破壊力

これが一会社員で平凡男子なら一発でOKで即結婚だ！！！！… なのだが如何せん相手ま王様で超美形の上に神様なんて全てが規格外こんな優良物件過ぎてハッキリって恐い！！

私は王様の熱い視線を死力を振り絞り外して、土下座をしよう。

「ゴメンなさい王様、呪いなんて嘘です……元の世界に戻りたくって嘘を言いました、私は平凡な普通の女なんです！ だから王妃なんてガラじゃないし、なりたくありません。どうか王様一人に戻って下さい」

私は額をカーペットに擦りつけて謝り王様がどんな顔をしているか



は分からない

暫らく沈黙が続き王様が漸く口を開く

「ミュキは余が嫌いか……」

悲壮感漂う声

好きか嫌い以前に会ったばかりの初対面でレイプされたのだ

「ハッキリ言って嫌いです。初対面で無理やり犯されて好きになんてなれるはずがないでしょ」

土下座したまま答えると王様は再び黙り込んでしまい重苦しい沈黙が続く中でテレビのニュースの音だけが聞こえる。

こう言う修羅場の経験の無い私はジツとしてるしかないが、いい加減テレビが天気予報になると痺れを切らして顔を上げるとそこには薄暗い中テレビの光に照らし出され滝のように涙を流す王様が声も出さず泣いていた。

美しいだけに恐すぎ!!

「王様……」

声を掛けても気が付かないように無表情に涙を流し続けまるで壊れた人形のようにだ

しかし此処で情を掛けてはいけない

最後まで面倒を見れないのに捨て犬を拾うようなもの

心を鬼にして私も座っているしかなく一種我慢大会だが王様も微動だにしないまま一時間が経過すると辺りは真っ暗でしようが無いので立ち上がり電気を点けるが王様は一向に動かないが涙は止まっております、焦点の合わない目と無表情さがマネキンのよう

少し…否…かなり可笑しい!!???

「王様どうしたんですか!?!」

王様の体に手を掛けるとひんやりと冷たくまるで氷のようなので驚いて王様を揺すってみる

「何か反応して王様! お願いだから返事をしてよ」

必死に呼びかけて体を揺するが微動だにもせずまるで石像

石像?!

王様の指先を見ると白魚のような手が石化したように灰色になっており触ってみると本当に石になっている。

「嘘!!」

訳が分からず混乱して一心不乱に石になって行く手を擦るが徐々に石化が進行して行く

「嫌! 駄目だよ、石にならないで!! 目を覚まして王様」

私の所為！？

王様を振ったから！？

そんなのズルイ！

神様のくせに一度の失恋で石化は無いんじゃないの！！

「王様駄目！ こんな事で死んじゃ世の中の半分は自殺しなきゃならないじゃない！」

「お願い止めて！ こんな嫌だよ……王様の伴侶になるから止めて」

怒鳴ったり宥めたりするが王様には一向に届かない

そして肘まで石化してしまい、もしかしたら足もなっているのかも知れないと思うとゾーッとする。

「どうでしょう……どうすればいいの！？」

パニック寸前でオロオロしているとアパートのドアの鍵が開けられる音がする。

ガツチャ カチャ カチャン

驚いてドアを見詰めるとドアが開き誰かが入って来る。

「っだっ誰！」

ドアから入って来た女を見て驚く

何故ならそこには自分が立っていた！！？？

「ただいま！深雪：なんだかおもしろい状況だね」

私が私を見てニツコリと笑っている。

この異常な状況を平然と受け止めしかも面白いと言う私

違うこの女は私じゃ無い

この女は誰

……………！！

そうだ、こいつはあの金髪美少年だ！！

神様なんだから私に化けるなんて簡単だろう

「あんた天帝でしょう！！ 正体を現しなさいよ！」

「あれ〜 直ぐ分かっちゃうなんて結構鋭いんだね〜」

私の顔でバカにしたように見られると尚更ムカついて来るが怒っている場合では無く王様をどうにかしなければ成らない！

「そんな事より王様が変なの！ 体が石になっていっちゃうんだけどどうにかして！！」

私に化けた天帝はヒールを脱いで上がって来るとスタスタと私達の側に来る。

良く見ると私はブランド品のスーツでバッチリ決めており以前の私より女子力が上がっている???

あんなスーツ私持ってたっけ???

天帝の私は王様を見るとニヤリと笑う

「可哀想に神族は神力が高い者程純粹なんだよ。だから考えられない程弱い心の部分を持っているから酷くその部分を傷付けられると簡単に壊れてしまう。壊れ方も人それぞれだけどチョングウイは自虐的だね……自分を壊しちゃうなんて」

「どうゆう事!？」

「我々神族には神核と言う力と命の源の珠が体内にあるんだけど、それを自らの力で打ち消して相殺しながら壊しているんだよ」

「全部壊しちゃったらどうなるの……」

「そんなの分かってるでしょ」

「石になって死んじゃうの……」

「ご名答!?!」

楽しそうに正解を言う私じゃない私

一瞬殺意が湧くけど、こいつしか王様を止めれない

「お願い、王様を助けて！ 石化を止めさせてよ！！」

「えゝゝゝ でもこの原因は深雪でしょ？ 何で私がしなきゃなんないの」

私の声が不満そうに耳に響く

「元を言えばあんたが私を異世界に落したからじゃない！ 責任とってよ」

「私じゃ無理ゝ チョングウイが望むものを示さない限り止められない。いいじゃない好きでも無い男なんかほっておけばゝゝ 助けたとして深雪はチョングウイの伴侶になる覚悟はあるのかな」

「何で知ってるの！？」

「一応、私は最高神だから全てお見通し・な・の」

ウィンクしながらふざけた口調……本当に神様なの、性格悪すぎ

自分の姿だから尚更最悪な気分

王様の伴侶以前に私は王様が好きなんだろうか

だけど王様は私なんか振られたくらいで石化してしまう程私を愛してくれている

こんな胸の無い平凡な顔の私なんか何処がいいんだろう？

本当にバカだよ…王様

こんなに想われて絆されない女はいない

素直に認めるしかない

私は王様に惚れちゃってる！

多分最初に抱かれた後には既に堕ちていた…

だけど自分にちっと自信の無い私は逃げるしか無い

何れ私なんか捨てられるのは目に見えておりその後の惨めに人生を送るなんて嫌だった

結局平凡で安穏な人生を送りたいなんて楽な生き方を選んでいたにすぎない

分かったよ王様ー私も逃げる自分を捨ててやる！！

王様に捨てられたら目の前で首を突いて死んでやるから覚悟しなさいよ。

まずは深呼吸をして呼吸を溜めてから大声で怒鳴る。

「チヨンマゲの大馬鹿野郎！！！！！」

ビッシ！　バッシ！

それから往復ビンたんを食らわすと此方の掌も結構痛い

王様をチョンマゲと呼んだのは最初に呼んだ時凄く喜んでいたからで他意は無い

「たった一度ぐらい振られたぐらいでいじけるなんてそれでも男なの！ そんなんじゃない私が他の男と結婚しても知らないわよ！！」

すると王様がピクリと反応した。

「私が好きなら何度でも好きっていつてよ。私の事を愛していないなら言わなくてもいい…でも死なないで生きていて…」

自分でも段々感情が高まり涙が出て来る。

涙を流しながら王様の石になった手を取り頬ずりをする。

「チョンマゲの所為で泣いてるんだよ…どうしてくれるのよ人を惚れさせておいて何処行く気よ… うっうう うえーん えーん うううっうえーん」

私の涙が王様の石になった手に染みて行くように消えて行きピシピシと音がし始めたかと思うと石になった王様の手が動き始め私の両頬を包んで上を向かせると王様の目に光が灯っていた

「チョンマゲ……？」

「ミユキ… 好き… 愛し…てる。 何処へも行くな 余の側に居てくれ……」



こわばった口をゆっくり動かし真摯に告げてくれる王様

もちろん返事は決まっている。

「うん チョンマゲのお嫁さんにして」

ピッシー

涙一杯の目で微笑みながら、そう返事した途端何故か王様は再び固まってしまったのだった。

余とミュキと……

瞑道の暗闇をミュキを抱き上げながら進む中、恐いのか抱きついてきたり自然な会話も出来た。

ああ〜何て幸せなんだろう

矢張り女になったのが正解だった!!

天帝の気の流れを辿りミュキの世界は簡単わかり、そうして着いたミュキの世界に來ると満面の笑顔で余に抱きつく

「きゃあ〜 有難う王様!!」

「／／／ ミュキ〜!」

だが余はミュキの本心を浮かれまくって全く気が付いていなかった愚かものだった……

狭間を開いてミュキの世界に入り込むとそこは狭い物置のような場所です。小さな簡素な寝台と箆笥に奇妙な箱が並んでいる。

寝台の上に座ると何やらギシギシといって今にも壊れそうなので大人しく座るが何とも貧相な部屋でまさかこのような処にミュキが住

んでいるのだろうか？　手慣れた様子で内掛けを壁に掛けてお茶を淹れに部屋を出て行ったが、直ぐにお茶を持って小さな机の上にお茶を置いてくれる。

「お茶をどうぞ、狭い部屋ですが寛いでくださいね」

「！！……　否、中々良い部屋だ！」

矢張り此処はミュキの部屋らしく両親と一緒に生活しているようでは無く一人でこの世界では結構苦労しているのかもしれない…後宮に入内させたら思いっきり贅沢をさせ着飾らせねば

ミュキは次に黒い小さな箱の突起を押すと向かいにある額縁のような箱に突然人と話し声がし始め驚く！！

なんだこれは？？

「ミュキ！！　この箱はどうなっておる？？　小さな人が入って話をしておるーー」

「これはテレビと言うもので電波を飛ばして映像を伝えるものなッですが詳しい事は私にも分かりません」

どうやらミュキの世界は余の世界とはかなり違っているらしい、テレビと言う箱に映っている人の服もかなり奇妙で絵には理解できない不思議な物が次々つ映りだされ目まぐるしい

「テレビか……神力も使わず絵を箱に映し出すとは摩訶不思議」

「このリモコンで操作すると色んな絵が見れますよ」

そう言って渡されたりモコンなる箱を受け取りそれについている突起を次々押すたびに絵が変わり中々面白いのでつい夢中になっているとミユキが神妙な顔で話しかけて来る。

「王様：お話をしましょう」

「良いぞ、お互いを知る為にも思う存分話し合おう」

そうであつた！！ この世界に來たのは余の愛が本物である事をミユキに証明する為チャンと婚姻の申し込みをして余の伴侶になって貰う了承を得に來たのだ。テレビがつい珍しくはしゃいでしまいミユキに呆れられただろうか

「私の世界に來た訳ですが、やはり王様の気持ちは変わりませんか」

「勿論だ！ 余にはミユキしかない！！ 呪いだとしても余の愛は変わらなかつた。どうか伴侶になつて欲しい」

思いのたけを言葉に込めてミユキを見詰めると凄い勢いで顔を真っ赤にさせる。

おお～～　なんと可愛いのだろう～～

しかし恥じらう赤い顔を突然床に付けて謝りだす。

「ゴメンなさい王様、呪いなんて嘘です……元の世界に戻りたつくて嘘を言いました、私は平凡な普通の女なんです！　だから王妃なんてガラじゃないし、なりたくありません。どうか王様一人で戻って下さい」

一気に捲し立てるように言い最初は意味を理解できなかったが覚え  
た言葉を頭の中で繰り返すように思い出す。

呪いの話は嘘

王妃に成りたくない

一人で帰れ

ミュキは余を許してくれた訳では無かったのか……

此処へは二人の愛を確かめ合う為に来たはず……

余はミュキに騙されたの……だ……丞相の言う通り騙していたのか……

悲しみと絶望で心が軋む

「ミュキは余が嫌いか……」

最期の勇気を振り絞り聞く、ミュキの本当の気持ちを聞くために

「ハッキリ言っただけ嫌いです。初対面で無理やり犯されて好きになん  
てなれるはずがないでしょ」

分かってはいたがミュキは余を嫌ったままだったのだ

戻るならミュキが寝台で目覚めた時に戻りたい

余が勘違いしなければミュキにこんなに嫌われずに済み、もっと巧

くやれたはず

後悔が押し寄せるがどうにもならない

ミュキの望み通り余だけ帰る……

……嫌だ！！！

嫌だ 嫌だ 嫌だ 嫌だ 嫌だ 嫌だ 嫌だ 嫌だ 嫌だ 嫌だ

千五百四十三年生きて漸く見付けた愛おしい存在

諦めるなど出来ない。

余には力があるのだ、人間のミュキを自由にするなど容易い（たやす）  
事

意志を奪い余の思うどおりに動かせばいい

それとも力づくでねじ伏せようか

どす黒い想いが次から次へと湧き上る

だがそれは本当のミュキでは無い

さっきのように自然に話し笑ってくれるミュキがイイ

壊れたミュキなど見たくないのに此のままでは酷い事をしてしまう

ミユキを手に入れられない悲しみで心が押しつぶされ悲鳴を上げる  
が何も出来ず涙だけが零れ落ちる。

また一人ぼっちになってしまう

爺やが死んでしまった以上の悲しみが襲い目の前が真っ暗になる

そうだミユキを傷付けるくらいなら余が消えればいいのかもしれない……

消える……

そう消えればいいのだ。

もし余がミユキの目の前で命を絶とうとしたらミユキは如何するだろう

止めてくれるだろうか

『ミユキ様は情に脆い方の様ですから』丞相の言葉が脳裏を横切る  
……

きつとミユキは止めてくれるだろ

だがそれだけでは駄目だ

心から余の愛を信じ応えてくれなければ意味が無い

ミユキを得られるか失うかは賭けに近いが勝算はある……本当に余  
を嫌っているなら抱き上げた時点で拒否され笑顔など見せ無いはず、

余を騙す為の演技だとしてもああも自然にはならず何処かきこちなさが伺えたはず。

ミュキとて余の美貌に見惚れてはいる

アンチヨングウィを気に入っていると言うなら美的感覚は異界人であるミュキも同じ

美しい男から求愛され愛情は無くとも不快に思う女はいない

しかも命を賭けるのだから

自分の命を使うなどある意味ズルイが…手段などどうでもよい

結果としてミュキを得られればいいのだ

そうと決まれば早速余の命を削ろうとしよう！

神族は中々死ねない体だが手段が無いわけでは無いのだ、神力と命の源である神核を自分の神力で力を相殺して行き力を浪費すれば神核が石化して行き体も石化して行く

もしミュキが余を許し愛してくれなければそのまま石となりその場で朽ちるだろう

そして自らの命を削るべく心を閉じるのだった。

次に目を覚ます時はミュキが我が胸にいる事を信じて



手にミュキの温かな涙を感じ胸が震える。

余の為にミュキが涙を流し余の命を乞うてくれているのを感じ意識が戻るとミュキが余の手をとって涙を流して泣いている。

「チョンマゲの所為で泣いてるんだよ…どうしてくれるのよ人を惚れさせておいて何処行く気よ… うっうう うえーん えーん ん うううっうえー」

だが石化の始まっている手では思うように動かずミュキを抱きしめられないのがもどかしい

石化したまま動かすとあまり良くない（ポツキリ折れる場合あり）が少しずつ無理に動かすとピシピシ軋む音を無視しミュキの頬を両手で挟み顔を上に向かせると涙の所為で化粧が崩れて酷い有様だが余にはこの上なく可愛く見える。

「チョンマゲ…?」

王様ではなくチョンマゲ!!

愛称で呼んでくれるミュキは驚いたように目を見張り、ミュキにとどめのを刺すべく愛の告白をしようとするが口の筋肉辺りも石化し始めていたように思うように動かない

「ミユキ… 好き… 愛し…てる。 何処へも行くな 余の側に居てくれ……」

これはこれで真摯な感じがして良いかもしれない

しかし早く石化を解かないと思うように動けないのは辛いが元に戻るのにもかなり神力を使いそ双方で二、三百年は寿命を縮めてしまいうだろうが構わなかった。

そして愛おしいミユキは笑い泣きのような顔で衝撃的な嬉しい言葉を言ってくれる。

「うん チョンマゲのお嫁さんにして」

おっお嫁さん!!!!!!!!!!!!!!

ピッシー

あまりの御衝撃に神核の石化した部分にひびが入り痛みで息を飲んでしまい固まったしまう。

こんな大事な場面でうつ動けないなんて何たる失態

だが甘い雰囲気は流れたままだがそれを破るかのように笑い声がけたたましく響く

「キャッハッハッハッハッハッ ヒィィ なにそのニックネーム!!!! マジ受ける! チョンマゲ! チョンマゲだって…… ブ

ツーーー ヒヤッハッハッハ」

横を見るともう一人のミュキが笑い転げて腹を曲げている????

「誰だ!? そなた? ……!! おっお前は天帝!! 何故ミュキになり済ましている?！」

もう一人のミュキからあの忌々しい天帝の気を感じ直ぐに納得するがこんな時一番遭いたくない者に遭い慄いてしまうのに反しミュキは天帝に話しかける。

「ちょっとあんたチョンマゲを知ってるの?？」

「当り前よ」 伊達に一カ月この世界で暮らしてないわよ。この世界の一般的常識は全て吸収しててよ。便利な世界よねパソコン一台あれば世界中の知識と情報を得られるなんて」

「いっ一カ月!!!! 向こうでは十日しか過ぎて無いのに??」

「アラ：そうなの? 此方の世界の方が時の流れが速いのね」

「それじゃあ私は一カ月行方不明になってるの!!」

「大丈夫よ、私が会社に行ってるし家族の電話にも出ているから」

一挙に余は会話から外れてしまい甘い雰囲気は何処かえ行ってしまう女同士??の会話が続く。

態とだ!!!!

絶対に態とやっておる！

天帝は余の恋路を邪魔するべく会話に割り込んだのだのに決まっている。

ミュキは余の事を忘れたように天帝とこれまでの経緯の遣り取りに夢中でさっきまで事を忘れたかのようなうだ

許さん！！

此のままでは天帝にミュキを盗られてしまうと思い、石化した事も忘れ立ち上がりミュキを抱き寄せるべく立ち上がりとした途端に嫌な音と共に体が崩れ落ちる。

ガツキ バツキィ：ズルーーズツデッデーーン！！

足の膝下まで石化していたのでふくらはぎの中程で折れてしまい倒れてしまったのだ。

「キャアーーーーー 王様大丈夫！！！？？」

直ぐさま驚き心配そうに余を抱き上げようとしてくれるが女のミュキでは無理な様で顔を青褪めさせ今にも泣きそう

こんなに心配してくれるのは嬉しいが何故王様？ 先程までのようにチョンマゲが良かったのに……

そしてミュキは折れてしまった石化した足首が転がっているのに気が付きそのままショックで気絶してしまう

「ヒイエエエエー！ー！ー！ー！！」

ボタン

「ミュキー！ー！ー」

「おやおや、結構図太そうなのに繊細な面もあったようね」

天帝がミュキの顔で嘲笑うように倒れたミュキを覗きこむ。

「ミュキに触れるでない！」

「プップ」 そんな姿で凄んでも滑稽なだけだよ」

確かにその通りなので直ぐに体を治すべく神力を高めようとするが、天帝が何の気の迷いか余の折れた右足を取り上げて接合しサッサと繋げ大量の神力を注いでくれる。

一瞬辺りが眩い光で満たされたと思うと余の石化した部分の体は全てもど通りになるが何時にも無い親切な天帝の行動に慄いてしまう！！

「こっこれは……何の嫌がらせだ……！！」

「失礼な、純然たる好意だわ」

同じミュキの顔と声だがあまりの恐ろしい言葉にゾツとして全身鳥肌が立つ

「嘘を言え！ 何か裏があるのであろう」

天帝から守るために急いで気を失うミュキを抱き寄せ警戒する。

「疑い深いねー 強いて言えば深雪に対するお詫びかしら……不可抗力とは言え深雪の人生を盗んでしまたしね」

珍しく殊勝な言葉を吐くが昔から知る天帝はこんな事を言うはずが無い。

「この世界で、一体ミュキの姿で何をしておる？」

そもそもミュキが余の元に落ちて来たのは天帝のお陰なのだがその理由は知らない

「私の大事な捜しものの為よ」

ミュキと同じ顔がニツコリ微笑むが全く可愛くない

「こんな異世界に何があると言う」

「在るはずなんだけど……まだ無いのかもしれない」

相変わらず訳が分からない言動だが問い詰めてもハッキリ答えないであろうから時間の無駄だろう。

「ふーん……取敢えずミュキに会わしてくれた事には感謝しよう」

ミュキは感謝しているか分からないが余には大事な伴侶を与えてくれた。

「深雪を伴侶にするの」

「勿論だ」

「いいの、確実に寿命が半分になる」

「ミュキを得る為なら寿命ぐらい幾らでも減っても構わん」

するとミュキの声が割り込む。

「ちょっとそれは何の話し！！ 寿命が減るってどういう事よ……！！」

何時の間にか気が付いたミュキが驚いたように叫ぶ。どうやらミュキが気が付いた事を察してこの話を振ったのだらう

「深雪は知らなかったの？ 神族が伴侶を得ると言う事は自分の寿命を分け合う魂の契約でもあるの、だから八十年しか生きられない人間の深雪を伴侶にする事は六千年以上生きるチョングウイの半分の命を削り深雪に渡す事になるんだよ、良かったね寿命が延びて！！」

その話を聞いたミュキは余の腕の中で慌てだす。

「なにそれ！！ 信じらんない。そんなの無理！絶対無理！！」

「ミュキが心配せずとも余は寿命が半分になろうとも全く問題ない！」

「違ーーーーー！！」

「えっ?？」

「王様って今何歳？」

恐る恐る聞いてくるミュキ

「余はまだ千五百四十三歳で若いぞ」

「千…!!　　と言う事は…結婚したら…6, 080÷2＝1, 543…!!　　単純に計算しても後1, 500年も寿命が…!!」

「どうしたのだミュキ？」

「やっぱりこの話は無かった事にしましょう」

突然意志を覆すミュキ…!!

もしかして余の命を著しく奪う事に罪悪感を感じてしまったのだろう、なんて優しいのだろうかと感動していると

「後千五百年も生きるなんて考えられない!　私の感覚では無理ですから他の女性をあたって下さい」

「エッエー　　先は了承してくれたでわないか…!!」

「さっきはさっき、今は今です」

キッパリ拒否するミュキの姿は凛々しいが受け入れる事は出来ない



「そんな殺生な～～～ お願いだミュキ、何でもするから伴侶になつてくれ～～～うっううう……」

再び泣いてミュキに泣きつくとは仕方なさそうに溜息をつく

「ふ…… 私ってやっぱり捨て犬を見捨てられないのよね……」

「捨て犬???」

諦めたようにミュキが微笑む

「人間にとって千五百年なんて途方も無い年月よ。それなりの覚悟があるの……しかも惚れた相手の寿命を奪うなんて信じらんない……本当に私でいいの?」

惚れた相手!!!!!!

「ミュキが良い!! なんなら余より多く寿命を分け与えても良い!!」

「王様と同じでいいよ……残されるのは好きじゃないし」

嬉しさのあまりミュキを抱え上げ抱きしめる。

「有難うミュキ。絶対に幸せにする」

「うん!、でも私に飽きたら殺してね」

「なっなにを言いだすのだ!!」

「だって千五百年も生きるんでしょ……その間気持ちが変わらないなんて人間の私には信じられない」

少し悲しそうにそう呟くミュキ、このままではまた嫌だと言いだし  
そんな心配

「どうすれば信じてくれる？」

「今は信じてるよ　だけど永遠は信じられない」

余にとって千五百年などそんな途方もない年月には思えないがミュキには違うようだ

「確かに永遠に続く想いなど人間には難しかもね」

静観していた天帝がしゃしゃり出て来る。きっとこの場を滅茶苦茶にする気なのだと警戒する。

「関係無い者は黙っておれ！」

「あらー　それは無いんじゃない？　二人が巡りあったのは私のお陰よ。そして私は天帝で絶対者。　信じる信じないなんて鬱陶しいから二人とも消して上げましょうか」

不穏な空気を醸し出し張りついていたような笑顔のミュキの顔をした  
天帝

とうとう本性を現して来たようだ

ジリジリと天帝の放つ殺気を感じ肌が泡立つ

急いでミュキを背後に隠し天帝を睨みつけて対峙する……天帝はその気まぐれで何人もの神族を狂わしその体から神核を取り出し神玉として収集しているのを知っており、創造神でありながら残虐非道な破壊神でもある

あまりに長い時を生き狂っているのではないかと疑っていたのだが……

だから関わりあいたくは無かったのだ

だが会ってしまったものは仕方が無い

自分は良いがミュキだけは守ろうと決意するのだった。

余とミユキと……（後書き）

ちよつと展開がアレアレくかも知れませんがこのまま展開して行きます。

全ては天帝の性格のせいです！

## 契約の指輪と私

王様の足が折れてしまい石になった足首が転がっているのを見てしまい卒倒してしまう。

ハッキリ言って私はスプラッター系はうけ付けないの

せめてもの救いは血が出ていない事だけど私には刺激が強すぎ意識を失う。

「深雪を伴侶にするの」

「勿論だ」

自分の声（天帝）王様の会話で目を覚ますと何時の間に自分の足で立っている王様に抱き寄せられていた：流石神様、自分で治療したの?!

「いいのゝ確実に寿命が半分になる」

寿命が半分???

「ミユキを得る為なら寿命ぐらい幾らでも減っても構わん」

なんだか王様の寿命が減ると言う物騒な話

「ちょっとそれは何の話し!! 寿命が減るってどういう事よ……  
!!」

思わず二人の会話に割り込むと天帝が楽しそうに事の詳細をご丁寧に教えてくれた。神様の婚姻でとんでもない無いもの、命を分け合うなんてどれだけ重いものよー

しかも私の寿命が千五百年なんてあり得ない!!

軽い現代人の私にはあまりにも重すぎる事実なので先の自分の言った事直ぐさま撤回させて貰う

美形すぎる顔にその地位でさえ私には重すぎるのに更なる加重に耐えきれそうにも無いよ……しかしそう言った途端捨て犬のような目で私に綴って来る王様

捨て犬は二度と拾わないと心に誓っていたのに

思い起こせば小2の春だった。空き地に捨てられていた真っ白な子犬を兄と一緒に見付け一目で気に入って貰おうと家に連れ帰ろうとすると「母さんが居るから諦めろ」とドライな兄の忠告を無視し

家に連れ帰りお願いしてみると「いいわよ」と母は簡単に許可してくれた。

しかしそれには条件があった。「深雪が犬を飼うんだから母さんは一切面倒を見ないからちゃんと世話をするのよ。朝と夕の散歩とご飯だけはちゃんと守るの、もしそれを一日でも破ると犬は保健所行きよ」私は大丈夫だという自信があり飼う事にしたのだが兄は最後まで止めた方がいいと忠告した。

それから私は犬にシロと名付けて一生懸命世話をしたのだけれどその冬私はインフルエンザに罹り高熱で寝込んでしまい一日だけシロの世話を兄に代わって貰ったのが母にばれてしまった。

「深雪、母さん言ったわよね。一日でもさぼったら犬は保健所行きだって」

優しい顔で恐い事を言う母

「でも私病気だったもん！ さぼりじゃないよ…」

しかし母にそんな理由は通らずまだ熱が引かない私が寝ている内にシロは保健所に連れていかれてしまった…：…内の母はかなり芯の通った人で自分の意志を曲げない—どんなに自分が不当でも、幼心に改めて母の恐ろしさを思い知った日だった。

泣きじゃくる私に兄は言う

「俺も幼稚園の時に子猫を拾って同じ様な事されたんだ…」

ぼそりと呟く兄に同情と殺意が湧いた…それを先に言え！…！！！！

多分、母は生半可な決意で命あるものを拾うなと教えたかったのだ  
としたいがその真意は知らない——否、知ってはいけないと本能  
が警告したのだ。

地味で平凡そうに見える母は仮の姿で実は地球外生命体では無いか  
と小学生の時は信じていた。

それだけ破天荒な母なのだ。

王様の目は捨てないでと訴えている

そう一旦拾うと決めただから最後まで死ぬ気で飼うしかないのよ  
！！

「ふ…… 私ってやっぱり捨て犬を見捨てられないのよね……」

「捨て犬???」

母の教え?とシロの犠牲を無駄にしてはいけない、こうなったら最  
後まで面倒を見るのが筋 惚れた弱味

もう一度王様を受け入れる事にと大輪の花のように嬉しそうに  
する王様

うっ　　なんて可愛い男

「有難うミユキ。絶対に幸せにする」

こんな綺麗で可愛い旦那を貰えて十分幸せだがこれだけは言ってお



く。

「うん！、でも私に飽きたら殺してね」

「なっなにを言いだすのだ！！」

「だって千五百年も生きるんでしょ…その間気持ちが変わらないなんて人間の私には信じられない」

そもそも王様の愛がそんなに続くのか疑問

愛なんて移ろいやすいものなんじゃないだろうか

千五百年も一緒に居れば色々あるだろうし心が離れることだって可能性はある。

多分私が王様に捨てられたら生きてる自信ないよ。

「どうすれば信じてくれる？」

「今は信じてるよ　だけど永遠は信じられない」

だって私は人間だから神様の王様には理解できないのかもしれない  
が自分の正直な気持ちを王様に言う

でも何時か永遠を信じられるようになったらいいとは思っている。

だけど王様と私はまだ始まったばかり、ゆっくり分かりあって行けばいいのだと考えている内に天帝が不穏な行動に出て来る。

「確かに永遠に続く想いなど人間には難しかもね」

静観していた天帝がしゃしゃり出て来る

「関係無い者は黙っておれ！」

王様が囁みつくように言う。

「あらゝ それは無いんじゃない？ 二人が巡りあったのは私のお陰よ。そして私は天帝で絶対者。信じる信じないなんて鬱陶しいから二人とも消して上げましょうか」

私の声でおどけた様な口調ながら何処か冷たいものを孕み、そして私と同じ顔とは思えない程に狂気を帯びた顔が此方を見つめゾツとする。

何かが天帝の癪に障ってしまったようだ。

王様が長い金の髪を逆立てるように警戒し、私を背後に隠す。

なに―これってかなりヤバいの……

確かに私にさえ天帝からは黒い禍々しいオーラを感じ、神様と言うより魔王！？。

「ねゝ深雪 チョングウィは絶対諦めないタイプだから信じらんないなんて生チヨロイ事言ってるならこの場でチョングウィを殺してあげるよゝ それも深雪が死ぬ？ やっぱり二人一緒がいい？」

なにそれ！

「誰がそんな事を願ったのよ！！ 第一 長い時間を生きている神様のくせに少し気が短すぎない！！」

「ミュキ止めよ！ 天帝を刺激しては危険だ！！」

王様が真っ青になり私を止めようとする。

「黙って殺されるより言うだけ言って殺された方がマシよ！！ そもそも永遠なんて本当に存在するの！ 神様は心変わりをしないの？ でも人間は違うわ人間は常に変わって行くし限りある短い命しかないのに永遠なんて信じられる訳無い。 そんな私に千五百年もの途方も無い時間の中で何も変わらず有り続けるなんて奇跡にしか思えない！ 私は人間でそれ以上でもそれ以下でもない神なんかじゃない。 だから私も少しずつ王様を信じれるように変わっていきたい……」

「ふーん で結局どうなる訳？」

「知るか！ そんなのやってみないと分かんないでしょうが…これから二人で未来を築いて行くのよ。例えばそれが不幸になろうが幸せになるかなんて二人で決める！ あんたなんか決められたくないわ」

「ミュキ！！」

王様が嬉しそうに名前を呼ぶが

「成程… 深雪は違うんだ……」

無感情に言い一瞬虚ろな目をした。

違う?? 誰と違うんだろう??

「でもやっぱり二人はムカつくから死んでね〜」

天帝がニヤリと悪役のように顔を歪め目が光ったかと思うと突然体が動かなくなり王様も同じように動けないようにで声も出せないようだ。

「チヨングウイお前がどお足掻こうと私には適わない。諦めて深雪共々その首を私に討ち取られてね〜」

そう言うとき日本刀が何時間にか握られている。

「郷に入れば郷に従えて言うから、首を斬ると言えば日本刀よね〜」

その諺は今使うのは違うよーと突っ込みたいが声が出ない。

私の姿をとったままの天帝が良く切れそうな日本刀を振り上げ、尋常じゃない目を見てこいつはマジだと悟りながら、なにも出来ないのが悔しい

せめて泣くもんか

私には王様がいる

一緒に死ねれば本望よ!

「それでは、お命頂戴つかまつる！」

もしかして時代劇に嵌ってた？？

絶対絶命なのに突っ込んでしまう自分が嫌

天帝は振り上げた日本刀を一気に振り下ろしもう駄目だと思い目を瞑る。

ズッザッザーーーーーー

凄まじい刀が空を斬り裂く音がしたが私は何の痛みを感じず、もしや王様が先に斬られたのかと慌てて目を開くとニコニコと笑う私のドアップが!!!!!!

「なっ なっ 何?????」

「やっだ~~~~ 本気にしたの深雪~~~~ 可愛い~~~~」

「エッ??????」

そして自分自身に引き寄せられ抱きしめられる。

後を見れば凄い形相で怒っている王様の顔はちゃんと胴体と繋がっているが動けないようで今だ天帝に体を縛られている模様

「へへ ロングも似合うのね。 今度伸ばしてみようかしら」

私の着け毛を触ったり体をベタベタ触られ呆気にとられて成すがまま

「それにしても、お化粧が崩れて大変よ　今綺麗にしてあげる」  
そう言いなが引き出しから化粧道具を取り出しクレンジングジェルで化粧を落とされ洗面所兼お風呂で顔を洗わされる。

「一体あんたは何がしたいの！」

「お化粧」　嫌なら殺すよ……」

と自分の顔で凄まじければ言う事を聞くしかない。

読めない……性格が歪みまくって何処まで本気か冗談か掴みにくい  
なんて疲れる性格なの!!

そして王様が立ちつくす前でお化粧タイム

「この世界は物資が豊富ね」　化粧品も種類が多すぎて最初は戸惑ったけど今ではプロ級よ」

そう言えば天帝の化粧は派手すぎず地味すぎないナチュラルメイクながら小さな目をひきたて眉山も綺麗に引かれて少ない睫毛にもマスカラが塗られてカールしていた。私なんてファンデーションと口紅で簡単に済ましてたのに

「何でわざわざ化粧??　貴方ならもっと美人に化けれるんじゃないの」

「バカね」　この地味な顔を如何にメイクし美しく見せるかが楽しいんじゃない」

何気に貶してる！

「ねっねっ この夏の新色リップ これがすごく可愛いのっ 見て見て」

まじ女友達ののり

もしかして多重人格者

そうして差し出されたのはピンク系

何時も私はオレンジ系をチョイスしてるので付けた事が無いというかトラウマの所為なんだけど…そんな事を知らない天帝は問答無用で慣れた手つきで塗る。

「自分の顔に化粧するなんて変な気分」

「違うー ー 私の顔よ！」

「ほっら 可愛くなったわよ」

手鏡を差し出され映し出された私の顔にピンクのルージュは確かに似合っていた。

「ピンク系は避けてたけどいいかも…」

しかし天帝は私以上にこの世界に馴染んでない？

私になり済ましアパートに住み会社まで行って、化粧は私より上手

いしブランドの服まで着て私より上手に生きてる感じで本当の私が偽物のようだ!!???

まるでこの世界の自分に乗っ取られたような喪失感を感じ、新たな疑惑がわく

「もしかして最初から私になり済ます為に態と落したの?」

「それは違うわ、本当に偶然よ。流石の私も異世界の人間を巻き込む気は無かったのよ」だから態々戻ってあげたんでしょ」

「だったら連れ戻してよ」

「え」 チョングウイが珍しく人を助けたから面白い展開だと思っ  
たの」 ゴメンね」 せめてものお詫びに非常持ち出し袋を取りに  
行ったんだからねっ」

全く悪びれない様子だが王様が私を助けた????

私を助けたのは岩山から落ちた時なんじゃないの???

「えっ 王様がわた」メイク完了! チョングウイとお幸せにね  
」 エッ!!」

天帝の凄い力で王様の方に突き飛ばされると体が自由になった王様に抱きとめられると同時に抱きしめられる。

「ミユキーーーー 心配したぞ! 早く危険な天帝から離れ余の世界に帰ろう!!」



「えゝ もう帰るの…」

元の世界に戻りまだ数時間、王様のお嫁さんになる覚悟はしたけど  
せめて2・3日は留まっていたい

「天帝の側など命が幾つあっても足りぬ」

「そうよゝ また何時気が変わって殺したくなっちゃうかもゝ 深  
雪の代わりはチャンと務めるから安心して向こうで一生終えちゃい  
なさいゝ」

さっきの殺意は本気だったて事！！

何が私の代わりよ！ 私の平凡な人生を返せ！と叫びたいが王様を  
選んだ手前止めておく。

「う… なんか複雑… 家族に酷い事しないでよ」

「この世界では大人しく人間してるわゝ 世界征服なんかしないし  
人も殺さないわゝ」

世界征服… 本気を出せば出来るの！？ いまいち信用できず心配

「最後に家族に会っちゃ駄目？」

王様を見上げ頼んでみる。 両親と兄弟に一目会っておきたい 母  
にはあまり会いたくないけどもう会えなくなると思うと会いたくな  
るから不思議

「別に構わぬ。 余もミュキの御両親に挨拶せねばならんだろうか

ら」

もしかしてドラマで見るような娘さんを下さいますか――――／／／

「有難う！ 王様」

「ミュキ」

ところが天帝が反対して来る。

「駄目よ！ あんた達は早く帰るのよ：チョングウィは気付いてないだろうけどこの場を安定させるのに私は結構力を使ってるのよ：神圧の大きいチョングウィがこの世界に入り込んだせいで歪が出来てそこから世界が崩れ始めるから長時間の滞在は無理、私のように神圧を下げてからまた来ることね」

「そうなの？」

「すまぬ： 天帝の言う通り一旦戻った方が安全なようだ」

「そっか： でももう一度連れて来てくれる？」

「ミュキが望むなら何度でもいいぞ！」

「本当！ 大好き王様！！」

「ミュキ」 余も愛しているぞ！」

お互い抱きしめ合い見詰め合い甘い雰囲気が始めるとお約束のように天帝が邪魔する

「イチャ付くなら帰ってからにしてよね… それと頻繁来られても世界が歪むからせめて年に一度だから…」

つまり今度来れるのは1年後!!

でも私のせいでこの世界が壊れてしまったら大変なので我慢するしかないだろう

「分かった…… それではミユキ戻ろう」

「うん……」

そしていよいよ帰ろうと王様が瞑道を開けようとすると天帝が呼び止める。

「ちょっと待ちなさい」

「なんだ先程から帰れと言ったり待てと言ったり」

「どうせならこの場で婚姻を結んでいきなさい」

「この場で？」

「天帝である私の前で結んだ方がより深く結ばれ強い契約になるはずよ」

「それも一理あるが…」

契約？ 私の世界のように婚姻届に署名でもするんだろうか

「どうやって婚姻を結ぶの？」

「簡単よチョングウイの契約の指環を嵌めて祝詞を言うだけ」

指輪を嵌めるのは此方と同じだけどえらく簡単

「それだけ」

「そうよ」

「だが矢張りミュキとの婚姻は国を上げて盛大に祝いたいので向こうでする」

王様の言葉で一気に血の気が引く

盛大に！！

それは嫌だ！

こんな綺麗な男と並んで大勢の人間の前で式を挙げるなんて考えただけで眩暈がする。

「まゝ なんて貧相な花嫁様」

「まさかあのような者が陛下の！？」

周囲からあんな声やこんな声が空耳のように聞こえてきそうで、きつと私は被害妄想に陥り精神を病んでしまう

恐ろしい

それだけは阻止しなければ

後宮に入れば滅多に公式の場に出るのは少ないだろうから精神的ダメージは少ない方がいいに決まっている。

「王様！ 私は今直ぐがいいわ！ 早く王様と婚姻したいの！！  
それに私の世界ではじみ婚が流行りだから派手婚は時代遅れよ」

なんとか簡単に済ますために王様をお願いする。

「余は正式にしたいのだが…」

渋る王様を何とかするのにあの名前で呼んでみる。

「お願いチョンマゲ 早く結ばれたいの…」

チョンマゲの意味を知ったらどんな顔するだろう—— 教えないでおこう。

「！！  
—— ミュキがそこまで言うなら！」

そう言うと、王様はマジックのように掌から金の指環を取り出すが、シンプルな金のリングだった。

契約の指環だからもっとデザインの凝った物を想像していたので少し以外：右手にしている翻訳機のブレスレットの方が余っ程高価そうだが結婚指輪なんて王様がくれるなら何でもいい、

「本当はチャンとしたかったのだが…左手を出してくれ」

私は左手を差し出すと王様がその手を取り薬指に嵌めようとする。

「余の伴侶になってくれるか ミュキ」

「はい喜んで 〳〳〳」

何も考えず返事をする何処か居酒屋の様な応対になってしまったが致し方ない。

そして王様が真剣な様子で指環を嵌めてくれる。

これで終わり??

命が結ばれた割には何の変化も無く無く拍子抜けしていると天帝が私達の手をとる。

「これより亀王チヨングウイと橘深雪の為に祝詞をささげよう」

天帝は厳かに違う言語で呪文を唱え始めると指環が発熱し、その熱が全身を包み込み一瞬火に飛び込んだような錯覚を覚える。

「ΣΘΞΔΣΦΨ∶ΨΡΩΒ∶?? αXζΠ ∶ αθΘΞΔΣ  
ΦΨ∶∶α∶∶ΣΦXθΞΔαXζΠ」

「あっ熱い」

呪文が終わると倒れそうになるのを王様が支えてくれる。

「ミユキ 大丈夫か」

「うん 一瞬熱かっただけ……終わったの」

「指環を見よ」

「あれ 指環が変わった」

王様に促され指環を見るとシンプルな金の指環は亀の調金の施された物に変化していた。

「おめでどう深雪 これで貴女はチョングウイの妻よ」

「妻 〃〃〃」

とうとう私も人妻

なんだかチョツと恥ずかしいが目の前で微笑む天帝が、こんなに素直に祝ってくれるのが引かかる。

そう思っていると突然眩暈を感じる

「あれ……?……」

「ミユキ!!」

王様助けると言おうとするが、次の瞬間王様の呼び声を最後に意識を失ってしまうのだった。





## 王様とお預け

漸くミュキを手に入れ向こうの世界に戻ろうとすると天帝が婚姻を急かして来る。

確かに早く名実ともに伴侶になって欲しかったがミュキにはもっと豪華な式を挙げてやりたいし、余にとっても記念すべき日にしたいのだ。

だが何故かミュキが婚姻に積極的になる。

嬉しい事だがこの場でするにはあまりにも侘しい場所

しかもこの狂神の前で挙げるなど縁起でも無い

きつと良からぬ事が起こるに違いないと避けたかったが

「お願いチョンマゲ 早く結ばれたいの…」

「！！  
／／／ ミュキがそこまで言うなら！」

ミュキにこれ程乞われたら断れなかった。

そして婚姻を結ぶべく契約の指環を取り出す。

「本当はチャンとしたかったのだが…左手を出してくれ」

ミュキはほっそりとした白い左手を差し出すと優しく手を取り指環を嵌めるべく持ち返る。

「余の伴侶になってくれるか ミュキ」

「はい喜んで 〃〃〃」

ミュキが頬を染め目を潤ませて返事を返してくれるが、どうせならもっと豪華な衣装を着せて宝飾品で飾り立てた一世一代の婚礼衣装を着せたかった。

だがミュキの願いは何でも叶えてやりたいので仕方が無い

そして契約の指環を発動するべく天帝が余とミュキの手をとられるとゾッとする。

本能的に恐怖が湧くのはどうしようもない

「これより亀王チヨングウィと橘深雪の為に祝詞をささげよう」

天帝は厳かに違うと神語の祝詞を唱え始めると余とミュキの命を繋げる道が開き徐々に時間を掛けミュキに余の神核が移って行くのだ

……ん！？ 何か大事な事を忘れている様な気がする…

「 $\Sigma \Theta \Xi \Delta \Sigma \Phi \Psi : \Psi \rho \Omega B : ? ? ? \alpha X \zeta \Pi :$   
 $\Phi \Psi : : \alpha : : : \Sigma \Phi X \Theta \Xi \Delta \alpha X \zeta \Pi$ 」  
 $\alpha \theta \Theta \Xi \Delta \Sigma$

「あっ熱い」

道が開いた時の衝撃を感じ体がよろめいたので抱きとめる。

「ミユキ 大丈夫か」

「うん 一瞬熱かっただけ……終わったの」

「指環を見よ」

「あれ 指環が変わった」

契約の指環の力が発動した証に亀の意匠の施された指環に変化していた。これで余とミユキは伴侶となり誰もミユキを害する事は出来ないのだから取敢えず安心だ。

「おめでとう深雪 これで貴女はチョングウイの妻よ」

「妻 〃〃〃」

ミユキが余の妻!! なんといい響き

帰ったら早速、後宮であんな事やこんな事をやり尽くさねば!!

「あれ……?……」

急にミュキの体が崩れ落ち意識を失くしている!?

「ミュキ!！」

何が起こったのだ!!

余の伴侶になったミュキは外傷はおろか病にすら罹らない体のはず

「あららゝ もう始まっちゃったのゝ」

「どういう意味だ。そなたがミュキに何かしたのか!?!?」

天帝はニヤニヤと笑う

「私では無くチョングウイ、お前自身の所為だよ。流石に亀王の神力は桁はずれねゝ人間のミュキにはかなり重い命、その命を調整するのに一体どれだけの時間が必要かしら?」

「!！」

天帝の言葉で自分がとんでもない事を失念していたのだ

神族と人間が婚姻を結ぶ時大きな弊害が起こるのだ――命の重さが違いすぎるため人間側に大きな負担が掛かるのを軽減する為に深い眠りに入り神核を受け入れて行くのだがその差があればある程調整に長時間かかる。

ここ数百年神族と人間の婚姻が無かったのですっかり忘れ去っていた事実

つまり当分いちゃいちゃも初夜もお預け!!!!!!!!!!!!!!

「ミユキ―――起きてくれ!!」

体を揺すれど一向に目を覚ます気配が無い

「チョングウイの伴侶であるミユキは人間だから一年以上は目を覚まさないんじゃないかな―――」

如何にも楽しそうに嫌な予想を言う天帝

「己―――この事を知って婚姻を急かしたな―――!!!!!!」

「確かに勧めたけど―――急かしたのは深雪よ―――プッププップ  
―――」

その通りだが、忠告しても良かったはずだ!

なんと忌々しい神だ

しかし反撃したくとも力が違いすぎるので此方の身が危ないのだ。

精神衛生上もこれ以上天帝の側にいるのは良くないのでサッサと帰るしかない

スヤスヤと眠るミユキを横に抱き上げて瞑道を開け笑い転げる天帝を無視して狭間に入ろうとすると

「深雪を大事にするんだよ―――」

珍しく天帝がまともな事を言う。どうやらミュキは天帝に気に入られてしまったのだろう……。厄介な相手に好かれてしまい不快だがそれだけミュキが魅力的なのだ。

「言われずとも…ミュキを幸せに出来るのは余だけだ」

そう言い捨て振り返らず瞑道を潜り向こうの世界が閉じると漸く緊張が解ける。

天帝がいては気が休まらない

それだけ恐ろしい相手だ

それより問題はミュキ…：天帝が言う通り一年は眠り続けお預け状態

矢張り婚姻は玄武国で盛大に挙げる事にすれば丞相が忠告してくれた筈、そうすればもう少しいいちゃいちゃしてから婚姻を結んだのに

「折角ミュキが伴侶になってくれたのに」

二人の幸せな未来は当分お預けになってしまった亀王は闇の世界を愛しい伴侶を抱きかかえ元の世界に戻るのだったがその後姿は哀愁が漂っていたのだった。

玄武国は平和な国

争いも少なく人々ものんびり割かし幸せに暮らしている。

最近の王都では亀王様が亀の姿にもならず真面目になった噂で持ち切り。

なんでも可愛い正妃様をお迎えして張りきっているとか

しかし不思議なのは民に王妃様をお披露目しない事

あまりに王妃様を愛するせいで後宮から一步も出さず誰にも見せないように閉じ込めているとか

きつと直ぐにでも御子様が生まれるだろうと多くの者達は期待したが一年経ちもう直ぐ二年経とうとするが懐妊の噂は一向になく、亀王様の溺愛が過ぎるのだろうと噂した。

だがその実情は大いに違っており王妃様は眠り続けていたのだ。

その傍らで亀王が王妃に甲斐甲斐しく世話をして暮らしており片時も離れないのが実情

政務は仕方なく午前中だけこなしているが、以前に比べれば格段に真面目になったので丞相も少しは肩の荷が下り喜んでいるとか

後は王妃様が目を覚ませばもっと幸せが訪れるのではないかと王宮

中の人々が待ち望んでいる。

勿論最も待ち望んでるのは亀王様

きつとそれももう直ぐ訪れるだろう

王妃様が目覚める時

それは亀王様と王妃様の新たな話が始まるだろう……



## 王様とお預け（後書き）

一応完結設定にしますが9月には続きを書きたいと思います。

これまでお気に入り登録及び評価有難うございました。

謹んでお礼申し上げます。

しかし、微妙な終わらせ方で申し訳ありません：私の書く主人公の内二人が冬眠中でラブラブとは程遠いので続編ではイチャラブにさせたいです。

ここまでお付き合い頂き有難うございます。続編も宜しく願います。

## 幕間一丞相の回想一

アンチヨングウイに巡り会うまで私は恋などくだらない感情だとバカにしていた。女など自分の欲望を解消する道具であってそれなりの容姿と体と割り切った関係を許容出来る女を選び婚姻など結ばず一生終える予定だった。

なにしろ私には亀王という女より厄介な存在がいた。

チヨングウイと初めて会ったのはほぼ両親に売られた時とっていいだろう

当時の両親は贅沢や賭博に嵌り商人から莫大な借金をしており領地を売り払ってもまだ有り余る借金が残っていながら享楽に耽るでしょうもない親だった。その内親族からの金策も無理だと門前払いをされる程に首が回らなくなってしまってい、唯一の商品として私が残った。

親戚の家に厄介になっていたが従兄達に乞食とバカにされ虐められボロボロにされた私はその屋敷を飛び出し唯一残っていた小さな別荘に住む両親の元に無理やり住みついた。使用人もいない荒れ果てた別荘に当時十歳の私は人間に化け荘園の下働きに身をやつして自分と両親の食いぶちを稼いで生きていた。亀族としての矜持も誇りも邪魔なだけでそんな物で腹はふくれないのだ。人に施しを受けず

一人で生きて行くと自負していた時が珍しく両親が意気揚々と帰って来る。

「ルイングウィや喜んでおくれ！ 然るお方がお前を養子にしたいそうだ」

「良かったわね！ これで贅沢な暮らしがおくれるのよ」

両親は嬉しそうに話します。

明らかに私は売られたと悟る。小さいと思い私を侮る両親

養子など出任せで幼児愛好者の愛人にさせられるのだろうと読んだ

人間の世界ではゴロゴロしている話で見目よい幼い子供を亀族や金持ちの人間に売る貧しい親達が大勢おり売られた子供達は変態の餌食となり真っ当な生涯は終えない。しかも私は亀族、かなりの高額がこの両親に支払われたはず

だが私は敢て変態爺の餌食に成るべく大人しく従った。何故ならこのまま生活して行くにしても両親と縁を切らねば私の将来は無いのだ。目的はどうであれ私を養子として向かい入れてくれるならその体を使い反対にその亀族の全てを奪おうと思ったのだ。

そして連れて行かれた屋敷は王宮のように広大な敷地に建てられ、かなりの高位の亀族だと分かり私の心は躍る。この全てを私の物にする決意し養子となる義父と引きあわされる。

「おおー これは賢く綺麗な子じゃ」

そう言って私の頭を孫を可愛がるように撫でる白髪に白い長いひげを生やした今にも死にそうな爺だった。

しめた…これならば毎夜性を絞り取れば直ぐにでも死んでくれそうだと心の中で晒う

「ルイングウイと申します。末長く宜しく願ひします」

可愛い口調で微笑みこの爺の心を掴むべく上目づかいで見やる。

「本に可愛い。これならチョングウイ様もお気に召すだろう」

何！？ この爺が主ではないのかとガツカリするがそうそう上手い話など無いのだ。

そして引き会わされたのが当時二十五歳のチョングウイで壮絶に美しい子供に見惚れ心奪われてしまったのは生涯の不覚だろう

しかも私はその子供の遊び相手として連れて来られたと知り喜び勇んだ

そして自分に注意を惹こうとありとあらゆる手を講じるが一向に反応を示さず、淡い恋心も直ぐさま醒めてしまう。

なにしろガキの頃からチョングウイは何もせず日柄一日寝ているかボーっとしている子供で言葉の喋れない低能な金持ちのバカ息子。爺やのロンロングウイに全ての世話を任すある意味生きているだけと言ったどうしようも無い子供だった。

「ロンロングウイ様、チョングウイ様はどうして何もしゃべらず動

こうとしないのですか」

「ルイングウイやチョングウイ様はご両親を亡くされ深い悲しみに囚われているのだよ。小さいルイングウイにはすまないが根気強くチョングウイ様に語りかけてくれんかの」

私は仕方なく引き受ける。親の借金を払って貰い衣食住の全ての面倒を見て貰っている上にチョングウイと共に教育も受けさせて貰っている恩があり、その厚意に報いなければならないと子供心にも思っただ。

しかし一年が経とうとしても変わらないチョングウイにとうとう私は切れてしまった。

爺やが居ない隙を狙い私はチョングウイに暴言を吐いたり時には殴ったり蹴ったりしたが無反応で段々加減が無くなっていたのは仕方がない事だろう、しかもチョングウイは痣一つ出来ないのだから腹が立つ

しかしある時チョングウイの両親の悪口を言った時一変する

「お前の両親もきつとお前のようにウスノロだったから死んだんだろう」

その途端チョングウイが始めて自らの意志で立ち上がり私に跳びかかって来るが私の方が体は小さくとも力もあり俊敏性があると踏んでいたのだが予想を裏切り瀕死の重傷を負わされる。

「お前は卑怯だ！ 恵まれている癖に何もせずに悲しんでいるだけじゃないか。私の親は子供の面倒も見ずその上自分の子供を売って遊び暮らしてる最低の親だ。お前はきつと愛され大事にされたん

だろがお前の所為でその大事な両親が貶められているんだ。何もせずメソメソしてたんじゃないやあ。お前の両親が泣いてるぞ！」

奴に殴られながら私は自分の不幸をぶつけてやる。

「売られたの？」

その言葉が最初に聞いたチョングウイの声だった。

「お前が買ったんだろ！」

「僕が？」

ボコボコにされて骨が砕けてその場に横たわる私を覗き込む目に私が映っていた。

「そうだチョングウイは私の主だろう… だから私の面倒を見る義務があるんだ」

「そうなの？」

「そうだ」

「わかった」

そう言うときチョングウイは自らの神力を使い瞬時に私の体を治癒してから、初めて微笑みを見せながら私に言う

「それじゃあルイングウイは一生僕のお世話を宜しくね」

私は不覚にも美しい顔にときめいてしまいが今振り返ってもその時の自分を呪いそうだ

あのままルイングウイを引き籠りのまま放置しておけば私はもっと楽に生きていけた筈で丞相など面倒な役職に就く事も無かったのだ  
しかもその当時から次期亀王として内定されていたとんでもない子供だったのだ

それからの私の人生はチョングウイの世話に明け暮れ、食事から風呂に着替えと私はお前の母親かと突っ込みたい日々

しかも意外な事にチョングウイは天才的な頭脳の持ち主で私にその知識を惜しみなく与えてくれ怠け者のチョングウイが勉強を率先して見てくれ感動し一生懸命勉学に励んだがそれには裏があったのだ  
！！

生まれながらに天帝に亀王になるよう定められたチョングウイは自分が楽をするために私を丞相に仕立てるべく企んでいたのであり、爺やのロンロングウイも一枚かんでいた

私は嵌められたのだ！！

所詮は賭け事の下手な両親の間に産まれた私は結局は生まれながらに一番の貧乏くじを引いてしまっていたのだ……

しかしそんな私にも掛け替えのない女性に巡りあう

それがアンチヨングウイだった。

チョングウイが成人の儀を済ますと同時に王位に就き無謀にも私を無理やり丞相の職に就かせてから四百年以上が過ぎた頃だった。

その頃には既に十八人の側室が後宮に在籍しておりながら、臣下達是我が娘を後宮に入内させようと私に煩く蠅のようにたかってくる。いい加減伴侶を決定してこの煩わしさから解放されたかった私は側室達を呑気に昼寝を貪るチョングウイに送りつけて交らわせて運が良ければ氣に入った側室を正室に据えればいいと考えていたんだが矢張りと言おうか誰もお氣に召されなかった。

元より欲望の薄いお方なので以前にまして女を近づかなくなってしまい警戒されてしまった。

「これでは生半可な姫では陛下をその氣にはさせれません。如何致しましょうロンロングウイ様」

私は今だ健在のロンロングウイ様に相談すると

「実わのゝ チョングウイ様の親せき筋で丁度年頃の姫がおる……大層美しく氣立てもいい娘なんじゃが……チョングウイ様がお手をつけず後宮で一生を終わらすのは忍びず躊躇っていた姫なんじゃが一度そなたが会ってチョングウイ様が氣に入るかどうか判断して欲しいのじゃ」

「はい分かりました」

ロンロングウイ様に乞われるまま一度目通しぐらいしておこうと内密に忍んでその姫に会いに行ったのだった。

夜にその亀族の屋敷に忍びこみ目的の姫を直ぐに見付ける。



その姫は部屋で兄と乳母らしき女と楽しそうにおしゃべりを楽しんでいた。

「婆や、今日お兄様がとても美味しいお菓子を買って来て下さったの悪いけどお茶お入れてくれるかしら」

何ともたおやかな声でお茶お頼む声には乳母に労るように頼む優しさが伝わる。

「はい姫様 今淹れて参りますので」

窓の外から伺うだけでも大層美しいのが伺え、真っ赤に燃えるような情熱的な髪をしていながらその面立ちは清楚で気品に満ちている。

「お兄様、私の入内のお話はどうなっているのでしょうか」

「今だハッキリとしたお返事を貰っていない様だが母上はごり押ししようと画策しているようだ」

気の毒そうに答える。

「私は嫌です……既に亀王様に十八人もの側室様がいらっしゃるのに私など行っても相手にされると思いません」

「大丈夫、お前は十分美しいからきつと陛下のお目に留まるから安心おし」

だが姫はハラハラと涙を流す様はあまりに可憐で目が釘付けになる。

今まで見て来た後宮の女どもは美しく清楚に装っているがその本性は獣と一緒に自分を着飾る事と女の栄華を極めんとする女の戦場で私に色目を使う者までいる始末で醜い部分ばかりが際立っていた。

こんな清らかな姫が後宮に入れば虐め殺されてしまう！！

私を守らなければ

突然起こった加護欲が襲い

妹を慰めるため抱きしめる兄にさえ嫉妬が湧き起こる。

その女から離れろそれは私の物だ！！

窓からその場に傾れ込み二人を引き離したい衝動にかられるがぐつと我慢し、もっと姫を眺めていたかったが急いで我が屋敷に戻り、密偵に姫の全てを探らせた。

姫の名前はアンチヨングウイで昨年成人の儀を終えたばかりで由緒ある血筋の姫君で母親が生まれた時から陛下の正妃にするべく厳しく育てられ穢れを知らぬ深窓の姫君だった。

あの姫が欲しい

日々欲望が膨れ上がるがあの姫は陛下の為に育て上げられた存在

私が姫が欲しいと望んでも姫の家が私に嫁するとは思え無い

なにしろ私の家柄は低く丞相と言う国でも一番偉い要職でありながらも出自の低さに誹られる事は多々あったのも事実で王の威を借りる狐だと言う者もいた。

だがそれを実力を見せねじ伏せて来たが私を妬む者も多く家柄を重視する風土は如何ともしがたかった。

それに姫が陛下を見れば直ぐに心を囚われてしまうに違いない

それ程に美しく強いのだ陛下は

矢張りチョングウイはズルイ

全てを持っている男

初めてチョングウイを憎んでしまった。

姫が後宮に入内する姿や後宮で悲しい目に会う姿など見たくない

「ルイングウイ最近何故余を睨むのだ。言いたい事があるなら話せ」

「私を丞相の職を解いて下さい」

「それは出来ん！」

「私はもう陛下のお世話をするのはうんざりです。恩は十分返したはずですから自由にしてください」

「そなたは余の世話を一生すると約束したでわ無いか」

悲しそうに私を見る陛下は親に捨てられる子供のようにだ

「もう陛下は立派なこの国の王、私でなくとも支えてくれる人間は大勢いるではないですか」

私が吐き捨てる様に言う

「余から離れるなど絶対許さん！　して欲しい事や欲しい物があるなら正直に言え」

「ならば正妃様をお迎えしてください」

「！！　それは無理だ」

「姫の名前はアンチョングウイ様　正に陛下の伴侶になるべくしてお生まれになったお方。むしろ陛下には勿体ない姫です」

「何だそれは……結局そなたが横恋慕した姫か」

ズバリと言い当てられてしまう

「陛下には私の気持ちなど理解できません」

「欲しいなら手に入れば良いではないか。そなたなら亀族の姫一人手に入れるなど簡単な話」

「姫は陛下の伴侶として育てられた尊い女性　姫も陛下を見れば直ぐに恋に落ちるはず」

「????　良く分からんがその姫を伴侶にすればそなたは丞相で居てくれるのだな」

「はい」

「良からう、直ぐさまその姫を私の元に連れて来るがよい」

初めて本気の恋をしてしまった所為で少々可笑しくなっていた私は直ぐさま姫の家に使いを送り数日後に陛下と引き合わせる事が出来た。

最初は顔合わせし話をして親睦を深める見合いの様な物としてその場を設ける

陛下には私が選んだ衣装を着て貰い（そうしないとド派手な奇抜なとんでもない衣装になってしまう）私もその場に臨んだ。

既にその場には一世一代の装いに身を包んだ一際美しいアンチヨングウイの姿に目が釘付けになり陛下も珍しく感嘆の声を出す。

「ほー 確かに美しいな。面を上げよ」

目の前で私の愛おしい人が恋に落ちるだろう

この女性が幸せになるなら私は涙を飲んで諦めようと二人を無言で見守る

姫は震えながら陛下の尊顔を拝すべく顔を上げる

陛下は無駄に顔はいいので姫は直ぐにその顔をバラ色に染めるだろうと想像していたが……

姫は一瞬陛下を見ただけで突然泣き出しその場に伏せる。

「陛下お許しを…私は陛下の側室になる覚悟がありません……この場で討ち捨てらるなりこの身をいかようにも…… うっう……」

私は急いで泣き崩れる姫の側に駆け寄りその体に手を置く

「アンチヨングウイ様 何故そのように陛下が御嫌なのです」

姫は私が声を掛けると驚いたように顔を上げ私と目が合うと美しい翡翠のような目を涙で潤ませていたが目が見開きそして顔をバラ色に染める

こっこれは

「申し訳ありません！ 取り乱してしまい…… ／／／」

恥じらうように顔を俯かせるがその顔を持ち上げ見詰める。

「貴女様の正直なお気持ちをお聞かせ下さい。私が出来事なら貴女の為に何でもいたしましょう」

そうやって聞き出した話によれば姫仲間から後宮は恐ろしい場所だと吹き込まれたようで純真な姫は全てを鵜呑みにしてしまった様だ。恐らくその者達は姫を妬んでそのような事を吹き込んだのだろう

姫が私を見る目は明らかに好意を含んでおり手ごたえを感じる。

陛下に目もくれず私を見てくれる姫に運命を感じ直ぐさま求婚を申し込む

「確かに後宮には恐ろしい側室達が陛下の寵を得ようと醜い争いが

起こっているのは事実。先日もある側室様が虐め倒され命を絶ったばかりで内密に処理されました」

「まあ……」

姫は私の嘘を信じ込み真っ青な顔になり震えだす。

「私はそんな恐ろしい場所に貴女のような優しい姫を入内させるなど私には出来ない……きつとこれは運命です。どうか貴女を私に守らせて下さい」

「／／／それは一体どういう事でしょう？」

「一目で私は貴方に心を奪われてしまった。どうか私の妻になって下さい」

「はい 私の様な者で良ければ……！ハッ 私ったらなんてはしたない、名前も知らない殿方の求婚を直ぐに受けてしまうなど……」

なんて可愛らしい人だそれ位の事で恥じらうなど

「悪いのは名乗らなかった私です。貴女が許してくれるのならば名乗らせて下さい」

「はい」

「私はこの国の丞相を務めているルイングウイと申すものです」

「丞相様！！ 失礼致しました。私はアンチヨングウイと申します」

私の地位を聞き驚き顔色を失くす。きっとそんなに高い地位の間  
だと思わなかったのだろう

「丞相……これは一体何の茶番だ？ 余は当て馬か」

「煩いですよ陛下、人の恋路を邪魔しないで下さい！！」

流石の陛下も目を白黒させる中。閃光の如く私は行動し、アンチ  
ングウイに婚姻を了承させてから陛下の威光を借り使える手段は全  
て使ってアンチヨングウイを妻に迎えるのに成功したのだ。

そうやって手に入れた最愛の妻アンチヨングウイ

幸せにしてやりたいと思いつつ陛下の所為で政務が忙しくあまり構  
ってやれないのに健気に私につくしてくれる妻

その妻を騙しミュキ様を宴に誘い出させてしまいどれだけ傷付けて  
しまっただろう

あまりに妻がミュキ様と連呼するものだから嫉妬してしまった。

そしてミュキ様を選んだ色の衣装が思いがけず似合っておりその美  
しさを引き立させ新しい妻の顔を知ったようで悔しかった。

きつとアンチヨングウイは寝台の上で涙を流し悲しんでいるだろう

今は自分の正直な気持ちを話許しを乞うべく妻の元へ急ぐのだった。

きつと陛下はミュキ様を手に入れるだろう



そうすればきっと上手く全てが幸せになるような予感がする。

ミュキ様は陛下を幸せにするべく天帝が遣わした伴侶様なのだ

陛下が幸せなら私も幸せだ

怠け者で寝てばかりのどうしようもない主だが私が生涯お仕えすると決めたお方

アンチヨングウィと二人で陛下とミュキ様の帰るのを待つ事としよう

そして二人でお出迎えをしよう

「「お帰りなさいませ陛下、ミュキ様」」

## 目覚める私と待つ王様

ここは天帝様が治める世界で四つの国に分かれており、その一つ玄武国は亀王様が治める割かし平和なのんびりした国だった。

しかし最近亀王様は元気が無く溜息を付く毎日

その原因は愛しい伴侶になった異世界からやって来たミュキ様が二年も眠り続けている所為で、最初の一年は目覚めるのを楽しみにしながら待っていたが一年が過ぎ月を重ねて行くうちに段々不安になって来たのだ

「何故ミュキは目を覚まさぬのだ…」

すやすやと眠るミュキの黒い髪は既に腰の辺りまで伸びており、それを毎日櫛で梳いて手入れをしている亀王チョングウイは目を潤ませ泣きたいのを済んでの所で耐えている。

以前ミュキの前で泣いた時に男のくせに泣くなど叱られたからだ

女々しい男だと思われたくないなので例えミュキが寝ていたとしても泣く気にはなれない

命の調整には一年あまりだと天帝も言っていたが二年は長すぎるので、もしかこれは天帝の呪い……矢張り天帝が婚姻の儀をしたせ

ではないかと疑ってしまおう

「こうなったら天帝に直接聞きに行くぞ」

天帝なぞに会いたくはないが背に腹はかえれないのが現状でもう待てない

「ミュキ、待っててくれ…」

そう言って愛するミュキの唇に口付を落とそうとした時だった。

ミュキの瞼がピクリと動いたのを亀王は見逃さない

「ミュキ！ ミュキ！ 目を覚ますのか！？」

声を掛けると瞼が静かに開き二年ぶりに黒い黒曜石の様な瞳が現れ、その中に自分の顔が映し出され歓喜する。

「ミュキーーーーー！！！」

「煩いーーーーー！」

バッシ！！

抱きつこうとすると両頬をミュキの手で挟まれるように打たれてショックのあまり固まる亀王だった。

目を開けるとそこにあるのは超絶に美しい金髪碧眼の男のドアップ  
これは夢？

目の前に天使がいるから天国かな？

ところがこの天使は「ミュキ、ミュキ」と私の名を連呼して煩くて、  
つい黙らす為にぶってしまう

悪気はない

ただ寝起きが悪くて頭が働いていないだけ

天使は目を見開き真っ青になるり今にも泣きそう

アレ？

この天使はもしかしてチョンマゲではないだろうかと漸く思い当る。  
確か天帝に婚姻を結んで貰ってから直ぐ眠気が襲ったのを覚えてい  
るが、今一状況がつかめず取敢えず謝ろう

「ゴメン」 チョンマゲ寝ぼけちゃった」

結婚したての夫の顔を忘れてしまうなんて若年性のボケだろうか

誤魔化すように両頬にある手で頭を撫でてあげると途端に頬を染めて喜ぶ可愛い夫は寝ている私にガバリと抱きついて来る。

エッ!？      このまま初夜!!!

結婚したんだから何時でもOKだけどエチケットは守って欲しい

「こら! チョンマゲ、するならお風呂に入らせてよ。そうじゃないと離婚よ」

とても新婚の花嫁の言葉ではなく色気もあった物で無いが何事も最初が肝心

……最初では無いけど

離婚の言葉に驚いた様に飛び跳ね私から離れる。

「ミユキは風呂に入りたいのか?」

「…そりゃあ…やるんならお風呂に入って体を綺麗にしたいのは当り前でしょ…      // //」

全く女になんて恥ずかしい事を言わせるんだろう

恥ずかしさの余り真っ赤になるとチョンマゲは目をキラキラさせ

「抱いてもいいのか!?!」

嬉しそうに聞き返して来るが、ロマンチックとは程遠い雰囲気です

とチョンマゲじゃ仕方が無いような気がするので諦める。

「／／／ 夫婦になったんだからいいよ……でもお風呂に入ってから」

俯いてもじもじしながら答えると

「では直ぐに入ろう!!」

「えっ!」

それからのチョンマゲの行動は早かった。

私をベッドから抱きかかえてお姫様抱っこするや否や瞑道を開いて  
広い大浴場に直行し寝巻きを手品のように一瞬で脱がして何時の間  
にかお互い全裸で湯壺に浸かっている

恥じらう暇も無い

しかも私はチョンマゲの膝の上

有り得ない!!!!!!

「ちょっと 何で一緒に入ってるの???」

確かにお互いの裸は既に見ているが貧相な体の私には恥ずかしい事  
この上ないのよ!

せめて胸がもう少しあればと恨めしい

「漸く目を覚ましたミュキともう離れたくない」

薄っすらと目に涙を浮かべる真摯な顔のチョンマゲ

「漸く???」

どういう事だろうと首を傾げると自分の頭がいやに重い事に気付き、よく見れば髪の毛が異常に伸びて湯船の中でワカメのように揺らいでいた。

「何でこんなに髪が伸びてるの!?!?」

「ミュキは向こうの世界で婚姻を結んでから二年近く寝ていたのだ…余は寂しくて寂しくて堪らなかった」

そう言って抱きついて来るがお互いスッポンポンで素肌が密着

恥ずかしさより二年も寝ていた事に驚愕

「二年!!! 何でそんなに寝てたの」

「実は…余も忘れておったのだが、神族と人間が婚姻を結ぶ時に重い命を受け取る人間はそれを受け取る為の調整が必要になり眠りに就く。その命が重い程長い眠りが必要でミュキの場合二年近く掛かったのだ」

成程…

私には向こうの世界で天帝と会ったのがついさっきの様に思えるけど二年も経っていたのかと納得

プチ浦島太郎気分

「そうか……チョンマゲ待たせてゴメン。これからはずっと一緒に  
いよう」

ぐうぐう寝ている私を二年も待っていたのかと思うと申し訳ないよ  
うな気がした。

普通の男なら他の女に目移りして捨てられそうなものだけどチョン  
マゲは一途に待っていてくれたかと思うと嬉しかった。

「ミユキ~~~~~」

そのままチョンマゲはキスをしてくるが素直に応え受け入れ、私も  
腕をチョンマゲの首に手を回すと眩暈がするような深いキスをされ  
意識が飛ぶほど……アレレ？

よく考えてみれば二年間寝たきりでお風呂に浸かるのは体力的にか  
なり消費する上にキスなんて呼吸しづらい行為をすれば頭がクラク  
ラするのは当たり前だったのだ

ゴメン……チョンマゲ

相手を出来そうもない……

そのままブラックアウトする私だった。



ミュキが目覚め舞い上がり、その上 抱いて良いと許されて浴場だと言うのを忘れ堪らず口付をして甘い唇を味わうが首に回されていたミュキの腕が外され湯の中に崩れ落ち様子が可笑しい

離れがたく唇を離しミュキを見ると真っ赤になり気を失っていた。

「ミュキーーーーー」

急いで湯船から上り急いで手当てをするべく寝所に向かう

人間が脆いというのを忘れがちになってしまう

幾ら命を分け合っているからといってミュキが神族のように超人的体や神力を持つ訳では無く人間のままなのだ

折角目が覚めたら丞相達に知らせ盛大に祝おうと思っていたのに

余の所為で台無し

ミュキの体から水気を取り去り新しい衣装を着せてから寝台に横たえさせると神力を流し込もうとミュキに覆いかぶさり口付をしようとした時

ズッゴン！！

脳天に痛みを感じ振り返ると凄惨な形相の丞相が立っていた。

この部屋には結界を張ってあるのだが瞑道を使える丞相には自由に出入りできるし許していたのが仇となったようだ

「何をするのだ!!」

「何をしているのですか、そのようなはしたない恰好で！」

そう指摘され自分が衣服を着ておらず全裸なのに気付く

「いやこれは」

「幾ら飢えているからと言って寝ているミュキ様を襲うなど獣ですか!! 私はそのようにお育てした心算はありません！」

お前に育てて貰ったはずなろうと反論しようとしたが止めておく。

思えば子供の頃から甲斐甲斐しく母親のように世話をしていたので強ち間違いとも言えない

「余とてそれ位の分別はある！ ミュキが湯にのぼせたので介抱の為に神力を注ごうとしただけ」

「ミュキ様が目覚められたのですか!!」

「つい先程、だが湯浴みをしたと言ったので一緒に入ったのだが体が付いて行かなかったようだ」

「バカですか陛下！ ミュキ様は人間なのですから当然です」

「余は王だぞ、バカはなからう」

「バカで十分です。それより正妃様がお目覚めになりおめでとうございます陛下。早速ミユキ様付きの侍女を付けましょう」

丞相は嬉しそうにいそいそと扉から出て行こうとするので慌てて呼び止める。

「待て！ 侍女はいらん」

「では一体誰がミユキ様のお世話をするのです」

「余がする」

「それでは私は侍女の選定がありますので失礼します」

全く聞き耳を持たないように余の言葉を聞き流して部屋を辞していってしまう

「おのれ―― 丞相め余を何だと思っておるのだ！」

本当に腹の立つ奴だ

暫らくの間はミユキと部屋に籠もり愛を深めるべくあんな事やこんな事をしたかったのに侍女がいては邪魔

手際の良い丞相は今日中には侍女を連れて来るのが予想でき

ささやかな余の野望は潰えてしまった。

ミユキはまた寝てしまったが今度は直ぐに起きるのが分かっている  
ので目覚めるのを楽しんで待つのだった。

## 目覚める私と待つ王様（後書き）

アルファポリス第4回ファンタジー小説大賞に参加しています。宜しかったら投票お願い致します。目指せ40位だったのですがすでに無理そう……ですが地道に頑張ります。

## 空腹な私とKYな王様

グウ~~~~~ キュウルルル~~~~~

お腹が空いた。

空腹の所為で目を覚ますと私はチョンマゲに抱き込まれるように寝ている様だ。

なにせ部屋は真っ暗で夜

視力は両目共に1.5だけど流石に闇の中を見る事は出来ないの  
ホッとする。

目を覚ます度にチョンマゲの神々しい美顔はある意味凶器

心臓に悪い!!

見馴れるのに数年は覚悟しているけど一生無理なような気もするの  
は気のせいだろうか

でも目を覚ますとチョンマゲが側に居てくれるのが嬉しい

何しろ出会って強姦され目覚めた翌朝は一人取り残され強がってい

たが実際はショックだった

あの時も空腹で目が覚めたんだっけ

今も凄まじい空腹感が襲っているが心は温かい

暫らくチョンマゲの体温を感じ匂いを嗅いでみるとオレンジのような柑橘系の甘い匂い!?

香水?

これが焼き肉やステーキや焼き鳥の匂いだったら確実に嚙り付いただろう

美味しそうな匂いを堪能してから恐らくスツと高い鼻に手を持って行って摘んで見ると暫らくは無反応だったけど息苦しさでジタバタし始める。

どうやら神様も人間のように呼吸しているんだとチョツと吃驚

チョンマゲが起きたの様なので手を放した途端お腹の虫が無く

グウーーーーー

色気も何も無い私

「ミュキ、お腹が空いてるのか?」

優しい声にドキリとするがお腹が空きすぎて堪らない

「うん、もう死にそう……」

お腹に力が入らず情けない声になる。

「死ぬ！！！」

すると何故かこの世の終わりのような悲壮な声を上げると急いで立ち上がると何処かに忽然と消えてしまう。

暗闇でよく見えない所為で正に一瞬で掻き消えた様に感じたのだ。

取り残された私は茫然とする。

「多分……ご飯を取りに行ってくれたんだよね？」

どうやら私の旦那様はかなりの粗忽者のよう

考えて見れば知りあって間もないのでそんなにお互いの事を良く知りもしないで結婚をしたんだから我ながら思いきった事をしてしまったと思う

チョンマゲの想いに流されたと言ってもいいけど決めてはヤッパリ顔だろうか

人間顔じゃないと思うけど

顔が良い事に越した事は無いと思うのが正直な気持ち

それに反して普通な顔の私

性格も至って普通だし一体どこに惚れる要素があるのかと不思議で



ならない

「多分地味専の貧乳好きという奴なのかな？ うっ……考えるの止めよ……」

深く考えると落ち込みそう

私はチョンマゲの愛を信じるだけだ！

………

所でここは何処？……？

一方此方は丞相のお屋敷

丞相ルイングウイはミュキ様が目覚めた事を愛する妻アンチヨングウイに知らせるべく早めに帰宅し知らせると我が事のように喜ぶ

「まあー　　ミュキ様が目覚められたのですか！」

慎ましい妻が満面の笑顔を浮かべるのに些か気に食わないが最近沈みがちな妻が久しぶりに見せる晴れやかな顔に安堵する。

「ああ： 私も直にお会いしてないが陛下が昼ぐらいに一度目を覚まされたと言っていましたよ」

「それは陛下もお喜びでしょう。 私もミュキ様にお会いしたい：

」

途端に沈み込む

後宮に居るミュキ様に会いに行くのはそう簡単では無いのを分かっているのだろう

ハッキリ言って妻をミュキ様に会わせたくないが妻の喜ぶ顔を見たい気持ちに負けてしまう

「それならばミュキ様に会えるよう陛下に頼んでみましょう」

「本当ですか！」

「私がアンチヨンに嘘を言っただ事がありますか」

「有難う貴方」

嬉しそうに私に抱きついて来る

そして良い雰囲気になりそのまま寝室に傾れ込む、王宮から使いを出し早めに帰るのを知らせておいたのでアンチョンも身を清めているはずなので湯浴みで中断する無粋な事にならないようにしていた。

「今夜のアンチョンもとても綺麗ですよ」

「貴方　／＼／＼」

何時までも初々しい反応をする可愛い妻

ミュキ様のお陰で陛下が政務を少しするようになったので余裕の出来た私は最近子作りに励め充実していた。

そして灯りを消し事に及ぼうとした時だった

「ミュキが死んでしまうーーーーー！ーーーーー！　相承食事を用意致せ！！！」

「キャアアーーーー！！！」

「へっ陛下！！！！？」

何故か陛下が私達の寝所に乱入して来る。

直ぐさまアンチョンに布団を掛け陛下目がけて鉄拳を奮う

鳩尾に手加減無く拳を打ちこむ

ドッス！！

「うっ！！」

「時と場所を選びなさい！！ 夫婦の寢所に押し入るなど言語同断！ 陛下とて許しません！」

お腹を押さえこむ陛下を引きずり隣室に連れ出す。

「それでミユキ様がどうしたのです」

忌々しい事にアレぐらい何時までもダメージを引きずる陛下ではない

「そうであった！ ミユキが腹を空かせて死にそうなのだ」 助けてくれ！」

「はあ…… 空腹だけで人は死にませんよ！ だから侍女を付けろと言ったのです」

ギロリと睨むと項垂れる陛下

自分自身の面倒すらままならない陛下が人の世話をするなど無理だと思っただ

『ミユキが寝ている間、風呂にも入れたし着替えも全て余が世話をしていたのだから大丈夫だ』と言って連れて行った侍女を追い出したのは陛下

なまじ陛下は許さなければ結界を張ってあるミュキ様の部屋に入れないのだから厄介だ

「兎に角ミュキ様の元に行きましょう。目を覚まして見知らぬ部屋で困っておいででしょう」

全くこれでは最初の時と同じ

明日は絶対に侍女を付けようと心に決める。

「ハッ！！　そうであつた。　余は直ぐ戻るからそなたはミュキの食事を持って参れ」

来た時同様に瞑道を開けてサッサと帰ってしまう人騒がせな陛下を見送る。

昔から振りまわされてばかりでうんざりだが何故か見捨てられないので諦めていた。

「貴方：　ミュキ様がどうされたのです」

心配げに部屋に入って来るアンチョン

「どうやら先程目を覚ましてお食事を所望されたようだから少し後宮に行つて来るよ」

「……」

何やら言いたげな眼差しで私を見る。

「アンチョンもミユキ様に会いに行くかい」

これだけ迷惑を掛けられたのだから陛下に文句は言わさない。

「宜しいのですか！」

「私は食事の用意をして来るから着替えておいで」

「はい貴方！」

まるで恋人にでも会いに行くように喜ぶ妻に少し不安になるが多分アンチョンは寂しいのだろう

広い屋敷で使用人に傳かれ何不自由なく暮らしているが心を許せる話し相手もおらず相承の妻としての付き合いは気の張る者ばかり

ミユキ様と話すアンチョンは本当に楽しそうだった。

少し嫉妬してしまうが全てはアンチョンの為に我慢しよう

家令に料理を適当に見つくりいお重に詰めるように手配しながら

ミユキ様が目覚めたのは良いが何やらまたひと騒動起きそうで不安が過ぎるのだった。



## 再会と私

私は一人で暗闇の中に取り残され恐らく、ただっ広いベッドの上で体育座りで待っていた。せめて灯りを点けて行って欲しかった

シーンと静まり返った部屋は不気味

想像からするとここは後宮の一室だと思うのだけど人の気配が一切しない

そう言えばチョンマゲって他に奥さんがいるんだろうか

王様と言えば後宮に美姫を集め夜毎違う側室の部屋を訪れるイメージがあるんだけど私って何番目かの側室になるのかな

左手に嵌る金の指環に触る

この契約の指環を嵌められる事によってチョンマゲと命を分け合い繋がったのだからきっと私は王妃だ

王妃

私が良いんだろうか



なってしまったんだから腹を括るが自分に似合わないといくづく思う

もし側室がわんさかいたら絶対いびられる

私が王妃の肩書を持っていた後も後ろ盾も何も無くチョンマゲの愛しか無い

チョンマゲは頼りなさそうだし不安

そこにルインさんの顔が思い浮かぶ

矢張りここは腹黒そうなルインさんに頼り色々ここでの地盤を固めないといけないだろう

何処の世界でも女の世界は怖いのだ

そう言えば牡丹の君は如何しているだろう……最後に見た時はかなりショックを受けていたようで気になる。

もし牡丹の君のような姫が後宮に入ったら絶対に標的にされて虐められていたに違いない

正に深窓の姫君タイプだもんね

それに比べ私は平凡庶民、雑草は強く逞しく生きれる自身はある。

何故だか男にはもてないがお姉さまタイプには可愛がれるので案外その辺を生かして上手く行くかも

そんな事を考え込んでいると

「ミュキーーー」

ガッバ！！

「ギャッツ————！！！」

又しても突然幽霊の如く現れるチョンマゲに一瞬心臓が止まるかと思ふ程ビックリする。

「今丞相に食事を持ってこさせるので気を確り持つのだ」

抱きつきなが心配そうに私を労ってくれるが：

「チョンマゲは大袈裟だよ。それより部屋の灯りを点けてくれな  
い、真っ暗で何にも見えないんだけど」

「はっ！　すまないミュキ……　余は役ただずだ…」

パツチリと音がすると

突然部屋に灯りが点き一瞬眩しきで目が眩むが直ぐに慣れて来ると  
しょんぼりと項垂れる美しい夫の姿

美形はどんな姿も絵になると感心する。

「どうしたの？」

「ミュキに何でもしてやりたいのに食事の用意も満足に出来ず、こ  
んな暗い部屋に一人でいさせてしまった……　夫失格だ」

かっ可愛い！！！！

思わずベッドに座り込む夫に頭から抱きしめてしまう

「ミュキ／＼／」

「大丈夫だよチョンマゲ。私だってまだ奥さんらしい事何にもしてないんだからこれからゆっくりやってこう」

可愛いのはいいがこんなんでも王様がやって行けるんだろうか心配になって来るが、突然チョンマゲは私を押し倒して来る。

ポッスン

そしてその美しい顔を私に近づけて来るのでキスをしようと迫ってくるがこういう所は抜け目が無いと感じる。

「今は駄目！」

私は急いでチョンマゲの顔を押し退けようと手で突っ張る

「うゝゝゝ 何故?？」

情けない顔で理由を聞いて来る。

「誰かが食事を持って来るんですよ。それに聞きたい事があるの」

「分かった」

渋々私から体をどかすと私も起き上がり正座する。

「こういうのは結婚する前に聞いておくべきだったんだけど、チョンマゲは王様よね」

「そうだが」

「もしかして此処は後宮？」

「ああ」

灯りの点いた部屋を見渡せば素晴らしい家具や美術品が飾られていられ、後宮の一室だと納得する。

「因みにこの後宮に女の人は何人いるの？ 正直に話して」

ある程度は覚悟している。

「今はミユキ一人だから安心してくれ」

私だけと聞き嬉しいが今はと言った。

つまり過去にはいたんだと思うとズキリと胸が痛む…王様だしこれだけの美形だから女がいない方が可笑しいんだけど

「今は… 昔は何人いたの」

当り前だけど私はチョンマゲが初めてだったから心に引かかる

この際ハッキリしておきたい。

「良く把握してないが十八人程だったかも… だが全員余が望ん

で入れたのでは無く臣下共が勝手に押し付けた女ばかりで愛してない  
どいなかった！」

十八人！！

流石王様だけど全員相手にするのは大変そう

否… チョンマゲの絶倫さを思えば当り前だろうか

なんだか悔しい

「でも抱いたんでしょ」

「そっそれは…その…」

しどろもどろのチョンマゲ

私に会う前だから仕方ない。

「はぁ… まさか自分がこんなに嫉妬するとは思わなかったわ」

「嫉妬！！」

私に嫉妬され嬉しようにするチョンマゲ

「過去の女に嫉妬してみっともないし許す。 でもこれから浮気は  
絶対許さないんだから覚悟してね」

これでは独占欲丸出しの嫌な女だけど私はかなりの覚悟で結婚をした。

生半可な覚悟では無くチョンマゲの愛を信じたから出来たのだ

それが揺らいだ時自分自身どうなってしまいか分からない

家族を捨て

地球にあった自分の居場所を全てを捨てて来たんだから

私にはチョンマゲしか居ない

そのチョンマゲに捨てられたらきつと狂ってしまいとんでもない酷い事をするかも

何しろ私はチョンマゲの命を半分握っているのだ

間違ってもジツと耐える女では無いのを自分でも理解していた。

「余にはミユキしか居ない。生涯愛する事を誓う」

真摯な顔で言うが、これだけの見目麗しいと結婚詐欺にあっていようような気分になって来るのだから不思議

矢張りこんな美形が私に惚れる訳が無いという思いが根底にあるからだろうか？

だけど私に半分の命をくれたチョンマゲを信じよう

「私もチョンマゲを生涯愛する事を誓うわ　／／／」

こんな臭いセリフを自分が口にするとは……

恥ずかしくって穴があつたら入りたい気分

しかしムードは盛り上がり必然的にキスに傾れ込む

チョンマゲのキスのスキルは高く直ぐに夢中になってしまう私

しかし折角の甘いムードは直ぐに壊されてしまうのだった。

「きゃっ!!」

女の人の声が聞こえ驚いて視線だけを向けるとそこには顔を真っ赤にした牡丹の君と見覚えのある男性が立っていた。

急いでチョンマゲの顔を手で外そうとするが二人に気付いていないのか止めようとせずに反対により一層激しくして来て恥ずかしさと酸欠で血が昇る

色んな意味で死にそう……

ガッツン!

男の人がチョンマゲの頭を突然殴り漸く解放されるがクタクタする。

「おのれ丞相 気を利かせて席ぐらい外せ!」

「陛下に学習能力は無いのですか！ ミュキ様が倒れそうですよ」

「しまった！ミュキ大丈夫か」

確かに気が遠のいたけど

その時私はある匂いに気付き本能的に体が動き芳しいその匂いの方  
向に跳び付く

それは牡丹の君が持っていた包み

「牡丹の君 ご飯下さい！！」

「！！ はいミュキ様」

牡丹の君は急いで風呂敷を解いて五段重ねの高級感溢れる重箱を出  
してくれベットのの上に次々ならべるとそこには美味しそうな料理が  
綺麗に並べられていた。

「ミュキ様お箸をどうぞ」

「有難うございます。 そして戴きます」

私は速やかにかつ迅速に次々に重箱を開ける事に没頭した。

二年ぶりに食べる食事は美味しい

私的にはお昼に食べたばかりのはずなんだけど体は飢えていた。

料理を胃に入れた途端に活性化し次々胃液で解かされ腸に送り込ん



で体に栄養を取り込み力がみなぎる。

生きていると実感

食べると言う行為は一種快感だと私は常々思っている。

ああゝ 幸せ……

そして短時間に綺麗に完食してしまう私

「御馳走様でした」

いまいち足りないけど健康の為に腹八分目

「ミユキ様 お茶をどうぞ」

「牡丹の君ありがとう」

何時の間にか用意されたお茶を飲んで漸く一息つく

やっぱり、食後は緑茶

ご飯を食べてお落ち着いて周囲を見渡せば、少しいじけたようなチヨンマゲとにこやかに微笑む牡丹の君、そして見覚えのある美形な男

男はモスグリーンに白メッシュの髪で切れ長なエメラルド色の目のインテリ―系の冷たい美貌の男でまるで男番ルインさん。Dカップの胸は無いが均整のとれた男らしい体つきをしており身長もルインさんより十？以上は高い

??? 誰???」

不思議そうに男を見ているとチョンマゲが怒りだす。

「ミュキ！ 何故丞相ばかり見るのだ！？ 心変わりは許さんぞ！」

見当違いなことを言う。

「違うわよ……もしかしてこの人ルインさん??」

思えばチョンマゲも女になっていたのを思い出す……もしかして神様って性別が無いの!!

男も成程といった感じで自己紹介を始める。

「そう言えばミュキ様と会う時は女の姿でしたね。此方が本来の姿で丞相をしておりますルイングウイです。これまで通りルインとお呼び下さい」

丞相?? どれくらい偉いのか分からないけど王様殴るくらいだから実質ルインさんがこの国の最高責任者なのだろう

「そして妻のアンチョングウイ共々ミュキ様を支えますので何なりとお申し付けください」

深々と頭を垂れるルインさん

「ミュキ様がお目覚めになるのを心よりお待ち申し上げておりました。最後にミュキ様を裏切るような形になり申し訳なくて……」

牡丹の君は思った通り気にしていたようだ。

可哀想に……腹黒の旦那様を持ったせいで

私は牡丹の君の手を取る。

「私は気にしてません。牡丹の君は知らなかったのは分かってたから大丈夫。それよりこの世界の事を何も知らないので色々助けてくれれば嬉しいです」

「ミユキ様……」

綺麗な青色の瞳を潤ませ何とも色っぽい

男なら惚れてしまいそう！

「／／／ 牡丹の君……」

抱きつこうとすると男共に邪魔される。

牡丹の君はルインさんに引き寄せられ、私はチョンマゲに抱き寄せられる。

「ミユキ…… 余以外に抱き付いてはならん！」

「え…… 女同士だからいいじゃない」

「女でも駄目」

どうやら夫はかなり嫉妬深く束縛するタイプの様だ

愛されている証拠？

少し頬が弛む

それから少し皆で話しながら私は眠気が襲い堪らない

二年間の眠り続けるのも案外体を弱らせている様で体力が続かない  
明日からジョギングでも始めようかと思いつながら眠りに就くのだっ  
た。

おまけ

ミユキが眠り丞相夫妻が帰る時の会話

「いいですか陛下、くれぐれもミユキ様にに手を出さないように！」

「分かっておる……お邪魔虫はサッサと帰れ」

「何がお邪魔虫です！ 最初に邪魔したのは陛下ですよ」

「そっそれは…緊急事態だから仕方なからう！」

「兎に角明日から侍女を付けて戴きます！」

「…せめて十日待ってくれ」

「無理です。私は陛下の子守りはうんざりですので… これ以上アンチョンとの時間を削らされるのなら丞相を辞めさせて貰います」

「そなたは直ぐそれを持ちだす。 分かった明日より侍女を付けよう」

「分かって戴き有難うございます。それではお休みなさいませ陛下」

「…… ありがとうルイン」

「チヨングウイ様……」

久しぶりに子供の頃のように呼ばれ嬉しかった丞相でした。

## 初心な私と欲求不満な王様

翌朝目を覚ますと目を血ばらせたチョンマゲが私を見ていた。

「ヒィ……!!」

怖え――――

美しすぎると迫力が違う!!

心臓が半端無い程心拍数が上りドキドキ

心不全を起こしそう

「お…はよう…… 寝れなかったの？」

「一晩中ミュキの寝顔を見てたら夜が明けてしまった」

私の寝顔なんか二年間見続けて飽きている様な気がするんだけど……

「暗くて見えないでしょ」

「大丈夫だ、我等神族は闇でも問題なく見る事が可能だ」

凄い暗視スコップ機能付きの目：まさか透視機能もあるのかな

「それじゃあ物を透かして見る事も出来るの？」

「やろうと思えば出来るが、した事がない……！！」

そして何故か私を見詰め出したかと思うと顔を真っ赤にさせ鼻血を一筋垂れ流す。

この反応は何！！！？？

「……………」

ボッカ！

「チョンマゲのバカー……！！」

思わず頭を殴り付けてしまう

信じられない！！

まさか私の服を透視するなんて誰が思うだろうか

「今度したらルインさんのお屋敷に行っちゃうわよ！」

実家には戻れないのでこの際ルインさん宅を実家代りにしよう

「うっう…… すまないミュキ」

自分で言うのもなんだけどこんな鶏ガラのような体を見て興奮する

なんてマニアック過ぎるような気がする。

此処は喜ぶべきなんだろうかと悩んでしまう。

しかし起きたはいいけど顔を洗ったり着替えは如何すればいいんだろう？

そもそも見知らぬ部屋で動きようが無い

「それより私はこれから何をすればいいの？ チョンマゲ」

王妃様のお仕事って何？

後宮で遊んでいればいのだろうか

「ミュキは余と常に一緒に居てくれればいいのだ」

「チョンマゲは王様の仕事があるでしょ」

「大丈夫、丞相が全ての政務を行い余は印を押すだけでいいから、ミュキの側でも出来る」

私は唾然としてしまう……思った通り丞相のルインさんがこの国を動かしているのだ

ハンコを押すだけなんて何処の会社の窓際課長なのよ

それってチョンマゲが王様である必要があるんだろうか

きつと王政だから能力は関係なく血統だけで王になったのだろう



頼り無いと思ったけどそれは情けなすぎるのでは……

これは教育的指導が必要だ

「其処に正座して」

すると素直に正座してくれ私も向い合せになり正座する。

「私は政治の事は分からないし口出しもする心算も無いけどチョンマゲにはもう少し王様の仕事をして欲しい」

向こうに居る時も政治には余り興味が無くころころ変わる総理大臣の名前すら覚える気になれなかった私だけどこれから日本はどうなるんだろうかと漠然とした不安はあった。

幾ら民主主義、選挙権があるからと言って日本の政治が国民の意に沿っているかと言えば微妙：一人一人の1票が国を造るっていうけどあまり実感できないのが本音だった。

だけどチョンマゲは王様

国の最高決定権を持って国を治めている人がハンコを押すだけなんて無責任すぎる。

国のトップが国民から血税を取るだけ取って遊んでるなんて、一年間働いた納税者としてはムカつく

「ミユキ？」

「ルインさんは有能そうだからちゃんと国を治めているんだろうけど、チョンマゲは王様としての義務があるんだから出来ない成りに努力して欲しいの。私もこの世界の事を勉強するからチョンマゲも一緒に王様の仕事を勉強しよう」

「ミユキは余にそうして欲しいのか？」

「うん。私はチャンと働いている男の人が好き」

「……分かったミユキがそう望むなら王の仕事を真面目にしよう」

「有難うチョンマゲ」

うーっ…… こうもすんなり私の言う事聞いてくれるのは嬉しいけど、一種の怖さを感じる。一歩間違えば王様を操り政治を動かす悪女にもなれそうだ

そんな事したらきつとルインさんを敵に回し殺されるのが容易に想像できた。

あの人は絶対手段を選ばないタイプだ！

人を見る目は割かし自信があつたのだけど私は知らなかった……目の前にいるチョンマゲの本当の姿を知らず見誤っていた事を……やっぱり恋は盲目なのだろうかと言う事で納得しておくのはもう少し後だった。

「でも今日のところはミユキとゆっくり過ごしたい……駄目か……」

チョンマゲが私のご機嫌を伺うように聞いて来る。

甘え上手な夫に私はたじたじ

これは計算だろうか？  
どちらかと言うと天性のよう気がする。

私としてもイチヤイチヤしたいが恋人をすつ飛ばして夫が出来てしまふまい王妃という立場同様にどうすればいいのか分からない

残念ながら私には経験とスキルが無さ過ぎる。

普通の夫婦や恋人はどう過ごすんだろう？？？？？

ここは腹が立つけど経験豊かそうなチョンマゲに任すしかないよね

「／／／そうね……、今日は二人つきりで過ごそう。何をすの？」

私としてはデートがてらにこの国の街を見て回りたいけど王様が街の中を歩くのは大変そうだし、此処は手近なところでお城探検もいいかも。きっと綺麗な庭園があるだろうから手を繋いで散歩もいいかもしれないと今時の高校生でもしない様な事を考えるのだった。

可愛い!!!!!!!!!!!!!!

首を傾げ「何をするの？」

と愛くるしく聞いて来るミュキ……！！

そんな事は決まっている。

先程、服の上から透かし見た裸を見てかなり興奮しており二年間お預けをくらい色々男として一杯一杯

暴走してしまっても仕方が無く自分でもよく此処まで我慢したと褒めてやりたい。

すかさずミュキを押し倒し、その可愛らしい唇にむしゃぶりつく

唇を割開き己が舌をねじ込み存分に味わう

最初は些か抵抗していたミュキだがその内おずおずと応えてくれるように舌を絡ませくれるが不慣れ様子が嬉しい

初めて体を繋いだ時ミュキが処女だと知り天にも昇る嬉しさだった。

もし違ったならミュキを抱いたであろう男達全てを例え異界の地にしようと跡形も無く切り刻み抹殺したであろう。

余にはその力がある。

可愛い 可愛い 可愛い 可愛い 可愛い 可愛い 可愛い 可愛い  
い

可愛い 可愛い 可愛い 可愛い 可愛い 可愛い 可愛い 可愛い

い

可愛い 可愛い 可愛い 可愛い 可愛い 可愛い 可愛い 可愛い  
い

なんて愛おしい存在

今までの女達は余から全てを絞り取ろうとしていたがミュキは違う

一緒に勉強をしようなどなんて可愛い事を言うんだろう

ミュキが働く男が好きなら余の王らしい姿を見ればきっとメロメロになるに違いない

もっと余を愛して貰う為にも少し政務を頑張ろう!!

あくまでも少し

ミュキとの時間を減らす気は露ほども無いのだ

とろんと目を潤ませ顔を上気させたのを確認してから前を肌蹴させ  
可愛い胸を顕わにした時だった。

ドン! ドン! ドン! ドン! ドン!

「陛下! 今直ぐミュキ様から離れ結界を解きなさい!! さもな  
くば無理やり入りますよ!」

「チッ! 丞相め昨夜から邪魔ばかりしおって」

丞相の言葉を見無視すべく結界を強化し音も遮断するが時すでに遅く  
ミュキが正気づく

「チョンマゲのバカ！！ 朝から何をするのよ！」

真っ赤な顔をしながら暴れ出しポカポカ余の胸を叩いて来るがその  
仕草さえ可愛い

堪らない！

「ミュキ、気にせず続きをしよう」

「駄目！ 駄目ったら駄目！！ こういう事は夜でしょ」

「余は気にしないし、明る方がミュキの痴態を堪能できる」

すると更に怒りだすミュキ

「今したらチョンマゲと当分口を利かない！！」

「そっそんな~~~~」

渋々ミュキから体を離すとソソクサと肌蹴た前を直して余に背を向  
けてしまう

どうやらかなり気分を害させてしまったよう

「すまぬミュキ……嫌ならもうしない」

「別に嫌じゃ……  
／／／  
夜……夜なら構わないの。 私はチ

ヨンマゲと違ってあんまり経験が無いんだからその辺を分かって  
／／／」

俯きながらも恥ずかしそうにしているのが伺え本当に可愛くて頭からバリバリ食べてしまいたいなどと病んだ事を考えてしまう

背後からミュキの華奢な体を抱き込んでもう一度謝る。

「余が悪かった…… だが今夜は良いだろうか余は我慢出来ない」

ミュキの耳元で呟くとビクツと体を震わす

本当に初心で可愛

コクリと耳を真っ赤にさせ頷くミュキ

「ありがとうミュキ」

ミュキのお許しが出たので今夜が楽しみだ

ああゝゝゝ 幸せだ!!!

しかし偶にチクチクと過去の事を言われるのが耳が痛い

こんな事ならミュキに童貞を捧げたかったと後悔するのだった。

それからミュキに促され仕方なく結界を解くと丞相が入って来るとすかさず余を睨んで来る。

「お早う御座います。陛下そしてミュキ様」

「お早う御座いますルインさん」

律儀に返事をするミュキ

「このような者に一々挨拶など返さずともよいのだぞ」

「それは人としてどうかと思うよ…」

ミュキにそう言われては不本意ながら挨拶を返すしかない

「おはよう丞相」

すると目を向いて驚く丞相

「陛下に生まれて初めておはようと言われました！ 天変地異の前触れでしょうか」

失礼な余とて挨拶ぐらい出来ると言いたい記憶にある限り確かに言った覚えが無いかもしれない

そんな事がミュキに知られたら軽蔑される？

「丞相、朝から冗談が過ぎるぞ…余とて挨拶はするぞ」



「申し訳ありませんでした陛下。確かに冗談が過ぎたようです…生まれてこの方挨拶をしない者などいる訳がありませんでした」

うつ…

ミュキも何故か余を横目でみる。

「これからチャンと挨拶をしよう」

「素晴らしい！ ミュキ様のお陰で陛下がまともになりつつあります」

そう言ってニツコリと笑う丞相…忌々しい奴だ。

「嫌みはそれ位で何しに来たのだ」

「ミュキ様のお世話をする侍女を連れてまいりました。見ればミュキ様は朝の身支度もまだな様なので早速侍女に支度をさせましょう。さあ入りなさい」

そう言って入って来た侍女は一人だった。

王妃の侍女となれば十人以上は用意されても可笑しくないのだが

「この者の名はフーラングウィと申します。教養も高く信用のおかげる娘ですでお見知りおきを。後ほど侍女は追加して行きますが今の処ミュキ様を任せられるのはこの者しかおりませんでしたので御不自由をお掛けすると思いますが御了承を」

どうやら重臣共が動き始めミュキに近づこうとしているのであろう

ミュキが目覚めたのがもう外部に漏れたのか

全く油断のならない者達だ。

「陛下並びに王妃様お初にお目にかかります。この度丞相様に王妃様のお世話の大任を承り恐悦至極に存じ誠心誠意を持てお使い致します」

「うむ、良からう…ミュキの世話はそなたに頼もう」

「陛下直々のお言葉有り難き幸せ。我が身に代えましてもミュキ様をお守り致します」

どうやら只の侍女では無く護衛も兼ねているんだろう

しかし横から不穏な言葉が聞こえる。

「素敵…」

横を見やればうつとりと侍女を見詰めるミュキ……！！

早くも余所見をするミュキ

ミュキはヤッパリ女の方が好きなのかと疑ってしまう

「矢張り駄目だ！ その侍女を連れて帰れ」

「何を仰るのです陛下。 さあミュキ様には着替えをして頂くので

陛下も別室でお着替えを」

「ミユキと同じ部屋が良い！」

「我儘を言わないで行きますよ」

「着替えたら一緒にご飯を食べよう」

そう言って手を振るミユキは何故か嬉しそう

丞相に引き摺られながら今夜は余所見出来ないぐらいミユキに余を刻もうと心に誓うのだった。

## 普通な私と騎士な侍女

危なかった…もう少してチョンマゲに流されてしまいそうになってしまった。

腹が立つ事にキスのテクニクも半端無くプロよ!!

一体どれだけの数をこなして来たんだろうか

何せ側室が十八人もいたんだから

チョンマゲのどスケベ!!!

「王妃様 今日の御衣裳は此方で宜しいでしょうか」

そ言いながらフーランさんが何処から持って来たのはピンクの内掛けで白い菊の花があしらった物で子供っぽいような気がするけど折角用意してくれたので着るしかない

この世界に来てからピンクを着せられる事が多いので拒絶感は薄らいできた

そもそも決して嫌いな色ではなくどちらかと言えば憧れの色

「それで良いです」

「ご希望がおりなら遠慮なく仰って下さいませ」

ニツコリと優しくに微笑みにうっかり見惚れてしまう。

フーラン…さんを一目見てこの人は白百合の君だと瞬間思ってしまった。

先ずはその真直ぐに伸びた美しい銀糸のような髪は穢れた物を寄せ付けないように神々しい輝きを放ち、切れ長な目にはアメジストのような美しい紫色の瞳が光り凛とした意志の強さを感じる。薄い唇はなんとなく無機質に感じるがそこから発せられるテノールな声に痺れてしまう。

宝塚の男役をすればトップ間違いなし！！ しかもノーメイクでいける。

男っばいとは違う凛々しさが漂い、姫に仕える女騎士というイメージがピツタリと嵌るのだ……こんな綺麗な人が私の侍女なんて初めて王妃になって良かったと思った。

でも知らない人が見れば絶対に王妃と侍女を取り違えるのは確実だ

牡丹の君と言いななんて美形ばかりなんだろう

かえって自分の普通さが個性に思えて来る……

「それじゃあ一つ良いですか！」

「はい、何なりと」

「貴女の事を白百合の君と呼んでも良いですか!？」

白百合の君は目をパチクリとさせ押し黙る。

どうしよう…引かれてしまったのだろうか、牡丹の君は喜んでくれたから調子に乗ってしまっていたのかも知れない

「とても美しい愛称をお付け頂き嬉しいのですが、私めは王妃様の侍女ですのでどうか名前でお呼び下さい」

「では、フーランさんでもいいですか」

「侍女に敬称は無用ですのでフーランとお呼びを」

恭しく頭を下げそれしか受け付けないというような拒絶を感じ諦める。

王妃と言う立場は存外孤独なのかも

徐々にこの美人侍女を攻略して行けばいいのだ

何しろこれから長い付き合いになりそうだしルインさんが選んだ人だから悪い人では無いはず、恋愛シュミレーションだと思えば楽しめる

念のため言っておくが恋愛シュミレーションをしたのは弟のお勧めを一度しただけ、女の私が二次元の可愛い少女を落として行くのは中々面白かったけど危ない世界に嵌りそうで封印した。

何しろ彼氏も出来ずに男がする恋愛シミュレーションに熱中する女なんて悲しすぎるよ〜

こうなったら侍女には色んなタイプの美女を集めリアル疑似恋愛シミュレーションをしようかと閃く

どうせ王妃をするなら楽しまなくっちゃ！

「フーラン それじゃあ着替えを」

「はい王妃様」

着替えを手伝て貰うのはリユーリンちゃんです慣れているが私の裸を見られるのは羞恥心が湧く。何しろ胸の無いのが主な原因

人並みにあればこうまで恥ずかしく無いんだけど

牡丹の君のようなスタイルなら見せびらかさんばかりに晒すんだけど

そう言えばリユーリンちゃんはどうしているんだろう、アレから二年経ったんなら一六歳で結婚適齢期：無事結婚できただろうか。私の侍女になりお給金がアップしたと喜んでいたのに私が居なくなりお給金下がってしまったのではないかと心配になる。

ルインさんに次にあったら絶対聞かないと

まだ結婚していないなら、また侍女をして貰いたいかも

着替えが終わると次は髪を結って貰う。両サイドをふっくらと盛り

トップに上げて留めから可愛い小花の髪飾りをあしらひ、耳には桜の花が三つ連なったデザインのイヤリングを着けられる。

もっと派手に装飾品を着けたらどうしようかと思っていたけどこれなら許容範囲

「お化粧は薄くて構わないので」

「はい 王妃様のお肌はお美しいですから紅だけに致しましょう」

おおー誉められてしまった！！

うがった見方をすればそれしか誉める所が無いのかも

私のような普通の人間が王妃なんて嫌じゃないんだろうか

いまいち読めないのよねフリーランは

フリーランの美しい顔を間近で堪能しながら見詰めていると少し頬を赤らめる。

おや…照れてる？

これだけ綺麗なんだから見られるなんて慣れていそうなのに…気のせい？

「お疲れ様です。これで宜しいでしょうか…とてもお可愛らしいですよ」

そう言ってフリーランが鏡を出し来るので思わず自分の姿を見てしま



う。

うっ！

二年前と変わらない自分の顔

さっきまで別次元のような美しい顔を見ていたせいでそのギャップにのた打ち回りたい衝動をおさえ、思わず落ち込んで俯いてしまう  
これは何の罰???

深雪！　こんな事でくじけちゃいけない！　これからこんな事が死ぬまで続くんだから一々落ち込んでいちゃ駄目よ！

そうよね私は王妃なんだから毅然としないと！

そうよ！負けちゃ駄目よ。

こうなったらトコトン美女を集めて私のハーレムにしてやる！

ある意味自虐的な決意する。

「王妃様…何処かお加減でも悪いのですか」

心配そうにフーランが聞いて来るが心の中で応える。

はい顔が……

流石に声には出来ない。

自虐モード続行中な私

「ちょっと眩暈がしたけどもう大丈夫です……」

「それなら宜しいのですが、では別室に食事が用意してありますので此方に」

眩暈がしたと言った所為か私の手を取り立ち上がられ、そのまま移動するのだがフーランは背が高く多分180?くらいで姿勢もいいので騎士にエスコートされるお姫様気分

チョツと衣装が重いのが難だけどこれからは毎日こんなに仰々しい恰好かと思うと気が重いがその内慣れるだろうか? 普段は寝巻きのような一重の着物で過ごしたい。

長い廊下をエスコートされ通された部屋には既にチョンマゲが座っておりテーブルには美味しそうな朝食が所狭しと並べられている。現金なもので食事を目の前にした途端お腹が無性に空いて来るから不思議

「チョンマゲお待たせ」

「ミユキー!」

私を見るや否や瞬間移動のように私の前に来て抱きしめて来る。

ムギユ〜

「なんと可愛い〜 侍女に変な事はされなかったか?」

変な事??

「何かされる訳ないでしょ。それよりご飯食べようお腹すいちゃったから離してよ」

「うっう ミユキが冷たい」

「さっき変な事したからでしょ」

フーランは女性で私に何をすると言うんだろうか、男だとしても私に不埒な事をする気にはなら無いでしょ…恋は盲目だと良く言った物だ

だけどチョンマゲは私を離そうとはせず抱き上げてお姫様抱っこをしてそのまま椅子に座る。

「ちょっと! この体勢は何!? 恥ずかしいから止めてー」

部屋には至って冷静な顔をしたルインさんとフーランが控えているが止めようとはしない。

見てないでどうにかして欲しく、ルインさんを見るが視線を逸らされ無視を決め込むよう

何時もは平気でボカスカ殴ってるくせに、絶対に何か裏取引をしたに違いない

フーランはチョンマゲに何か意見するなんてとんでもない人間だろうし自力で何とかするしか無いよう

「だって余は寂しいかったのだ：二年間もミュキが寝ていたからもう片時も離れたくない」

かっ——————／／／

なんてストレートなの

恥ずかしさで頭に血が昇り思考回路がショートしてしまい恥ずかしいお願いを許してしまう。

「今日だけよ　／／／」

「ありがとうミュキ！　それでは早速ア~~~~ン」

「はぁ?？」

それはどういう意味？

いえ：分かっているけどこの際スルーしたい！

「余はミュキに食べさせて貰うのが夢だったのだ……」

綺麗な瞳を潤ませてそう言われたら無下には出来ない

うつ……　毒を食らわば皿までもと言う諺がある。

この場合悪事では無く羞恥プレイだけど

そしてチョンマゲの希望通りに食べさせてあげるが恥ずかしいのは

最初の頃だけで食事に夢中になると平気になってしまう

「これ凄く美味しい！ チョンマゲも食べてみて」

といいながら同じ箸を使いチョンマゲに口に持って行くと美味しそうに食べてくれる。

「うむ 確かに美味しい」

「でしょ！」

私がこんなラブラブ新婚夫婦をしてしまうなんて思ってもいなかった

矢張りチョンマゲのスキルが高いせいだろうか

そうやって楽しみながら二人で料理を完食するのだった。

―侍女の眩き―

私はフーラングウイ、亀族の中でも下位の出自ながら神力の高さから武官を目指し軍に所属していたのですが出自の低さから出世は望

めないもののそれなりに満足した日々を過ごしていました。

そして突然に丞相様より直接お声を掛けて戴き王妃様の侍女をさせていただく事になり有り難く拝命したのですが護衛では無く侍女？不遜ながら聞き返してしまいました。

「王妃様は人間でしかも此方の世界の者では無い普通の少女」

「異界のお方なのですか！！」

噂では大層お美しい女性で亀王様が溺愛するあまり後宮に閉じ込めて誰にも触れさせない程。そして亀族の姫では無く人間だとは聞いていたがまさか異界からいらっしゃったとは……どおりで出自も容姿も不明な訳だと納得する。

「各府の長官達は知っていますが王妃様は陛下との婚姻を済まされ二年間眠りに就いて今日漸くお目覚めになったのですが信用のおける侍女が見つからず取敢えずそなたにやって貰いたいのです」

命の調整に二年！ 流石に亀王様だと神力の高さに今さらながらに畏敬の念が湧く

「仰せとあれば。 しかし私は武官であり王妃様に満足戴ける程のお世話が出来るか不安なのですが」

「それは大丈夫。 王妃様は気さくな方故に我儘は言わないだろうし、そなたには護衛としての任もやって欲しいのだ。 王妃様が目覚めた事を嗅ぎつけ近づこうとする不屈きな者を見張れ、特に下働きの者に注意をせよ」

多分此方が本来の役目なのだろう

王妃となればその権力のおこぼれに預かろうと蟻のように群がるのは目に見えており、その側近や侍女となれば選定が難しい

私は下級亀族の出で出身血も王都から遠い州の出で白羽の矢が立ったのだろうと納得する。

「それと王妃を見ても驚かないように……そして後宮での事は決して外部には漏らさない事。そなたの職務に対する誠実な姿勢は定評があるので期待しています」

「勿体ないお言葉有難うございます。誠心誠意王妃様にお仕える所存です」

それから直ぐに後宮に連れてかれたのには驚いたが、その日は邪魔だと亀王様に追い返されてしまい王妃様を溺愛している噂が真実だと知る。

後宮を後にしながら、あの麗しい亀王様に愛されるとはどんなに美しいお方なのだろうかと期待していると

「余り期待し過ぎて顔に出しそうなので忠告しますが王妃様のお顔は普通ですから。そなたの趣味に沿えないと思います」

「丞相様……」

私の性癖を知られていた事に蒼白になる。

「悪いとは思いますがそなたの事は全て調査済み。同性が恋愛対象

であるからこそ選びました」

「宜しいのですか」

「王妃様に手を出さなければ良いのです。異性愛者の侍女を付けた場合の方が問題、王妃付きの侍女となれば陛下との接触が避けられずその場合必ず陛下に懸想するでしょう。そして普通顔の王妃に比べ自分の方が美しいと思った侍女がどういう行動をするか想像がつくでしょう」

「はい」

亀王様に取り入ろうとするか、王妃様に嫉妬の余り危害を加えるのが容易に想像できる。確かに一度だけ御拝謁した亀王様のご尊顔は想像を絶する美しさだった。

しかしその亀王様の王妃様が普通顔？！！

丞相様が嘘を言っている訳でなく真実なのだろう

どんなお顔の方であろうと誠心誠意を持ってお仕えしようと心に誓うのだった。

翌朝早速王妃様にお目通しになった時は丞相様の言われた通りの普



通の少女だったがその黒い瞳と髪に驚いてしまう。生まれてこのかた見た事の無い珍しい色合いで神秘的に映り興味が湧く。

そして亀王様の美しさに慄いてしまう……正に究極の美、此処まで美しいと引いてしまうのは私だけだろうか？

「貴女の事を白百合の君と呼んでも良いですか！？」

小さな瞳をキラキラとさせ聞いて来る王妃様

白百合の君！

何とも美しい響き

侍女ごときに愛称を付けてくれるなど有り難き幸せなれど主従のけじめは付けなければならぬので丁重に断らせて貰うが、気分を害さないかと思ったがフーランと呼んで下さりホッとした。

成人前に高位の亀族の姫の元で行儀見習いに出されていたのだが、その姫は美しいが性格が高慢で我儘のため苦労した。それに比べ王妃様は素直で可愛らしお方で良かった。

そしてふっくらとした可愛い唇に紅をさしているとジッと見られドキマギしてしまう

どうしたのだろう

私の好みはふくよかな肢体の気の強そうな女性

王妃様とは正反対のはず

きつと子犬のような穢れの無い黒い瞳に中てられたのだ。

だがこのように可愛い女性もよいかもしれないという気持ちが湧いて来る。

そして小さな可愛い王妃様の手を引き食堂にお連れした途端に背筋がゾクリとして亀王様を見れば凄まじい殺気の籠った目で射抜かれ素早くお手を離し後ろに控える。

直ぐさま王妃様を抱き締めながら私を睨んで来る目に浮かぶのは嫉妬

恐ろしい――

睨まれている間生きた心地がしなかった。

自分でもよく気を失わなかったと感心してしまう。

そして目の前で繰り広げられる亀王様と王妃様の甘甘ぶりに茫然とするしかない

さっきまで私を睨んだ亀王様とは別人で王妃様を膝に乗せながらだらしが無く鼻の下を伸ばして、王妃様の手から食事をお取りになる亀王様。

亀王様がこんなお方だったとは……

王位に就いた時は不正や意に介さない臣下を全て粛清した王だとされ、近年では亀の姿をとり政務を放棄していたが、何処で知るのが謀反を企てようとする亀族を容赦なく自らの手で討ち取る絶対君主

として恐れられているとはとても思えない

丞相様はまるで意に介して無く平然としたお顔

確かに此処での事を外部には漏らせないと納得する。

しかしある意味王妃様も凄い

亀王様を目の前にしながら萎縮されず、亀王を非難するような言葉を平然と仰るので亀王様の恠気に触らぬかと気が気では無い

これまでこのような口をきくなど王妃様しかないだろう

普通の者なら確実に打ち首だ

それだけ王妃様は愛されているのだと思い知る。

もし私が王妃に手を出せば瞬時で首が飛ぶのが容易に想像できる。

もしかして王妃様を膝に乗せいちゃつくのは私への布石なのだろうか

手を出すなと言う

そして仲睦まじいお二人を見て私もこんな可愛い恋人が欲しいと思うのだった。



## 衝撃的事実と私

食べる事がこんなに楽しいとは知らなかった。

ミユキが箸で料理を次々と余の口に運び食べさせてくれる物は全て美味しい！

今までは味覚と言うものが麻痺していた余には食事は苦痛で面倒くさい行為でしかなかったが丞相が食べると煩いので仕方なくとっていたがどうだろう

食べる物全てに味がある。

余にとっては驚くべき事だ！！

しかも余の膝でミユキが美味しそうに次々とたいらげる様子は見ていても楽しい

しかしこの細い体の何処に大量の料理が消えて行くのだろうか？？

全てを綺麗に食べ終わると

「ごちそうさまでした」

ミユキが手を合わせ奇妙な挨拶をする。

「何だそれは？」

「私がいた国の習慣で食べる時は『いただきます』食べ終わったら『ごちそうさま』て食材や作ってくれた人に対しての感謝の気持ちを言うんだけど、此処では無いのそういう習慣？」

「聞いた事が無い、どうだ丞相」

「玄武国ではありませんね」

ミユキの世界は面白い、ミユキの部屋にあったテレビは実に不思議でアレがあれば一日があつという間に過ぎてしまうだろう。

「今までして来た習慣だから気にしないでね」

「ミユキがするなら余もしよう。　こうするのか？」

「一緒にしよう」

ミユキがしたように掌を合わせるとミユキも一緒に習い

「「ごちそうさま」」

この気持ちは何だろう、心が温かいもので満たされる不思議な感覚

「どうしたのチョンマゲ」

何時の間にか涙が零れていたようでミュキが優しく拭いてくれる。

「ミュキと一緒に居てくれて嬉しいのだ」

そう言った途端ミュキが真っ赤になる。

「チョンマゲはどうしてそう恥ずかしい事をサラリと言っちゃうのよ  
／／／」

「嫌か」

顔を横に振りながらも顔は赤いままで何とも言えず可愛い

「嬉しいけど、こういう事には慣れて無いのよ私。生まれて二十三年間男と付き合った事の無いから恋愛に対する免疫がないの」

「免疫？」

「抵抗力が無いって事。だからその内慣れると思うからドンドン言  
ってね」

「ふっふっふ…それはそれで勿体ない。真っ赤になるミュキも可愛い  
いからなく」

／／／ チョンマゲが笑った……」

笑うなど普通のの事なのにミュキが目を見張る。

「余とて笑う」

「そうかも知れないけど、私は初めて見た！　すっごく嬉しい」

「余が笑うと嬉しいのか？」

「好きな人が笑ってくれると幸せな気分になるわ」

「ミュキ／＼／」

今度は余の方が真っ赤になる。確かにこれは恥ずかしい：ミュキは余に色々な感情を教えてくれ退屈だった世界が崩れ、新しい世界が開けて行くような気がする。

なんて愛しいんだろう

ミュキに口付しようと顔を近づけるが、違う感触が唇に当たる。

それはミュキの手が何故か余の口を押えていたのだ

「キスは禁止！　チョンマゲは直ぐエッチな事に傾れ込むから駄目」

「そっそんな／＼　口付だけだと約束する」

「駄目、ルインさん達がいるでしょ！」

「それならとっくに居ないぞ」

丞相達は食事が終わると食器を片付けてサッサと部屋を出て行ったのだがミュキは気が付かなかったようだ



「えっ！？ 何時の間に？？ しかもテーブルも片付いている！！」

「それでは心おきなく致そう！」

「もー 分かったけど私からね」

思ってもいない提案に跳び付いてしまう。

「本当か！」

「目を閉じて」

ミュキに言われるがままに目を閉じるとドキドキして来る。

そして柔らかなミュキのぷにゅとした唇が数秒押し付けられ続きを期待していると何故か離れて行き、しかも膝から温もりまで消えてしまった。

慌てて目を開くとミュキは隣の席に座りお茶を飲んでいた。

「ずるいー 余はもつとして欲しい」

「私のレベルではこれが精一杯なの。続きは経験を積んでレベルを上げてからね」

レベル???

そう言いニツコリ微笑まれると何も言えなくなってしまう。

それから二人で仲良くお茶を楽しむのだった。

美味しい緑茶を飲みながら傍らにいる私の麗しい夫を見る。

本当に直視が辛い程綺麗な男だ

しかも神様で王様と言うとんでもないオプションも付いてるし何て恵まれた人間だと思っただけだ少し違うようだ

さっきの涙を見てチョンマゲの言い知れぬ孤独を感じてしまう

私と少し離れていただけで寂しいと言うチョンマゲ

それはただの甘い言葉で言ったんだと思っただけど本当に寂しかったんだ

私には計り知れない長い年月を生きていたチョンマゲがどんな人生を送って来たのかは分からないけど王様と言う立場は案外孤独で気を許せるのはルインさんだけなのかもしれない

否……考えて見れば十八人の側室達とそれなり楽しんでいたのを忘

れてはいけない

思わず恨みがましくチョンマゲを睨んでしまう

自分がこんなに拘る女だとは知らなかった。

「どうしたのだミユキ!？」

少しキョドるチョンマゲを虐めたくなる。

「チョンマゲはキスが上手だから十八人の側室達と一杯したのかな  
〜と考えてたの」

すると心外そうにする。

「口付： キスはミユキとするのが初めてで側室達とはしなかった  
ぞ。信じてくれ」

始めって!!!!

十八人も女性がいて一度も経験していない?????

その割には慣れていて上手すぎる。

有り得るだろうか： いや無いと普通は断言する。

でもチョンマゲは嘘を言わないような気もするし

「まさか童貞だったなんて言わないよね」

「それは違うが、余から抱いた女はミユキだけ…」

体は許してもキスはさせない??　まるで風俗のお姉さんかと言いたくなる。

徐々に生々しい話になって来て此処で止めるべきかと考えながらも言ってしまう。

「だったら他の女の人達はこういう事よ」

なんだか浮気を問い詰める妻——その通りなんだけど新婚ほやほやの時にする話題では無かったと後悔し始めるが止められない

過去の事なのに

「余が昼寝をしていると何時の間にか上に乗って腰を振っておるの  
で致しかた無いであろう。不可抗力だ」

「／／／　側室達が!??」

凄い積極的な女性達!!　私には出来ない業だわ

「そうだ余は嫌で逃げていたが丞相が子を作る為に隙を見ては送り込んで来るので辟易してとうとう亀の姿で過ごす事になったのだ」

ルインさん　なんかやりそうな気がする。

それより亀の姿とは何の話し???

「亀!??」

「ミユキはまだ聞いてないのか、我等亀族の本来の姿は亀でこの人型の方が仮初なのだ」

「亀の神様だとは聞いていたけど…本当に亀になれるの」

亀の神様と言うから今一理解していなかったけど本当に亀だったなんて

軽くショックだけどチョンマゲはチョンマゲだ

「ミユキも余の亀の姿は見ているぞ」

「えっ？ 知らないよ？」

この世界で亀を見た記憶なんて無い、私の世界の亀と違う？

「余の上にミユキが落ちて来たのだ。アレが余の本来の姿」

落ちた場所と言えはあの岩山しか思い浮かばないんだけど…岩山に突き出た崖は嫌に弾力のある変な地面だった

アレがチョンマゲ！？

「もっもしかして私の落ちたのはチョンマゲの頭の上？」

「そうだ。余が寝ていると空から少女が降って来て驚き、見れば瀕死の怪我を負っていたから神力で治したのだ。その少女がミユキだった」

「そうだったの、ありがとうチョンマゲ」

不思議だったのよねー 確かに落ちた瞬間骨が砕け凄まじい痛みがあった筈なのに目覚めれば無傷で錯覚だと思っていた。

つまり私が生きているのはチョンマゲのお陰！ 流石神様

「だけど何故直ぐ人型に成らなかったの？」

「ミュキがあまりに可愛くって観察していた」

觀察？

つまり見ていた？

二日近くの私の行動を！？

すると走馬灯のように次々と崖の上でして来た事を思い出すのだった

私はチョンマゲの頭の上であろう事が排出行為をしていた。大も小もそれを観察していたの――

有り得ない！！！！！！

[illegible]

バツキ！！

私は立ち上がり愛する夫の顔に渾身の一発をお見舞いする。

茫然として殴られた頬に手を当て茫然とするチョンマゲ

「うえーん 酷いチョンマゲの馬鹿！ あんな恥ずかしい所を見るなんて最低！ 痴漢行為は犯罪よ犯罪！ ひえゝゝゝん シクシク……」

それにあの岩山に一人きりで過ごすのがどんなに不安だったか

それを見てたなんて酷い！

しかもあの岩山から降りようと一生懸命だったのを見ていて、しかもそこから落ちるまで助けてくれなかったのだ。

確かに命拾いはしたけど

そして私はもう一つとんでもない物を忘れていたのに気付いてしまった。

！！

非常持ち出し袋

袋は別に問題無いが、問題は中身！！

私がいたした排出物があの中に嚴重に保管されていると言う事実

ビニール袋に包まれて二年間朽ちる事無くそこに存在している事が容易に想像でき気が遠くなる。

もしアレが誰かに発見されては立ち直れない

ほっとけば誰も分からない？

無理！！！！！！！

アレが存在するかと思うと夜も寝れ無くなってしまふ

気付けばチョンマゲは私の腰に縫りつき涙を溜め謝っている。

「ミユキ〜 余が悪かったから許してくれ…… ミユキが望む事なら何でもする。お願いだ……」

望む事……

そんなの決まっている！

「チョンマゲは何でもしてくれるのね」

私は恨めしげに睨みながら聞く

「何でもする！」

「じゃあ、私が落ちた場所に連れて行って頂戴！」

「そんな事で良いのか？？」

「私には重要な。早く連れてって」

「分かった。直ぐに連れて行こう」



チヨンマゲはこれ以上私の機嫌を損ねない為にも素早く私を抱き上げてそのまま窓から外に出ると空を飛ぶ

これ位で今の私は驚かない

何しろチヨンマゲは神様なんだかこれ位の事はおり込み済みなのだ

それより私の頭には非常持ち出し袋の事しか頭に無かったのだった。

チヨンマゲが直ぐに人型になり私を王宮に連れて行ってくれば野  
○なんかしなくて済んだのだ

又してもムカついて来てチヨンマゲに抱かれながら飛んでいる最中に大きな声で叫んでしまう。

「チヨンマゲのバカーーーーー！  
ーーーーー！」

私の叫びは眼下に広がる街に吸い込まれて行くのだった。

## 衝撃的事実と私（後書き）

アルファポリス第4回ファンタジー大賞で目標40位以内に入りました！！

途中経過でまた下がるかもしれませんが私的には目標達成！ 読んで下さいました皆様及び投票してくれた皆様有難うございました。これからも更新頑張ります。

## 非常持ち出し袋の封印と私

野○ ○糞 野○ ○糞 野○ ○糞

私にとって最大の汚点

振り返りたく無い過去ベスト1と言ってもいい

振り返らない為にもあの非常持ち出し袋を消去しないと私の心には  
平安は戻らない

「ミュキ…… 此処が余が居た場所だ…」

「此処？」

チョンマゲが上空で留まり恐る恐る私に声を掛けて来るので下を見  
下ろせば森の中に大きくくり抜かれたように草原が広がっておりそ  
の形は正に亀の形

「……チョンマゲってこんなに大きい亀なの!!」

確かにあの岩山がチョンマゲだと納得する。

まさか私の夫がカメラもどきだったとは……ファンタジーを侮って  
いた

どうしてこんな美形がガメラもどき

でもガメラもどきが夫と言うのも私の前世でも来世でもこれっきりだろう

「そうだ……、はっ！　もしかしてミユキは余が亀だと知って怒っておるのか？」

「違うー！ー！ー！」

チョンマゲは何故私が起こっているのか分かっていなかったらしい

「違うのか??」

「私が怒っているのはチョンマゲが私のトイレを覗いていた事と崖から落ちるまで放置してたからよ！」

「トイレ??　ああゝ憚り（はばか）の……　あっ！　／／／

余はチラリと見ただけで……そっそんなにじっくりは見ておらんぞ！！　ちよつとだけ……ほんの一瞬だけだ」

チョンマゲは真っ赤になりなが動揺を隠せないように目が泳いでいる。

「本当に……」

私は思いつきり睨む。

「うう……　すまないミユキ……　ミユキがあまりに可愛いのでつ

い… しかも落ちる前にあのような姿を見て興奮のあまり意識が飛んで態と見過ごした訳では無いんだ!」

可愛い??

アレをしている姿のどこに興奮!!??

ガメラもどきの事実より引いてしまう

変態だ!

本物の変態だ!!

私に一目惚れした時点でマニアックなのかも知れないと思っていたけど…これ程なんて

怒りを通り越し呆れてしまった。

ある意味変態の方が平凡な私は引け目を感じない?

超美形で王様だがこれだけ変態だと差し引きすれば少しは私が王妃でも許されるような気がする。

変態行為は許せないが…

仕方ない……この際目を瞑ろう

「はあ…… もういいよ… だけど今度トイレを覗いたらルイさんのお屋敷に帰らせて貰います!」

チョンマゲは必死に頷く

「分かった絶対視かない！ ……だが何故丞相の屋敷なのだ。まさかミュキは丞相に気があるのか！？ そんな事絶対許さん！！」

「そんな訳ないでしょ」

ビヨ~~~~ン

私はチョンマゲの頬を抓って引っ張って伸ばしてやると結構伸びて面白い

美しい顔もこうなると形無し

「みい……ひゅ……ふい……」

「私は全部許した訳じゃなのよ。 取敢えず下に降ろして」

「ふぁ…かつ…た」

手を離してあげると元通りの美しい顔で頬が赤くもなっていない。そう言えばさっき思いつき殴った痕すらないのに今さらながら気が付いてしまった。

なんて丈夫な顔！

まさか形状記憶合金の如く補正力があるんだろうか

降りた場所は草が生い茂る草原でしかも1mの背丈があるのでとても非常持ち出し袋を探し出せそうも無い。

流石に二年の年月は長すぎたようで、人に拾われていない事を願うしかない私

「ここで何をするのだ？」

「私が落ちた時に持っていた銀色の袋を捜したいの」

「銀色の袋とは色々な珍しい道具を入れていた袋か？」

「色々： 本当に全部見てたのね：」

それを知らずに間抜けな私は色々していたんだ：恨めしそうに見詰めてやる。

「いやっそのく ミユキの為に余がその袋を必ず見付けよう！」

誤魔化そうとするチョンマゲ

私にすれば最近の事だけど実質は二年以上前の事でチョンマゲには過去の事

此処は広い心を持とう

「見付けてくれたら覗きの件は許してあげる」

「真か！」

「でもこの状況で捜せそう」

目の前は草が生い茂りその周囲は高い木々がそびえ立つ深い森

「余に出来ぬ事は無い。ミュキの髪を一本くれぬか」

「いいよ」

私は髪を一本引き抜いてチョンマゲに渡すとそれを手にした瞬間に髪が光ると共に一匹の黒い蝶になりヒラヒラと舞っていた。

「この蝶がミュキの気を含むものを探し出してくれる」

夫が神様と言うのは便利、ド○えもん以上に使えたりしちゃう？

「でも二年も経っているけど大丈夫かな」

「どんな微弱な気でも引かれ合うはずだが持ち物では確かに年月が経ち過ぎて消えてしまっている可能性がある。せめて髪や汗か血でも染みついておれば確実なのだが」

汗でいいなら排泄物でもOKだろう

そんな物があるなんて言えないから黙っていよう。

「兎に角やってみよう！ 駄目なら別の手を考えれば良いんだから」

「そうだな、そうしよう」

チョンマゲが蝶に息を吹きかけるとヒラヒラと飛びながらゆっくりとある方向に向かって行くが草を掻き分けての移動は面倒なのでチョンマゲに抱っこして貰いながら蝶の後を付いて行くと森の方に入



って行き1本の木に辿り着くと、その木の上に向かって飛んで行く。そして木の上の枝の先の途中に銀色の袋が引っ掛かっており黒い蝶はそこに停まるとはらりと一本の髪に戻りはらりと下に落ちて行つた。

それは間違い無く私の非常持ち出し袋で二年の雨風にも褪せる事無く枝の途中で銀色に輝いており、どうやら落ちた時に木の枝に引っ掛けてしまいそのまま枝が成長してしまった感じた

「ありがとうチョンマゲ！ これで枕を高くして寝れるわ」

「これを取ればよいのか？」

チョンマゲが袋に手を掛けようとするので慌てて止める。

「触っちゃ駄目！ 私が取るから！」

幾ら夫でも私の二年物の排泄物を触らすわけにはいかないけど自らの手に取るのも憚られる。だけどこれを地中深くに埋めなくちゃ悪夢を見続けそう

勇気を振り絞り非常持ち出し袋を取ろうとするけど肩紐が枝を通っているので切らないと外せない、だけど私の力では引き千切るのは無理そう

「この紐切れない？」

「容易い」

チョンマゲが指で切るように空を切ると紐が簡単に切れて私の手に袋が収まるが成るべく体から離して持つ

「その袋をどうするのだ？」

「これは呪われているから地中深く埋めるの」

「呪われている??? その袋が？」

不思議そうに言うチョンマゲ

「速く埋めないと私が呪われるの！ 下に降りて穴を掘って」

「分かった」

チョンマゲは急いで木の根元まで降りると手を地面にかざし光ったと思うと直径50?の円筒状の深い穴が開いたのだった。

本当に便利

私はすかさず袋を穴に落とすと落下音がヒューと聞こえるだけで着地音が聞こえない

どれだけ深いのかと思いつつもこれだけ深ければ安心！

絶対に掘出せない。

「穴を塞げる」

「勿論」

チョンマゲが又しても手をかざすとあっという間に穴が塞がり元の土の地面が蘇り何かが埋まっているなどと誰も思わない

「完璧だわ！ チョンマゲの力って凄い！」

「ミユキの頼みならば何でも叶えるようぞ」

そう言って私の手を取ろうとするが、さっきまであの袋を持っていた手を触られるのは嫌なので、急いで手を後ろに回す。

「私に手は穢れているから何処かで清めたいの」

「手を洗えば良いのか？」

「うん水で洗えばそれでいい」

問題の物は嚴重にビニールで包まれ持ち出し袋に入っていたとはいえ、気分的に気持ち悪い

チョンマゲは直ぐに私の願いを叶えるべく上空に飛ぶと下を見まわすと右にはチョンマゲが居た空き地と左には大きな街が見え最初に落ちた時に見ていた風景だ

本当にあの岩山がチョンマゲだと再確認

そして王宮に戻るのかと思えば違う方向に跳んで行く

「何処に行くの」

「余とミユキの為に建てた離宮があるからそこに行こう」

そう言って連れられてきた場所は直ぐ近くの大きな湖に建てられた  
広大なお屋敷で教科書で見た平等院鳳凰堂のイメージに重なる。

これを私達の為に建てた!?

一体幾らの国家予算を使ったの!!

信じられない、よく高級官僚や国会議員が税金で建てられた都内の  
高級マンションをただ同然の賃貸料で住んでいるのを知った時は納  
税者の一人として世間の不条理さに憤ったのを覚えている。

それなのに、何時の間にか私は納税者の血税を湯水のように使う人  
間になってしまった。

後宮でさえ立派な部屋で私には居心地が悪いのに

しかもチョンマゲはハンコを押すだけの仕事でこんな無駄遣いなん  
てしては国民はどう思っているのか心配

茫然と離宮を見る私

「どうしたのだ? もう少し大きい方が良かったか」

そんな私にチョンマゲは有り得ない事を言う!!

「チョンマゲ! 国民の皆さんに謝らないさい」

「はあ… 何故だ?」

「国民の皆さんが納めた税金を無駄遣いしちゃ駄目でしょ。二人のならこんな広いお屋敷は無駄なんだから小さいので良いの！ 日本なんてこんな土地や屋敷を持つだけで毎年どれだけの税金を払うと思ってるの。私の小さな実家なんかまだ十年のローンが残っている上に固定資産税を払わされ、チロルチョコ一個にも消費税が掛かってどうなのよ！ 小さい子供達のお小遣いから税金を盗っておきながら保養施設や官舎、人の来ない公共施設なんて無駄な施設ばかり建てておいて更に莫大な維持費を掛けるなんてあり得ないの！ 分かるチョンマゲ」

「なんとなく、ミユキが喜んでくれると思ったのだが……」

しょんぼりと項垂れるチョンマゲを見てハツとする。

「ゴメン… チョッと興奮して言い過ぎたわ。 あんまり立派すぎてどう反応して良いのか分からなかったの…… ありがとうチョンマゲ」

チョンマゲと私の生活レベルはあまりに違いすぎる所為で考えがすれ違ってしまう。

私はしがない一般庶民でかたや王様

その上私の世界の常識とこの世界の常識がどう違っているのかも分からない

どうしようも無いギャップだわ…

だけど直ぐに埋める必要は無いのだからゆっくり溝を埋めて行くし

かない、私はこの世界をあまりに知ら無すぎた。

「これから余もミュキに相談してから建てよう」

まだ建てるのと驚きつつ牽制しておく。

「この離宮だけで十分嬉しい！ さあ中に入って手を洗いましょ」

この話題は此処で止めておかないと折角の甘い時間が台無しになりそう、新婚なんだから仲良くしたいし徐々に話し合っていけばいいだろう

大きな門を潜るが人の気配が全くせず閑散としていた。

「此処って人が居るの？」

「確か管理する者を数人置いているはずだが、構わず入って手を洗おう」

そう言いながら玄関に入っていくが玄関だけで私の部屋の数倍は広く駄々広い廊下が黒光りしながら続いており唾然としてしまう。

やっぱり付いて行けないよ〜

絶対これ以上は建てさせないでおこうと心に決めるのだった。



## 月の宴と舞と私（前書き）

今回のお話は長めです。何故なら昨夜の満月を見て突発的に思いついたものを加えたら長くなりすぎました。あんまりにも綺麗な月で久しぶりに写真を撮ったんですけど三脚を使わなかったなので今一で残念な写真ばかりでした。



## 月の宴と舞と私

広い玄関には白い大理石が敷かれており上がり框には巨大な黒い天然石を綺麗にスライスしたように置いてあり、そこから廊下に入ろうとした時に人が中から脱兎の如く飛び出して来て跪く

「へっ陛下、ようこそお出で下さいました。私は此方の管理を任されておりますマツカーサングウィと申します」

「余の伴侶が手を洗いたがっている用意いたせ」

「はっはー」

その男は顔を下げたまま後ろに下がり再び脱兎の如く何処かに消えて行き、何とも慌ただしい

顔は良く見えないがまだ年若いようで、茶色の髪をした恐らく美形  
そう言えば目を覚まして初めて見るルインさん以外の男性

断然興味が湧く

何しろこの世界に来てから外部とは遮断された生活と言っているの

で接触できる人間が少なすぎるのだ

「ミユキ、手を洗ったらこの離宮を案内いたそう」

「本当！ 嬉しい」

わぁーい　なんだか漸くデート気分

抱き付きたいけど手を洗ってからじゃないとイチャ付けない。

そこへさっきの男とおばさんの二人やって来て私達に水桶を差し出す  
すがその手は震えていた。

どうやら突然王様が来たので驚いて緊張しているらしい

二人は決して顔を上げる事無くその姿勢でいるがおばさんの方が辛  
そうなので急いで水桶に手を入れて洗わせて貰い、洗い終わると水  
を置いてすかさず手拭を差し出すので受け取り手を拭いてから返す

「ありがとう」

「ヒィ…ッ　滅相ありませんー」

おばさんはひきつけでも起こしたかのように息をのみ身を縮こまら  
されるので、私は途轍もなく悪い事をしている様な気になる

なんなのこの反応

「申し訳ありません。人出が足りずこのような者をお出しご容赦く  
ださい」

男の人はおぼさんの態度が拙いと感じすかさず詫びる。

「いいのよ、突然来た私達が悪いんだから。それよりチョンマゲ離宮を早く見せて」

この場に居るのが気まずいのですかさずチョンマゲの腕を取り促す。

「ああ… そうだ、王宮の丞相に連絡し至急此方に昼食の用意を致すよう伝えよ。それと今夜は此処に泊るのでそのように取り計らへ」

「御意に」

男は床に更に額を擦るようにして私達が立ち去るまで微動だにしないのだった。

「なんかチョンマゲが凄い人に見えて来た。初めて見たよあんな土下座姿、テレビで水戸黄門に平伏する悪代官達しか見た事が無いわ…」

私まで恐れられていた。

「余は王だからな。ミユキもこの国の王妃になったのだから全ての

者が平伏すぞ」

「うっ…… なんか嫌かも」

そんな立派な人間では無いから人に跪かれるなんて落ち着かない

「諦めよ、王妃となってしまうたからには慣れるしかない」

「そうだね…」

慣れてしまう自分なんて嫌かも

「余の伴侶になった事を後悔するか？」

心配そうに聞いて来る。

「後悔するくらいなら結婚しないよ。私はチョンマゲと一緒に居るって決めたんだから後悔するより問題を解決すべく考えるから大丈夫。チョンマゲも助けてくれるでしょ」

「勿論だミユキ」

ガバッ！      ムギユ~~~~

感極まったように私に抱き締めて来るがハッキリいて苦しい

その内背骨がへし折れるのではないかと心配

「ぐるるしいー」

「済まぬミュキ！」

急いで力を弛めると見詰め合ってしまう恰好になり、そうなるとお約束のようにチョンマゲがキスをして来る。

最初は触れるだけの軽い物が徐々に舌が割入れられ深いものに変わっていく

隙あらば迫って来るチョンマゲ

普通の恋人や夫婦の日常もこんなだろうか???

長いキスが終わり漸く解放されるがその顔は興奮しており目が血走っている。

「ミュキ〜 今から駄目か？」

今から？ 今から何をしたいと言うのなんてカマトトぶる心算は無い

「無理！」

キスでボーッとしているが直ぐさま拒否するとガツカリと項垂れる

男の人って皆こうなのだろうか??

草食男子の多い現代日本ではチョンマゲは絶対肉食男子だ

「それでは今夜は絶対だぞ」

必死に約束を取り付ける姿は鬼気せまっっていて思わず頷く

「うん……」

恐い！ やる気満々が伝わって来るので引いてしまう

大丈夫だろうか私

自分の身が心配になって来るのだったが途端に嬉しそうにするチョンマゲを見て今更嫌だとは言えないだろう

それから一時間ばかりで離宮を案内されるがその大きさと豪華さに驚くばかり、何でこんなに部屋が必要なのってくらいに沢山あるがお風呂は気にいった。湖を一望できる半屋外の露天風呂があり何処かの高級旅館のよう

さっきチョンマゲは此処に泊ると言っていたので今夜はあの露天風呂に入るのが楽しみになる。

一通り見て回ると何時の間にか来たフーランが現れる。

「陛下、王妃様、あちらにお茶の用意が出来ましたのでどうかお寛ぎ下さい」

「フーラン、来てくれたの」

「此方にお泊りになるとお聞きしましたので王妃様のお世話をすべく遅ばせながら参りました」

「そうなの。ありがとう」

確かに先の男の人は頼りなさそうだしおばさんもオドオドして使えなさそうで心配だった。

「丞相様も後ほどいらっしゃるそうです」

「!! 折角ミュキと二人っきりになれると思ったのに」

忌々しそうに呟くチョンマゲだけど私は少しホッとする。

だってスキンシップの激しすぎるから慣れない私は困るばかり

案内された部屋で椅子に座ろうとするとチョンマゲが不満そうに自分の膝を指し示す。

「ミュキの場所はこっちだ」

私は無視して向かいの席に座ると悲しそうに私を見詰める。

此処で許せば膝抱っこが常習化しそうで恐ろしい

朝の食事の時に許したのが間違いで、最初が肝心なのを忘れてしまっていたのが痛い。

丸テーブルにはフーランが用意した美味しそうな綺麗な色々な和菓子が十個ほど黒い漆器盆に盛られていて目でも楽しめた。

「美味しそう、どれを食べてもいいの?」

「好きなのを言って頂ければお取りします」

こういうのはマナーがあるのかな？？

王妃となると行儀作法があるのだろうけど今日は目を瞑って貰おう

「自分でするわ。チョンマゲはどれがいい？」

「余はどれでもよい。ミユキが好きなのをとりなさい」

私が目移りしているのを楽しそうに眺めている。

「じゃあチョンマゲにはこの一番綺麗なやつね」

私は蝶を模った黄色の菓子箸で取り小皿に移して渡し、自分にはピンクの可愛い花を摸した菓子を取る

フーランは香りの良いお茶を淹れてくれ、二人でお茶を楽しみまるでデート

夢にも見た憧れのデート

向こうの世界では誰も誘ってくれなかったので絶対に味わえなかった…幸せだった。

「夜はルインさん達を呼んで食事をしようよ」

そう提案するとムツとする夫

「余は二人きりがよいのだが……そう言えば今夜は満月だな」

「満月だと何かあるの」



満月なら皆で月見酒をしたい

「満月の夜は月から月華人が降りて来て舞いを踊るのだ」

月華人は月に住む月の神族だが精霊に近く肉体が希薄で幽霊のような存在

満月の夜は月光に乗り地上に降りて人々に舞いを見せるのが好きな神様達で気に入った場所を見つけるとそこで舞いを披露してくれるらしい

「どうやったら見れるの」

「それなりの舞台を用意するのだが気紛れな者達故に気に入った舞台で無いと踊らない」

「そうなんだ」

「見たいのか」

「見たい！」

「ならば舞台を造らせよう…… 侍女よ湖の上に舞台を設えさせよ」

ええっ 湖の上に舞台!!

「はい、陛下」

フーランは静かに部屋を辞して行き、少し不安になる。

私が望めば何でも聞いてくれ、叶えようとしてくれるチョンマゲ

湖に舞台を造るなんて結構大変そうだししかも夜までと短時間

出来るのだろうか？

「別に無理しなくてもいいんだよ。無理な事は駄目だって言って欲しい」

「無理などしていない。ミユキの望みなどささやかな事ばかりでもっと我儘を言って欲しいくらいだ」

チョンマゲは嬉しそうに言う

成程……

どうやらチョンマゲは私の望む事は全て叶えてくれるような勢いで、自分を律しないと途轍もなく面倒になって行く気配

言動に気お付けよう

それから時間は瞬く間に過ぎて行き、その夜は離宮ではルインさんと牡丹の君を呼んで小さな宴を開く事になった。

わーい お酒！

夕方前に露天風呂を一人堪能したかったけど私の貧相な体を晒し髪を洗って貰う。どうせなら一緒に入った方が恥ずかしくないのだけど頑なに断られてしまったが何時かきつと裸の付き合いをしてやろうと燃えるのだった。

そう言えば牡丹の君とも何時か入りたい

きつと色っぽいだろうなと期待が膨らむ！

その為にも少し太って胸を大きくしたい所だが

揉んで貰うと大きくなるって本当かな？

／／／

揉む程も無いんだけど……チョンマゲは貧乳が好きだからこのままの方が良いのかな？

チョンマゲが私と入ると騒いでたがルインさんによって黙らされ自分の支度にとりかかる為に何処かに行ってしまった。

まさか……あの時のようなキンキラな痛い恰好をして来るんじゃないかと心配をよそに、身支度を終えて宴の場にフーランに連れて行かれる。

そこは湖に突き出たようにバルコニーのような場所に赤い毛せんが敷かれてテーブルと椅子が湖面に向かい一列に設置されており灯りは松明が焚かれ、大きな月が煌々と輝いているのでロマンチックこの上も無い

向こうの世界ではこの贅沢は味わえない。

そして既にルインさんと牡丹の君が待っていた。

「ミユキ様、今夜はお呼び頂き有難うございます」

「牡丹の君いらっしやい。今夜もとても綺麗です！その若草色の内掛け凄く似合ってますよ」

松明の炎が牡丹の君の赤い髪に生え燃えるように情熱的見えるが涼やかな美しい青い目がそれを見せしていた。

「まあ： ミユキ様もとても純白のお衣装が黒い髪に映えてとても可愛らしいですよ」

「／／／ ありがとうございます」

絶世の美女に褒められても卑屈になりそうだが牡丹の君の言葉は不思議と素直に受け入れる事が出来る。

「本当に今宵のミユキ様はお綺麗ですよ」

そして取って付けくわえたようにルインさんが心にも無い言葉を言いながら牡丹の君を引き寄せ私から引き離す。

何故か警戒されている。

「ルインさんは今夜は男装なんですネ。とても素敵です」

とニツコリ微笑んであげると嫌そうに顔をしかめる。

「私は男なのでこれが普通です」

「そうでしたネ。今夜は以前のようにお酒で乾杯もして楽しみましよう！」

「嬉しい、ミユキ様と乾杯出来るのを楽しみにしておりましたの」

「そう言えばチョンマゲはまだ来てないんですか」

「陛下なら既にあちらでミユキ様が来るのを待ってましたよ」

ルインさんが指し示す方を見ると湖面に四つの灯りが付いたと思うと四角い舞台が浮かびあがりそこには金の髪を煌めかして白い衣装を着たチョンマゲが立っていた

「もしかしてチョンマゲが踊るの？」

「はい、月華人を呼び込むためにご自身が踊るらしいですよ。舞の名手の元に月華人は好んで降りますから。さあ座って陛下の舞を見ましょう」

ルインさんに言われそのまま席に就くとそれを合図かのように笛の音が奏でられ湖に響き渡るとチョンマゲが踊りだすのだが正に幻想的

仄かな灯りと月光に照らし出された金の髪が体を巻き付くようにうねり何とも言えない美しさ

「凄い： チョンマゲって本当に綺麗」

こんな壮絶に美しい男が私の夫なんて

自分との差があり過ぎて挫けそうだけど踏ん張る。

こんな平凡な私を愛してくれているのは間違いない。自分の心と周

囲の奇異な目に負けない強い心を持てばいいのよ！

「陛下が舞うなど私も初めて見ます。これもミユキ様のお陰…あの怠け者の陛下が人の為に何かするなどあり得ませんでした」

「怠け者？」

確かにハンコしか押さずにぐうたらししているからな

「この二百年の間に政務を行ったのはほんのわずかで人間に戻るのは年に数日、その間亀の姿で王都の側で寝てばかりで無気力な代名詞のような人間だったのです。そのお陰で私はどれだけ苦労したか……妻と過ごす時間も無く政務に追い立てられ……」

なんだか段々愚痴めいて来てかなり鬱憤が溜まっているのが伺える  
知らなかった、チョンマゲそんなに長く亀でいたなんて…どうりで  
あんな深い森の中に綺麗に亀の形の空き地が出来るはず。

美しく舞うチョンマゲ

二百年も亀の姿で何を考えていたんだろう

「本当に陛下はミユキ様のお陰でお幸せそう」

牡丹の君が舞いをうっとり眺めながら言う

「そうかな／＼／＼」

「私が初めて陛下にお会いした時はとても冷たい目で射竦められて

恐ろしさのあまり私は涙ぐんでしまいましたのよ」

「チョンマゲが!？」

こんな美人を睨むなんて許せないが、私にはそんな目を向けた事は一度も無くどちらかと言うと情けなく涙ぐんだ目やデレデレした目ばかり…。それか欲望に血走った目

「あんな優しい目をした陛下はミュキ様のお陰ですわ」

夫婦で私を持ち上げて何かあるの

恥ずかしいです…

「ミュキ様はそのままです十分陛下を支えていますのです。何時までもお変わりなく陛下の側に居て下さい」

伶俐な顔を微笑ませそう言う言葉の裏に何もせずに居ろと言っているように感じるのは私だけ？

ルインさんは敵に回すと絶対に厄介な存在、前回も問答無用でチョンマゲに差し出したのは私には数日前の事——あの時は牡丹の君にちよっかいを掛け過ぎた所為だった。

ある意味ルインさんは私に弱味を曝け出した事になる。

今の私は王妃だ

その内に牡丹の君にベタベタしてあの時の復讐をしてやろうと考えていると

「ミユキ様！ 月華人達が降りてきましたよ！」

「流石陛下、月華人をも魅了する」

見れば月から何かが降りて来る。

虹色に光るふわりとした影が五つ見て取れ、チョンマゲの居る舞台に舞い降りるとそれが人の形を成しているが半分透けているが殆ど裸に近い美しい肢体を晒し女性は羽衣を纏い男は剣のような物を持つており、チョンマゲの上空で舞始める。

するとチョンマゲは礼をして舞台を明け渡すと私達の元に飛んて来た。

「ミユキゝ 余の踊りはどうであった！？」

「凄く素敵だったよ！ ビデオカメラに取って永久保存したいくらい！」

「ビデオカメラ？ なんだそれは？」

「私の世界にある道具で映像をそのまま記憶してテレビで何度でも同じ映像を見る事が出来るの」

「ビデオカメラ…… 余も欲しい」

ジーと私を見ながら何を考えているのか予想できるので話を逸らす。

「ほら月華人の舞を見よう。 チョンマゲの舞も綺麗だけど月華人



の舞も凄い」

月華人の舞は光のイリュージョンで東京ディズニー○ンドのエレクトリカルパレードなんて目では無い

光の芸術

つい食い入るように夢中になり見ているとチョンマゲが私の体を引き寄せて膝の上に乗せる。

油断してしまった。

「ミユキー 余も見えてくれないと寂しい…… あの者達より余の方が美しいだろ」

確かに目に痛い程綺麗だけど発言も痛い

「はいはいチョンマゲは綺麗だから降ろして」

「嫌だ、このまま一緒に見よう」

まるで子供のようでルインさん達は何故か微笑ましいそうに見えていて助けてくれそうも無い

それからお酒や料理を楽しみ四人で乾杯をしたけどチョンマゲはお茶  
どうやら一滴も飲めないらしい

月も傾く頃漸く宴を閉じたけど月華人達はまだ踊っている。

「ほっておいてもいいの？」

「月華人達は月が沈むまで踊り続けるから付き合っていては夜が開けてしまう。それより二人っきりの甘い夜を過ごす約束」

妖しい目で私を見るので心臓がバクバクし始め顔に血が昇る。

「分かってるわよ／＼／」

そう言う私を抱え瞑道を通って一瞬で寝室に傾れ込む。

相変わらず素早い

二人とも白い衣装でなんだか婚礼衣装のよう

ベットに寝かされチョンマゲが覆いかぶさって来る

「ミュキ愛している。絶対に離さない」

真剣な目で見詰められドギマギ———既に死にそう！！

「私も愛してるから、末長くお願いします……」

「ミュキ」

それからキスを交わし二人で愛を確かめ合うのだった。

だけどある意味私には愛の行為は死線ギリギリ

どうしてこう絶倫なのかと喘ぎというより死の断末魔を口からもらしながら意識を失いそうになりながら思うのだった。

チヨンマゲのバカーーーーーー！

手加減しろーーーーー！

**おまけ 一亀王の秘密(変態)の部屋一(前書き)**

汚い表現がありますのでご注意ください。短いです。

おまけ 一 亀王の秘密（変態）の部屋 一

亀王には最近楽しみが新たに一つ加わった。

それは愛する伴侶であるミュキが深い眠りに落ちた時から始まる

寝ているミュキを起こさないようにコッソリと起き上がり瞑道を開けてある場所に辿り着くのだが、そこは地下に作った出入り口の無い広大な部屋で、ガランとした閑散とした部屋だが唯一あるのは大きな本棚のような棚だけ

そこは地下でありながら太陽石が常に灯り明るく、白い土壁に反射し眩しいくらいだった。

「確かにこの部屋に落としたはず」

亀王は辺りを見渡しある物を探す。

「おおーーーー あった！」

部屋の片隅に落ちている銀色の袋を拾い上げ嬉々とする。

「ミュキは何を隠そうとしたのだ？」

そう……それはミュキが必死に捜し出し封印した非常持ち出し袋、実は亀王は地中に穴を掘ったと見せかけ瞑道を開けてこの秘密の部屋に落としたのだった。

ハッキリ言って最低な行為だと亀王自身も理解していたがミュキの全てが欲しいと言う欲望に負けてしまった。

早速袋を開けて中身を取り出すと真っ先に透明な袋に幾重にも包まれた物体で中には更に水色の物があり見た事が無い。そして銀色の布に、履物、折畳み式の小刀、透明な容器に入った水などの細々した道具

「矢張りこの不思議な物をミュキは隠そうとしたのか」

亀王はガサゴソとする透明な袋に嚴重に包まれた物体を取り上げ考え込む。

「うーむー 何をするものであろう???」

触っていても分からないので包みを開ける事にする。

この世界には無い透明な不思議な材質の袋を三枚剥がして行くと三個の水色の袋が出て来たのを見て思い出す。

「こっこれは!! ミュキの汚〇!!!」

間違い無くそれはミュキが亀王の頭で使用した中身が入った携帯トイレ。しかも使用済みであり普通なら部屋にあるのも触るのも憚れ

るはずなのに亀王はそれらの使用済み携帯トイレに愛おしそうに頬ずりする。

皆さんも分かっておいでだと思いますが二年物

尿凝固剤と消臭剤その上二重構造の袋でファスナ式で密閉出来るため匂いは殆ど漏れていないが大をした方は黒くなりとても手で触る気にはなれない物体

しかし亀王はそれを大事そうに眺め匂いを嗅いだりと常人では無い行動を取り始める。

「ミユキ〜〜 ああ〜ミユキ ミユキの物は何でも愛おしい〜」

一通り堪能すると亀王は大事なミユキコレクションに加えるべく形を整えてから静止の術を掛けて棚に大事に置いた。銀色の袋やその他の小物も全て静止の術を掛けて棚に並べて行く亀王の顔は恍惚としており、その表情を見た全ての男も女も欲情してしまう事間違いないだろが状況を知っていたら全ての者達が引いただろう

棚に納められているのは全てミユキの使用した物品

その中での一番のお気に入りにはミユキが落ちて来た時に着ていた衣装で毎夜それをを抱き締めながらミユキが落ちて来てくれた事に感謝するのが日課になっていた。

初めのうちの変態臭は徐々に磨かれ正に変態になってしまったがミユキ限定

全ては愛するが故

他人に迷惑をかけてはいないので許してあげて欲しい

この部屋は亀王だけしか知らない秘密（変態）の部屋

何時かこの部屋がミュキの物で溢れる時、新たな部屋が作られるのが容易に想像できるのだった。

そして一通り楽しんだ後に再び二人の寝所に戻り情事で疲れた可愛いミュキを抱き締めて眠りに就く亀王

夫の変態行為を知らず眠るミュキがこの事実を知った時血の雨が降るだろうが

その日が訪れる事は決して無いだろう。

今夜も二人は幸せに仲良く寝るのだった。





## 深紅の薔薇の君と私

新婚の甘～い朝は夫より先に置きて朝食を用意してキスで起こした  
いなんて乙女のような事を考えていた私は今の現実に困惑するしか  
なく、三途の川を見そうに息絶え絶えな現状だった

快感と息苦しさで目を覚ますとそこには夫の心臓に悪いドアップと  
キスの嵐

「ひゃ……んっん……」

昨夜の愛の営みで体力を絞り取られ筋肉痛及び倦怠感は半端がなく  
快感より体が辛く最期の抵抗の手段としてチョンマゲの舌に噛みつ  
いてやる。

ガプッ！

「！！」

舌なんて噛むの初めてなので軽くにしたつもりだけどチョンマゲは  
目を見開いて唇を離すが何故かその目は妖しく光る。

「ミユキがそのように積極的になってくれるとは、今から昨夜の続  
きを！」

絶対無理！ 女の腹上死なんて死んでもいやーーーーー

「そんな事したら当分お預け！」

ピツタ

チョンマゲはその一言で動きを止め、まるで待てをされた犬のよう

「私は昨夜の行為のせいで腕すら上がらないの。これじゃあトイレにも行けないじゃない」

先程から尿意を感じているけどチョンマゲに連れて行かれるのは考えられない。絶対に中まで来そう

「ならば余が全部世話をしよう。最初はトイレか？」

嬉しそうにするが私は身の危険を感じてしまう。

「フーランを呼んで手伝って貰うからいい」

「余はミュキのトイレに行って 次に見たら離婚っていたよね  
」……」

ニツコリと釘をさす。

「仕方ない…余の神力を与えよう」

渋々と私に手をかざすと今まで体の痛みとダルさが嘘のように消えて元気になる。

神様って本当に何でもありよね……　これが弟が言っていたチートな能力と言うものなんだろうか

「ありがとうチョンマゲ。お陰で一日寝たつきりにならず済んだわ」

「余が一日中世話をしたかったのに…」

いじけたように私を見る。

もしかして体力回復出来る事を秘密にして寝室で一日を過ごそうとしてたの?!

無視して起き上がると当然全裸で床には衣服が散乱していて何とも淫びでいたたまれない  
しかも体中キスマークだらけで無残

急いで布団で体を隠す。

「チョンマゲ、羽織る物をとって　／＼／＼」

「余の事は気にせずに、そのままでよい」

そう言う自分は白い着物をガウンのように羽織って壮絶な色気を放っていて良いだろうけど、私は細い体に赤い斑点を付け何かの病気のような体を晒すなんて嫌

「意地悪なチョンマゲ嫌い」

するとスゴスゴと床から私の白い着物を取ってくれ、急いで羽織っ

てからベットを抜け出しトイレに行きたいけど場所が分からない

「トイレは何処？」

「その扉だ」

私は小走りでトイレに急ぎ扉を閉める前に念を押しておく。

「透視したら口きかない」

チートな能力を持つ夫は油断ならないから先回りして言っとかないと気が気じゃない

案の定、ビックとしてうろたえる。

絶対にしようとしたなと確信

私のトイレ姿を見たがるってチョンマゲは変態が少し入っているよね……

特殊趣味のオンパレード？

その好みに当て嵌まるの私って……

断じて私は普通で平凡な女のはず

朝からいやな思考に陥りながら用を済ましてから部屋に戻ると何時の間にかフーランが部屋を片付けておりチョンマゲが居ない

全然そんな気配を感じなかったんだけど

「お早うございます王妃様。早速ですが湯浴みの準備が出来ておりますがお食事を先になさいますか」

こっこれは新婚さんにある「あなた、お帰りなさい食事とお風呂どちらにする？」と妻が夫を迎える時の定番

フーランのような美人に言われるなんて良いかも！

私が男なら毎晩定時で会社から帰宅しちやいそう

「お早うフーラン。先にお風呂がいいわ」

昨晚ので体は汚れている。

それより脱ぎっぱなしの服や乱れたベッドを人に片付けさせるなんて女として駄目駄目

せめて少し片付けてからトイレに行くんだった。

地味に凹んでいると

「何処かお加減でも悪いのですか」

「チョンマゲが何処に行ったのかな〜と思って」

「陛下なら丞相様に連れられ王宮に向かったようです」

「お仕事？」

「私には分かりませんが夕方にはお戻りになるそうです」

早速ちゃんと仕事をするなんて偉い偉い

「ところで今何時なの？」

「ソロソロ正午を迎えます」

「お昼！！」

疲れていたとは言えお昼まで寝てるなんてチョンマゲの事を言えなくなりそう

ああ〜どうしよう。

上げ前据え膳で身の周りは全てフーランがしてくれる上に夫の世話も夜以外はしなくて良いし、悪い言い方をすればチョンマゲの専属娼婦！！

ガー——ン

そんな人生は嫌かも

勉強よ

先ずはこの世界の一般常識を知る事よ！

それから考えよう

「失礼します」

「えっ？」

考え込んでいた所為で何時の間にかお風呂場の脱衣室で着物を脱がされてしまう。

一枚しか着ていなかったので直ぐに全裸をフーランに見られてしまう

昨日も見られているから今さらなんだけど

今は体中にチョンマゲのキスマークだらけで、如何にもしましたよ  
って感じ

一気に全身が真っ赤になる。

これでキスマークが隠れる？

訳ないー！

それに対してフーランは至って冷静で私の手を取り湯船に浸かるよう促すのでそのまま急いで湯に浸かる。

ああゝ恥ずかしいよ……

顔の半分ぐらい湯船に埋める。

王妃って考えればプライバシーが少なそう。日本の皇室も皇太子妃は色々大変そうだし私なら絶対そんな所に嫁に行かないぞと思って  
いた私が皇太子妃をすっ飛ばし王妃様



世の中分らない物だをつくづく思っちゃう

恥のかき捨てとばかりに大人しく髪と体を洗って貰い体まで拭いて貰いながらある事を思い出す。

げえーーーーーっ

そう言えばルインさんと同じ事をした様な……考えればルインさんは男で牡丹の君の旦那さん

ルインさんもフーランのように平然としていた。

もしかして女として見られてなかった!!???

くーーーーー その内この件を持ち出し虐めてやると心に誓うのだった。

体をさっぱりしてお昼ご飯も美味しく頂いて一息つくとも何もする事が無いので少しチョンマゲが恋しくなる。

今頃チャンとお仕事しているかな〜と考えていると廊下から騒がしい声が聞こえて来た。

「お客さんが来たのかな」

「此方に来客の予定は無いのですが… 見て参ります」

フーランは訝しそうに部屋を出ようとした時だった。

バン!!!

凄い勢いで扉が開けられたと思うとフーランがすかさず私の前に立ち、はだかり乱入者から守ろうとしてくれる姿は正に騎士のようでカッコいい！

惚れてしまいそう     ／／／

「何者！ 王妃様のお部屋と知っていたの狼藉か！」

「申し訳ありませんー！ お止したのですが」

廊下の床に平伏してガタガタと震えているのは昨日の管理人さん…  
…相変わらず顔は分からない

そして勢いよく飛びこんで来たのは深紅の薔薇の君だった。

一目見てそう呼びたくなるのは仕方がないだろう

少々釣り目がちな意志の強そうな深紅の瞳はまるで妖しく光るルビー

高く結い上げたワインレッドのベルベットのような光沢を放つ髪に  
緑の宝石とダイヤをちりばめた髪飾りを付けたゴージャスな美人で  
しかも巨乳

此方の世界の衣装は私に優しい体型を隠すはずなのに、胸ボン・ウ  
エストキュンの腰ドンが強調されているってどういう事???

しかも口元の黒子が色っぽい

正に美しい薔薇には棘がある感の強い悪女タイプと見た。

「妾は大理府長官の一の姫ミュンチュングウイである。此方にいる  
人間の女に態々会いに来たのじゃ。侍女如きが妾の前に立つなど無  
礼であらう!」

おおー！ 何て女王様 薔薇の鞭が似合いそう

「無礼はミュンチュングウイ様の方。王妃様に対し臣下としての礼  
を先ず取るのが礼儀」  
毅然と立ち向かうフーラン素敵過ぎー！

思わず二人の美女の攻防を見守る。

「人間如きが王妃じゃと! 妾は認めぬ。本来王妃になるのは妾  
その貧相な女が王妃など他国に嘲られ、愛しい妾の陛下がお可哀  
想」

ぐっさ!

言われる事は覚悟していたけど傷付く

誰が貴女のチョンマゲよ！ 私の夫よ！

話からして深紅の薔薇の君はチョンマゲの側室だったお姫様なんだと分かる。

つまり過去の女

するとチョンマゲの以前の言葉を思い出した。

『余が昼寝をしていると何時の間にか上に乗って腰を振っておるので致しかた無いであろう。不可抗力だ』

ええっ——————！！

こんな巨乳美女がチョンマゲ寝込みを襲い腰を……思わず想像してしまい顔が赤らむ。

確かに致し方ないかも

普通の男なら誰もが相手して欲しいと思う様な美女

あの豊満な胸とお尻を揺らしながらチョンマゲの上に跨っていたの！！

そんな妄想をしている中も二人の言い合いは続いており

「兎に角王妃様とお話したければ陛下か丞相様の許可をお取り下さい」

「キ――― 妾は大理府長官の姫　そこをお退き」

業を煮やした深紅の薔薇の君は強硬突破しようとフーランを突き飛ばそうとするが、いとも簡単に避けて逆に腕を捻り上げる。

「キャッ！」

「私は陛下より王妃様に危害を加える者は全て切り捨てるよう許可を得ております。例えば大理府長官の姫であろうと関係ありません。それどころかお父上のお立場を危うくするとのことご覚悟を」

そう言って何処から取り出したのか手に剣を握り深紅の薔薇の君に突き立てていたので慌てる。

「フーラン　離してあげて。　深紅の薔薇の君が泣きそうよ」

「「　深紅の薔薇の君　」」

二人がハモル

案外気が合うんだらうか？

名前を呼びたいけど此方の名前は呼びにくいのよ

微妙な空気が流れる中フーランは剣を消し（マジック！？）　振じり上げた手を離す。

するとさっきまで青ざめていた深紅の薔薇の君は、直ぐさま乱れた着物を整えて私に艶やかな笑みを向ける。

何故か背筋に寒気が

「失礼しました王妃様。陛下に捨てられ取り乱しました妾をお許し下さい……例えば地味で冴え無い女性でも陛下がお選びになったお方。これから仲良くして下さいませね」

謝っているのか貶してるのか……絶対後者だけどね

多分父親の地位が危うくなりそうなので方向転換したのだろう

しかも仲良くと言いながら虐める気満々

これで譲歩して本気で言ってるのか、態と嫌みで言っているのかどちらだろう？

「そうですね。私も後宮の仕来たりなどをお教えして欲しい人を探してましたの。長く後宮にいらっしゃった深紅の薔薇の君ならば熟知しておられるはず。お暇な時に教えて欲しいので如何でしょう？」

少し言葉を畏まって話そうとすると舌を噛みそう

結構今までもぞんざいな話し方をしてたのを皆は許してたけどそれで良いのか疑問だった。

私の周りには優しく守ろうとする人ばかりで一人ぐらい虐め役が居ないと生活のスパイスに欠ける。

「まあー 何て殊勝な心がけ。妾でよければ何時でもお呼び下さい」

「はい。それでは今からお茶お御一緒にしませんか、話相手がいなくて寂しかったんです」

「……王妃様のお誘いを断る訳に参りません。喜んで御一緒にしますわ」

「フーランお茶の用意をお願い」

「宜しいのですか」

「お願い」

私がニツコリと微笑むとフーランは諦めたように廊下に平伏したままの管理人に声をかける。

「王妃様がお茶を所望だ持って参れ」

「はい!!」

心なしきつめな声で言う和管理人さんはビクつき脱兎の如く廊下を駆けて行ったのだった。

何時もならフーランが全てしてくれるんだけど今だ深紅の薔薇の君を警戒して二人つきりにはしないようにしているようだった。

果たしてこれから始まるお茶会はどんなものになるか私にも想像がつかない。

決して楽しいもので無いのは覚悟している。

恐らく深紅の薔薇の君の言動は、多くの亀族が私をどう見ているか

の指針になるだろうと考えるのだった。



## 深紅の薔薇の君は女王様

私の目の前には殴りこんで来た時とは打って変わって、お上品なお姫様ぜんとした深紅の薔薇の君

見た目は三十代前半でとうがったており実際の年齢は不明ながら牡丹の君よりは年上でしかもチョンマゲより年上にも見える。

私が勝てる点と言えば正に若さと性格の良さだけって感じ

だけとお色気むんむんの妖艶な美女だけど私は牡丹の君の方が好きなのでルインさんの女性の趣味の良さは感心したけどチョンマゲは服のセンスといい女の趣味も今一残念…… うっ！……だから私なんだろうか……落ち込む。

私もお茶を飲みなが値踏みするが相手もその腹そこを見せないような表情で私を観察しているようだ。被害妄想では無く絶対バカにしているのは分かっている。

「王妃様は異世界の方だと我が父より聞いたのですが異世界ではかなりの家柄のお生まれですか？」

「至って庶民の出ですが、私の暮らしていた国では亀族のような貴族もいまして政治も一般庶民から選挙と言う制度を取って庶民が

選出した人間が国を統治してるんです」

「人間だけの世界でしかも王が居ないなど野蛮な世界です事…どうせ獣の皮を着て地を這いずりまわっていたのでしょ」

何を持って野蛮？ 文明でいえば私の世界の方が発達していると反論したい

「確かに神族のような力はありませんけど私達人間には知恵がありましたので馬より早く走る乗り物や鳥のように数百人を乗せて飛ぶ事が出来る乗り物を造り出せました、四十階建ての建築物が建ち並ぶ科学の発達した世界です。特別な力を持ってなくても人間はそれを補い進化して行く力があるんです」

そう反論するとムツとし不機嫌な顔をする。

「まゝ それでは王妃様はそれらをお創りになる事が出来るのですね。 素晴らしいですわ。是非此方でも造って下さいな」

「それは出来ません」

「それでは、なんだか眉つばのようなお話ですわね」

「一人の人間がそれを造り出すのは不可能です。特殊な知識や技術が必要で部品一つ一つを専門の者達が造っていき分業で組み立て一つの物を分業で製造していますから。例えば深紅の薔薇の君が着ていらっしゃる衣装を造るにしても糸を紡ぎ染め織り上げてから縫い子さん達によって仕上げられるように何人もの人の手を経て造られています。それに私の向こうの世界でしていた仕事は建築資材を扱う会社でその経理の一部を任されるだけでしたから、空を飛ぶ乗り

物を造れといっても無理です」

「なんだか言い訳がお上手なのですね。出来ないなら出来ないと正直に言えばいいでわないですか」

きーーーー ムカつく!!

こういう相手はいくら言っても疲れるだけなので流すのが一番だと心に言いきかせる。

「そうですね確かに私は一人では何にも出来ない人間です。だから色々な人に助けて貰ったりしながら王妃を務めて行きたいと思えます。ですので庶民の出の私は王妃が何をしなければならぬか分からないので深紅の薔薇の君にも教えを乞いたいと思っています」

かなりへりくだり下でに出る。

王妃としての威厳はどうせ地を這っているんだからどうでもいい

「王妃の仕事と言えば陛下の為に常に着飾り女としての務めを果たし子を産めばいいのです。公式の場でも陛下の横に控えて華を添える存在ですが、その点王妃様は少々……」

そう言いながら私の顔や体をチラチラ見やる。

どうせ華の無い顔に体ですよー

しかし王妃様ってそれだけの存在なの

日本の王様つまり天皇は象徴でしか無いけどその皇后様も一緒に色

々な慰問活動や外交を行っていた気がするし、偉ぶった所も無い優しそうな天皇御夫妻

イギリスのダイアナ妃なんて慈善事業に世界中を駆け巡り福祉に力を注いだ皇太子妃の例もあるからそんな王妃を目指しても良いかもしれない。政治的な事に口を出すとルインさんに睨まれそうだし

だけど何処の王室も出産にかなり神経を尖らせ重要事項

「矢張り子を産むのは重要なんですか」

「当り前ですわ、陛下程の巨大な力をお持ちになった王は歴代の中でもおりません。その血を受け継ぐ御子様は必然と素晴らしい力が期待できますから次期亀王となるのは必至ですわ、だからその伴侶となる女は神力の高い由緒正しい亀族から選ばれるべきなのですが、残念な事に人間をお選びになってしまった以上は御様に期待は出来ませんわね」

如何にも私をチラリと見て残念そうにする

王妃である私に失礼な態度

幾ら美人でもこんな性格の悪い女は御免こうむりたい

チョンマゲが王妃に選ばなくて正解だわ！

そう言えばチョンマゲに子供はいなかったの！？

十八人も側室が居たなら子供も何人もいそう

「そう言えば深紅の薔薇の君か他の側室達の間には子供はいないのですか」

すると途端に顔を赤らめきついめの声で言う。

「そんな事も知らないでよく王妃の座に就きましたのね！　なんて厚顔無恥な女」

此方が下でに出ていれば何処までもつけあがって行くようで

私もいい加減堪忍袋の緒がきれそう。

こっちだって色々事情があるのよ、オバサン！！

少しぐらい挑発しても許されるはず！

「申し訳ありません。何しろこの世界に落ちて直ぐ熱烈に求婚されて婚姻を結だ瞬間二年間も眠りに就き目覚めたばかりなのですが陛下に朝も夜も無く求められこの世界知る暇も無く」

一応頬を染めて俯く

途端にガチャツとカップの割れる音

顔を上げると嫉妬で鬼の様な形相で手には割れたカップが握り潰されている。

ヒエーーーーー！　　怖い

陶器のカップを握りつぶすなんてどんな握力！！

チョツと遣り過ぎた!?

危ないと感じたのかフーランが間に入る。

「ミュンチュングウイ様、お加減がお悪いご様子なので今日の所はお引き取り下さい」

フーランは深紅の薔薇の君の腕を持ち上げ立たせようとするがその手を打ち払う。

パッシ!

「無礼者! そなた如きが妾に触れるな」

おおー 流石女王様!

そう言って深紅の薔薇の君は立ち上がり私を見降ろすようにして捨て台詞を言う

「妾はそなたを王妃など認めぬ! そのような貧弱な顔と体では直ぐに飽きられ陛下も目を覚まされるであろう、そして何れ側室に返り咲き陛下の御子様を宿すのは妾じゃ!」

ぐっさりと胸に激痛がまたしても走る

私が気にしている事を言われ二の句が告げれないが、此処で傷付き黙っているのはこれからやって行けない

本当は仲良くしたいんだけど

私も頭に血が昇り口を止められない。

売り言葉に買い言葉

「確かに平凡な私ではその可能性があるかもしれませんが、その場合若くて気立ての良い姫を側室に迎えて戴くよう陛下に進言しますわ」

その言葉が言い終わるや否や目の前が真っ赤に染まり部屋全体が炎に包まれた。

かつ火事だーーーーー！

初めて見る生の火事

慌てて立ち上がろうとするとフーランが私を抱き上げ飛びず去り壁際に置くとそのまま剣を握り炎に突っ込んで行く姿は勇ましいがこのままでは大火傷を負ってしまうし、深紅の薔薇の君はどうなってしまったの！！？

「フーラン！」

ところがさっきまで轟々と燃え上がる炎はフーランが飛びこんで直ぐに消え去り、現れたのはフーランにより取り押さえられた深紅の薔薇の君、両者とも無傷な様でホッとする。

深紅の薔薇の君はフーランにより気を失っている様で床に倒れているがフーランは容赦なく何処から取り出したのか銀の鎖を体に巻き付け終わると私に跪いて詫びて来る。

「申し訳ありません。この痴れ者の攻撃に御身を晒してしまいな  
んとお詫びすればよいか」

「攻撃?? まさか今の炎は深紅の薔薇の君が私に!!」

「はい、もし王妃様に伴侶としての不可侵の力が働いていなければ  
今頃火達磨になり息絶えておりました」

神様だけあって炎を出すなんて流石だけど

本気で私を殺すきだったと知りゾツとするがそこまで追い込んでし  
まったのかと反省

遣り過ぎちゃった：オバサンに年齢を言っではいけなかった。

「ところで、不可侵の力は何？」

「はい、陛下の伴侶となったお方には誰も傷一つ負わす事は不可能  
なのですが私も油断してしまい如何なる処分もお受けいたします」

初めて聞いた私の体の性能!! 凄いと喜んでばかりはいられず

思いつめたよう目を伏せ続け声も低く思いつめている様子

なんだかこのまま切腹でもしてしまいそうな勢い

私の所為でそこまで責任を感じるなんて冗談では無いので急いで止  
める。

「フーランは悪くないから! 深紅の薔薇の君をお茶に誘ったのは



私だし挑発して怒らしたのも私だからフーランは悪くないのよ」

「ですがこの事は丞相様に報告し処分を受ける所存」

フーラン頭が固すぎ

待ってよ：フーランでさえ罰を受けるのなら深紅の薔薇の君はどうなってしまふの！？

「深紅の薔薇の君はどうなるの：」

「王妃様を殺そうとしたのですから陛下に対する反逆者。直ぐさまに打ち首及び親族も唯では済まないでしょう」

うえーん マジですかそれ

一般庶民の私ならこうまで大袈裟にならないはず

今さらながらに自分の立場を自覚してしまうが今さら遅い

此処はフーランに黙っていて貰うしかない

「物は相談だけど今の事は無かった事にしましょう！ 私は怪我をした訳じゃないしー 未遂だから三人が黙っていれば問題ないわ」

ニッコリと営業スマイルでフーランにお願いするが無情にも侵入者に一刀両断されてしまう。

「そうわいきませんよミユキ様」

背後から聞こえるルインさんの冷たい声

「「！！」」

振り返ると、まるでタイミングを計ったように現れた

「げっ—— 何故ルインさんが居るの!？」

何時の間にか背後にルインさんが立っている。

何時も音も気配も無く現れるから心臓に悪い今さらながらの登場のしかた。多分瞑道を潜って来たんだろうけどチャン扉をノックして入ってよ……

「丞相様…… この度の不祥事いかなうな処断でも受ける所存です」

「駄目！ フーランは悪く無いの」

「フーラングウィを処分する心算はありませんから御安心を。それよりあのミュンチュングウィを一瞬で倒すとは流石です。これからも気を緩める事無くミュキ様にお仕えなさい」

処分なしと聞き安心するが、ルインさんの言葉を聞けば深紅の薔薇の君は結構強いんだろうか？

「寛容なお言葉ありがとうございます」

「それより問題はミュンチュングウィ。陛下の留守を狙いミュキ様を訪れるなど言語同断、しかもミュキ様に炎を向け焼き殺そうなど父親共々責任を取って貰うしかないでしょう」

そう言い冷たい眼差しを意識の無い深紅の薔薇に向ける。

本気だ

「まさか打ち首て事は無いよね」

「それが妥当かと。残りの縁者も王都を追放し流刑地で過ごして貰う事になるでしょう」

私の世界では信じられない処遇！

裁判を受け法律に定められた刑を受けても最高刑は死刑

親族まで及ぶなんて理不尽

そこまでの罪なんだろうか

「其処までしなくても良いんじゃない？ 未遂で終わったんだし」

軽い調子で取り入ってみるが

「そんな事をすればミュキ様が侮られこれからも足下をすくわれる事になります。それに今回ミュンチュングウイがこの離宮に来たのも計画的。王宮で問題を起こさせ陛下をミュキ様から引き離したのですから、目的がなんだったにしろミュキ様に刃を向けたのは事実でこの決定は覆せません」

キツパリと言い捨てる。

流石に悪女は侮れないけど、命まで奪いたく無い

「ルインさんの冷血漢！ 命まで取る事無いじゃない。深紅の薔薇の君を挑発し過ぎた私も悪いんだから許してよ」

と泣き付いてみると、思わない所から私の行為を無駄にされる。

「そなたの情けなど妾は要らぬ！ このような憐れな姿を陛下に晒すくらいならこの場で首を切り捨てるがよい！」

何時の間にか気が付いた深紅の薔薇の君はその豊満な体を鎖で縛られると言う倒錯的な体を横たわらせ私とルインさんを睨みつける。

庶民の情けは無用とばかりな女王様

貴女はそれで良いだろうけど庶民な私には夢見が悪すぎますからなんととしても阻止させて貰います。

「この者もそう言っておりますから、良いではありませんか」

「駄目！ そんな事をしたらチョンマゲに私の裸を見た上に触った事を言い付けてやるから」

途端に顔を青褪めさせるルインさん

「何を仰るんですか！ あの時の私は女性体ですから何の問題もありませんし、触れたと言っても体を拭いただけ」

このうろたえぶりからもうひと押しだと確信

「チョンマゲにそんな言い訳が効くかどうか試しに言ってみようか

しらゝ それと…牡丹の君にも言っちゃおうかなゝ」

牡丹の君の名を出した途端にガツクリと膝をつくルインさん

「クウ… 此処でこの者を許して後々後悔しても知りませんよ」

「この場合深紅の薔薇の君を殺しちゃう方が後悔するから」

「分かりました。ミュキ様のお好きなように… ですがその二人、今の話を余所に漏らせば命はありませんから覚悟して下さい。次はミュキ様の言葉は聞き入れませんから」

「うんいいよ。この事が漏れたら二人の命乞いはしないわ」

私もルインさんが最大限譲歩してくれたのが分かるのこれ以上我儘は言えないし、フーランはともかく、深紅の薔薇の君がそこまでバカな女なら庇う必要は無く自業自得で良心も傷まないよ…多分

しかし深紅の薔薇の君は納得いかない様子

「人間ごときに憐れ身をかけられるなど妾の恥、そなたが殺さぬなら自害するだけじゃ」

そう言うと言を引き千切ろうと狂女の如く暴れ出す

「何故切れぬ！ 妾は高位の亀族の姫、一介の虎族の女の戒めなど」

「いい加減にしないでミュンチュングウイ。ミュキ様に助けられた命を大事にしないで」

「己…丞相… 妾を利用するだけ利用して後宮を追出した佞臣が。その女を使い陛下を意のまま動かそうとしておるのじゃろ！」

それは有り得ない気がする。どちらかと言うとチョンマゲの被害者？

「利用していたのはミュンチュングウィそなた。そもそも娘を王妃に据え私を追い落とそうとしてるのはそなたの父親で、この件に父親である大理府長官が一枚かんでいるのは分かってます。一族共々路頭に迷いたくなかったら大人しく屋敷で余生を暮らしなさい」余生！？

まるで深紅の薔薇の君がもう女の盛りを過ぎた様な失礼な言い方確かにオバサンだけど十分若くて美しい熟女！！

「ルインさん！ 女性に対して余生とは何ですか。 深紅の薔薇の君は確かに性格は悪いですけどこの弾けんばかりの豊満な体に妖艶な美貌をこのまま腐らせるなんてもったいない事を言うんです！」

「えっえっ？？」

私が生ってかかると目を点にするルインさん、ところがあの気の強い深紅の薔薇の君が泣きだしてしまう

「口惜しい…… 人間ごときにバカにされるなど…… うっうっう……」

そのまま泣き崩れてしまう

少々言い方が拙かったよう

しかもこんな縛られるなんて屈辱的姿に女王様も気が弱くなってしまったのかも

絶対に縛っても縛られる立場なんて似合わない

「フーラン 深紅の薔薇の君の鎖を解いて上げて」

「しかし」

「解いて上げなさい」

ルインさんの言葉で深紅の薔薇の君を縛る銀の鎖が一瞬で消えてしまう。

これが神力何だろうけど私にはマジックのよう

私は恐れず近づき深紅の薔薇の君が床に泣き伏せるのを頭を怒られそうだが撫でてあげる

拒否されると思ったけど泣き続ける深紅の薔薇の君は気付いていないのかもしれない…

「深紅の薔薇の君には涙は似合いません。貴女は毅然と咲く薔薇のような女性なんですからこのまま枯れてしまうのは早すぎます。そもそも陛下は私のような普通顔の胸の無い女が好みなんですから深紅の薔薇の君のような美しい人が選ばれるはずが無いんです」

「陛下の好み……」

「振り向かない男を追い続けるなんて美貌の浪費。このままでは美しさは古い衰えるばかりで勿体ないです！　そこまでの美しさは財産、それを維持し続ける為にも若い前途ある亀族の男を捕まえ婚姻を結んでその美を永続させて欲しいのです。親の思惑に振り回され

て自分の人生と美しさを浪費していいのですか」

「美しさの浪費」

深紅の薔薇の君は漸く私と目線を合わせてくれるが涙で潤んだ赤い瞳は婀娜っぽく普通の男なら瞬殺！ 若くは無いけど年増の色気は凄まじい

「／／／　そうです！　今の深紅の薔薇の君をみれば全ての男共が平伏しその美しさを讃える事間違いない！　私が男なら深紅の薔薇の君を女王様と呼びたいくらい」

「妾が女王……／／／」

「はい！　深紅の薔薇の君は正に女王様がピッタリ！　この世の男共の女王様になって下さい」

「……」

すると暫らく沈黙が続き考え込むが、その情熱的な赤い瞳に新たな情熱の灯が灯るのを見る。

そして突然、すっくりと立ち上がり私を見降ろす姿は正に女王様

「確かに私の美しさを理解できない陛下など妾から捨て去り、王妃様に差し上げますわ」

本当に地で女王様気質に惚れられ

「それでこそ深紅の薔薇の君」



そしておもむろに踵を返し扉に向い帰ろうとするので声をかける。

「今度お茶会にお誘いしても良いですか」

するとピタリと立ち止まる。

「仕方がありませんわね！ 王妃様がそこまで望まれるなら行って差し上げても良くてよ 〃〃〃」

そう言いながら耳は髪のように真っ赤

これぞ女王様ツンデレ？！

「はい！ その時は是非深紅の薔薇の君の美しさを堪能させて下さい。待ってますから」

「その時は妾の美しさに平伏すがいいわ」

「はい！」

良かった女王様は自信で満ち溢れていなければ

S Mは嫌いだけど女王様プレイ？は楽しい！！

そんな私達を啞然と見詰めるルインさんとフーランに全く気付かない私は手を振り深紅の薔薇の君を見送りながら

もしかして私って深紅の薔薇の君を攻略しちゃいそう???

などと呑気に思うのだった。



## 騎士な侍女と情けない若者

大理府長官の一の姫ミュンチュングウイ様が去って行き漸く静かさが戻ると言っても部屋は黒こげで使いものに成らず王妃様に別室に移動して貰う

あれ程の目に遭いながらもにこやかに楽しそうなお顔の王妃様

あの女性を相手に一步も引かず、それどころか助命したばかりか泣き崩れ意気消沈したミュンチュングウイ様を立ち直らせるとは並みのお方では無いと見直してしまう

一方私と言えばミュンチュングウイ様の毒気に中り少々疲労感が溜まっている。

まさか陛下の前側室様が王妃様に殴り込みを掛けて来るなど誰が考えるだろう……天災としか言いようがない

しかも王妃様の情報が筒抜けだと言う事は考えもの

流石に大理府長官と大物となると陛下の動きなど隠しようがないのだろう

丞相様もこの件で処分は保留されたようだが大理府長官に釘はさすとおっしゃっていたが、私にも釘を刺されてしまう

「次はありませんよ」

そう言い残し王宮に帰って行かれるが、その言葉で次の失敗で命が無い事を自覚する。何しろ知りたくも無い丞相様の弱味を知ってしまったのが重い。一体何時から丞相様はあの部屋での出来事を見ていたのか： 私でも感じられない程の手練れの者が常に見張っているのかも知れない。

王妃様の小さなお手を引き御希望の庭園が見渡せる部屋にお通しする。

そしてお茶をお出しすると

「ねー フーラン チョンマゲには子供がいるの？」

矢張り気になっておいでだったようだ

「安心下さいませ。陛下には今のところ御子様は一人もおいでません」

「そっか…… となると私への重圧が掛かってくるのか…… 十八人も側室がいて孕ませられないなんて種なし？」

種なし！！

どうやら違う方向で考えられていた御様子

王妃様は一見地味な印象の大人しい方と思ったら大間違いで良い方向で期待を裏切っている……異界のお方故に考え方が違うのかも知

れないが理知的な女性でお優しい方

「王妃様、陛下は決してそのような理由で御子様が出来ないのでは無く神族にはありがちな話なのです。神族は神力が高い程出生率が激減する傾向が激しく、王ともなると生涯に一人も子を成せない事の方が多いのです」

「ええー それじゃあ王の血統はどうするの!？」

「王は血統では無く神力の高さで天帝様が任命するのです」

「ゲッ! あの性格破綻者が… だからチョンマゲが王様になったのか」

変な納得をされる王妃様だが

「まさか天帝様にお目もじされた事が御有りなのですか!」

「会ったも何もその天帝の所為で私はこの世界に落とされちゃったのよ! 酷い話でしょ」

頬を膨らませ怒っていらっしやる姿もあどけなく普通の可愛らしい少女だが本当に驚かされる。

天帝様に会う事出来るのは各国の王のみ。 他の神族は生涯会う事が出来ない程の最高神であり創造神

「では王妃様は天帝様に選ばれたお方でもあるんですね」

「選ばれていないよ! ただの事故だから」

謙遜するなど奥ゆかしい

きつとこのお方なら陛下に御子様を授けて下さるに違いない

これは新たに心を戒めて王妃様にお仕えせねばと心に誓う

この方こそ生涯を誓う我が主

「ところでフーラン、深紅の薔薇の君以外の側室だった人達も皆美人だたんでしょ！ 全員と会いたかったな〜」

肩を落としガッカリされる……普通はお会いしたく無いものでは??

先程のミュンチュングウイ様に対する言動といい王妃様は女性も守備範囲なのだろうか!?

本当に読めないお方だ。

「私は軍の方の所属で後宮の警備にも関わっていませんでしたので側室様達にはお会いできませんでしたので噂の方もとんと疎いものからです、今日ミュンチュングウイ様とお会いしたのも初めてです」

「そっかー でも深紅の薔薇の君は女王様のように綺麗であの巨乳羨ましい……せめてあの十分の一でもあれば」

そう言いながら自分の胸を見て溜息をつく

「王妃様はそのままでも十分お可愛らしいのですから、お気になさらずとも自然と大きくなるでしょう」

「そうかな……」

王妃様は痩せておいでだが、お食事をチャンとお取りになるのでその内肉を付けられれば人並みになるはずで、今だ成長途中なのだからお気になさる必要もないだろう

しかも陛下にあれ程愛された体は徐々に女らしく変化して行くのは必至

しかしながら、王妃様が気にされるのも頷ける。ミュンチュングウイ様は確かに群を抜いてお美しいく、豊満な体の持ち主

ハッキリ言ってかなり好み

あの気の強さをへし折り快樂でグチャグチャにして綴り、征服欲を満たしたい

だが相手は大理府長官の一の姫

手の届かない高位の亀族

あの方が望めば王妃様の言う通り直ぐに相手が出来るだろう。それに最近別れた恋人と色々有って当分の間色恋は十分、王妃様にお仕えするのに専念しよう。

それに私も生涯連れ添う相手が欲しい、それにはミュンチュングウイ様のような女性では平穩な人生わ望めず何時かは別れを覚悟した関係になりがちだ。

だから次に恋人にするなら王妃様のような可愛らしく楽しい女性が良いものだと思えるのだった。

「ふわあゝ　なんだか眠くなって来た……」

そう言われたかと思うと直ぐさま寢息をたてて椅子に座りながら転寢をしてしまっている。

昨夜の濃い情事の跡をその細い体に所狭しと付けられ陛下と深く交わり、人間の体力では一晩お休みになったくらいでは癒されないだろう

起こさないようそつと内掛けを脱がしてから寝台にお運びして横たえさせる。

あまりの軽さに王妃様の体が心配だ

恐らく今夜も陛下は王妃様を召されるだろう

少し手加減をして欲しいが侍女の身では口には出来ず、丞相様にお口添えして貰わねばならないだろう。

王妃様が眠る部屋に嚴重に結界を貼りながら侍女の仕事は主が寝ている間も山とある。

しかもこの離宮にいる者達はいかに使えないのだ。

何しろ此処の管理を任されているマツカーサングウイなる若者はあまりに頼り無い



それなりの亀族の出でその嫡子らしいがこの離宮の仮の管理者として在中している所をみると呈の良い厄介払いで此処の閑職を任せられたのだろう

何しろ王妃様の為に建てられた離宮ながら後宮から一步も出られない王妃様が此方を訪れるのは当分ないだろうと誰もが考え、一応は何時でも使用できるよう離宮内の掃除や庭の管理、補修を行うのを統括するのがマツカーサングウイ

王妃様がミュンチュングウイ様にお会いしてしまったのもあの青年が止められなかった所為

今回の事でもっと閑職に飛ばされるであろうのは容易に考えつくが新任者が来るまではもう少し確りするよう指導しようと思ひ立つのだった。

「ああゝゝ どうしよう…… また失敗してしまった……」

自分の部屋でさめざめと泣く青年はマツカーサングウイ

茶色の髪に赤い瞳の優しげな顔だちで、既に成人の儀を済ました百三十四歳の若者ながら些か童顔で背も低いく体つきも薄いので頼り無い外見と相まって性格も気弱な優しい青年だが、これでも頭脳は人一倍良く官吏の試験も上位の成績で受かり家柄も良く将来を囑望

された前途ようようの青年だった。

しかしあまりのお人好しと丁寧な仕事ぶりで時間がかかるのが災いしてウスノロ扱い、しかも同僚の仕事を押し付けられ残業をして終わらせても手柄は全て同僚に奪われる有様で厄介者扱い

幾つもの職場を回されとうとうこの離宮の管理官を任されたのだが呈の良い閑職

父親が大理府の役職を持つのでお情けで此処を任されたのだ。

決して無能では無く本当は有能なのだが、ついておらず自己主張をしないので上司達も気が付かなかった。

だがマッカーサングウイは閑職ではあったがこの職場が気に入っていた。

此処で働く者は全て人間で年のいった者が多く、その殆どが掃除婦や庭師などと言った下働きの人間でマッカーサングウイを孫のように可愛がってくれる。これまでの職場は仕事を押し付けられバカにされ信じた同僚に裏切られたりと散々な目に遭ってきたので、此処では家庭のような温もりすら感じていた。

マッカーサングウイは家庭に恵まれていなかった

立派な父親は厳格で嫡子であるマッカーサングウイに厳しく結果を求め、母親は正妻では無く愛妾の人間だった為に二十九歳の時には死に別れ、正妻の元では愛情も与えられず跡取りとしての義務だけで育てられ寂しい生い立ち

しかも茶色の髪が仇となり亀族の中では人間のようにだと誹られ、人間には亀族だと敬遠されどちらとも馴染めない

そんな中漸く見付けた安らぎの場所だった。

「王妃様にご迷惑をかけてしまいきつと罷免される…… もう行く当てもないでしょう……」

既に数々の失態で父親には勘当され、せめてもの情けで宛がわれた仕事

ある程度の蓄えはあったが帰る家は無かった。

「弟が生まれ私など不要な人間…… うっうっう……」

そこへ誰かが扉を開けて入って来た。

「マツカーサングウイはおるか！」

「ヒィー はい居ります」

それは最も苦手なタイプの人間である王妃の侍女のフーラングウイ様だった。

急いで跪く

「こっこっこっこのような場所に何の御用でしょうか」

するといらついたように怒る。

「私は侍女なので跪く必要はない。立って確り顔を上げなさい！」  
そう言われおずおずと立ち上がり涙を袖口で拭きフーラングウィ様を見上げる。

女性ながら背が高く颯爽としテキパキとした仕事ぶりは正に自分の理想であるが一番苦手な種類の人間でもある。何故なら自分の行動が相手をいらつかさせてしまうようで怒鳴られる事が多いからだ

「泣いていたのですか！」

怒る代わりに驚くフーラングウィ様

「申し訳ありません。ミュンチュングウィ様をお止出来ず王妃様にご迷惑をかけました……此処は仕事を辞してお詫び申し上げます」  
すると呆れたように溜息をつく

「はあ……別に辞めずとも追って沙汰を待てば良いだろう」

「いいえ、多分ミュンチュングウィ様がこの場所を知っていたのは私のせいなのです」

「何！」

目を向き睨まれ恐ろしいが正直に言おうと話します。

「私は父の命で陛下が此方にお出でになった時は直ぐ知らせるよう言われたのです。父は大理府に席を置くものなのでその所為です。でも決して陛下にも王妃様に背くつもりは毛頭ありませんでした

……御免なさい　うえん…ええん……」

父の思惑も知らず私はバカだ

ただの使い捨ての駒だったのだ

情けなくも女性の前で泣いてしまう

きっと女々しい男だと呆れられ誹られるだろうが甘んじて受けよう

ところが意外な衝撃を頭を感じる。

ポンポン

慰めるかのよに頭を撫でられる。

「そなたに悪意が無かったのは分かったが例え身内にも仕事の内容を明かしてはならないのが基本。　これから気お付けよ……それにそなたは今だこの離宮の責任者、罷免された訳ではないのだから王妃様の為に確り務めを果たしなさい」

優しいくはないが労るように諭してくれる。

こんな人は初めてだった

「良いのでしょうか、私のような者が王妃様にお仕えしても」

「良いも悪いも無い。そなたが此処の責任者であろう、確り務めを果たすのです。さあ王妃様の為に夕食の用意の采配をして来なさい」

「はい、有難うございますフーラングウェイ様。 頑張ってみます」

私は叱咤激励され少し元気が出る。

この仕事を辞めなければならぬにしても後任者が来るまでは頑張  
って確り務めあげようと決心するのだった。

きっと一生懸命生きればきっと私の事を認めてくれる人がいるはず  
出来ればフーラングウェイ様に認められるような男になりたいと思う  
マツカーサングウェイだった。

## 私とマッキー

美しい湖の辺に建てられた離宮が気に入った私は暫らく此処に滞在している。

深紅の薔薇の君の襲撃により警備は強化されているらしいけど私には分らず呑気に暮らしては……いない

何しろ夜のお勤めが激務過ぎて幾ら神力で癒して貰っても芯からは取れず日々食べて寝るだけの怠惰な生活。拒否したいけど深紅の薔薇の君の襲撃を知ったチョンマゲが怒り狂いそれを宥めるのに自分の体を差し出したようなもの

あのルインさんを甘く見ていた私は直ぐ後悔したのだった。

深紅の薔薇の君襲撃後、転寝から目覚めた私はフーランに頼んでお風呂を入った後寛いでいると

「ミユキーーーーー 大丈夫か!! 何処も怪我をしておらぬか!?!」

夕方帰って来たチョンマゲに抱きしめられ、そっちの方が背骨が折れて息絶えてしまいそう。

「……つくっ苦しい…… 死ぬ……」

「何！死にそう！！ 侍女何をしておる医者をやべー！！」

「っ違うー チョンマゲの所為……」

漸く自分の力の強さに気付き腕を離してくれるが直ぐに優しくその腕に閉じ込める。

「あの女がミュキに酷い事をしたと聞いて直ぐさま飛んで来た！」

あの女とは深紅の薔薇の君の事だろう

「誰に聞いたの！？」

「丞相だ。あの女は直ぐさま斬首し親族共々死刑だ！」

ルインさんめくくく 確かにチョンマゲへの口留めはしなかったけど

「駄目！ 私と深紅の薔薇の君はお友達になったんだから殺すなんてしないでお願いチョンマゲ」

すると何故かキョトンとする。

「深紅の薔薇の君とはあの女の事か……」

「そうよ、だって真っ赤な薔薇の女王様のように綺麗だから付けた



の。ピッタリでしょ」

だがチョンマゲは気に食わない様子

「ずるい!! 余にもそのような名を付けて欲しい!」

チョンマゲも壮絶に綺麗だけど私にははチョンマゲと言う強烈なイメージに固定されて今さら他は浮かばない

チョンマゲはチョンマゲしかないのよね……

此処は誤魔化そう

「チョンマゲは私の国に伝わる伝説の美男の名前で由緒正しいのよ! だからチョンマゲは男性に対する最高の美辞麗句なんだから」

「そうなのか?」

大嘘だけど……神様に嘘をついて罰があたるかな

「そうよ! チョンマゲほど美しい男性は私は知らないよ」

これは真実

そう言うのとポツと頬を染める可愛い夫

「／／／余もミユキほど愛らしい女性には知らない」

それはチョンマゲ限定だろうけどヤツパリ嬉しい

「ありがとうチョンマゲ。その可愛い妻に免じて深紅の薔薇の君

の事は不問にして」

「それはならん！」

何時もならこれで折れてくれそうなのに今日は余程怒っているのだろう

私はチョンマゲにしか効かないお色気作戦で攻める事にする。

他の男にしても相手にされないか引かれる??

腕を首に回して上目遣いで夫を見詰めて

「お願いを聞いてくれたら夜に良い事してあげるから…… お・ね・  
が・い 旦那様」

「良い事!!」

ゴックリと唾を飲むチョンマゲ

「耳を貸して」

そして私はチョンマゲの耳に今夜してあげるサービスを耳打ちする

現代の性知識はネットを使えば簡単に知る事もできるし、ティーン雑誌でもその知識量は半端無く処女だった私も知識だけは豊富、いわゆる耳年増なのである。

だから男性がして欲しい事は大体理解しているつもり

ブッ！

途端に鼻血を吹きだす……

「ミュキが余にしてくれるのか！」

「／／／ うん…… 恥ずかしいけど私のお願い聞いてくれるなら  
して上げる……」

ここで少し恥じらうのがテクニック

あんまりあっけらかんとしていては色気もへったくれも無いから  
あくまでも知識として知ってるだけだから！

「うっ…… だが……」

しぶとく躊躇うけどもうひと押し

「／／／ 今夜はいっぱい可愛がって旦那様……」

「ミュキーーーーー！！」

そしてチョンマゲは堕ちた……

深紅の薔薇の君は許され一件落着なんだけど私は疲労困憊

しかしこれもあの美しく気高い女王様を守る為と思っていたけどソ  
ロソロ限界で休息が必要

私も癒しが欲しいのよ、癒しが

今日も昼ごろに目覚めるとチョンマゲはチャンと王宮に行って仕事をしてるのでいない。

「お早うございます王妃様」

そして目を覚ますうと直ぐにやって来るフーラン

「お早うフーラン」

そして何時ものように抱っこして貰い風呂場に連れて行かれ体を洗って貰うけど既に恥じらう元気すらない私

一応チョンマゲが出勤？する前に神力を注入してついでにキスマークも消して貰っている。夜毎付けられるキスマークは上から重ねられマジきもい状態だったので、キスマーク禁止を言うとおっさり私の体からキスマークを消し去ってからもう一度付け直すイタチごっこ……

でもあのキスマークだらけの体をフーランに見られる事は無くなったのがせめてもの救い

そして着せ替え人形のような服を着せられてからまた抱っこして移動

チョンマゲに見られると煩いけどご飯を食べるまで歩く元気すら無い

「大丈夫ですか王妃様」

「お腹すいた……」

「昼食は既に用意してますので存分にお食べ下さい」

先に食べればいいんだけどどうしてもお風呂が先なのは譲れない

フーランに抱っこされ廊下を行くと久しぶりに管理人さんの頭が見えるのでつい声を掛ける。

「あっ 管理人さん久しぶり」

相変わらず跪いていて顔が見えない

「王妃様！ ご無礼をお許しをー 直ぐ消えますのでご容赦を」

「……フーラン管理人さん何してるの？」

「恐らく許可なく王妃様の側にいる事言ってるんだと思います」

「ええー 側を通るのも駄目なの」

「はい、しかも男など言語同断で許可なく王妃様の視界に入る事すら許されません」

「面倒くさいな…今許可するから顔を上げて」

ハッキリ言って管理人さんの顔に興味があった。 何時も顔を床に付けてるから顔を一度も見えていない、人間見れないと思うと寄り一層見たくなるもの

しかし中々顔を上げてくれない??

「マッカーサングウイ、王妃様が御所望だ顔を上げよ」

すると飛び上がらんばかりに顔を上げると顔は真っ青

だが矢張り美形だった。茶色い髪に赤い瞳のジャーニーズ系

可愛い美少年タイプ

しかも今にも泣きそうに目を潤ませて何とも保護欲?守ってあげたくなっちゃうような子

しかしマッカーサーなんて厳ついサングラス掛けてパイプを咥えた歴史上のおじさんのような名前で似合わない

ジャーニーズ系だからマッキーが良いわ!!

「マッキー そんなに畏まらなくてもいいのよ」 そうだご飯一緒に食べましょう」

「「マッキー??」」

チョツと碎けすぎかな?

でもマッキーがピッタリ

「王妃様なりません。陛下以外の男と食事は色々問題がありますのでお控えください」

相変わらず硬いフーラン

「そうなの… 牡丹の君も遊びに来れ無いって言うし、深紅の薔薇の君も当分は会えそうも無いから、偶には他の人と話したかったのに」

「王妃様……」

「そうだー！マツキーが女になれば良いんだわ」

「「ハッ！！？」」

「チヨンマゲもルインさんも女に成れるんだからマツキーもなれるでしょ？」

ところが青い顔で首を振る。

えっ無理なの？

「恐れながら体を変化させるのはかなりの神力を必要としますので私もありますがマツカーサングウイも無理で御座います」

あの二人ってそんなに凄いんだと改めて感心する

「じゃあ 女装でいいからお願い一緒にご飯食べて」

綺麗過ぎる人ばかりでマツキーぐらいの可愛いタイプは珍しい

そう……マツキーは癒し系

オドオドしたところも美形らしくなくまるで小動物ような愛らしさがあった。

そしてとうとう二人は折れて私の願いは叶えられたのだった。

そしてマッキーの女装はなんの違和感も無い！

可愛い美少女でとても成人男性とは見えないのがチョツと気の毒なくらいだ

衣装は私のを貸してあげると言ったのに丁重に断られ、フーランと同じ侍女用の着物で白い着物に紺色のひだスカートのような物を着ていてとてもシンプル。

位が高い者だけが着る内掛けは二人は着ていないがその内にヒラヒラエプロンを着せようと企んでいる。

メイドさんポイでしょ？

何時ものように美味しくご飯を食べているけどヤツパリ一人

王妃の私と同席するのは憚られるらしいのでお給仕をして貰う事にしたのだ



女装で恥ずかしくプルプル羞恥心に震える美少年

癒されるわ〜

このまま侍女にしたいくらい

「マッキーはこの離宮で働いて長いの」

「はい／＼／ この離宮が完成してからなので一年半になります」

「一人でこんな広い離宮を管理してたんでしょ。大変そう」

「いえ、ここの者達は良く働いてくれますので私は指示をしたり帳簿をつけたりするぐらいでしたので」

頬を染めモジモジするしぐさは女の子

生まれる性別を間違えたんじゃないだろうか

それに対しフーランは男性的でカッコいい騎士のような女性

面白い組み合わせ

このまま侍女に成って欲しいかも

でも女装なんて男の子には屈辱的だよね……悪い事したかな

「ゴメンねマッキー 無理に女装させて。 今度はチョンマゲに許可を取ってお茶でも飲みましょ」

「いいえ！ 滅相ありません。王妃様が喜んで下さるなら何でも致しますが同席だけはご容赦を」

「そお…… なら今度湖の周辺を散歩したいから案内をお願いするわ」

「はっ…… はい ですが私は」

何故か下を向いてしまい暗くなる

代わりにフーランが説明してくれる。

「この者は先日の子ンチュングウイ様の一件で責任をとりこの度、職を辞することに成っています」

「……」

「えっえ！ そうだったの！？」

初めて知る事実

深紅の薔薇の君の事件は色々と後を引くけど結構旨くおさまったと思っていたのにそんな被害者がいたなんて知らなかった、マッキーだけが辞めさせられるなんて不公平

「ルインさんに言って何とかして貰うわ」

「王妃様お止め下さい。私はこのまま此処を辞めた方がいいのです」

「なんで？」

「私がこのまま此処に居ては何時かまた迷惑をおかけしてしまいます」

「迷惑？ どちらかと言うとマッキーの方が迷惑受けた方じゃ」

「違います。ミUNCHUNGウィ様が王妃様の元に押し掛けたのは私が父に教えた所為なのです。 そんな私が王妃様の側に居ればまた父が接触して来て色々聞き出そうとするはず」

なんか訳有りの子のようにだけとても素直で良い子そうだな

この場合は父親に問題があるのだろうか

何やら政治的匂いがあるのでどうしよう

う~~~~ん

「ここを辞めてどうするの」

「はい、一応教師でもしようと思っています」

教師か

なんだか生徒に虐められそう、悪ガキどもに授業妨害に遭ってオロオロするマッキーが容易に想像できてしまう。

中学生の時に気の弱い英語教師の若い先生がヤンチャな生徒の標的に成り授業妨害でPTAの問題になり数か月で辞めて行ったけど一

部女子には惜しまれていた。

一部の女子とは腐女子達、憐れな英語教師は腐女子達の妄想の糧にも成っていたのだった……ヤンキー攻め教師受け萌えと友人が騒いでいたっけ

私もその友人作の小説を読んだけど英語教師は現実より凄い目に遭っていて悲惨だったけど最後はヤンキーのリーダーとハッピーエンド  
どんな展開!!と思ったけど友人には言えなかった。

マッキーそんな不条理な目に遭いそうで心配

いや絶対そう言うタイプ↑単なる決めつけ

手元に置いて守ってあげたくなる。

母性本能をくすぐるのだろうか

「じゃあ私の家庭教師をしなさい」

「滅相ありません……私のような者が王妃様のお側にいられますん」

しかもフーランまで止めに入る。

「王妃様、男が側に仕える事は許されておりませんし家庭教師の件は丞相様が至急手配しております」

「だって手配するのにも人選が必要だとか言って中々決まらないじ

やない」

「もう暫らくのご辛抱を」

「それならマッキーが女の子に成れば良いんでしょう？多分チョンマゲに頼めばしてくれるわ！後はマッキーのやる気次第」

「私のですか」

「そう。親と縁を切って別人に成るのよ、そして女性に成って名前もマッキーに改名後私の家庭教師となれば問題無いはず」

我ながらなんて良いアイデア！

「別の自分」

何やら考え込むので興味はあるようだ

そうよ変身願望で誰にでもある。

特に自信の無いタイプはそういう意識が強いはず

「良く考えて見て、親と縁を切るのも性転換するのもかなりの覚悟が必要で直ぐには決められないだろう」

ところが私が言い終わらない内に返事をする。

「成ります！」

今までの態度とは正反対に即決してしまうので驚く

「エッ!! いいの!?!」

親と縁を切るのを即決させる親ってどんな奴!

私も過去何度も破天荒な母親と縁を切りたいと思ったけど実行はしなかったわよ

「はい、陛下がお許しに成るなら宜しく願ひ致します」

ガッバ!

そしてまた凄い勢いで平伏する。

「良いわよ。でも私の家庭教師に成るんなら平伏禁止よ」

「はい王妃様」

オズオズと立ち上がり頭を下げる。

これ位は仕方ない、なんと言っても私は王妃様と言う立場

ヤッパリ対等に話そうと思うと牡丹の君か深紅の薔薇の君しかいなさそう

ああゝ 牡丹の君に会いたい!

それより今夜どうやってこの件をチョンマゲに納得させるか考えるのだった。



## 私と二人の侍女のある一日

それから無事マツキーは正真正銘の女性に成り私の家庭教師兼侍女補佐に納まるけど私の努力の賜物

先ずはチョンマゲより先にルインさんに相談は私にとっての基本

直ぐ拒否されるかと思えば

「成るほど……相変わらず突拍子もない事をお考えに成りますねミユキ様は。確かにあの者を調べてみるとかなり優秀だったようですが周りに妬まれ陥れられて職場を次々と追いやられたようですし、実家でも正妻との嫡男が生まれて妾腹だったため立場を追いやられた様子。その者に家と性別を捨てる覚悟があるなら私は構いません」

マツキー ……

なんて見た目通りの人生なの

恐らく気弱な優しい性格が災いしたのね…官吏とは言わば国家公務員、出世するには色々な派閥やら同期のけ落としや上司への付け届けや根回し接待など裏工作の世界、マツキーはやらなさそだね…如何にも真面目に仕事に励むだけって感じ



しかも父親最低！　だけど亀族ではありがちな話らしい――　それ  
って愛人囲うのが常識って事？？　こんな悪習は徐々に消し去らな  
いと世に不幸な女性が増えるだけだわ！

そして次がチョンマゲ

「男をミュキの側に置けぬ！　許さん！　絶対許さん！」

「男じゃ無くなるんだからいいじゃない。　それとも女に性転換で  
きないの？」

「余にそれ位の事は動作も無い事」

「じゃあやって見せて！　フーラン、マッキーを連れて来てくれる  
」

予め隣室に控えていたマッキーを女装させて控えていたの  
をチョンマゲの前に突き出とつと性転換して貰い、後はなし崩  
しでそのまま家庭教師に納まる作戦

何事もタイミングとスピードよね！

しかし一つ悲しいような羨ましいような誤算があった

「マッキー　なんでそんなに胸が大きいのよー！ー！」

「もっ申し訳ありません……王妃様　私もどうしていいのか……  
／／／」

弾けんばかりの胸を押え恥ずかしそうに顔を真っ赤に染める姿は激

可愛い

押える胸はメロンが二つ入っているの？てかんじぐらいに膨れている上に細い体にアンバランス。何処のロリアニメから飛び出して来たのって感じできつと弟の理想が飛び出したような美少女

背も私より十？は高かったのに今は同じくらい

「酷い！ 何でこんな胸を大きくするのよチョンマゲ！ 私に対する不満なのね……うえっくんえん」

思わず泣いてやる！

「違うぞ！ それは断じて無い！！ 性転換はその者が持つ特性が出るのだ。それにミュキならどんなに胸が無くともミュキの胸だから好きなのだ！！」

「うっうう……胸が無いって言った！ 少しはあるのに…… えんーん……」

するとチョンマゲはうろたえてオロオロし何とか私の機嫌をとろうと一生懸命

「悪かったミュキ…… その者を家庭教師にしてよいから泣きやんでくれ」

「本当……」

「本当だ。ミュキの好きにしてい」

「じゃあ…許してあげる」

女の涙って最強だと改めて思うけど、これがチョンマゲ以外に有効なのは今だ謎だ

試す気は無いけどね。

それにチョンマゲの視線は一度もマツキーの胸には向けられず、反対にフーランは食い入るように見ていた。確かにフーランもあまり胸がある方でないので羨ましいんだろうと勝手に思い親近感がわく。

それからマツキーにこの国の歴史や地理や習慣と字を教えて貰っているけど字にはかなり苦戦している。

「王妃様 此処はこのように流れるように筆を運ぶのです」

マツキーの少し高くて甘い声が響き心地よく耳に響く、当り前だ。ど声まで女の子だ。

「筆って苦手なのよ… しかもこの文字ってやたらと曲線が多くって絵文字みたい」

そうこの国の筆記用具は筆と墨!! 習字なんて小学校以来しやう

していない私には此処で挫折しそうよ

「王妃様の世界ではどの様な文字を使われているんですか」

最近かなり打ち解けて来たマツキーのお願いなので久しぶりに漢字を書いてみる。

「それじゃあ私の名前を書くわね」

真っ白な紙に大きく深雪と書いてみると漢字は直線の多い文字だと改めて思う

「画数が多くとても造形の美しい字なのですな」

そう言いながらマツキーも私の字を真似て見事に深雪を書きあげてしまう。教え方も上手だし理解できない事は根気よく教えてくれるのでマツキーは教師に向いている。

面白いので漢字を色々書いてマツキーについでに日本語を教えるとひらがなと漢字をあつという間に覚えてしまう……確かにマツキーは頭のいい子

きつと上司がしっかりした人ならマツキーも官吏の世界で活躍できだろ事が想像できる。

親を選べないように上司も選べないのが悲しい

私もそうだったから…… 今では懐かしい

天帝は私に成りすまして会社で大人しくOLしているんだろうか……  
案外出世して課長ぐらいに昇進してたりして

神様がOLなんてシユールすぎて笑えない

「ねー 天帝ってこの世界でどんな存在なの」

「天帝様はこの世界を造られた創造神であり巨大な神力を持つ絶対神。この世は天帝様の気次第で滅びるとも言われ敬い尊ばれる半面破壊神としても恐れられているんです。普段は崑崙山に住まれ滅多に下界には降りられないのでそのご尊顔を拝謁出来るのは崑崙山の神々と四神国の王達だけなのです。 と言えどもまだこの世界の成り立ちの神話をお教えしていませんでした。」

そう言ってマツキーはこの世界の神話を話してくれる。

大ざっぱに要約すると、最初この世界は全てがドロドロの一つの肉塊が覆っていたが、ある時肉塊が一人の神となり、美しい海が産まれた。しかし世界で一人ぼっちの神は寂しさの余り死んでしまうそう。死んだ神の体は海の上の大きな大陸となりこの地が出来たのだが、まだ土くれだけの命が無い状態が長く続いたが、大陸の中央が徐々に盛り上がり、大地を突き破り、火の柱が立ち噴火が起こる。そこから最初に産まれたのが今の世界の最高神である天帝だった。

天帝は溶岩から色々な神を生み出し大地は命で溢れだし、その山―崑崙山の頂上に神々は住み地上を治めた。そして最後に人間を創ると地上に住まわしたが人間は凄い勢いで増え続け欲望の俤に大地を穢し破壊し始める。それに怒った天帝は、4匹の神獣を人の姿に変えて地に送り人間の国を4つに分け治めさせたのが四神国の始まりでその内の一つがこの玄武国

神話の神様がそのまま生きて存在している世界、正にファンタジー

でもあの天帝が創造神で破壊神と言うのは納得

私の元いた世界が破壊されない事を祈るしかない。

其の他にも面白い神話を聞いたり楽しんでいるとフーランがお茶を運んで来てくれる。

「王妃様ご休憩をしては如何です」

どうやらおやつの時間

「もうそんな時間、マッキーの話が面白いから時間を忘れちゃったわ」

ヤッパリ何かするっていいわゝゝ

学生の際は勉強なんて苦痛だったけど娯楽に乏しい世界では勉強も楽しく感じてしまう。現代社会は刺激的な遊びが溢れているから勉強なんて二の次に成ってしまうのよね

「そんな…私の話など…」

「マッキーは謙遜しすぎ。もっと自分に自信を持って胸を張った方がいいよ」

これだけの美少女で巨乳な上に頭がイイんだから私よりずっと恵まれている。

普通な私はどうすればいいんだろう

「はい、王妃様」

素直なマツキーは胸を反るようにま直ぐ立つと大きな胸がポヨヨンと揺れる。

羨ましい

そしてフーランもお茶を出しながら羨ましそうに横目で見やる。

ウン ウン その気持ちよく分かりますフーラン

「それよりマツキーは女の体には慣れた？ 男とはかなり違う」

「／／／ はい まだお風呂に入るのが恥ずかしくってフーランさんに手伝って貰っています」

「エッ！ 一緒に入ってるの？！」

「自分の体が恥ずかしく見れないものですから目隠しして一緒に入って貰っているんです」

なに！ その倒錯プレイはわ——！！！！

思わずフーランを見ると涼しい顔で慌てている風ではない

「最初に風呂に入った時に自分の裸を見て卒倒して長い間倒れたので危なっかしく、慣れるまで私が一緒に入っているだけです」

何て羨まし～～ いいな～～

「今度私とも入りましょ！ 三人で洗いっこしようよ！」

「めっ滅相ありません！」

「王妃様 一応、マツキーは男ですので陛下に打ち首にされる可能性が御座います」

「うっ！」

確かにチョンマゲなら言いそうかもしれない

「フーランのケチ： 私もマツキーの胸を生で見たかったのに」

「ご容赦を」

そう言って頭を下げられれば何も言えない

「それじゃあチョツとだけ揉ませてマツキー！」

この際、パワハラだろうがセクハラだろうがあのかくよかな胸の感触を一度確かめたい衝動に負けてしまう

「／／／！！！」

「なりません王妃様！ 王妃とあろう者が侍女の胸を揉むなど品位に欠けます」

「ずるゝい… フーランばかり触って」



「触っておりません！ 洗ってるだけです」

えっ！洗ってる。あのメロンのような胸を…冗談で言ったのに少しフーランが変な疑惑がわく

でも思えば私も洗って貰うしこの世界では可笑しい事では無いのか  
もしれない

しかし今日のフーランは厳しい

今まで王妃の品位なんて言わなかったのに

ガツカリと俯いていると

「フーランさん、王妃様が喜んで頂けるなら少しぐらいなら私構い  
ません 〃〃〃」

マッキー 貴方はなんて優しく太っ腹なの！！

「いけません！ 王妃様になんて事をさせるんですか」

「すみません…」

何故かマッキーが怒られてしまい、可哀想な事をしてしまった。

こうなったらフーランがいない時なら触らせて貰えそうなので今度  
は二人っきりの時に触ろうと思うのだったが……

それ以降も触ろうとすると何処からともなく現れるフーランに邪魔  
されるのだった。

「フーランのケチ――――！！」

## 私と牡丹の君の告知

私が目覚めて既に一月が過ぎさり離宮での生活に慣れて後宮に戻るのが少々面倒くさく感じていた頃、久しぶりに牡丹の君が遊びに来てくれる事になった！

ルインさんに幾ら会いたいとお願いしても中々応じてくれず、この間、私に全裸を見た事をばらすと脅した所為で警戒されているのかと思い、素直な態度を示し続けたお陰なのか漸く合わせて貰えたのだった。

まるで恋人に会うように楽しみ！

マッキーとのお勉強中だったが

「王妃様嬉しそうですね」

「久しぶり牡丹の君に会えるからワクワクして昨晚は眠れ……無い  
と思ったけど寝れたわ……」

「……  
／／  
」

相変わらずチョンマゲとの熱い夜はお昼まで熟睡を保証してくれていたけど、私の体がもたないので三日に一度に制限しているんだだけ

ど、ついうつかり牡丹の君が来ると嬉しそうにしていたら嫉妬した  
チョンマゲが襲って来たのだ

女性にまで嫉妬するってどうなんだろう

チョンマゲにしろルインさんは嫉妬深いので神様ってそういう習性  
なんだろうか

嫉妬されるのはまだ愛されている証拠で

されなくなったらお終い?!

分かっているけど、体は辛いのが現実でもう少しソフトな性生活が  
送れないかと思案中なんだけど——思い浮かばないのが現実

精力を削るにはどうすればいいんだろうか?

精力増強剤ならあるけど減反剤なんて聞いた事ないし

あつたとしても誰もくれない

周囲は恐らく子供を待ち望んで期待されているのが容易に想像でき  
るから、そう言えば生理がまだ来ていない……色々有ったから不  
順の可能性もあるけどフーラン辺りに相談した方がいいのかな?…  
…!! 　　そう言えばマッキーにも生理って来るのかな?…?

そしてマッキーに聞こうかと思うとフーランが牡丹の君の来訪を知  
らせてくれる。

「王妃様、丞相様の奥方様がお出でに成りました」

「本当！ 直ぐにお通しして！」

マッキーは手際よくテーブルを片付けて、私は椅子から立ち上がり出迎えしようとするが、直ぐに牡丹の君の麗しい姿を見せる。

「ミユキ様御無沙汰しており申し訳ございませんでした」

優しく艶やかに微笑む牡丹の君！ 背後にはルインさんの姿が見えないので思いつきハグして歓迎する。

ガバツ！

「キャー 牡丹の君会いたかった！！」

「私もお会いしようございました」

二人でひっしとハグし合う

ヤッパリこういう女同士の付き合いはいいわー

牡丹の君からは花のような良い匂いして堪らない

「王妃様、 奥方様のお体に障りますので此方に御座り下さいませ」

体に障る？

「牡丹の君何処かお悪いんですか！」

「いいえ……そういう訳でも無いんですが 〃〃〃 実は今日はミ

ユキ様にご報告したい事が御座いましたの」

顔色も悪く無く、どちらかと言うと頬を染めて幸せそうなのが滲み出ていて何かいい事があったのが伺える

「そうなんですか？ 兎に角座ってからお話しましょう」

私に促されるとフーランが椅子を引き優雅に牡丹の君が座るのだがその動作まで美しく王妃のよう、私もせめて達振舞いぐらい王妃らしくしたので牡丹の君に色々教えて欲しいかも

それより今は報告の内容が知りたいので私は急かすように聞く

「何かいい事があったんですか」

「はい、実は私…先日漸く待望の卵を無事出産した事をどうしてもミユキ様に私の口から報告したかったのです」

「エッ！？ 赤ちゃんが出来たんですかーーーー！ おめでどう御座います…卵？ 出産？？？ ええっえーーーー？」

出産と聞きおめでただと思ったけど卵と言う不思議な単語に訳が分からない

「赤ちゃん出来たんですね？」

思わず聞き返してしまう。

「いいえ、卵を産んだだけで孵化するのは十月後ですわ」

孵化するって卵が割れて中から亀が産まれるの????

「……牡丹の君は卵を産んだんですか!？」

「はい」

にこやかに微笑みながら楽しそうな牡丹の君

「冗談？」

首を傾げてからかわれているのかな？

その様子を見た牡丹の君が噴き出したように笑い出す。

「うっふっふっふふふー」

「あっくく 騙したんですね牡丹の君！」

「酷いですわミュキ様 私は騙したりなど致しません」

「ええっー それじゃあ本当に卵を産んだんですか!！」

「はい! 何時もミュキ様には驚かされるので偶には私が驚かせたかったのです」

それから知った事実は人間の私には驚愕的な事だった。

卵から産まれるのは亀では無くちゃんと人間の赤ちゃんが卵を割って出てくるそうだ

どうやら神族の殆どは卵から生まれ人間の場合は赤ちゃんで産まれるなんて私には直ぐには信じられなかった。

神様と人間が婚姻を結んだ場合は神様と人間の両方の出産の可能性があるそうで神族の場合は卵で産卵？するので私の場合は卵か赤ちゃん両方を産む可能性あると言う

「私も卵を産むんですか！！！！」

ひえゝゝゝ 思わずムンクの叫び

「そうですが必ずとは限りません。もしミュキ様の血が多く出れば人間の御子様をお産みに成るのですがそうになると色々問題がでます」

「やっぱり人間だと亀族の人達が煩いんですか」

特権階級意識の強い世界ではありがちな話

私に対する深紅の薔薇の君の態度が亀族の当然の反応なんだろう

「それも多少ありますが陛下に表立って盾突くような愚かな者はおりません。それより問題は命の重さの違いにあります」

「つまり寿命ですか」

「そうです。非常に悲しい現実ですが神族と人間ではあまりに時間の流れが違うために、先に子供が老いて死んでいってしまう悲劇も起こります」

「もし人間だったらどうなるの」



「殆どの神族は人間に養子に出し育てさせるのが通例ですが、情の深い親は手元で育て成人した時に神族と婚姻を結ばせて寿命を延ばそうとする者もいますが稀です。しかも人間と婚姻を結ぼうとする神族は余程相手を想ってなければ出来ませんわ」

チヨンマゲ：

確かに命の半分を差し出すなんて究極の求愛

今さらながらに何て愛されてるんだろうと幸せになるけど、もし子供が人間だったらどうしようと恐怖が湧いて来る。

自分が全く老いないのに子供がどんどん年をとり死を看取らなきゃならない運命が定められているなんて何て残酷なんだろう：

さすがの私も悲しい気分になってしまう

「牡丹の君、折角のお目出度い話なのに何でこんな話しをするの：」

「陛下とミユキ様にとっては避けられない問題です。確かに杞憂に終わる可能性もありますが、この際亀族について知って欲しかったのです。私達亀族は神族の中でも神力が高いのですがその半面出生率が低い為に人間と交わりなんとか数を保っておりますが、今だ純粹な亀族の血を尊ぶ風習は根深い物があるのです。私は純粹な亀族の出でしたが夫の御両親は人間の血が入った言わば神位の低い出ながらその当時でも夫は丞相と言う国での最高の地位であってさえ私達の婚姻は反対されてしまいましたの」

そう悲しそうに言う

ルインさん程の男性でも人間の血が入っているからと言って反対されるなんて確かに差別意識の強い世界

「牡丹の君は気にしなかったんですか」

「お恥ずかしい話ですが小さい頃より厳しく育てられ何れは陛下の側室に成る為の後宮に入内するのを産まれた時より決められておりましたから人間の血の入った亀族など下位のものだとかバカにしていましてわ…」

陛下の側室??

「ええっ!! 牡丹の君ってチョンマゲの側室予定だったの!!」

「はい、何れ何処かの誰かがミユキ様のお耳に入れるでしょうから言っておきますわ。でも私は既に十八人も側室のいる後宮が恐ろしくって逃げ出たく成人してから毎日泣いて暮らす内に、とうとう陛下との顔合わせの時に泣きだしてしまいましたの。それを優しく慰めてくれたのが夫のルイングワイでお互い一目で恋に落ちてしまい、その時に人間の血を引くからといって差別していた自分が如何に愚かだったか気付かされました」

美男美女だからお互いに一目惚れしても可笑しくないし、設定がまるで王宮恋愛ドラマか小説を地でいっている。

「以外、ルインさんの略奪愛! なんてロマンチックなの。でもチョンマゲはごねなかったの」

普通なら牡丹の君程の美人をむぎむぎ逃すなんて勿体ないよね

「陛下は最初っから私になど興味などあらず夫に言われイヤイヤ会ったみたいですの」

確かに後宮には深紅の薔薇の君を筆頭に十八人の美女が取り揃えられていたからな…

しかもチョンマゲの趣味は特殊

牡丹の君はそれとは正反対

「そうなんだ…でもどうやって結婚を許して貰ったの？」

「陛下のお力添えと夫が両親を説得して、最後には祝福して貰いましたわ」

嬉しそうに頬を染めるが

私には絶対両親を脅して裏工作を巡らせるルインさんの姿が浮かんでしまう

「そう言えばルインさんとは何時結婚したんですか」

「二百八十六年前に成ります」

二百年以上前…

私にしたら江戸時代の出来ごと——時間間隔のギャップが半端無い！

でもその期間赤ちゃんが出来ないなんて本当に出生率が低いんだと納得してしまう

「そんなに…でも良かったですね赤ちゃんが出来て。その内私にも卵を見せてください」

「はい、陛下のお許しがあれば是非に」

「私も何時かはチョンマゲとの赤ちゃんが欲しいけど、出来るかな」  
チョンマゲはどうやらこの世界でも最高クラスの神様みたいだから子供を望むのは難しいのかもしれない、チョンマゲは子供が欲しいんだろうか？

「きつとミユキ様なら… と言いたい所ですが現実はどう甘くは御座いません。これは夫から聞いた話なのですが陛下はあまりに甚大な神力を持つ為に孤独なのだ。小さい頃に両親を亡くされた所為で取り残される恐怖を知ってしまった…そして己が持つ命の重さが全ての存在に置いて行かれると…そう思い込んでしまったようです。まだ陛下が王位を継ぐ前に狂ったように次々と女性を求められた時期があったそうですが誰も妊娠する事なく三十年以上が経った時にピタリとその行為をお止めになったそうです」

おのれ〜チョンマゲの嘘つき

自分から抱きたいと思ったのは私だけと言っていたくせに

もしかってキスの話も嘘なんだろうか

いや…それよりも、子供欲しさに女性を抱くなんて失礼な話だけど

それだけ孤独だったのチョンマゲ

「そんなに子供が欲しかったの」

「子供と言うより自分を越える者が欲しかったようです。取り残される孤独を救ってくれる存在を」

「そんなに寂しかったなら… どうして今まで伴侶を迎えなかったの？ そうすれば生涯一人にはならないはずなのに」

「愛してもいない者と数千年の時を過ごすのは苦痛と感じたようです。陛下が心をお許しになされたのは、私の夫とじいやのルイングウィ様だけで即位した頃には夫を伴侶に迎えようとしていたようですよ」

「チョンマゲってルインさんが好きだったの！！」

「恋愛感情とゆうよりは家族愛だったようですけど、夫もそこまで面倒を見れないとお断り申し上げたようです」

なんて滅茶苦茶チョンマゲ

「あっはははは…… チョンマゲにとってルインさんは特別なんだ」

「夫にとっても陛下は特別ですよ。私が卵を産んだ時も最初は私を労り喜んでくれましたが最後に言った言葉に私は結構陛下に対して嫉妬してしまいましたわ」

「なんて言っただんですか？」

「『これで私が居なくなってもこの子が陛下にお仕えしてくれるだろう』 自分が死んでからの事まで陛下を心配なされるなんて妻としては妬けます」

可愛く拗ねる牡丹の君

「確かに女としては自分だけを大事にして想って欲しいですよね」

「我儘でしょうか」

「私もそうですから同じですよ」

そして二人で見詰め合い笑い合う

「うっふっふっふっふっふ」

「くすくすくすくす」

そして突然思いついたように牡丹の君が言う

「そうだわ！！ ミュキ様、何れ私達夫婦は先に逝ってしまいます。だから今度卵を産むとして私はミュキ様の為に子供を残しますわ」

牡丹の君の言葉で嬉しさのあまり泣いてしまいそうになるがぐっと堪えて一、少々怒ってみせて言葉を返す。

「牡丹の君はまだまだ若いんですから今からそんな悲しい事を言うのは無しです！ でも子供はバンバン産んで下さいね！ 私も絶対子供を産んでお互いの子供達を結婚させましょ！」

「まー 素敵！ だったら絶対にもう一人は産まないといけませんわね」

「はい、頑張って下さい！」

それから卵を産む時の様子や卵が受精し産卵するまでにたった二十日間しか掛からないのに驚き卵の世話などの色々教えて貰う

そしてあつという間に牡丹の君の帰る時刻になり別れを惜しみながら次は牡丹の君のお屋敷に行く事を約束して別れるのだった。

その晩、私はチョンマゲにファーストキス疑惑を問い詰めようと思ったけど此処は不問に付す事にした。何故かと言うと、私に甘えるように食事を食べさす事をねだる夫の幸せそうな顔を見たら何も言えなくなってしまう。

寂しがりやな神様

チョンマゲ…… 愛は何時か変化してしまうかも知れないけど家族愛だけは生涯持ち続けよう

その為にも絶対子供を持とうと密かに誓うのだった。





## 私と王様と休日

その夜チョンマゲにベットの所で聞いてみる。

「チョンマゲは子供が欲しい？」

「丞相の妻から話を聞いて欲しくなったのか。ならば今から子作りに励もうぞ！」

そう言って飛びかかって来る夫に手でブロック

「昨日したから今日は無し！」

「ミユキのケチ：余は毎日したいのに」

それでは私の身が持たないのよー

イジイジとしながらも私の髪を玩具にして指でクルクル巻き付けている。

「それよりさっきの答えは」

「余は要らぬ。子供が居てはミユキとの時間が減るし子供に構って余を蔑ろにされてはたまらん。ミユキは余だけを見ていて欲し

い」

なんとも子供っぽい独占欲丸出しの甘い言葉にクラクラする。

それとも子供が出来にくいのを知っていて気遣った言葉なのかもしれない

「でも子供が出来なかったら周囲からまた側室を持てって言われない」

「心配はない。以前は丞相の奴が煩いので置いただけでミユキが居る以上何も言わぬだろう。余はミユキしか要らぬ」

相変わらずのストレート直球な言葉に今だ慣れない私の顔は真っ赤かその隙にキッスを仕掛けられ心も体もメロメロにされ結局二日連続セックスは濃厚で翌日起きるのは昼過ぎだった。

しかも目を覚ますと何故かチョンマゲがまだ寝室に私を抱き締めたまま寝ている。

最近はずまずにお仕事をしていたから久しぶりの休日なのかもしれない

目が潰れそうなほど麗しい夫の寝顔を眺めながらつくづく不思議

こんな綺麗な男が牡丹の君や深紅の薔薇の君ほどの絶世の美女を歯牙にもかけず私だなんて本当に変わってる。

チョンマゲと巡り会えたのも天帝のお陰だと性悪美少年神様に感謝し始めていた。

もう少し落ち着いたら向こうの世界に行って家族に会って事情を説明しに戻りたいと思っているが、本音は天帝が私に成ってとんでも無い事をしていないか心配なのよ

そしてチョンマゲの心音を聞きながらもソロソロ起きようかと抜けだそうとするが確りと私の腰に廻るチョンマゲの腕のせいで脱出不可能

偶には早く起きて身支度をして夫を起こしたいんだけど

もがいている内に当り前だけど目を覚ましてしまうチョンマゲが一層手に力を込めて離さない

「ミユキ　もう少し寝よう」

「今日はお休みなの？」

「そうだ仕事を頑張って片付けたから五日間の休暇を丞相に貰った」

臣下から休暇を貰うなんて本当に王様？

神力の高い者が王だなんて乱暴な選定法は甚だ疑問だけどあの天帝のしている事だから仕方ない？

「良かったね。それより私は起きたいんだから離してくれる？  
チョンマゲはもう少し寝ているといいよ」

途端に目をパチリと開けて起き上がる。

「ならば余も起きる」

そう言って私を抱き上げて瞑道を開けてサッサとお風呂に向かい当然のように一緒に湯船に浸かる私達

相変わらずの素早さ

何しろ裸で寝ているので服を脱ぐ手間は無い

恥ずかしがるのも今更になってしまっている。

チョンマゲの膝に乗せられながらゆったりと湯に浸かり寛ぐ

目の前には美しい湖面が輝いて優しい風が頬を撫で心地よいが、湯の中にはチョンマゲの髪が金の蛇のようにうねっているのが見え少し不気味だ

「ね…チョンマゲは髪を何故切らないの」

「切るのが邪魔くさかったただけだが」

「伸ばしている方が邪魔でしょ?!」

こんな長い髪を洗ったり、梳いたりする方が大変そうだけどあまり手入れをしていないのに、流れるように真直ぐな美しい金色の髪はただものでは無い。私の髪はくせ毛で絡まり易く毎朝フーランが香油をつけて丹念に梳いてくれるから纏まっているけど腰の辺りまで伸びた髪をこれ以上伸ばすのはきつそう

「ミュキが切ってくれるなら切ろう」

「切らなくて良いよ。このまま何処まで伸びるかギネスに挑戦よ」

此処まで伸ばしたんだから勿体ない。国庫がひっ迫したらこの髪を売ったら少しは足しになりそうだと不純な事を考えてしまう

「ギネス??      ミュキがそうして欲しいなら伸ばそう」

嬉しそうに言いなが体のあっちこちを触って来て少々妖しい雰囲気になって来る。

「ひゃっん……      こら、チョンマゲ触らないで……」

「今日は一日中ベッドで過ごそう」

朝からさかりだすチョンマゲは何処からそんなに精力が湧いて来るのかと呆れるけど私の体は昨夜の行為でヘトヘトだよー

「昨夜一杯したでしょ！      お預け！」

「うっう……      折角の休みなのにもっとミュキとしたい」

「無理だから。私は人間で体力が無いんだからそんなに付き合ええないの」

「今夜は？」

「酷いチョンマゲは体だけが目当てだったの……」

「ちっ違うそんな事は断じて無い！」

「じゃあ今日は無しでいいね」

「……」

不満そうな感じで渋々了承したようだ。

それからチョンマゲと着替えてから仲良く食事をするのだけど私の定位置はチョンマゲの膝の上になっており食べさせてあげるのが当り前になってしまっている。

こんなにくっついて直ぐに飽きられそうで怖い

それ以上にこの状況に慣れてしまっている自分も怖いのだった。

「はい これも美味しいから食べて」

魚の甘露煮のような物を口に持って行くと口を開けて食べさせて上げると嬉しそうに食べてくれる。私は自分の分も確り食べるけどチョンマゲも良く食べる方で出された料理は二人で全て完食している所為か、出される料理が徐々に増えているような気がする。

気のせい？

「「ごちそうさま」」

二人で手を合わせて食後の挨拶

それからチョンマゲとまったりと寛いでお茶を飲む。

「ミユキは何かしたい事や欲しい物がないのか」

「なら、牡丹の君の卵を見に行きたい」

「む…」

牡丹の君の名を出すだけで不機嫌そうにする。

「チョンマゲが連れて行ってくれないならルインさんをお願いしますわ」

「明日でいいなら連れて行こう」

「ありがとうチョンマゲ」

チュッ

そのまま頬にキスをすると途端にデレつく

「お礼は口が良いのだが」

そんな事したら襲われるのでする訳にはいかない

「今度ね」

それからひらりとチョンマゲの膝から降りてフーランに声を掛ける。

「これから少し勉強するわ。マッキーを呼んで」

「宜しいのですか…」

「何が？」

フーランがチョンマゲの方へ目くばせするといじけた様に私を見ていた…：これはマッキーが委縮して勉強になりそうもないので諦めるしかないよう

「そうだ！ 今日にはチョンマゲが字を教えて」

途端に機嫌を直し満面の笑みを浮かべて字を教えてくれる事になったけど私の下手糞な字を誉めるばかりでとても教師には向いていないので、マッキーがくれた課題をひたすら練習するだけで自習と変わらなかった。

「ミユキはどうして字を覚えたいのだ？」

不思議そうに聞くチョンマゲ、字を覚える事が変なんだろうか

「だって字を書けないと恥ずかしいでしょ」

「字を書けない者など大勢いるぞ。 亀族は別だが人間の半数近くは読み書きも出来ないのが当たり前で暮らしている」



「私のもつとこの国の事を知りたいから、勉強もして本を読んだりもしたいの。美味しいご飯を食べたり着飾っているだけなんて退屈よ。王妃なんてチョンマゲの横に居るだけでいいんだろうけど私はそれだけじゃ嫌なの」

「ミュキは何かしたいのか？」

「さあー だから何をしたいか知る為の勉強じゃない」

「やっぱりミュキは可愛い」

そう言っとうつとりと私を見詰めるが、今の言動に何処が可愛いのか？？

「むっ… バカにしてる」

「しておらぬ。 誉めているのだ」

全く親ばかならぬ妻バカのようなチョンマゲ

それから暫らくは静かに見ているだけだったが飽きて来たようで私に構い始める。

「ミュキ… 少しは余にも構って欲しいのだ」

私の肩に顔を載せすり寄って邪魔をして来るので鬱陶しい…休日にごろごろしている父を鬱陶しがる母の気持ちが良く分かる。これ以上は続けられそうもないので諦めよう

「それじゃ湖を散歩しよう」

「散歩」

「散歩も知らないの？ 外の景色を楽しみながら歩く事だよ」

「知ってはいるが…した事がない」

「一度も?!」

「歩くなど面倒なので空を飛ぶか瞑道を使えば楽だろう」

そう言えばチョンマゲが移動をする時は何時もそれで歩くのは部屋を少し移動するぐらい

ルインさんが怠け者だと言うのに今一ピンとこなかったけど今納得してしまう。

呆れてなにも言えないがこのままではいけない!

「それじゃあ私と初めての散歩よ!」

断然張り切りだす私に目を瞬かせるが

「成程ミュキとの初めて散歩か では早速行こうぞ」

そう言って立ち上がると私の手を取り玄関へと急ぐのだった。

それから湖の畔を手を繋ぎ散歩をする。

湖の周辺は整備されており小道が設けられ湖を一周出来て美しい花や木が植えられて湖周辺が巨大な庭園になっているのだ。本当に幾らお金を掛けたのか聞くのが恐ろしいが今は二人の散歩を楽しむ。

だけど普通王様には護衛が数人は付きそうだけど周囲には気配はなくフーランも付いてこなかった。

「普通は護衛とか付かないの」

「余を襲う愚かものなどおらぬし、折角のミュキとの散歩が護衛などとしては邪魔だ」

チョンマゲがこの国で一番力が強いと言っても数十人に襲われては危ない様な気がするんだけど本人は気にしてない様子

今一チョンマゲの強さが分からないけど神力の凄さは何度も目にしていたので心配するだけ無駄だろう

チョンマゲが私の手を引きながら歩調を合わせてゆっくり歩く

辺りは少しずつ日が傾き夕日が辺りを染め始めると湖の様子も一変して違った趣になる。

「綺麗だねー これからも一緒に散歩しよ」

「こうやってミュキと歩くのは好きだからそうしよう。それに景色を楽しむのも良いものだったんだな」

千年以上生きていて散歩も景色を楽しむ事をしないなんてどんな人生なの??

「チョンマゲって今まで何をしてたの??」

「さあ? 何をしておったのだろう…… きっとミュキが落ちて来るのを待っていたのかもしれない」

なっなにこの人!! 真顔でとんでもない事を言う

ドッキュー——ン!!

チョンマゲのその言葉で心臓と足が止まった。

「どうしたのだ?」

カツ————

恐らく私の顔は夕陽のように真っ赤だろう

「うっ……チョンマゲは私を殺す気 / / /」

「余がミュキを殺すなどとんでもない! 何を言っておる??」

どうやら素で言っただけらしい

恐るべし天然

「もういい…… お腹すいてから戻ろう」

そう言って誤魔化して戻るべく夫の手をひっぱりながら幸せを噛み締める。

一体私の何がチョンマゲにこうまで想われるのかは分からないけどこんな時が永遠に続くのを願うのだった。

## 私と王様と卵

翌日はお忍びでルインさんのお宅訪問！

何しろチョンマゲが瞑道を開ければ一瞬でルインさんの屋敷の一室と繋がるんだから、正にドラ○ものの「どこでもドア」のような業で便利

普通だと何人もお伴を連れて馬車などに乗って時間を掛けて移動したり色々面倒くさそうだけど、瞑道を使えば人知れず移動が出来るやう！

先日来た牡丹の君も予めルインさんが渡した瞑道を開ける玉を使って移動していたようだ。何しろ私は王妃なので会うのにも本来は色々手続きが必要らしく滅多に会う事が出来ない存在らしい

だから牡丹の君もこっそりと会いに来るしかないよう。

それに一人だけと懇意にすると周りが最賈だと煩く、私が色々な亀族との付き合いを広げていかなければなくなり私の負担が大きく掛かって来るので今のところ人目を忍んだお付き合い

王妃って本当に面倒な立場

チヨンマゲに抱っこされ暗い瞑道を通り出口に向かう

この真っ暗な深淵の何処かに私の世界と繋がっているらしいけど私には生命反応も光も何も無い闇でしか無い

「そう言えば私の世界に一度だけ戻りたいんだけどいい？」

「ミユキの気持ちは分かるが、向こうには天帝がおるので余はあまり関わりあいたくないのだが」

洩る気持ちはよく分かるけど私もあの性悪美少年…私に為り済ました天帝が家族に何かしていないか心配なのだ

「最後に家族にお別れを言うだけだからお願い」

「ミユキの頼みなら致し方がないが暫らく待ってくれぬか」

「うん 有難う！」

やったー これで家族にお別れが言えるしもう一人の私に注意し接近禁止を促せる。天帝は既に二年以上も私の世界に留まっている計算だけど此方に帰る気配は無いらしい

自分の世界を留守にして大丈夫なんだろうか？

「陛下、ミユキ様　よく御出で下さいました」

瞑道を抜けると牡丹の君が頭を下げて出迎えてくれたので、直ぐさま飛び付きたかったがチョンマゲが私を確り抱っこしていた為に諦める。

「うむ」

「早速卵を見にお邪魔しちゃいました」

「有難うございます。陛下とミユキ様に祝福を受けるなど瑞祥の極み、夫に代わりお礼申し上げます」

艶やかな赤い衣装を纏いながら深々とお辞儀する姿は畏まっている。やっぱりチョンマゲがいる所為だろうか、一人で来ればよかったと後悔

「ルインさんはいないの」

「はい、夫は王宮に出仕しておりますので、代わりに十分お持て成しするように言い遣っております」

チラリとチョンマゲを見ると何故か視線を逸らす。

そうやら休暇は貰ったのでは無くルインさんに押し付けたのだろう……なんだかんだと言ってチョンマゲには甘いよねルインさん



「そうなんだ、今度はルインさんが休暇をとって牡丹の君とゆっくりして貰ったらいいんじゃない？　ねえ、チョンマゲ」

「そうだな……」

「チョンマゲが今度ルインさんに代わってお仕事してくれるって。良かったね」

「ミュキ様そのようなお気遣いは無用です…我等は陛下の臣下なのですから」

「でも今までチョンマゲは何百年も仕事をサボり続けたんだから五日間ぐらいルインさんが休んでも大丈夫よね！」

「うっ……そうだな」

「牡丹の君！　チョンマゲがルインさんにお休みをくれるって良かったね」

「ミュキ様……」

牡丹の君は戸惑っているようだけどこの際ルインさんに恩を売っておこう

ルインさんはねちっこく五日連続で励みそうだから二個目の卵が産まれるかも知れないし楽しみ

「それより牡丹の君の卵を見せて下さい」

「はい。今持って参りますので此方でお待ち下さい」

そう言って部屋を辞して侍女が出してくれるお茶をチョンマゲと二人で待っていると直ぐに籠を大事そうに抱えて戻って来る。

「お待たせして申し訳ありませんでした」

テーブルの上に置かれた籠の中にはメロン位の大きな赤いボールのような卵

想像した物とは大いに違っていてビックリ

とても卵には見えない

「これが牡丹の君の卵なんですか……こんな大きいくって産む時に殻が割れ無いんですか？」

なんだか殻を途中で割っちゃわないんだろうかと疑問

「／＼／ 産まれる直前は殻も柔らかいので大丈夫ですの……」

恥じらいながら説明してくれる

成程と納得する。

「卵を余に渡すがよい」

珍しく牡丹の君に声を掛けるチョンマゲ

「はい、陛下。 宜しく願います」

牡丹の君が大事そうに卵を手に取りそつとチョンマゲに手渡す姿はまるで一枚の絵のように決まっております私ではこうはいかない

私とのあまりの違いにいじけそうだけど私は負けない！

ファイトよ深雪！

それより何をするのか気になる。

「卵に何をするの」

「余の神力を与える事で神力の高い亀族が産まれるのだ」

「へー」

そう言いながらチョンマゲが両手で包み込むようにすると卵が仄かに光る。

「陛下がこのように卵に自ら神力を注いでくれるなど初めての事、きっと強い子が産まれるはずです」

嬉しそうに喜ぶ牡丹の君

いいなー 私も神力があれば分けてあげたいけど何も出来ないのが寂しい

「ミユキも抱いてやるがよい」

「私もいいの」

「是非ミュキ様も抱いて、祝福をお与えください」

チョンマゲに渡される卵を恐る恐る受け取ると、仄かに温かい

「祝福って何をすればいいのかな」

「ただ抱きしめて下さるだけでいいのです」

牡丹の君に言われるままそっと抱きしめると確かにそこに命が宿っているのが感じられ愛おしさがわいてくる。

思わず頬ずりしてキスをして見る

チュッ！

「元気で産まれて来てね」

するとフルツと卵が震えて

《 かわいい 》

小さな男の子の声が聞こえたような気がした。

「ミュキ！ その卵を直ぐ置いて離れよ！！」

するとチョンマゲが低い声で私に怒りだすがその目は鋭く恐い

初めての態度で訳が分からない……私なんか悪い事をしたの……

「えっえ？？ 何で」

「ミユキ様、私にお渡し下さい」

牡丹の君が顔を青褪めさせて私から慌てて受け取り籠に戻すと一目散に部屋を出ていてしまい訳が分からない

チョンマゲはチョンマゲで不機嫌そう

「何があつたの チョンマゲ」

「卵のくせに余の目の前で口説くなど許さん！ ミユキも何故口付など致すのだ！！」

口説く？ 卵がどうやって？

「だって卵でしょ？？？ 可愛いからキスしただけで他意なんてある訳ないし…もしかしてさっき聞えたのは卵から？？」

確かに可愛いって聞こえたけど

卵が話したの？？

「そうだ。僅か四日で思念を送りミユキを口説くとは据え恐ろしい……悪い芽は早々摘んだ方が」

何やら物騒な事を呟き始める。

「あのねチョンマゲ、卵に焼餅やくななんて変だよ。それに私の好きなのはチョンマゲだけだから変な事を考えないで」

そう言いながらチョンマゲの膝に乗って機嫌をとるために夫の美しい唇にキスをする。

チュッ！

一瞬の触れるだけのバードキス

「もっと」

どうやらこれだけでは満足しないよう

キスって自分からするのって苦手だけど、牡丹の君の大事な卵を守る為には頑張ろう

再びチョンマゲの唇に唇を重ねるだけのキスを数秒して離れようとするがガツシリと抱きしめられ離すのを許さず、恐らくもっと違うキスでつまり自分から舌を差し入れディープキスをしろと言うのだろう

完全に足下を見られているが仕方がない

おずおずと自分の舌をチョンマゲの唇の隙間に差し入れると歯に当たるが開かない

うっう……意地悪だ

仕方なく何時もされているように歯や歯茎を舌でなぞり刺激して行くが私の小さな口ではカバーしきれず巧く出来ないせいかわ動だにしない

目を開けて顔を真っ赤にさせて睨むと、目を見張るようにギラついた目とぶつかる。

しえゝゝゝ 吞まれるゝゝゝ と思った瞬間にはチョンマゲの舌が私の口内に入って来て責め始める

うつうつゝゝ 苦しいゝゝゝ

そして激流にのまれ溺れる猫のように溺れて気が付けば何時の間にかベッドの上で裸に剥かれて深く交わって啼かされてしまうのだった。

ぐううううーーーーーーーーきゆるきゆるきゆるーー

そしてお腹の虫の音で目覚めて見れば朝

お昼も夜御飯も食べれずお腹の虫が悲鳴を上げているのに満足そうに私を抱き締めて寝る夫の鼻を思いっきり噛んでやる。

ガブー！

「!!」

目覚めた夫の耳にすかさず

「当分お預け——————!!」

鼓膜が破れようと構わず大声で叫んでやる。

グラクラクラ~~~~~

あああ……眩暈が……

それだけで再び気を失ってしまった私は二度と自分からキスはしないと誓うのだった。

ミュキがあまりに可愛く余の唇に吸いつくのでその姿を堪能していると真っ赤な顔で目を潤ませて見詰めた所為で理性が切れてしまった。

深くキスを交わしても足りずに急いで瞑道を潜り寝室に戻ってミュキを貪り尽くしてしまう……可愛すぎるミュキが悪いのだ

可愛くて可愛くて本当に食べてしまいたい……異常だろうか



余も天帝の事を言えない

ミュキに対して狂ってしまったているのかもしれない

卵を愛おしそうにキスする姿に思わず卵を叩き割りたくなり、しかもミュキに対して可愛いと囁く思念を聞いた時完全な殺意が湧いてしまったが、そんな事をすればミュキに嫌われてしまうのでおし留まる。

なんと忌々しい卵

しかし既に自我が芽生えているとは次期王の資質があり喜ばしいがミュキに興味を持っているのが気に食わない

余に夢中のミュキが子供などに目を向けるとは思えないが丞相の妻や元側室に目を奪われているのもたしか

今だ性別も分からない核しか出来ておらぬくせに、産まれて来るのは恐らく男子

しかもあの二人の子ならば抜けた美形だ

百年後には立派な大人

不安がよぎりつついついミュキを抱き潰してしまい少しやり過ぎたかと後悔

恐らく目覚めたら怒られるのを覚悟し当分お預けだろうかと又後悔

死んだように眠る妻に神力を注ぎ体力を回復させておけば少しは怒りは和らぐかと思いきや

「当分お預け——————ン!!!!」

ガ——————ン……

「ミュキ……」

ぐうううう——————きゆるきゆるきゆる——

そして直ぐに気を失ってしまったミュキのお腹の中から聞こえる盛大な腹の虫を聞いて、急いで侍女に食事を用意させてミュキの眠る寝室に運ぶとその匂いを嗅ぎつけ目を覚ます。

「ご飯！」

以前から思っていたがミュキは食べ物に対する執着は並みならぬものを感じる。

普通は宝石や煌びやかな衣装を強請るのに其の辺には興味を示さず、美味しい物に目がなく幸せそうに食べる姿が気に入っている。

すかさず箸でミュキの前に料理を運ぶとパクリと小鳥のように啄み美味しそうに料理をお腹に納めていき徐々に機嫌も直って来る。

「チョンマゲ、もう自分で食べるからお箸頂戴」

少し元気が出て来たようだが、何時もミュキにやって貰っているが

食べさせる行為も楽しい

「何時もは余がして貰っているから今はさせてくれ。さっ　ア—  
ンをするがよいミュキ」

そう言うのと恥ずかしそうに頬を染めながらも食べてくれ、可愛くて  
堪らない

人に食べさせるのがこんなに楽しいとは知らなかった。

ミュキにもし卵が産まれたら毎日愛おしそうに卵抱きしめキスをす  
るかと思うと腹が煮えくり返そうだし、子供に食事を食べさせる姿  
など見たくもない！！

子など要らぬ！

ミュキを誰かと分かち合うなどあり得ない

幸い子が出来る確率は殆どないと言ってよいだろう

丞相の息子が王になる器ならサッサと王位を譲り隠居して誰にも煩  
わされる事無く二人で暮らせるかもしれない

そんな事を夢みながミュキとの休日を楽しもうと思ったのだった。



## 丞相と卵と休暇

妻の知らせを聞いて急いで屋敷に戻るとオロオロと顔を青褪めさせた妻が待っていた。

「アンチョン大丈夫かい」

「あなた！ 申し訳ありませんお仕事中なのに……でも私どうしていいのかわからなくて……」

今にも泣きそうな程うろたえているので落ち着かせる為にも抱きしめて一緒に長椅子に座り背中を擦ってやる。

「一体何があったのだ？」

「どうしましょ……私の可愛い卵が陛下に殺されてしまうかも……貴方どうしたらいいの うっううう……」

初めて見るアンチョンの取り乱しように胸が締め付けられる。

「何故、陛下が卵を殺すのだい。 ミユキ様と何かあったのか」

優しく問いたです。

幾ら陛下でも私の大事な妻と卵に理不尽な仕打ちをするならばそれなりの覚悟がある。

「はい……」

それから妻の語った話に啞然とする。

「卵の子が思念を使いミュキ様をかわいいと言ったのかい!？」

「それを聞いた陛下は凄まじい殺気を放ち卵を割らんばかり睨みつけるので私は恐ろしく、ミュキ様より卵を受け取って別室に隠しましたの……それから暫らくして無礼を謝る為に戻ったのですが既に姿がなく……」

それぐらいで嫉妬するなど陛下が悪い

「大丈夫だよアンチョン。恐らくミュキ様が陛下にとりなして下さっているはずだよ」

そう言うとき少し安堵の表情を浮かべる。

「ミュキ様が」

「ミュキ様は優しいお方だから卵を殺すなど非道な事をさせるはずがない。私も明日ご機嫌を伺いに行くから何も心配するな」

「ゴメンなさい貴方……ご迷惑を掛けてしまつて」

「迷惑などと、私はアンチョンの為なら何でもしよう。さあ少し眠るといい まだ卵を産んだばかりで気が高ぶってるおるのだろ

う」

漸く落ち着いた妻は暫らく抱きしめてやっていると安心したのか寝息をたて始める。

余程混乱していたのだろう

可哀想に

寝室に連れて行き寝台に寝かしつけてから卵の部屋に向かう

嚴重に結界の施された部屋に行き扉を開けて入ると中央の台に納められた卵に近ずき、手をかざして神力を注ぐと卵が光り出す

毎日帰って来てから卵に神力を注ぐのが日課になっていた。

まさか産まれて四日しか経たない卵が自我を持ち思念を送るなど信じられないが、試しに語りかけてみる

「お前は悪い子だ母を泣かすなど」

《ゴメンなさい》

すると直ぐさまに応じるよに思念が飛んでくる。

「!!」

驚いて言葉が出ないとはこの事かと思わず微動だに出来ずジッと卵を見詰めてしまう

まさか陛下が神力を与えた所為か??!!

「…… 私が誰か分かるかい」

《 ちち 》

凄い、私を父親だと認識している。

「そう父親だ。今日何が起こったのか話してごらん」

《 ミュキ あった かわいい すき 》

すきとは好きの好き!!

僅か生を受けて二十四日しか経っていない命がここまで自我を持つなど信じられず、我が子ながら据え恐ろしい

しかしこのままではアンチヨンの気が休まらないので釘を刺すしかないが……

理解できるだろうか？

「よいかミュキ様は我々亀族の王の妃なのだから軽々しく好きとは言ってはいけないお方。その所為でお前が陛下の恠気に会い殺されるかもしれない。そうなれば母は嘆き悲しむがよいのか？」

《 いや…… でも へいか きらい 》

「陛下は確かに心の狭い我儘なお方だがこの国で一番神力の高い亀族。産まれたばかりのお前では敵わない相手、強い相手に従うのが



この世界の不文律だと理解しなさい」

《 ミュキ すき ダメ…… 》

「ミュキ様は陛下のものだ諦めなさい」

好きの意味合いが今一どの様に理解しているのか分からないがミュキ様を好きとは我が子ながら趣味を疑う

明らかに陛下の神力が影響しているのではないかと心配だ

そもそも与える神力によって人格が形成されなど聞いた事もないのだが

母親以外の初めての女性として認識したせいだろうか、こうなれば美しい娘を数人揃えて世話をさせれば審美眼が改まるだろう

こうなれば卵の内から早期教育で確りと育てなければ陛下のようになっってしまうな予感がする。

我が子の誕生に喜んでいたのも束の間で新たな悩みの種を背負い込んだような気がするのは気のせいだろうか

「兎に角、母と陛下の前でミュキ様を好きなどと言ってわならぬ。分かったな？」

《 はい ちち 》

取敢えず素直な物分かりの良い子のようにだと一安心するのだった。

翌日はアンチョンも落ち着くと我が子との会話に喜び安心して王宮に出仕してから政務を終えてから陛下のいる離宮に立ち寄る。

「陛下、昨日は色々ご迷惑を掛け大変申し訳ありませんでした。妻は気にするあまり心労で倒れ今朝も起き上がれないほど気を伏せてしまい、なんとお詫び申し上げてよいかと伺いに来た次第です」側にはミュキ様も座っており私の言葉に目を向く

「牡丹の君は大丈夫なんですか！」

「体は異常ございませんが精神的に弱って、陛下に卵を殺されないかと気に病んでいる様子。幼い子の何気ない言葉に反応するなどあまりに大人げないのではないですか」

「むっ そなた余に詫びに来たのではないのか！」

「だから最初にお詫び申し上げましたでしょ」

「そうよチョンマゲがあんな事で怒るから悪いのよ！ 牡丹の君が心配だは私がお見舞いに行きたいけどチョンマゲがいるから無理よね」

ミュキ様の申し出は嬉しいが陛下が来てはアンチョンが気が張る。

「心の狭い陛下がミュキ様一人を我が屋敷にお寄越しになるとは思えませんが、陛下をアンチョンに会わすわけに参りません」

「そうよね…… 牡丹の君がこれ以上伏せってはお気の毒だわ」

「ミュキ……」

そう言って冷たい目を陛下に差し向けると途端にあたふたと顔を青褪めさせる陛下

陛下に反省させるのはミュキ様の言葉が一番

我が妻の憔悴ぶりに比べればまだまだ

「そうだわ！　ねえチョンマゲこの際牡丹の君に元気になって貰う為にもルインさんに休暇をとって貰って側に居て貰いましょう！！」

「えっえっ」

「はっ！？」

相変わらず突拍子もない事を言いだすミュキ様

だが妻の側にいられるのは嬉しいかもしれない

「しかし丞相が居なくては政務が滞る」

「昨日は良いっていたじゃない！　国を動かしてるのはルインさんだけじゃ無いんですよ。チョンマゲの王様らしい姿を見たいわ……そ

れともチョンマゲって無能」

「別段丞相が居なくとも余が丞相の分まで確り国を動かせる」

「ルインさん、チョンマゲが大丈夫だって言うからこの際十日ぐらい休暇をとって牡丹の君とゆっくりマツタリして下さいね！」

「はあー ……」

流石ミュキ様、陛下の手綱を確りと握っておられる…陛下の惚れた弱味か

「ミュキ、余は許可した訳では無いぞ」

「いいじゃない十日ぐらい 少しはルインさんを労らないと髪が全部白髪になっちゃうわよ。若白髪の旦那様を持つ牡丹の君が可哀想」

しつ白髪… ここ百年余りに徐々に増えて来ているが

アンチョンも私の白髪を気にしているのだろうか!!!

すると陛下が私の髪を労しそうに見詰める。

一体誰の所為で白髪が増えたと思っているのだと陛下を軽く睨む。

「確かに丞相には苦勞を掛けっ放しであった。 十日は無理だが五日なら休暇を取り妻とゆっくりと過ごすがよい」

「本当ですか!？」

陛下が私を労るなど初めての言葉

「よかったねルインさん。これで又 子作りに励めるね！」

嬉しそうに言うミュキ様

子作り?? 何の話した

まさか休暇を貰えるなど、陛下にお会いしてから初めてかもしれない。

思い起こせば丞相の職に就く前は陛下の世話に追われ、丞相になったらなったで政務に追われ休みなど年に一日休みを取るか取らないかの頻度

生涯休暇など縁がないと思っていた。

五日も取ってもいいのだろうか

仕事漬けの私に言い知れぬ不安が心を襲う

そんな私の葛藤を読んだかのようにミュキ様がけしかけて来る。

「ルインさん偶には仕事を忘れて牡丹の君とラブラブしないと牡丹の君に愛想を尽かされますよ」

アンチョン……

政務に追われ結婚してからもゆっくり過ぎる時間も尽ならず王宮に泊る事さえあった私に不満一つ漏らさなかった愛しい妻

アンチヨンの為にも二人で過ごすのも悪くない

「それではお二人の御好意に甘えて明日から五日間の休暇を頂きます。政務の方は緊急な事は無いので二人の副丞相補佐がおりますので大丈夫でしょう」

「うむ、分かった余に任せよ」

陛下がこうまで言い切るなら安心だろう。そもそも私より優秀なのだから私が居なくとも立派に国を治められる方なのだ。

ただ単にやる気がないだけ

これも全てミュキ様のお陰なのだろう

私では陛下の孤独を癒せなかったが、こんな普通の人間少女が陛下をこうまで変えてしまうとは思わなかった。

容姿はアレながらミュキ様が陛下の伴侶で良かったと心から感謝してしまう。

「それよりミュキ、王の務めをチャンとしたら御褒美が欲しい」

「いいけど、何が欲しいの」

「また、アレをして欲しい!」

「／／／アレってまさかアレの事!!」

「そうだ、アレ以来してくれないではないか： だから褒美にしてくれぬか」

ミュキ様の顔を見れば顔を真っ赤に染めて恥ずかしがっている。

アレとは何だ?????

「もー 分かったわよ。 でもルインさんの休暇が終わった後だよ」

「ミュキ 約束だぞ」

そう言ってミュキ様に抱きしめて恥ずかしがるミュキ様を私の視界から隠すとサッサと帰れと言わんばかりに私に目くばせする陛下

私も長居をする心算もないので目礼をして離宮を辞し、愛しい妻が待つ屋敷に急ぐのだったが、陛下達の言うアレがなんなのか気になる…

恐らく碌でもない事に違いないだろう

それより今は妻との五日間の休暇をどう過ごそうかと想いを馳せるのだった。

そして屋敷に戻ると心配そうにアンチョンが待っていた。

「お帰りなさいまし貴方」

「体は大丈夫かい」

直ぐ体を抱き寄せ、シミ一つない額に口付を落とす。

「陛下は如何でしたか…」

「ミユキ様を取り成していたようで問題なかった。それにミユキ様のお陰で陛下が明日より五日間の休暇を頂いた」

「休暇?? 貴方がですか?」

にわかに信じられず問い返して来る妻

無理もない、結婚して以来ゆっくり一日すら過ごせずに寂しい思いをさせて来たのだから。

「陛下からのお詫びだそうだ」

漸く休暇の言葉を受け入れた妻は

「嬉しい! 五日間も貴方とずっと過ごせるのですね! そう言えばミユキ様がそのような事を陛下に頼んでおいででしたわ」

さっきとは打って変わり華のように笑顔を咲かせる。

そのような会話があったのかと初めて知る。



「そうだ、王都の側は忙しないので賀州にある別荘であの子も連れて家族で過ごそう」

「はい！ あの子も喜びますわ。 今日是一杯お話をしましたの」

「ほ… 何を話したんだい」

「主にミュキ様の事を話すと特に喜んでましたわ」

「ミュキ様の」

「あの子もミュキ様の愛らしさに感動している様で、もしミュキ様に可愛い女の御子様が出来たらお嫁に欲しいと、もうそんなおしゃまな事を言うので驚かされます」

そう嬉しそうに無邪気に報告する妻

くらりと眩暈が起きる…

どうやらミュキ様から御子様に乗り換えたようだが、恐るべしは我が子

既に知能と自我は十歳程度まであるのではないか。

陛下は知らないが私ですら自我を認識したのは殻を割って生まれて一年経てから

しかも何故そこまでミュキ様の容姿を感動する程可愛いと言えるのだ??

思えばアンチヨンもミュキ様の事を可愛い、愛らしいと連呼する。

初めは陛下の伴侶に対する気遣いだと思っていたが心の底から愛らしいと思っているのに最近気が付いた……。もしや私に審美眼の方が可笑しいのかと不安になる。

「どうしたのですか貴方？」

急に黙り込んだ所為でアンチヨンが不安げに声を掛ける。

「あの子の成長の速さに驚いているだけだよ。それより明日からの予定を二人で話そう」

「それではお酒の用意をします」

そう言って喜び勇んで部屋を後にする妻の姿を温かく見守り、椅子に座り待つ事にする。

我が子の将来を今から憂えても仕方がない

今はミュキ様に感謝し、五日間の休暇を妻と如何に過ごすか考える事にするのだった。



## 丞相と卵と休暇（後書き）

今日でアルファポリスファンタジー小説大賞の投票が終わり、35位の好成績で終わる事が出来、読みに来てくれた人、投票してくれた人達に感謝申し上げます。

後1話で第2章を終わらせて11月位から第3章を始める予定です。これからも「私と王様」を宜しく願います。

## 私の王様

ルインさんと牡丹の君はそれから休暇をエンジョイしたらしくお礼と称しお土産を持って牡丹の君が遊びに来てくれたのだけれど今まで以上に艶やかで美しく幸せで輝いていた。

その美しい姿を堪能しながら楽しい一時を過ごした後の二十日後に牡丹の君が卵を出産したのを知った。ルインさんなんてグッジョブ!!!!

思わず心の中で拍手喝采を送ってしまう。

当のルインさんも困惑しているらしく、これ程連続して卵を産むなど玄武国でも歴史上例を見ないと話してくれたがその顔には常に嬉しそうな笑みで湛えられていたのだった。

私と言えば順調に生理が来ており妊娠の兆候は無いけど牡丹の君さえ2百年以上も待って漸く授かったのだから気長に待つしかない。

そして今だ離宮に住み続け後宮には戻っておらず六ヵ月が過ぎ去ろうとしているある日の午後、何時も通りマッキーから字を教えて貰っているが幼児が書くレベルぐらいには上達したけどマッキーは私の日本の平仮名、私が書ける範囲の漢字をマスターしてしまった……

「マッキー これでいいかなー」

「はい、だいぶ上達してきましたよ。ですが此処をもう少し丸めたほうがよろしいかと」

そう言って筆を持つ私の手にとって筆の運びを教えてくれるのだけどその時に背中や腕に触れるマッキーの胸の感触を密かに楽しんでいる。

ぶにゅぷにゅ

ううっー気持ちいゝゝゝ 堪らん！

そんな邪まな事を考えていると、またしても邪魔しに来るかのよう  
にフーランがやって来る。

「王妃様！」

「ゴメンなさい！ 触ってません 感触を楽しんでるだけなのゝゝ」

行き成り飛び込んでくるので思わず謝ってしまう。

「……」

呆れたように私を見るフーランと頬を赤らめるマッキー

えっ てっきりマッキーの胸の感触を楽しんでたのがばれたのかと勘違い

「違います王妃様。 丞相様のお屋敷から卵が無事に男子の御子様  
が孵化されたと知らせが参ったのです」

孵化??？　つまり殻を割って産まれたって事!!

「きゃーーーーー　本当に!!　万歳ーーーー」

両手を何度も上に上げて万歳をして喜んでいるとある事に気付く

「アレ……　孵化するのは後四カ月後じゃなかったの??？」

「はあ…　普通ならそうなのですが丞相様の御子様は異例づくしの  
ように自ら成長を速めて殻を割ったようです」

「それじゃあかなり神力の高い子なの」

「成人した折には陛下に並ぶのではないかと推察されます」

「へー…　…　…　凄いの？」

「はい、でもこのままでは玄武国が割れるかもしれません」

顔を少し青褪めさせマッキーがか細い声で言う

「つまりチョンマゲに不満を持つ亀族がルインさんの子供を亀王に  
しようと反乱でも起きるとか」

ありがちな展開だけど

「確実にそのような勢力が暗躍して来るでしょう」

でもそれってあんまり意味がないよね。何しろチョンマゲは私でも

分かるくらい王様の仕事に精力的でなくルインさんに押しつけている。

「いいんじゃない。どうせチョンマゲはやる気が無いようだし私も王妃なんて面倒なもの」

「宜しいのですか」

「もしかして二人共、私が王妃じゃなくなったら一緒に居てくれな  
い」

「いいえ私は生涯ミユキ様を主と心に誓っております。お許しいただけるならこの命が尽きるまでお側に仕える所存」

「私も王妃様のお陰で自分らしく生きる事が出来るようになりました。だから何時までもお側に居させて下さい」

マッキー それって女が本来の自分だと言うの、良かった…性転換させて少し恨まれていないか心配だったのよね

「二人共ありがとう。王妃じゃ無くなっても最低限この離宮は貰って欲しいっぱぐれないようチョンマゲに稼がせるから」

「「王妃様……」」

感動すると思ったのに何故か微妙な二人だった。

「それより牡丹の君にお祝を持って行きたいんだけど何がいいのかな」



「そうですね。丞相様なら全て揃えていらしゃるでしょうから」

「美しいお花で宜しいのではないでしょうか：なにぶんにも急な事で後日改めて陛下からお祝の品をお贈りになるでしょうから」

「そうだねマッキー 庭師の人に牡丹の花がないか聞いてくれる」

「はい王妃様」

「フーラン、使者の人に明日の午前にお伺いする事を伝えておいて」

「宜しいのですか陛下にお許しを得ずとも」

そう言われて卵に嫉妬したのを思い出しアレ以来卵に会いに行けなかったのだが：確かに明日は無理かもしれない。

「取敢えずお祝の手紙とお花を送るわ。 後はチョンマゲの機嫌のいい日にでもおねだりするしかないわね」

「そうした方が賢明かと」

「そうと決まれば手紙を書くからマッキーは牡丹の花の手配したら手紙を見て頂戴」

「はい王妃様」

今だに二人しかいない侍女

歴代の王妃は侍女が十人以上いたらしいけど私はフーランとマッキーだけで十分

以前はリユールンちゃんに来て貰いたかったけど人間は駄目だと却下されてしまった。人間差別かと思ったけど寿命が違いすぎて辛い別れが直ぐに来てしまうためらしい

それにリユールンちゃんは病気がちなお母さんと兄弟の面倒を見る為に実家に戻ってしまったらしい。何れ一度は会いたいけど王妃の立場では難しい

神族と人間の命の重さはどうにもならない問題だ。

もし私が人間の寿命しか無かったらチョンマゲとは結婚しなかっただろう

先に死にゆく者は幸せかもしれない

後に残されたものは喪失感を感じ長い悲しみにくれるかと思うと切ない

特にチョンマゲは小さい頃に両親亡くしたようだから……

愛する人にそんな思いをさせるくらいなら憎まれても身を引いて日本で普通のOLをしていただろう。

その場合チョンマゲが死んでいたような気がするけどこの際、結果オーライ？

結果が全てよ！

その日の夕方早速チョンマゲにおねだり

「牡丹の君の赤ちゃんが生まれたんだって！ 会いに行きたいな〜」

途端に顔を真っ赤にして怒ります。

「アレはそんな可愛い者ではない！！ 絶対会いに行ってはならん！」

何時にも無く厳しく速攻で却下されてしまう

ルインさんと牡丹の君の赤ちゃんなら絶対可愛いはず

「なんで会っちゃ駄目なの〜 生まれたばかりの赤ちゃんよ」

「余のミュキを狙う者が可愛い赤ん坊なものか！」

狙う

なんでこんなに思い込みが激しいの

相手は赤ちゃんなのに

「顔を見るだけでいいの、お願いチョンマゲ」

「駄目だ！ 駄目だ！ 絶対に許さん！」

そう言って駄々をこねるよに喚く

「チョンマゲのケチ！ そんなチョンマゲなんか嫌い！！」

最近牡丹の君も遊びに来ないし、深紅の薔薇の君もまだお茶に呼べていないので少しストレスが溜まっていた私

ついカッとしてしまう

お互い子共の喧嘩のようになってしまい、腹の立った私はチョンマゲの膝から飛び降りて部屋を飛び出してしまうとマッキーが追いかけて来るけどチョンマゲは来なかった。

私はそのまま勉強部屋に入りマッキーも閉め出して一人で籠もるのだった。

「チョンマゲのケチ！ そんなチョンマゲなんか嫌い！！」

ミユキの愛らしい口から久しぶりに聞く嫌いと言う言葉が余の心臓

に突き刺さり呼吸を止めさせ、部屋を出ていくのを引き留められなかった。

嫌われてしまった。

どうしよう どうしよう どうしよう どうしよう どうしよう

ミユキに嫌われたら生きていけない

どうしよう どうしよう どうしよう どうしよう どうしよう

丞相の子にそんなに会いたいのか

余より赤子を選ぶと言うのか

茫然自失をしているとミユキの侍女が声を掛けて来る。

「陛下、お声を掛ける無礼をお許し下さいませ」

そう言いなが跪いてから話をしだす。

「王妃様は純粹に可愛い丞相様の御子様にお会いしたいだけで決して陛下を蔑ろにしている訳ではありませんせ」

「煩い！ お前ごときが余に口を出すなーーーーー！」

言い知れぬ怒りを侍女に向け放つだけで神力が刃のように侍女を切り付けてその体に無数の傷を負うがうめき声一つ出さずにその場か

ら微動だにせず耐え忍ぶ

流石に丞相が選んだ女だけの事はある。

「恐れながら王妃様は丞相様の御子様がお生まれになった事で失礼ながら陛下が漸く玉座から降りて二人でこの離宮で静かに暮らせると喜んでおいででした」

「ミュキが」

「そうです。王妃様は陛下の為にこの世界を知ろうと懸命に学問に励み馴染もうと一生懸命頑張っておられます。そんな王妃様が陛下以外の者を愛するなどあり得まじょうか。此処は広い心示され王妃様をお許し下さい」

「余にそのような生意気な口を聞くとは覚悟が出来ておろうな！」

「怒りは全てこの身受けましょう」

暫しの静寂が辺りを包む

侍女は額を床につけ、その潔い良さに清々しいくらいだが

ミュキの為に我が身を差し出すのが気に食わない！

「お前にとってミュキは何だ」

「わが生涯の主と心に決めておりますが、武人としてで疾しい心はありません」

余の臣下でありながらミュキを主として仰ぐのか

「余の前で抜け抜けと良く言う」

「お許しを」

「よからう、ここは余が折れるしかないだろう」

そもそも余がミュキに敵うはずがないのだから結局会わせるの許していただろう

あまり我儘を言わないミュキのささやかな願いを嫉妬でうち捨てるなど確かに心が狭い

嫌いと言われて当り前だ

「有難うございます」

「フン、お前に礼を言われる筋合いではない」

ミュキは余のものなのに周りの者はミュキを慕うのが面白くない

我ながら心の狭さを改めて自覚する。

そのままミュキの元に行こうとするが侍女が気を失っている事に気が付く

余の怒りを受けてここまで耐えたのだから仕方あるまい、手当はもう一人の侍女がするだろうとそのままにして置くのだった。

部屋に籠もって椅子に座りながら項垂れる

王妃になって実質二年と七ヵ月だけどあまり王妃らしい事をしていない私

チョンマゲは好きにするといいと言って自由にさせてくれて甘やかしてくれるが不安

この世界での知り合い何んて数えるくらいしか居ないし、しかもその人達とは自由に会う事すらままならない立場にいい加減に嫌気がさしていた

立派な王妃は無理だけどせめて公式の場に立てるぐらいには王妃の務めが出来るよう勉強も頑張っている。

チョンマゲに恥を掻かせたくないし少しでも相応しくなりたかった。

だけど私なんか全然相応しくなかなれないのだ

どうしてチョンマゲは追って来なかったんだろう

何時もなら直ぐに抱き締めてその腕に閉じ込めて機嫌を伺ってくれ



るのに

やっぱり全然王妃らしくも綺麗でもない私に飽きて来たんだろうか  
そんな不安が心を過ぎると次々にネガティブな思考が湧きあがり涙  
が出て来る。

「うえーんくく チョンマゲのバカ しくしく…… うええーん  
グスグス えんえん……」

そうやって暫らく泣いていると音もなく背後から誰かに抱きしめら  
れる。

ビック！

「すまないミユキ… 余があまりに料簡が狭すぎたから泣かないで  
くれ」

それは何時も抱き締めてくれるチョンマゲの腕と切なそうな声

「チョンマゲ……」

「明日にでも一緒に丞相の子供に会いに行こう、だから機嫌を直し  
ておくれ」

そう言って私を抱き上げてその膝に座らせて顔を持ち上げる。

そこには寂しい表情で私を見詰める麗しい夫

それに対して泣いた所為で涙と鼻水でぐじゃぐじゃでより一層みす

ぼらしい私は急いで両手で顔を覆って隠そうとするがチョンマゲがそれを許さない

「うつ……意地悪しないで…こんなみっともない顔見られたくない…」

「何を言う、ミュキは泣いていても壮絶に可愛い」

それはチョンマゲの目が腐っているからだと言いたいけど口には出したくない

だけど可愛いと言われて少しずつ心が落ち着いて来る。

「私は可愛いの」

「この世界でミュキほど愛らしい者は居ないぞ！」

チョンマゲの瞳は嘘偽りがなく本当にそう思っているのが伝わる。

ああ、チョンマゲの目が腐っていて良かった……

その瞳に私以外誰も映して欲しくない

「明日本当に連れてってくれる？」

「ああ。だが見るだけで触れてはならん」

「……取敢えずそれでいいよ。ありがとうチョンマゲ」

チュッ！

「ミユキ」

「チョンマゲ大好き…… 愛してるよ」

「余も愛しているから、二度と嫌いなど言わないでくれ。余は動けなくなってしまう」

「ゴメン」

そして何時もの如く夕食も食わずにそのまま寝室に傾れ込み仲良く  
睦み合う

こんな普通の私に誰が横恋慕すると言うんだろう

誰かに盗られないかと心配なのは私の方

周囲は美形だらけで気が気じゃないのにチョンマゲは分かっているのだ

チョンマゲが王様を辞めれば二人で世捨て人のように暮らせば、  
チョンマゲを誰にも見られないし他の綺麗な女性を見せないで済む。

チョンマゲがずーっと私を見ていてくれる限り幸せは続く

愛おしい夫に抱かれながら私は永遠の愛の夢を見る。

それは幻のようなものかもしれない

それでも私は信じつつける

その夢が終わるまで

チヨンマゲ、どうかズーッとズーッと私を愛してね

それが私の最大の我儘

愛してるよ

チヨンマゲ

私の王様



## 私の王様（後書き）

取敢えず第2章はこれでお終い。第3章の予告——ある人間が落ちてきて一騒動が巻き起こるそんなありがちな展開です。おそらく11月から連載しますのでその時は楽しんでくれれば幸いです。此処まで読んで頂き有難うございました。

## 番外編一 チョンルイグウイの思惑一

始めまして、僕の名前はチョンルイグウイと言います。

まだ孵化して一月ですので声で話すと赤ちゃん言葉になってしまうので恥ずかしいから思念を使います。

お父様はルイングウイ。玄武国の丞相を務める立派な人で尊敬しています。嫉妬深さが偶にキズ

お母様はアンチヨングウイ。良妻賢母でとても綺麗で自慢の母親

そして弟である卵もいますが今だ自我が出来ていないようでお話は出来ませんがその日が楽しみ

何故弟だと分かるのか？

それは分かるからです。恐らく大まかな未来視が出来るようで無意識に感じてしまうみたい。

その力で僕は弟が生まれた時に視てしまった未来を知り早く体を成長させて殻を割って孵化しようと決意し、両親から神力を多めに貰い四ヵ月も早く殻を割って出てきました。

どうしてそんなに急ぐのですか

それは将来、僕は弟とある少女を巡って対立するからです。

僕は絶対その少女を手に入れなければいけない

その為にも一月と生まれの変わらない弟より大きな力を示し屈服させ逆らわないよう教育しようと思ったから

その為にも用意周到に準備

卵の内から僕に逆らえないように潜在意識に刷り込んでおけば横恋慕しても僕からあの娘を奪おうとは思えないと思うけど可能性はゼロではない

未来なんて不確定なもので油断は出来ません。

恋は盲目

あの娘にあったら幾ら従順に馴た弟も僕に逆らうかもしれません。

僕とて弟をこの手にかけるなんて嫌ですし、あの娘に嫌われたく無い

僕はそれ程あの娘に既に恋をしている。

初恋はミュキ様だった。



初めてお会いし口付をされた時は今だ形成されていないはずの心臓が爆発するかと思うほどドキドキして、愛らしい姿に見惚れてしまうだけどミュキ様は既に人妻だったし、相手は亀王だからまだ僕は適わない

まだ卵の僕に嫉妬してミュキ様に会わせてくれないし

亀王も心が狭い、あんな男がミュキ様の相手なんてお気の毒

僕が孵化した時に少しだけ会いに来てくれたけどその間中赤ん坊の僕を睨みつける上にしきりに可愛い可愛いと誉めてくれるミュキ様は僕を抱っこしたそうなのに、僕に見せつけるかのように抱きしめて放そうとしない

事前にお父様に言い含められていた僕は無邪気な赤ん坊の振りに徹した

「いいかいチョンルイグウイ。ミュキ様に話しかけていけない！そうすれば嫉妬深い陛下は赤子のお前とて容赦しないだろう。そうなれば私もだが母も嘆き悲しむ……此処はお前が分別を持って可愛い赤子の振りをしているんだよ」

赤ちゃんの僕に分別を持てなんてある意味笑えるけど此処は素直に返事しておく

『はいお父様』

大好きなお母様を悲しませるのは僕も嫌だし

だけどミユキ様にもう一度お会い出来て良かった。

僕は確信する。

あの愛しいあの娘はミユキ様が産んでくれると

だからあの忌々しい亀王は生かしておかないと

何れ僕が王位を就く時に殺しちゃおうと思ったけど考えてみれば伴侶であるミユキ様も死んじゃうし、あの娘も生まれない事態になっちゃう

亀王も僕と言う存在を内心喜んでいる。

サッサと亀王の座を押し付けようとしているのが父の話から推測でき、案外利害は一致してるしミユキ様しか見えてない男は喜んで僕に皇女をくれるだろ

くれないなら殺してでも奪うけどね。例えミユキ様が犠牲になっても仕方が無いと思えるほどあの娘が欲しい

あの娘が生まれるのはまだまだ遠い未来

それまでに僕は次期亀王と成るべく勉強と努力を怠らない

全ては愛しいあの娘の為

僕の伴侶の為に最高の男になる。

そしてあの娘の望む事全てを叶えてあげるんだ。

絶対幸せにするから安心して生まれて来てね

僕の大事な未来の花嫁

逃がさないよ

絶対に

## 番外編一 チョンルイグウイの思惑一（後書き）

恐ろしい赤ちゃんです！！

一種ホラーかも

こんな男の子に愛される深雪の長女もお気の毒

未来で深雪と亀王の間に人間の女の子が生まれますが、容姿は深雪にそっくりだけど髪はプラチナで瞳は薄いブルーで普通であれば綺麗な色合いなんだけど顔が地味なせいか全体的にぼやけた印象で存在感が薄い少女で性格は深雪に似ず卑屈でネガティブ

両親は溺愛してるんだけど二人がラブラブ過ぎて少しいじけ気味

周りの人間も目の前に皇女が居るのに皇女は何処に居るんだと捜し回る程に存在感が希薄である意味特技になっている。

「どうせ私なんか居なくても同じなんだわ」

そんな卑屈皇女に愛を囁く次期亀王であるチョンルイグウイ

見事な赤い髪に緑の瞳の超美男子で全てにおいて完璧な男が自分に言いよって来るのが信じられず、自分とつい比べて釣り合っていないので更に卑屈になってしまう

完璧過ぎて避けられているのに気付かないチョンルイグウイは躍起になって更に完璧を目指すと言う喜劇

何とか振り向かせたかったが、最後は焦れたチョンルイグウィが王位を就いて無理やり伴侶にしちゃう設定。

チョンルイグウィは皇女に操を立て女性に指1本も触れない潔癖さだったので、いい加減欲望が爆発しちゃったようです。

数百年童貞……この記録は四神国のギネスで破れる者はいないと噂されている。

一方弟は完璧な兄に可愛がれ崇拝しているが常に兄と比べられ少々卑屈になりながらながらブラコン青年は立派に育つ。最初は兄が執着する皇女に嫉妬して虐めていたが何時しか好意を持つが既に遅く皇女にはチョンルイグウィ同様に嫌われてしまっていた。

全ては兄の思惑に嵌っているとは知らない弟

本来は完璧な兄の所為で忘れられた様な存在で卑屈で暗い男に成長したが卑屈皇女と出会いお互いの共通点と性格の一致を見出し恋に落ちてしまう。それを許すはずが無いチョンルイグウィは亀王となり二人を引き裂き皇女を無理やり伴侶にしてしまい弟は悲しみのあまり自害する悲劇の展開

どっちにしろ皇女はチョンルイグウィの妻になってしまうので喜劇で終わった方が良い。

皇女も観念してチョンルイグウィと幸せに暮らすでしょう。

チョンルイグウィと皇女の話は書く予定が無いので此処に設定だけ

書いておきます。

第3章はもう少しお待ちください……「龍王の娘」も先が長そうだし

完結は絶対したいので応援宜しくお願いします。

## 始まりは肥溜め

ここは四神国の一つ玄武国

亀王チョングウイが治める平和な国で可愛い王妃を迎えてからは益々人々の暮らし向きは豊かになり、これも王妃様のお陰だと感謝していたが一向にその姿を現さず黒髪の可憐な少女である神々しい亀王を魅了する程の愛らしさだと巷でも評判だった。

そして王都では王妃様の姿を想像した絵姿が出回り人気を博していたのだが

侍女のマッキーが下働きから聞いた話をすっかり王妃様に教えてしまい急いで買いにいかせた、その姿絵を見た王妃様は絶句

「ヒェ……なんなのこの絵姿はー！ー！ー！」

ミユキはフーランに買って来て貰った自分の絵姿を見て一気に青褪める。

「恐れながら王妃様の絵姿です」

至極真面目な口調のフーラン

「嘘よ！　こんなの詐欺じゃない！　全くの別人よ　一体誰の許可

でこんな絵が出回ってるのよ！ 肖像権の侵害 これじゃ絶対人前なんかに出れない」

王妃の絵姿は黒い髪に黒い瞳の美少女

大きな零れんばかりの黒い瞳に薔薇いろの頬、愛らしいピンクの唇で十人中十人が目を奪われる美少女ぶり

それに対し王妃は黒い髪に黒い瞳ではあるが美少女ではない……普通の平凡な容姿の二十六歳の成人女性でこの世界では童顔でギリギリ少女に見えない事はない程度

この絵姿を見た後に実際の王妃を見た時の人々の反応を思うとミユキは今直ぐ元の世界に戻りたい衝動にかられる。

「私実家に帰らせて貰います！」

「王妃様 それは陛下が許さず不可能かと思われます」

「ヒィエエ〜〜ン」

王妃の実家

それは此処ではない世界、地球の日本に帰りたいからと言って気安く帰れない場所

帰るには夫である亀王の力を使わなければならないが王妃を溺愛する亀王が許すはずが無かった。

「お諦め下さい。王都でも腕利きの化粧師を用意致しますので安心



してお披露目にお望み下さい」

お披露目

その所為で王妃が此処までうろたえている理由だった。

王妃になり三年近くになるが極一部の重臣を除きまだ一度も王宮の家臣や国民にも姿を見せた事が無く周囲の亀族達からも不満が出て来たのだ

本来亀王も盛大な婚礼の儀を上げたかったが地味婚を望んだミュキの意を酌み天帝の前で二人で婚姻を結んだのだが亀王としてはミュキを一世一代に着飾り人々に見せ自慢したいという思いを引きずっていた。

そこで臣下や国民に王妃としてお披露目をしようと亀王は一月後の新年祝賀祭の祝いの席に王妃の出席を決意したが

ミュキにとっては大迷惑この上ない

亀王の目にはミュキは世界一可愛いく変換され脳に投影されているが一般の人々から見れば少し可愛い普通の女性でしかないのを本人は自覚していた。

だが王妃としての立場なので最低限の公式の場に出席するは務め

腹を括り自分の顔を晒すを決意した直後の姿絵騒動

動揺するのは仕方ないだろう

「ハッ！！！！　これはもしかして私を陥れようとする勢力の陰謀？！」

「陛下の伴侶にそのような悪意を向ける者など存在しません」

侍女のフリーランは王妃の妄想を直ぐさま否定する。

亀王に逆らう事は即死を意味し、独裁国家と言っていくらい亀王の神力は巨大で逆らう者などいないのだ。溺愛する王妃をおとしめるなどとんでもない行為

「じゃあ一体誰の嫌がらせなの！！？？」

「私にも何故このような絵姿が出回ったのかは推し量る事は……」

言葉を濁すフリーランだったが事の次第を知っていたが言えなかった。

全ての原因は亀王にある。

王宮でミュキが如何に清らかで可憐であるかを側近に毎日のように切々と説いており周囲は仕事がかどらず迷惑この上ないのだがそんな事おくびにも出せない。その鬱憤を周囲や家族に漏らしそこから端を発し王妃の容姿が尾ひれをひき市井に伝わり現在に至るのだ  
言えない……この事を王妃様が知ればどんな騒動が起こるか考えるだけで頭が痛くなるフリーラン

最近では丞相様の苦勞をヒシヒシと感じてしまっている自分

畏れ多いが親近感を持っている……ハッキリ言って持ちたくなかつ

たが

これは王妃様が何かしでかさないか警戒した方がよさそうだ

なにしろ普段は素直で聞きわけが良いのだが思いがけず突拍子もない事をしでかすのがこの王妃様

油断できず人知れず苦勞が絶えなかった。

「ううっく　こうなったらマツキーの髪と目を黒くして身代わりにしましょ!!」

「王妃様!!」

突然名前をだされ身代わりにされそうになり真っ青になる元男の侍女マツキー

「それは無理かと……　陛下が王妃様以外をお側に侍らすわけがありませんせ」

フーランの言葉にマツキーは胸を撫で下ろし王妃は頭をかきむしらんばかり

「キーーーーッ　こんな事ならサッサとこんな顔潔く晒せば良かったんだわ……シクッシク……うえくん……」

とうとう泣きだしてしまう始末

慰めて差し上げたいが迂闊に触れる訳にはいかないフーラン達

何故なら……

「ミユキーーーーー」

何処ともからなく現れる亀王

ガバツツ！

「チョンマゲ！！」

机に泣き突っ伏す王妃を抱き上げて抱きしめる。

「何を泣いているのだミユキ 誰かに虐められたのか」

「ちっ違う…… くっくっく……」

「く？」

「僭越ながら陛下、王妃様が苦しがつておいでに……」

これもお約束の展開で侍女二人は慣れたもの

漸く王妃様が息も絶え絶えなのに気付き腕を緩めてフーランが差し出す椅子にドカリと座り膝の上に王妃を乗せる

「すまないミユキ……心配のあまり力加減を忘れた」

シュンと項垂れる亀王だがそんな事に構わず自分の泣いた原因を訴える。

「それよりこれを見て！」

王妃様は手に握りつぶしていた姿絵を亀王様に伸ばして見せる。

「誰の姿絵だ？」

「私よ！ この絵姿が私だって王都中で出回ってるの！」

「何！ これがミュキだと！！！」

憤然と怒り出す亀王

「そうでしょ！ こんなんじゃ人前に出れない！」

「確かにこれは酷過ぎる。 余のミュキはこれ以上に可愛いぞ！ 余の伴侶を侮辱するとは 即刻この絵師は打ち首だ」

「はっ????????」

呆氣にとられる王妃様

完全に二人の意見はすれ違っているが侍女達には見えていた結果

「何言ってるのチョンマゲ！ 打ち首禁止！！ そんな事したら駄目」

「だがこのままではミュキの愛らしがこのくらいだと思われてしまう」

「うゝゝゝっ 違う意味でこの絵姿通리と思われるのは痛いわ……」

「よし！ 余が真実のミュキの姿を描き国中に配布しよう」

「えっ チョンマゲは絵が描けるの！？」

「余に出来ぬ事はない」

そう断言するだけはある。侍女に紙と絵筆を用意させたかと思うと小一時間で見事な精緻画が完成されそこにはミュキが見事に書き写されていた。

「凄いチョンマゲ、絵もプロ級なんだね」

あまりの見事さに感心する。

しかしミュキは意外だった。チョンマゲの脳内で自分はかなり変換され別人のように認識しているとばかり思っていたのだ。

あの絵姿の美少女より可愛いと感じる感性が可笑しいのだと気付いた。

そしてミュキは決意する。

このまま偽の絵姿の自分が知れ渡りお披露目の公式の場で針のムシロニ座るより、チョンマゲが描いてくれた真実の自分の絵姿を配布してしまおうと……

噂など耳を塞げばいいだけ

配布したらかなりのガツカリした人々の顔が想像できるが自分の顔を偽れない

どうせ本当の私は知られてしまうのだ！

傷口は小さい内に塞いだ方が直りは早いのだと判断した王妃様

「フーラン、この絵姿を国中に貼り出して頂戴」

「宜しいのですか」

「言いも悪いもないわ…… 国民を騙す訳にもいかないし」

「その通り、 国民全てに真実の愛らしいミュキを知らしめるのだ」

思わず夫である亀王を殴りたい衝動にかられるが止めておく、王妃様も亀王様が真実そう思っていると理解しているので始末の負えないのだ

お披露目の当日は今より厚化粧をして少しは絵姿より綺麗に見せよう決意する。

そうすれば、アレ？王妃様って結構可愛いかも…と思われるかなと姑息な事を考えているのだった。

そして王妃様の絵姿は国中のありとあらゆる場所に貼られ、当初はあまりに普通な顔にがっかりする人々だが見れば親しみやすいお顔

で少し可愛らしい。それに美しいと噂される中で敢て自分の姿を公表する姿勢が好感をもたれ、あの亀王様が亀の姿を止めて国の政治に力を入れ始めて豊かになったのも王妃様のお陰なのは確かで徐々に王妃様は好意的に受け入れられて行くのだった。

そして古い年が終わり新年を迎えようとする十日前の良く晴れた日の午後

突然王都の上空の青い空に赤い巨大な傘のようなものが落下して来る

「おお～～　　すげ～～　　本当に異世界トリップ！！」

それは黒い髪に瞳の青年が赤いパラシュートを装着して落下してくる姿

「異世界トリップが体験できるなんて、これで俺もハーレム主人公！？」

思わずにやける青年の容姿は地味で普通なこれと言って特徴の無い顔  
屈折二十三年Ⅱ彼女いない歴　つまり悲しき童貞

ここで人生最大のモテ期を経験できるかと思うと期待で胸がふくらみ、地味顔も少し華やいている？



眼下に見えるのは平安京を思わせる大きな都市に街を取り囲む豊かな森に右手には大きな湖が見えもつと遠くには田園地帯が広がっていた。

「待っててくれよ俺のハーレム要員の女神達！ 橘健斗<sup>けんと</sup>参上ー  
ー！ー！」

何とも痛い登場

そう…この痛い青年は橘深雪つまり王妃様の実の弟

何故、彼のような普通の何の力もない無力な青年がこの世界にトリップ出来たか

それは徐々に分かって行くのでここでは語らないが予想はつくと思います。

あの方が関わっているのは確実

そしてミュキの弟は王都の王宮に降り立つ予定で降下して行くがパラシュートの経験は少ないのと突風が突然吹き王都からドンドン離れてしまう

ビューーシューシューシューシュー

「ああゝ俺のハーレムが遠のくー」

そして情けない声と共に憐れな弟は王都から少し離れた畑の真ん中に舞い降りるのだった。

ポチャーン!!

「ギャアーーーーー くっせーーーー なんだこれ? ? ? ? ?」

しかも肥溜めの中

一応シティーボーイである健斗は肥溜めの存在を知らないので腐った泥水ぐらいの認識

幸い片足を突っ込んだただが凄まじい匂い

初っ端からケチがついたのか?

それともウンが付いたのか?

それが分かるのはこれから

二人の姉弟が繰り広げる異世界の物語はこれから始まり始まり

## 始まりは肥溜め（後書き）

龍王の娘があるので更新速度遅めです。

## 異世界トリップ一日目

広大な畑の真ん中に降り立った健斗は酷いに匂いに悩ませながらパラシュートを外し適当に畳んでまとめ持って来た大きなゴミ袋に入れてしまうのに四苦八苦していると何処からか現れた子供達

子供達は見た事もない奇妙な男の不思議な行動を物珍しそうに遠巻きで見守っている。

健斗は溜息をつく

はぁ… 何で寄って来るのがガキばかりなんだ！

ここは美少女が登場して俺に惚れるんじゃないのか！！

しかし良く考えればこの臭い状況で会うのは心証が悪くフラグが立たないと思い直す。

早々にこの臭い足を洗い王都に入ろうと思い子供達に声を掛けてみる。

「おい、この辺で足を洗う所はないか教えてくれ」

そう呼び掛けると何故か後ずさる子供達

なんだ???

自分の服装が可笑しい所為か言葉が通じないのか？

警戒しているのは間違いない。

「子供を手懐けるにはお菓子が一番」

大きなリュックからおもむろに飴袋を取り出す。

これは俺の大好きなイチゴのミルク味だ

袋を開けて1個取り出して可愛いイチゴ模様の包みを外して口に放り込み

「美味い！ やっぱアメはイチゴミルク味に限る」

そう大声で言ってもう一個口に入れて如何にも美味しそうに舐めて周りを見れば物欲しそうな子供達が伺える。

「欲しいか？」

袋を差し出すと一番体の大きな子供がおずおずと近寄ってきて手を差し出して来るので掌に一個のせてやると先ず匂いを嗅ぐ

俺の匂いでイチゴの香りなんか掻き消されていそうなのに子供はうつとりとした顔をしたかと思うと不慣れな手つきで包みを外し恐る恐る口の前にペロリと舐めると目を見開く

そして一気に口に放り込んでしゃぶり始めると目をキラキラさせて

叫ぶ

「うめーーーーー!!」

そうそう、俺も小さい頃このイチゴミルクを舐めた時の感動は忘れない。

様子を見ていた他の子供達がワラワラと近づいてきて我先に手を差し出して来る。

「「「 ちょうだい! ちょうだい! 「「「

小さな泥だらけの手に一個づつのせてやると包みを外して次々口にする全員目を輝かせて幸せそう

だがその幸せも直ぐに終わってしまうと一斉に物欲しげな目を俺に向けて来る

じーーーーーーーい

「「「「「 ..... 「「「「「

仕方なくもう一個づつやると直ぐに食べるかと思いきや大事に懐にしまい込む

見れば子供達の服は継接ぎだらけでくたびれており昔の古いテレビの名作で良く紹介されるおしん風

日本の子供達とはかなり様相が違いあまり裕福な生活とは言い難いようだ

その内、好奇心一杯の顔で尋ねて来る子供

「あんちゃん、どこから来たさ？」

「俺か、あの空から来たんだ」

「もしかして亀族様なの？」

亀族とは玄武国を治めている神族、つまり神様——流石に異世界トリップ

「否、れっきとした人間。それより足を洗いたいんだけど水場を教えてくれないか」

「ええけど、あんちゃん肥溜に落ちただか」

「間抜けだな」

子供たちがウシッシと笑いだすが肥溜めとは何だと記憶を手繰り寄せてよく時代劇に出て来るアレだと思いだす。

肥溜めって詰まりアレか

たい肥、いわゆる糞！！！！

よく足下を見れば白い蛆が数匹を確認

一気に血の気が引く

「……ギャアアアアアアー————俺を今直ぐ水場に連れてってくれ」

絶叫したが氣絶しなかつたのを褒めたいくらの悲惨さだ

信じらね  
〜  
〜  
〜

反泣き状態の俺を子供達は手を引っ張り直ぐ側の川に連れて行ってくれ速攻で糞を洗いますが、ズボンを脱ぎ靴下とシューズと次々洗い草むらに広げて乾かすしかない。

「替えのズボンを持って来て良かった」

リュックからズボンを取り出し履き替える姿をジーツと観察している。

余程俺が珍しいようだ。

俺は一番年かさの十歳くらいの少年に話しかける。

「王都に行きたいんだがどれくらい掛かる」

「うーん、歩いて三日くらいだあ、あんちゃん、王都に行くのけ」

三日！ 風に結構流されたようだ

「馬か馬車はないのか」

「ねえだな、長のところさ馬が一頭いるだけだ」



見たとおりのど田舎、仕方が無いので歩くしかないがこの日の為に俺は高校を卒業と同時に自衛隊に入隊して体は鍛えてきた。

これは向うの姉ちゃんが最低限の体力とサバイバル力をクリアしていないとこちらの世界に送ってくれないと条件をだしたからだ。

「一応健斗は弟設定だから姉として無責任な事出来ないし」 取敢えず自衛隊入隊で3年耐えれたらね」

なんて優しい言葉の中にサド気質を感じるが俺は頑張った！

はっきり言ってオタクな俺は運動なんてこれまでしておらず二次元の世界の海を泳ぎ回る存在でチョッとポツチャリめの色白な男子高校生

運動なんてもっての他だったが小さい頃からの夢だった異世界トリップが実現出来ると知った俺は二次元断ちをして進路も一般大学から一転し自衛隊に入った。

三年の担任には成績は良いんだから防衛大にしろと言われたが一般曹候補生の試験を受けて入隊、体力テストがあったら確実に落ちていた。それから入隊前から基礎体力を少し上げて挑んだけどマジ1年は地獄

教官にも俺は1週間もたずに脱落すると思っていたと言われたからそれくらい俺はへなちょこだったが屈折五年昇進もそれなりして除隊する時は引き留められるくらいのバリバリの自衛官

しかし俺がここまで頑張ったのは異世界トリップをしてハーレムを作る為であって愛国心からでは決してない

それより3年が何故5年かって？

何でも王妃になった姉ちゃんが長い眠りに就いてしまい最近目覚めて漸くこの世界に落ち着くの待っていたら5年になってしまった。どうやらこの世界と向うの世界の一年は違うんだそうだ。

姉ちゃんが異世界トリップしたのも驚いたけどその世界のイケメン王様と結婚したと聞いた時は俺も後に続く決意した。何しろ俺の姉ちゃん……顔は不細工ではないが普通、だけど胸が洗濯板で嫁にいけるか心配だったのにそれが超美形と結婚ありえね

矢張りこれは異世界トリップの恩恵だ

神族は美形しかないそうだから姉ちゃんの側に居ればモテモテ間違いないし！！

「待っててくれ」俺の嫁」

俺が妄想していると子供達が不気味そうな目で俺を見ている。

いけね」なにしろ禁欲生活が長くて飢えており綺麗な女を想像しただけで涎が

口元を拭い子供達に王都への道を聞く

「王都への街道は何処だ？」

「「「「「あっち」」」」」

全員が違う方向を指す——子供に聞いた俺がバカだった。

「何処かに大人はいないのか」

そう聞くと途端に子供達が慌てだす。

「いけねべー——草むしりの途中だったべー　おっとうに怒られる！！」

「早く　草むしりに戻んべー」

どうやら子供達は畑の草むしりの途中だったらしい

やっぱ学校なんて行かずにこの年代でも立派な労働力なんだろう。

「おい待て、川を教えてくれたお礼がまだだから手を出せ」

子供達はそれを聞くと嬉しそうに手をだす。

遊んで泥だらけだと思っていた手は立派な労働者の手だったのかとジーンとしてしまい袋にあるアメを均等に全部分けてやると本当に嬉しそうな顔をする。

今時の幼稚園児でもアメ一個をここまで喜ぶ奴は少ない

俺もそうだったけど……

「「「「「　ありがとう　あんちゃん！　「「「「「」

子供達は飛び上がらんばかりに畑に戻って行ったのを見送り取敢え

ずシューズが乾くのを待ってから農民Aでも捜そうと水筒を取り出してトリップ前に淹れて来たコーヒーを楽しむ事にするのだった。

コーヒーを飲みなが周りを見れば畑と森しか無い単調な風景

建物らしきものも見えず、澄んだ空に綺麗な空気で日本では失われつつある風景

向うの姉ちゃんの話ではあまり機械文明が発達しておらず生活レベルも数千年単位で緩やかにしか進歩していないスローライフ

俺の世界とこの世界どちらがいいか判断できないが取敢えず生まれる世界も親も選べない状況

産まれ落ちた世界を生きるしかないのだ。

それなのに俺は異世界でこれから違う生活を選ぶ。

「俺って超ラッキー！　姉ちゃん様様」

コーヒーを飲み終わり草むらに横たわり日向ぼっこをしながら姉ちゃんと会いに行ったら驚くだろうなーなどと考えていると顔に影が掛かりその方向を見れば逆光で良く分からないが女性が見降ろしていた。

「あのー　旅のお方ですか？」

声を聞く限り若い女性

俺は急いで跳び起きて女性の顔を見る。

「!！」

こっこれはーーーー!

キターーーーーーーー!

お約束の美人

長い茶色の髪を後ろで束ねて服装は簡易な着物に長いスカートのような物を穿いており、全体的にくたびれているのを着ている。大きな緑の瞳に鼻筋が通って形良い唇。化粧などしておらず服でも誤魔化されず綺麗なんて凄いいんじゃないか?

現代女性は化粧で誤魔化してるらしくスッピンを見て幻滅したと言う友達の話をよく聞く。

どんな状況でスッピンなんて拝めるんだ〜自慢か!!

先ず自己紹介からだな

なにしろリアルな女性にあまり免疫がないので既に顔が真っ赤なのはずだ

「おっ俺…健斗っていいます…  
／／／」

もっと自己アピールをしないといけないのに、テンパっている俺にはこれが精一杯

おお〜 心臓がドキドキ

こっこれは恋だろうか

「ケントさんですか？ 私はリユーリンと申します。王都に行きたいと弟から聞いたんですが」

よく見れば女性の横にはさっきの子供の一人が立っていた。

「はっはい そうなんです。／／／」

この子の姉ちゃんか！

これは中々流れるにいいのでは

お菓子をやった↓優しい人↓素敵！

おおー！ 早速フラグがたったー！ー！ー！！

こんな美人に惚れられるのか！？

向うの世界では絶対にあり得ないぞ。

異世界トリップ万歳ー！ー！ー

心中で万歳三唱をする俺

「王都に行く街道はここから大分外れているので明日の朝なら案内出来るんですけど」

明日↓一晩お泊り下さい↓抱いて！↓童貞喪失！！！

こんな綺麗な女性に筆おろしして貰えるならこの年で童貞悔いなし！！↑妄想注意

「そっそれでお願いします　／／／」

そう返事をするトリユーリンさんが恐る恐る尋ねて来る。

「少しお聞きたいんですけど…もしやミュキ様をご存じないでしょうか」

ミュキと言えば俺の姉ちゃんだが何でこの娘が知ってるんだ？

王妃だから有名人だし当然か

「深雪は俺の姉です」

「まあー　やっぱり。黒い髪に目や顔立ちも似ておいでなのでもしやと思ってお聞きました」

そう言うとその娘は慌てて膝き弟にも頭を下げ始める。

「王妃様の弟君様とは知らず子供達が無礼をしました。どうかお許しを」

エッ?!　俺って偉いの??

どうやら姉ちゃんのお陰でこの世界の俺の地位も人間でありながら上らしい

しかしこの状況は頂けない

美人に跪かれても萌えない

どうせなら「いらっしやいませ御主人様」とでも言ってお歓迎してほしい

「俺そう言うの苦手なんで立って下さい！俺は一般人なんで普通でいいんで」

「そう言う訳には…」

戸惑うリユースリンさんを何とか立たせて普通の客人として扱って貰う事で何とか手を打ちリユースリンさんの家に泊めて貰う事になる。

やり～

脱童貞！！

喜び勇んでリユースリンさんの家に向かうのだった。

その道すがらの話でリユースリンさんは姉ちゃんがこの世界に落ちて来た当初の世話係をしていたらしくその流れで弟が居るのを知っていたのだ

何たる偶然————いや、これは必然！

リユースリンちゃんは俺のハーレム構成員の一人だと確信したのだった。



しかしそんな美味い話なんてないと思い知る。

「私の夫でこの村の長を務めているタンです」

そう言って紹介されたのは三十歳位の渋めのおじさん

ガーーーーー

見事フラグがへし折れる。

このエロ親父――

こんな綺麗な若い娘（年を聞いたら十七歳！！）を嫁にしやがって！

日本なら淫行罪だ！！

羨ましいぜ―― 畜生！！

「弟君様 このようなあばら家で申し訳ないですが精一杯お持て成しさせてください」

確か村の長の家と言う割にはボロく築百年は経っていそうな佇ま

いながら村ではましな方

大きな体をペコペコさせ頭を下げる長

腰の低い悪い人間には見えない

「こちらこそお世話になります」

そう言った途端土下座し始めるタンさん

「畏れ多いだ…」

正直疲れる…これは俺が王妃の弟という事は隠して王都まで行った方がよさそうだ。

そしてリユーリンさんのささやかな手料理を振る舞われて其の夜は一人寂しく布団で寝るのだが

「ア… イヤ… アアン… …」

薄い壁から時折聞こえるのはリユーリンさんの甘い声

新婚さんだから仕方ないけどお客が泊る時ぐらい控えろ!!

童貞の俺には刺激的すぎその声で抜いた。

空しい……

挫けるな俺!

王都に行けばリユーリンさん以上の美女が俺を待っている。

人妻もいいが、やっぱり俺の好みはロリ系の巨乳

待ってろよ俺のマイスイートハニー

新たな野望に燃えていると

「!！」

「クソ！ 3ラウンド突入かよ…… いい加減寝ろ！」

そうして異世界トリップ初日の夜は更けて行った。

## 異世界トリップ一日目（後書き）

暫くケント視点でお話が続きます。

## 異世界トリップ二日目その一

「起きて下せえまし、弟君様」

「グウ…… スウ……」

ゆさゆさ

誰かが俺の体を揺する気がして目を開けるとそこには男の顔

「ヒィー！」

貞操の危機！！

思わず足を振り上げ鳩尾に蹴りを入れると男が壁に吹っ飛ぶ

ドッカン！！

「一体誰だ！？」

ベットから飛び降り気絶している男を見れば村長のタンさんが薄っすらと明る中で確認し慌てる。まかりなりにも泊めてもらった家主を蹴り倒してしまうなんて酷い話、だけどさっきの状況では仕方ない

のだ、何しろ自衛隊は男の集団で中にはそう言う趣味の人間もあり何故かそういう連中にモテてしまう俺は何度も襲われかけた事か――全て未遂で決して掘られてないと弁明しておく。

急いで抱き起こすと直ぐに気が付きホツとする。

「すいません。泥棒が襲って来たと勘違いしてしまつて」

「おらの方こそ高貴なお方に無断で触れるなんて申し訳なかつたべ」

高貴？ 違うんだけど否定するのも面倒でスルーしておく

「それよりどうしたんですか？」

「朝になつたで、起こしにきましただ」

朝？ 朝という割には薄暗いしあまり寝た気がしないと言うか……  
そもそもこのおっさんが盛るせいで寝付けなかった。

昨夜の事を思い出しさっきまでの腹を蹴った罪悪感は綺麗さっぱり無くなる。

「まだ暗いようだけど」

「おら達は何時も日が昇ると起きるんで…若君様はもう少し寝るべか」

「俺も起きます」

流石に農家の朝は早いんだと納得すが、今さら寝るより王都に一刻

も早く出発したい。

リユーリンさんとはフラグが立たないのは分かりきっており他人の女に何時までも未練はない——本当は1回お願いしたかたっけど……

それから雑穀粥のような物を食べさせて貰ってタンさんに街道まで案内して貰う事にした。どうせならリユーリンさんが良かったが仕方ない

朝食を終えてリユーリンさんが見送ってくれる。

「それではケント様、ミユキ様に宜しくお伝え下さい」

今朝も美しい顔を堪能し別れがたいが人妻だし、昨夜はこの顔を快楽で歪ませていたのかとつい妄想してしまう

そんな顔も見たかった〜

「分かりました。お世話になりました……それとこれ要らないんで処分して置いて下さい」

そうやって差し出したのはゴミ袋に入れ嵩張ったパラシュート。本来はチャンと畳み収納できるが面倒だし次に使う予定もないし結構高かったが旅には邪魔にしかない。

「宜しいのですか！　このような高価そうな布を」

「はい、なんなら売っても構いませんから」

「有難うございます」

嬉しそうに受け取るリユーリンさん。

「碌なもてなしも出来なかったのに申し訳ねえべ」

相変わらず大きな体で恐縮そうにペコペコ頭を下げる。

「どうせ要らないんで」

別にお前にやる訳じゃねー リユーリンさんにあげるんだバカヤロー このエロ親父め年がいもなく3回もするなと心で毒づきながら愛想よく答えてしまう。

自分の小市民ブリに嫌気がさしそう

荷物のリュックは街道までタンさんが担いでくれて村を抜けて森に入るが道と言うより獣道で山道の様に傾斜がない分歩きやすい

「この辺りにはタンさんのような村が幾つもあるんですか」

「そうだべー、真直ぐ行けば次の村さ着いてそこから山ば越えれば街道に出るだ」

「因みにどれ位掛かります」

「お日様が真上に掛かる頃だべかな」

思ったより時間が掛かるようだ。しかし本当にど田舎で何も無く通り過ぎた村もタンさんの村同様に三十軒あまりの集落で農作業に勤



しむ農民さんしかないのどかな風景

「この辺の収穫されているのは何ですか」

「麦が半分以上だべか、それとおら達が食べる粟や稗と野菜を植えてるだ」

「麦は食べないんですか」

「麦は租税で大方取られてしまうべー だからおら達は税の掛かってね粟や稗を食うしかねえべ」

「お米は？」

「米か、米さつくるには大きな川がねえと無理だべ、だからこの辺りは麦しかねえ」

やっぱり税金は大変な様だ。朝食も粥一杯に芋の煮っ転がしの様な物だけだがもしかすると何時もより豪華なのかもしれない。だがタンのさんの体格は立派で俺より上背もあって筋肉も確りと付いており腹を蹴った時も堅い腹筋を感じた。現代の若者なら結構悶絶もののはずだがタンさんは結構平気で立ち上がった。日々の農作業で鍛えてるんだろうけどあの食事の量で持つのかと不思議だ――俺は既にお腹が空いて来たぞ

山も道の様な道じゃない様な所を歩くが結構足に来るがタンさんは俺の重い荷物を担ぎながら平然としておりスピードが一向に落ちず俺が先にギブアップしてしまう。

「タンさん休憩しましょう」

「おお 済まねえだー 気付かねえで」

適当な所に座りリュックを返して貰い中からカロリー○イトのチョコレート味を取り出して半分をタンさんに渡して食べ始めるとタンさんの方はパッケージを破り匂いを嗅ぐ

うーん 昨日の子供達と同じ反応で面白い

おっ 食った！

おおー 顎が外れてるー

一気食い！

感動で泣いている……すげーかもー

百面相を楽しんで見ていると

「うめえですだ！ こったな美味かもん頂いて申し訳ないですだ……」

そう言って土下座し始め引いてしまう

「そんな大したもんじゃないから、頭は下げなくて良いですからー」

「ありがとうございます。 なんだか力が湧いてくるようだ！」

「そお？」

俺には小腹の足しにしかないが日頃から粗食のタンさんには効果が表れやすいんだろうか？ ペットボトルの水を飲み、タンさんは革袋の水を飲む。

あの中の水を飲んだら確実に腹を壊すな俺

一応正露丸は持って来たので心配はない。

残り少ない水を飲み干すと不思議そうにペットボトルを見るタンさん

「要ります？」

「頂けるだか！？」

「どうせ捨てるから」

「我が家の家宝にしますだ。ありがとうございます」

そう言い大事そうにペットボトルとカロリーメイトの残りの一本を懐にしまう

「食べないんすか」

「リユーリンにも食べさせてやりてだ」

子供達も大事そうに持ち帰ったのを思い出す。

きっと家族にあのイチゴミルクを食べさせるのにしたのだろうか。なんか良いよな。俺の世界は物資が豊富すぎて何かを忘れているのを痛感する。

「良いですねー リューリンさんみたいな綺麗な奥さんを貰えて」

しみじみと俺が言うと

「リューリンはおらには勿体ない嫁っこだ 本当ばー この郷を治める郷首様のお妾に上がる話があったんだがおらさ選んでくれた……」

お妾ってつまり愛人かー許せん！そんな奴がいるから俺には彼女が出来ないんだ↑絶対違う

「妾よりやっぱ妻の方が良いですよ」

男として何人も囲いたいののは分かるが女の立場としては大勢の一人は嫌だろうと思う

「いんや 農家の嫁っこより郷首様のお妾の方が美味しいもんも腹いっぱい食えるし、綺麗なべも着れるだ……おらの嫁になっても食うのがやっとなで苦労ばかり掛けるのは分かりきつとるのに それでもおらの嫁っこさなってくれただ」

そう言ってデレデレするオヤジ

「へ……良かったですね……」

ケッ！ のろけか

俺だっでロリ顔の巨乳娘を嫁にするんだ！ 見ていろよ

密かに闘志を燃やし再び歩き出すのだった。

そうして漸く整備された石畳の道に出るが人影はない

「うんだばー この道さ真直ぐ行けば二・三日で王都に行けますだ」

「タンさんありがとうございます」

「いんやー 王妃様の弟君様のお役にたてるなんぞ代々語り継いでいくだ」

いや……そこまでの人間じゃないけど

それからお礼にカロリー○イトを二箱分けてあげると涙を流し喜んでくれリユーリンさんの事がなければ本当に良い人だ

手を振って別れてこれから一人で歩いて行くが本当に自衛隊に入っ  
ていって良かったとしみじみ思う、あのままで言ったら確実に山を  
越えるのに一日は以上掛かっていただろう

あの頃は高校の登下校さえ苦痛だったからな

運良く馬車が通ればいいんだけど当分歩いて行くしかない

「そう言えば次の街の事を聞くの忘れていた――最悪野宿か――まさか山族なんかないだろうな……」

一応サバイバルナイフは持って来たがどうせなら自衛隊から拳銃でもちよろまかしてくれば良かったかなと考える――無理だけど

重いリュックを背負い取敢えず歩き始めるが俺の嫁が待っているかと思うと足取りは軽かった。

目指せロリ顔巨乳!!!!!!

## 異世界トリップ二日目その一（後書き）

ミユキ達が出ない！？　なんか話が違うと思う皆様ゴメンなさい――  
――　当分こんな感じですがお付き合いください。

## 異世界トリップ二日目その二

俺は森の中を通る街道をとぼとぼと歩いているが周りには背の高い樹齢百年以上は経っていきそうな巨木ばかりで太陽の日差しが届かずうつそうとしている。

「この辺りで山族が出るのが定番だよな」

サバイバルナイフを直ぐ出せるよう腰に携帯している。

1対1の戦闘ならある程度応戦出来るが大勢に取り囲まれればアウト

639

まさか着地地点が王都から逸れてしまったのは想定外

「取り囲まれたら逃げるが一番だよなー 普通なら能力の一つでも目覚めるんじゃないのか！」

しかしそんな能力は目覚めないのは向うの姉ちゃんに言われていた  
ので知っていたが

『 そんな都合に良いチートな能力が無償で貰えるなんてある訳ないでしょー せめて言葉ぐらい通じるようにしてあげるわ 』

そう言ってくれたのが何の変哲もない金の指環で今は左手の人差し指に嵌めている。



向うの姉ちゃんの本物の姉ちゃん同様あまり甘やかしてくれないが有り難く貰っておくがせめて身体能力一つでも上げてくれるアイテムも欲しかった。

街道の先にはただ暗い森が続いており失敗…さっきの草原で誰か通るのを待っていれば良かったと後悔

先が見えない道では一気に走り抜けるのも危険で体力を温存する為にも一定の速度で歩くがガサゴソと音がする度にビクついてしまい走り出したいのを我慢する。

「なんか山族より化け物が出るんじゃないだろうな〜」

心の中で平常心を保つ為に呪文を繰り返す。

走っちゃ駄目だ 走っちゃ駄目だ 走っちゃ…

ギエー~~~~~

突然聞こえる不気味な声

「ギャ~~~~~ 助けて~~~~！」

俺は情けなも脱兎の如く走り森を走り抜ける。

自衛隊で重い装備をしたまま走る訓練をしているのでそれなりに走れるが全速力で走るって俺はバカか!!

二十分後には座りこんでいる。

「ゼエー　ゼエー　ゼエー　ゼエー　……　もう走れん……」

座りこんだ場所は相変わらずうつそうとした暗い森の中

なんか心理的に来る物があつてマジ怖い……

なんか迷子になった気分で良く木のうろが人の顔に見えて来るって  
本当だな

アレなんか骸骨ポイし……

うう……

助けて姉ちゃんーん

思えば小さい頃から引き籠り気味の俺を母ちゃんが外に連れ出し  
アル迷子ごつごで置き去りにした時は何時も迎えに来てくれたのが  
姉ちゃんだった。

此処で待ってたら姉ちゃん迎えに来てくれないだろうか

だが知らないから無理だろうな……

少し泣きそうになるが二十三歳でこの状況で泣くのは痛いぞ!!

小さく丸まり泣くのと恐怖に耐えていると

ドン!

背中に衝撃!!!!？

「邪魔だどけ！」

ドカッ！

背中を誰かに再び蹴られて前のめりに倒れるが咄嗟に腕でガードしたので顔を怪我せずに済んだ

「何するんだ！ 顔を怪我するだろう」

「そんな不細工な顔に今さら傷の一つも惜しいのか」

如何にもバカにしたような少女の声

少女!!

振り向くとそこには美少女！ 大きな菫色の瞳にピンク色の髪は両サイドの上方でツインテールにし白いリボンが結ばれ天使の様な可愛さだが……年齢的に十歳くらい

確かに口リ顔は好きだが幼児体型には萌えない

俺は巨乳が好きなんだ!!

しかし此処にこんな美少女がいるなんて変な話

幻???

思わず少女に触れようとすると

バシ！

「人間風情が妾に触れるな！ この無礼者！！」

叩かれた手が痛いのでどうやら本物らしいが偉く高飛車な子供で身なりも綺麗な赤い着物で絹のよう、タンさんの村の子供達と明らかに違い貴族のお嬢様と言う風態

顔は可愛いが俺にしたら村の子供達の方が数倍可愛く感じる。

恐らく髪とか美しさから判断して亀族のお姫様なんだろうが御供も連れずこんな所に一人歩いているのは不自然

「お譲ちゃんは迷子かな？」

ニツコリ笑いながら聞いてみると

「その不気味な笑みは止せ、目が穢れる」

マジ可愛くんねー！ー！ー

「誰かお家の人はいないのかな？」

「言っておくが妾は迷子では無いぞ。そもそも道の真ん中で泣いていたそなたが迷子であろう」

ギック！

泣いていたのがばれてる！？

「……違うよ。疲れたから休んでいただけだから」

「妾の横を助けてと叫びなが走り抜けていったのは誰だ」

エッ そうだったの？ 全然気が付かなかったがあまりこの娘とは関わらない方がいいと本能が言っている。

此処は本能を信じよう

「きつとそれは別人だ。俺は急ぐんでじゃあな」

さっきまでの恐怖心は何処へやら、それよりこの少女をから急いで離れようと立ち上がりスタスタと早足で立ち去る。

絶対アレは危険だ

きつとんでもない被害に合うのは目に明らかなパターン

普通の少女をこんなところに放り出すほど薄情じゃないと弁明しておく

走って出た汗が今は冷や汗に変わっている。

暫らく歩き続け後を振り向くとあの少女の姿を消えておりホッと安心し前を向くと

「妾を置いて先に行こうとは失礼な人間」

「のわああーっ！ 何時の間に！！」

俺の胸ほどもないのに気配も感じず後を付いて来たとは思えずらく  
まさか空間転移

小さくても神様らしいからそれ位しそうだ

まさかそれとも幽霊!?

「そなた一人では寂しかろ。 妾が付いて行って進ぜよう」

「俺は一人が好きなんだ」

「嘘を申すな。さっきはべそをかいてだではないか！」

キーンと癩癩を起こす少女

なんだかこれ以上怒らせてもとんでもない目に合いそうなので街ま  
で同行し人混みで撒いた方が穏便に済みそうだな……

「分かった。一緒に行ってもいいが泣いてはいないから」

「フン！ 一人前に自尊心か——よかろう妾の広い心でその事は不  
問にいたそう」

マジでムカつくガキ

「それは有難うございます。それじゃあ行きますよお姫様」

俺が歩き出そうとすると右手を差し出す少女

「??.」

どういふ事だと訝しく見ていると

「サツサと妾の手を引くのじゃ！　この愚図がそんな事も分からんのか」

「さっきは触れるなと言ったぞ」

「今はいいのじゃ。　触れる事を許す故、手を引け」

なんて上から目線のガキ！

絶対親もこういうタイプだな。

仕方なくそのほっそりとした小さな手を取りその少女が本当に実在しているんだと感じる。

しかも恐ろしく綺麗なガキ

神族は美形ばかりと聞いたが此処までのレベルとは期待してしまう――このレベルがウジャウジャいるのかと思うと顔がニヤケてしまう

「ところでそなたは面妖な服を着ておるな。しかも黒い髪に目とは珍しい……何者だ」

「ただの旅人」

俺が王妃の弟だと知られるとなんか面倒そうな気がして黙っておく

「本当に……」

疑り深そうに俺を見るので話題を逸らす。

「お姫様こそこんな所に一人で御供も連れず不用心じゃないのか」

「案ずるな。妾は強いし王都には父上と母上がおる」

お姫様って言うのは否定せずあっさり受け入れているぞ

「まさか家出じゃないよな」

「違うぞよ。妾は置いてかれたので後を追いかけているだけじゃ。全く可愛い娘を置いて夫婦二人で王都に行くなど以ての外じゃ！」

「それは それは大変だ……」

それを家出と言うんだ！ このアホ娘、次の街で絶対に逸れてやる。

というか飛び出した屋敷から絶対に搜索の為に街で待ちかまえている可能性が大きく巻き込まれイベント発生確実だよ

「それよりそなたの名はなんと申す」

他人の名を聞く時は先ず自分から名乗れと言うとフラグが立つので絶対に言わない。

「ケント。それよりお姫様の名前は」

「下賤な人間に名乗れるか」



「あーそうですか」

一々反応するのも疲れるぞ

スルーだスルー

そのまま無言で歩き続けると突然立ち止ってしまいう姫

「疲れたのか」

「ケントは妾の知っている人間とは違う…何故媚びてへつらわぬ」

「いや…十分へつらってるぞ」

自分的にはかなり下手に出ている心算だが…もしやタンさん張りにしろと要求してるんだろうか？　なんて我儘な姫様だ

「姫様は俺にどうして欲しいの…もしかして優しくして欲しいとか？」

「フン！　そなたの様な不細工の優しさなどいらん！」

へーへーそうですか…　不細工不細工言うなよ…　これでも傷付いてるんだ

こうなったら嫌がらせの様に頭を撫でてやる

「遠慮するな。　良い子　良い子」

ナデ　ナデ　ナデ

そして怒り狂うかと思えば何故か顔を真っ赤にさせてプイと横を向く

「わっわっ 妾を子供扱いすで無い！」

うーん 少しは可愛いところがあるのか

「取敢えず歩こう。とっとと森を抜きたいからな」

そう言って姫様の手を引っ張ると

「……ミヨンミヨグウイ」

「ヘッ？」

「妾の名はミヨンミヨグウイだと言っておるのだ」

いや…別段名前は知りたくないんだけど

もしかして懐かれた?????

「良い名前だな姫様」

取敢えず流しておこう

これがせめてBカップの女の子なら嬉しいんだが、如何せん子供

射程外

兎に角、街までは穏便に行こう

お姫様が大人の時に会いたかつたと思つたのだつた。

## 異世界トリップ二日目その三

二人で暗い森の中を只ひたすら歩くがさっきの暴走で半分近い体力を使ってしまった俺は姫様に休憩を申し出た。

「姫様、俺は休憩したいんだけど」

「無理じゃ。チンタラ歩いていては街に着けぬ」

「甘いお菓子があるんだが残念だ」

「仕方がないのー 少しでもいいじゃ」

やはり女の子、甘い誘惑には勝てない

俺はリュックを下ろして中からどら焼きを取り出す。これは姉ちゃん的大好物でお土産に二十個持って来たのだが予定に反し直ぐに対面出来なかったから二個ぐらいいいだろう

ビニールで個別包装してあるのを一個渡すと繁々と眺めている。

「袋を破ってから食うんだ」

「それ位分っておるわ！ ただ珍しい物に包んであるから見ていた

だけじゃ」

俺は地面に座り姫様にはリュックの上に座らせて二人で食べる。

俺が美味しそうに食べるのを確認してから恐る恐る一口食べるとあつと言う間に食べてしまう。

「まずまずであった。 妾はもう一つ所望する」

「悪いが姉ちゃんの土産の分だから他のをやるよ」

そう言ってイチゴミルクのアメを三個掌に載せてやる。

最初は不満そうにして受け取るが一口に入れると直ぐに機嫌を良くしあつという間に三個のアメを舐めてしまう。

「このアメは何処に行けば手に入るのじゃ」

余程気に入ったようだが買うのは無理、なんせ異世界のお菓子だからな

「玄武国では絶対に手に入らないから諦めろ」

「妾は亀族の姫、手に入らぬものはない」

「日本で売ってるから搜して見れば」

「日本？ 初めて聞く地名だ」

「知らないのか？」

「妾に分らぬ事など無い！！ 日本など造作もなく捜せるわ」

「うん 姫様なら捜せるはず。頑張れよ」

俺も性格が悪いと思いつつもからかってしまう。どうせ直ぐ分れる間柄だしアメの出所を話すのも面倒だ。

それに嘘では無い

ついでに水分補給をすると姫様の荷物は何も無く手ぶらしく水を1本分けてやるとこれまた大騒ぎ

「この器は何で出来ておるのじゃ？ ガラスの様に透明でありながら薄く柔らかいとは不思議な素材」

「それも日本では珍しくないものだ。さっきのアメ同様簡単に買えるぞ」

「日本か！ 絶対捜し出してやろうぞ」

「しかし水も食料も持たず良く此処まで歩けたな」

「妾は亀族ゆえ別段吞まず食わずでも一年以上は普通に生きられるのじゃ、人間の様な脆弱な体は持っておらん」

「でもまだ成長途中だろ、確り食べないと駄目だぞ」

そう言って頭をポンポンと撫でるとまた真っ赤な顔でプイツと顔を逸らす。

うゝん これはツンデレの初期症状だろうか……これ以上懐かれるのは危険だ早く撒こう。

この世界に来て子供ばかりに懐かれても嬉しくない！

幼児趣味のような極悪変態だけにはなりたくないもんなー姉ちゃんにもそっちに走ったら縁を切ると断言されてしまっている。

そもそも俺はおっぱいが重要で顔は二の次

向うのリアルではトコトンもてなかった俺

自衛隊の時も一応合コンも積極的に参加した。高校のポツチャリ体型の時ならいざ知らず自衛隊で鍛え締まった体と地味ながらスッキリした顔は普通レベルになりこれなら少しは需要があるはずと顔は二の次で胸だけで女の子を選んだが全て玉砕

なのに俺より不細工な奴が女をお持ち帰りってどうゆう訳だ??

俺のどこが悪いんだと悩んだすえ、やはり俺には異世界トリップし  
か無いんだと思い至った。

これだけの美少女が俺に懐き始めたのだから幸先は悪くないはずだ

「何を気色悪い顔でニヤついておる。サッサと出発じゃ」

「うっ そうだな…」

不細工やら気色悪い、齒に衣着せぬ言葉に俺の心は擦り傷だらけ。

姫様の教育係に文句を言ってやりたいぞ

そしてトボトボと姫様の手を引きながら歩く事一時間あまり漸く森の出口が見え始め安心したその時だた

目の前に三人のガラの悪そうなオヤジが森の茂みから飛び出し立ち  
はだかる。

体格は俺より遥かに大きく手には剣を持っており顔も如何にも悪人面

「こりゃあ綺麗なガキじゃねいか。男の方も奴隸として売れそうだが珍しい黒髪に目かく細身だし娼館に高く売れそうだ」

娼館！！ 何で俺がそんな所に売られる？？ 男は買う方であって  
売れねえだろ！？

「怪我したくなけりゃあ大人しく捕まりな」

なんてお約束な展開だ

姉ちゃんに会う前に死亡フラグ発生

小銃の一つでもあれば切り抜けるがナイフ一本で三人は無理

此処は森の中に逃げるしかない

「おい 逃げるぞ！」

手を引き森に入ろうとするがビクとも動かない姫様



「捕まったら売られるぞ!!」

「妾は逃げぬ! このような輩に背を向けれるか 妾は亀族が姫と知っての狼藉かー 許しを乞うて逃げるなら今のうちぞ」

「うっひゃあーひゃあーひゃー 大ボラふくなよガキ! どうせお前等二人はどこぞの亀族の庶子で家を追い出されたに決まってる」

「それとも売られそうになって逃げて来たのか」

「亀族の姫が御供一人でこんな所にいるはずないぜ」

男達は嫌らしく笑いながらジリジリと迫って来るが姫様は逃げようとせず真直ぐ男達を見据え怯えてすらない。

仕方なく腰からナイフを抜いて構え一人ぐらいはやれるだろう

後は姫様の能力次第だが本当に大丈夫なのか

「最後の忠告ぞよ、手を引け下種共」

オイオイ 煽ってどうする!?

「このガキども たっぷり可愛がってやるぜ! 取り押えろー」

ええっっ そういう意味でそれって俺も入るのー??

三人の男達が一斉に掛かって来るので身構えるが

「死ぬが良い」

姫様は今までとは違う冷酷な笑みを浮かべながら掌を山族達に向ける。

なんかマジっぽいぞ！

掌が光り出すのを見て慌てる。

「止めろ！」

ガバ！！

ドウツカーーーーン！！！！

咄嗟に姫様の手を押えて下げさせると爆音と同時に砂煙と石の破片が降り注いで来る。

砂煙が治まると石畳の道に大きな穴が開いており向う側には三人の山族は真っ青な顔をしてガタガタと震え腰を抜かしていた。

「おい殺す気か！」

「何故邪魔をするのじゃ。このような輩は生きていても何の価値もない害虫と同じ」

まー確かにその通りなんだが、日本で生きていた平和ボケの俺には目の前で人が殺されそうになっているのに見過ごせないんだよ

しかし据え恐ろしい姫様

人間の命なんてこれっぽちも惜しんでいない

神族なんてそんなものなのか

「悪人だからと言って直ぐ殺しちゃいけないだろ。法で裁かれて罪を償う手続きが必要だ」

「まどろっこしい…… どうせ何人もの旅人の命を奪ってきた悪人で死刑は確実じゃ」

取敢えずこのまま山族を放置しては迷惑なのでリュックからロープを取り出してエビぞりの姿勢で男達を次々と縛りあげるが何の抵抗も見せず恐ろしげに姫様を警戒して震えている。

しかしオッサンを縛っても全然嬉しくない！

どうせならロリ顔巨乳を亀甲縛りに出来るなら死んでもいいぞー  
ー  
ー

想像するだけで鼻血が

「どうするのじゃ？」

「街で役人に教えて引きとって貰う」

「それまでこの体勢で放置か。ケントも案外えげつないの……」

そうだろうか？ 命を助けてやったんだから優しいだろ俺

「俺って優しいよな」

山族達にそう問いかけると真っ青な顔ながら頷いてくれる。

言うなれば命の恩人だぞ

「それじゃあ役人が迎えに来るから大人しく待ってるんだぞ。暴れれば暴れるほどロープは締まるから一応忠告ね」

それに軍使用の特注ロープで滅多に切れない

「ケントは何が武術の心得があるのか？ 結構人の扱いに馴れておるな」

「一応五年ばかり軍に居たんだ」

「軍に五年！ 一体ケントは何歳だ？」

「二十三歳だが」

「何ー！ ！ 妾はてっきり十五歳くらいだと思っていたぞ」

十五才！ ！？ 多少童顔に見られるがそれはないだろ

確かにリユーリンさんも大人ぽかったが…もしかすると年下だと思われていたんだろうか

地味にシヨックだ

もしかして俺って女性に子供扱いで相手にされない

ガーーーーー！

意外な事実

失敗だーーーーー！！

これなら後十年待った方がいいのか

それじゃあ三十三年間童貞で自衛隊で頑張るのもいやだぞー

防衛大でも卒業すればそれなりに昇進できるが一般曹上りでは先が見えてる。

とても明るい将来では無い

此処は異世界トリップの恩恵に縋るしかない

大丈夫だ

あの洗濯板の姉ちゃんでさえ超絶美形の王様をゲットしたんだ俺にだってロリ顔巨乳美女が寄って来るはず

「信じる者は救われるんだ！」

思わず叫ぶ

「何を言っておる！ 気でも触れたか？」

不気味そうに俺を伺う姫様

「いや…妄想してただけ」

そう言うのと冷たい目で見られながら聞いてみる。

「そう言えば姫様は何歳なんですか」

「妾は三十二歳じゃ」

「俺より年上!!」

俺は三十二歳の女性の頭を子供扱いし撫でていたのか！

良く切れられなかったと思うが体に精神年齢が引きずられると言うし、姫様の仕草も話し方も時折子供っぽさを感じるからそれでいいのだろう

「亀族は人間の様に早く年老いて直ぐには死なぬ。百歳で成人の体に成長すると更に老化はほぼ止まる故に人間の年齢で妾達を当て嵌めても無駄じゃ」

「亀族のお嫁さんになって貰うとすると全員年上なのか」

「ケントの容姿で亀族の姫を射とめられるはずがなかろう」

バカにしたように言われるが気にしないぞ

「仮定だよ仮定」

うるせ—— 確かにそうだが異世界トリップの恩恵を舐めるなよ

亀族の姫から人間のロリ顔巨乳は全部俺のだ――――

と心の中で叫ぶ

それから山族達をその場に置き捨てて森から漸く抜け出るとすっかり日が暮れて夕焼けが広い麦畑に沈み反対方向には大きな街が夕陽で赤く染まり見えて来た。

それと街道の真ん中に一人の影

姫様はその姿を確認するや否や慄く

「しまった！」

どうやら知り合いで恐らくお迎えのようだ

そいつは歩き始めて近づいて来るとその容姿が顕わになると思わず息を飲んでしまう

それは壮絶に綺麗な男

紫紺の長い髪を後ろで束ね切れ長な目にはアイスブルーの瞳に高い鼻筋に薄い唇は酷薄につり上がり静かな怒りを感じる。

背筋がゾクゾクとして鳥肌が立つほどの殺気と低い声で俺に向かい怒号する。

「人間如きがミヨンミヨグウイ様のお手を取るとは許さん！ 死してその罪を贖うが良い」

はあゝ そんな理不尽な

俺は好きで手を引いている訳じゃないぞ！

どうせなら胸のある女性が希望だ！

「姫様 あいつなんか勘違いしてるぞー 説明して誤解を解いてくれ」

俺は急いで姫様をお願いするが

「逃げるぞ！」

「はあ？」

そう言う俺の手を引っ張り元来た森に引き返し始めるが俺としてはあちらの美形に姫様を渡してこのままお別れしたい

「俺は街に行きたいんだ！」

「あ奴に捕まれば王都どころでは無い！ 呈州に連れ戻らされる」

「そんな事情知るか！俺は関係ないぞ」

しかし姫様の力に敵わず引き摺られ森に行くが直ぐに行く手を阻まれる。

「さあミヨンミヨグワイ様帰りますよ。その汚い人間は始末しますからお渡し願います」  
人を汚物の様に言うな！



全く亀族は綺麗だが人間に優しくない

このまま死亡フラグまっしぐらなのか

「煩いぞウェア、ケントは妾の愛玩動物じゃ。手出しは無用」

「ええ〜 俺ってペットかよ!!??」

何時の間にそんな事に??

しかも人ですら無いのか俺!!!

「ミヨンミヨグウイ様：おふざけは程々に、しかし素直に宮殿にお戻り頂けるならその者の命は助けましょう」

おお〜 なんて嬉しい提案

俺は巻き込まれただけの被害者なんだがこの状況から解放されるならどんな扱いでも許容しよう

「嫌じゃ! 妾はケントから離れぬ!」

そう言って俺に抱き付くお姫様

「ぬうわあああ——— 離れてくれ姫様」

必死に引き離そうとするが姫様の力は半端無い

怒れる美形は更に凄まじい形相になるり一気に死亡指数がアップ

姉ちゃん…

お元気ですか

俺は死にそうです。

美形は静かに近寄り…まるで鎌を振り上げる死神の様に近づくと、そして俺はせめて最後くらい気丈に奴を睨みつけてやるのだった。

## 異世界トリップ二日目その四

美形な顔の怒りの顔ほど迫力があるのを初めて知る。

マジ怖えーーーーー

ささやかな男の意地は直ぐに挫けて睨んでいた目は涙ぐんでしまう  
こいつは亀族だ、姫様同様に力があるはずで俺なんか散りに等しい  
に違いない

俺は殺されるのか……ひえーーーーー

情けない事に抱き付いている姫様の頭を抱えて縋り付いてしまう

それが奴を更に刺激したようでクワツと目が見開かれそこから光線  
ビームでも照射しそうなほど凝視され更なる恐怖に支配され生きた  
心地がしない

正に蛇に睨まれたカエル

そして1m圏内に入ると右手を俺の首元に突き出して来る。

首を絞められ殺されるのかと覚悟した時

何故か顎を取られ上に向かされると凄まじく綺麗な顔と冷え冷えと

したアイスブルーの瞳が間近で見降ろしておりこのまま瞬間凍結されそう

「……良い表情だ」

「へっ!?!」

「その泣き顔が実にそそる……」

「?????」

そそる？

こいつは何を言っている????

理解不能で今度は違う意味でフリーズ

「可愛い唇」

誰の??

ムチュツ????

そして固まる俺の唇と奴の唇が何故か重なる。

これはもしかして憧れのキスと言う行為ではないだろうか

誰と？

おっおっおっ男と!!!

ギャア――――  
ー！

と叫びたかったが生憎口が奴の口によって塞がれており出せないばかりかナメクジのような物が入り込んで来て俺の口の中を暴れて攻撃し始める。

ナメクジが這いまわってるおぞましさに気が遠くなる

「ウェアー！ ケントになにおし……」

最後に聞えたのは姫様の怒鳴り声

男に……

男に……

男に……

ファーストキスを奪われた俺はそこでブラックアウトしてしまうのだった。

口付の最中に倒れ込むケントを抱きとめる男

「初心な子だ私の口付で気を失うなど」

決して自分が嫌悪されているとは思えないらしい

「たわけーーーー！ この腐れ外道 ケントに変態が移るではないか」

「ミヨンミヨグウイ様 亀族の姫がそのような下品な言葉遣では嫁の貰い手がありませんよ」

「フン！ 呈州の州知事の地位欲しさに男なんぞ掃いて捨てるほど寄って来るぞよ」

「それよりケントを私に譲って下さい。 なんなら王都へ行くのは目を瞑りましょう」

「うーむ… 中々魅力的な申し出だが 無理だと言っておこうぞ」

「珍しい ミヨンミヨグウイ様が人間に興味を持つなど」

「そなたも同様であろう。 何時から地味専になったのだ？ そなたの好みは生意気な美少年では無かったのか」

この男はミヨンミヨグウイの従者でもあり教育係を務めるウェアーグウイ

秀麗な上品な顔立ちながら趣味は美少年の調教というとてもない趣味の持ち主でその毒牙にかかり道を踏み外した者は有に百人を超える噂される美青年

大事な呈州知事の一人娘にそのようないわくつきの男を付けるのは周囲は反対したが優秀なのは間違いないで大事な娘に手をだす心配もなかった。

「確かにそうなんですが、あの怯えた子犬の様な目で見られ思わずゾクゾクしてしまい思いつきり<sup>なぶ</sup>つて泣かせたくなりました。あの濡れた黒い瞳を思い出すだけで直ぐさま突っ込んで一晩中犯し続けたいくらい興奮します」

そう言ってうつとりと気絶しているケントを見詰める目には危ない光が宿っている。

「ケントを見て他に思う事はないのか…」

軽蔑の眼差しで見るが堪<sup>こた</sup>えるような男ではない

「他？　そう言えば黒い髪に瞳と言えば王妃様と同じ、しかも来ている服も変わっていますね……ケントは何処の国の者ですか」

「これを見るがよい」

そう言って袂<sup>たもと</sup>から取り出したのは水の入った透明な容器

ケントを抱いたまま受け取り繁々とその水筒らしき物を眺めると驚きを隠せず目を見開く

「素晴らしい技術です。どの様に造られたのか皆目見当も付きませんがこの世界の物ではありませんね」

「ケントから貰った物じゃ。ケントは日本と言う国からの旅行者らしいぞよ」

「日本 この世界にそのような国も地名も御座いませんが」

「そうじゃ、そしてケントは王都に居る姉を尋ねて行く口ぶり……バカでも分かるであろう」

「つまりケントは王妃様の弟君だと」

「恐らく…確証はないが王妃様の出自は隠匿されており他の亀族も躍起になって探ったが分からなかったそうじゃが」

「珍しい双黒を纏いながら出自が分からないのは異界人の所為だったのですか、なるほど」

「だからケントは諦めるのじゃな 王妃の弟君をそなたの玩具にされ壊されては妾の首も飛ぶ」

「ミヨンミヨグウイ様ならご両親の首を差し出すのでは」

「成程！ それは良い考えじゃ。 煩いのが三人も一度に死んで呈州は妾の思うがまま」

あまりに酷い言い草に流石のウェアグウイも鼻白む

「はぁ… 薄情な主に仕え私は不幸ですよ」

「妾は暗愚な両親を持って不幸ぞ！ 主従の縁は切れても親子の縁は切れぬのだから…妾の結婚を無理やり決めるなど信じられぬ」

「それで自分のご縁談をぶち壊す為に王都に行っても成人もしてお



られぬ御身では無謀としかいいませんよ。ここは御両親の言う通り婚約だけでも結べばよいではないですか」

毎年新年の挨拶の為に王都に各州の州知事が賛礼に行くのが習わしなのだが、今回はミヨンミヨグウイと王都に住むさる高位の亀族の縁談をまとめるのに乗り気なのだ。

そこで邪魔な娘を宮殿に監禁してまで推し進めようとしていた。

しかし黙って大人しく監禁されるお淑やかな姫様では無く、ウエア―グウイが美少年と戯れている隙をつき結界を打ち破り一人で王都に向かうじゃじゃ馬ぶり

生まれる性別を間違えたのではないかと何時も思うウエア―グウイ  
これまで亀族の婚姻は親が決めるのが一般的で女性は特にそれが顕著で余程の高位の姫でなければ相手を選ぶのは難しかった。しかし最近では女性自体が数が少なくどちらかと言うと女性の方に選択権があるのだが今回は相手が悪かった

「今にも死にそうな亀族の爺と婚姻を結ばされ命を削られた上に妾の純潔まで奪われる位なら死んだ方がましじゃ」

「爺…… しかし純血の亀族と婚姻を結べるなど亀族の姫として誉れ高いではありませんか。もし次期亀王様をお産みになれば皇太后となれば大きな権力を持てますよ。好きでしよう権力」

相手は権力の中枢の丞相府に勤める重臣で純粋な亀族の血を引く男なのだが確かに高齢でありながら未だ正妻を迎えていないが側室は山のようにいるのだ。自分より神力の劣る相手と婚姻を結び命を削る

より自分の寿命を延ばす為に時折、年老いてから神力の高い若い姫と権力を使い婚姻を結ぶのは良くある事

この場合はお互いの家に利益があるのでその姫以外には悪い話では無い

ミヨンミヨグウイの両親もその亀族と親交を深め婚約の密約と同意書を交そうとしているのだ。

「妾は慎み深い性質なので呈州だけで十分じゃ。それに丞相様に産まれた御嫡男様は亀王様と同等に神力が高く次期亀王だと目されておる。あんな化け物を超える子など妾は産めぬぞ」

あまりの言葉に眉を顰めてしまう。

化け物とは何たる暴言で他の者に聞き咎められれば即刻打ち首だろ

「兎に角今回の婚約の書状は両家で取り交わされ提出され後は亀王陛下のお許しで決まったも同然。無駄な足掻きはお止めになって帰りましょう」

「何を言っておるのじゃ。妾には今この手に重要な駒を握っているではないか」

そう言いながらケントに視線を注ぐ

「弟君をどうなされるのです？」

「ケントを使い王妃様に取り入り泣き付くのじゃ。亀王様は王妃様を盲目的に愛されているのは周知の事実で王妃様の願いは何でも

聞くと噂。妾の元にケントが遣わされたのは天帝様の御慈悲に相違ない！」

確かにこのまま老いた亀族と婚姻を結ばれるのも憐れに思っていたが阻止する力など無い自分には、主にこの婚約を説き伏せるしかないと思っていた。

だが王妃様に嘆願し婚約を破棄して貰う算段ならその可能性は高いので此処は趣味と実益を兼ねて協力をする事に決める。

「どうせなら私が体を使い弟君を籠絡すればもっと簡単ですよ」

「その爛れた思考は何かならんのか……ケントなど妾の美しさに直ぐにメロメロじゃーそなたは手出しするな」

「はあっ……!？」

主の言葉に驚くウェアグワイ

卵から生まれ出でた時よりお仕えしておりその性格を熟知しているがこのような手を使うなどあり得ない。どちらかと言うと相手の弱みを握り脅すのが常套手段な姑息な主

どうやら自分と同様に、この少年に多大な興味があるらしいと気付く

「良いでしょう……ミヨンミヨグワイ様のお手並み拝見といたしまし  
ようが無理なようでしたら私にお任せを」

確かに我が主は美しいが如何せんまだ子供で初潮すら始まっていない幼い体

しかもこれまで恋などした事のない色気の欠片もないお方だ

男を落すとはどういう事か理解しているかすら怪しい

ケントが少女愛好者ならば勝ち目はないが、異性愛者ならその嗜好を変えさせる自信があるウェアグウィ

「妾で十分じゃ」

自信満々のミヨンミヨグウィ

これまで州知事の娘として男達にチャホヤされてきて男の扱いを知らない少女

高飛車な亀族の姫の態度に人間の少年がどう感じるかは明らかであろう

自分方に分があると考えているので余裕があるウェアグウィは薄っすらと笑う

「ソロソロ街に参りましょう。既に宿はとってございますので七日間の逃避行の垢でもゆっくり落して下さい」

「ところでそなたは良くこの場所が直ぐに分かったの…神力を使わずに此処まで来て先程も僅かに使っただけであった筈じゃ。妾がこの街道を来るのが分かっていたのか」

「勿論で御座います。おしめの頃よりお仕えしている私の裏をかこ

うなど百年早いですよ」

神力を使えば一気に王都まで飛んでいけるのだがその場合直ぐに見つかり連れもどされれると思ったので歩いて人目を憚りながら歩いて来たのだ。

「クウー―― それでは神力を使わない努力は無駄なのか！」

「そう言う事です」

「まさか結界に綻びがあったのも王宮に居なかったのも態と？」

「どうせ有り余るほど元気ですので少々力を削いでから再び閉じ込めようと考えてました」

いけしゃあしゃあと言う従者に殺意を覚えるのは生まれてこのかた何度目であろうと思いつながら手が出せない自分の非力が恨めしい

「そなたの加虐趣味を主にまで向けるのか――」

「何を仰るのです。これも私なりの愛です」

そう言ってニッコリと笑う従者に何も言えない。

「妾は疲れた！ サッサと宿に連れてくのじゃ」

「はい仰せの通りにミヨンミヨグウイ様」

大きなリュックを担ぐケントを軽々と抱き上げ空高く舞い上りそれが続くにミヨンミヨグウイは真っ赤に染まる街の方に消えて行くの

だ  
っ  
た。  
。

## 異世界トリップ二日目その五

ヌルゝ　ヌルルルゝゝゝゝ

ナメクジが　ナメクジが　ナメクジが襲って来るーーーーー！

巨大ナメクジが俺の前に現れて大きな口を開けて俺を飲み込もうと襲って来るので必死に走り逃げるが地面につまずき転んでしまう。

しまったと思った時は遅くナメクジがそのヌメヌメとした体で自分に押し掛かろうとしている。

ギャーーーーーッ

「止めてくれーーーーー」

ガバッ！

飛び起きてハッとするところは見知らぬ部屋のベットの上がった。

「アレ?????　夢か……」

ホッとするのも束の間で部屋の様子を伺い訳が分からない

「確か、姫様に会ってから山族を捕まえて……　それか……　！！

」

その先を思い出して一気に冷や汗が吹き出し鳥肌が立つ

俺は……俺は男に唇を奪われてしまったのか……!!

自衛隊に入隊し屈折五年、守り抜いたファーストキスとケツの穴!

俺は何度もノーマルだと主張したいのに何故か狙われてしまう自分

幾ら美形でも男なんて受け付けるか!

どうせなら女の子にもてたい

異世界トリップして男にフラグが立つ俺って何なの……

うっうー泣けて来る……

何で姉ちゃんは上手く行って俺はこうなんだ

二番煎じは駄目なんだろうかと考え込んでいると扉が開かれる。

ガチャ!

ビク!

ガバツ

もしかあの男かと思いき急いで布団に潜り込む。

「ケント? 目が覚めたと思ったのじゃが」



姫様の声だと気が付き急いで布団から飛び出し今の状況を確認したかった。

「姫様！ 起きてるから待ってくれ」

「おお ケント 気が付いたのじゃな」

見れば綺麗な水色の花柄の着物を着ており、髪も可愛いツインテールに藤色の小花が所々にあしらわれており良く似合う。

日本でさえ滅多に見れない美少女で二次元に引けをとらない

だが如何せん胸がないときめかない性癖の俺には綺麗な写真でも見ている気分

いや…3Dか

「ここ何処？」

すると何故かムツとする。

「そなた、妾を見て何か言う事があるであろう」

えっ？？？ 何か違うのか？？

考え込んでいると焦れた姫様が怒りだす。

「妾の様な美しい少女を見たら先ずその美しさを誉め讃えるのが礼儀じゃ」

そう言う事かと納得するが普通そうなのか？

まあ 事実綺麗だし誉めて何かが減る訳でもない

「おおー すごい綺麗だぜ姫様」

少々 棒読みになるのは仕方がないだろうが

「／／／ もっと心を込めて言うのじゃ！ やり直し」

駄目押しされてしまった

「なんて綺麗なんだ 初ミクも真っ青な美少女ぶりだ」

少し抑揚をつけて言ってみる。

「？？ 初ミクとはなんじゃ？？」

「日本の国民的美少女歌手で凄い人気がある娘だ」

二次元だけど

「ほおー 今一な誉め方じゃが 仕方ないの： 次はもっとましな  
賛辞を考えよ」

俺的には最大の賛辞だ！

第一何で俺が一々誉めなきゃならないんだ面倒くさい

「それより此処は何処か知りたいんだけど」

「街の宿屋の特別賓客室じゃ。 ケントが氣を失ってしまい連れて来てやったのじゃ有難く思うが良い」

「へっへゝ ありがとう： やっぱり運んだのってあの男？」

恐る恐る聞いてみる。

「そうじゃ。 あ奴はウェアーグウィと申して妾の従者を務めておる。 ケントには二度とあのような事をしないようお願いしたので大丈夫、安心いたせ」

「そうか……」

それでも油断は出来ない、 ああいう手合いはしつこい

「それと俺の荷物はどこ」

「それならそこじゃ」

姫様が指示した部屋の隅に俺のリュックが置いてありホツとする。

アレには姉ちゃんと新しい兄ちゃんへの土産が入っているので無くしたくない――きつと二人共喜んでくれるだろうと今から楽しみだ。

それともう一つ大事な物が入っている。

急いで起き上がりリュックの中を確認してそれがあるか取り出して

みる。

「なんじゃそれは？」

俺のとりだした白いケースを興味深そうに覗きこむ姫様に蓋を開けて見せてやった。

そこにはダイヤの指輪が納まっており、それを興味深そうに見る姫様

「なんと美しい石じゃ」

部屋の照明に反射しキラキラ輝くダイヤをうっとり見詰める。

矢張り女の子はこういう光り物が好きなんだろう

「ダイヤモンドと言って俺の国では結婚相手に渡す指環に付けて贈るんだ」

この指輪を買う為に安い給料から百万円つぎ込んだ俺の血と汗の結晶

もしそう言う相手が出来たら即結婚を申し込む心算で用意した。

亀族ならこの世界に留まる心算だが人間の女性なら日本に連れて帰ると決めており、向こうの姉ちゃんも了承してくれた。

「これを妾にくれるのか！」

「はあ？ 言ったら結婚相手だって」

「ケントには許嫁が居たのか！？」

目を見開き少しうろたえる姫様？

「うっ… まだ居ないが王都で絶対に相手を見つかるから良いんだよ」

物欲しそうに見るので急いで蓋を閉めてリュックにしまう。

「ならば妾が貰っても可笑しくないであろう！？」

「???? だから何で？ 姫様はまだ子供だろ？ それに俺なんか眼中にない人間だし不細工なんだろうが。 欲しいだけでも譲れないからな」

不細工やらキモいと言われ少し恨みがましく思っていたので突き放すように言う

「キィ—— ケントの空け者!!!!」

バン!!

ヒステリックにそう叫ぶと部屋から飛び出して行きそれを茫然と見送る。

全く我儘な姫様だ

きっと周りからチャホヤされて自分中心に物事が回っていると勘違いしている典型的お姫様タイプ

大事な結婚指輪を姫様の気紛れに付き合い、あげられる物じゃ無い

のだ。

このまま嫌われても痛くも痒くもないしこのままお別れしようと思  
い立つ

我儘な姫に変態の従者

最悪のカップリング

窓の外は夜で暗く建物から漏れる灯りと所々に街灯が立っており逃  
げ出すなら早い方が良い

少々空腹なので手早くカロリー○イトを水で流し込んでリュックを  
背負い窓を開けると二階で屋根があるのでそこに降りて屋根伝いに  
進んで降りれる場所を探す。下を見下ろせば大きな通りで疎らなが  
ら人通りもあり裏手に回った方が良さそうだ。

「自衛隊に入っていて良かった」一般人だったら対処難しいかも  
な」

やっぱり姉ちゃんは助言は頼りになる。

裏手に回ると裏路地で雨どいを伝い降りれそうだと雨どいに手を掛  
けようとした時だった。

「セント殿、このまま逃げる心算なら私の玩具になるか、それとも  
部屋に引き返すなら姫の賓客として持て成しますがどちらを御選択  
なさいますか？」

ヒーーーーーーーーーーーーーーーーーッ

変態従者の声が後ろから聞こえて来る。

ギッ ギイイー

油の切れた機械の様に振り向けばそこには闇に浮かぶ秀麗な顔

だが俺にはナメクジ並みの嫌悪感で鳥肌が立つ

玩具？ 玩具って何されるんだと想像も出来ないがとんでもない行為を強いられるのは伺える。

「もっ戻りますから、俺に触らないで下さい」

震える声を振り絞り言う

「残念ながら我が主にもケント殿に触れるのを禁止されていますのでご安心を。着替えと食事を用意しましたので後ほどお呼びに参ります」

恭しく頭を下げたかと思うと一瞬で暗闇の中に消えてしまう。

うつうつ 怖いよあいつ！

アレは獲物を狙う目だ！

しかもドSだ~~~~

このまま屋根を飛びおり逃げたい衝動にかられるがあいつのハンターが目が逃がさないと言っていた。

ガックリと肩を落としスゴスゴと元来た屋根を引き返し部屋に戻るのだった。

俺の異世界トリップ生活は全くついてなく、憧れの生活とは程遠いが姉ちゃんに会えば状況は変わるはずだと期待するのだった。

それから部屋に戻ると宿の人が部屋に来てお風呂や着替えの手伝いをして貰うが手伝ってくれたのは十五歳位の少年：どうして女中さんじゃないんだろうと嘆きながらも人懐っこそうな子だったので嫌ではなかった。

少年にこちらの服を着せて貰うが正装なようで一杯着せられる。

日本の着物の様にたもとの短い白い着物にヨモギ色のをもう一枚重ね着し、袴の様なズボンを穿いて内掛けの様な青い着物をズルズルと着せられる

「うーん もっと簡易な服が良いんだけど」

「申し訳ありません。こちらを着て頂くようお願いしております」  
少年は恐縮したように言い支度が終わるとソソクサと退出して行った。



きつと姫様の指示なんだろうから仕方がない。それに王妃である姉ちゃんにあの恰好で会いに行くにはラフ過ぎ、TPOは守らないと拙かったかもしれないし。

アレ……

そう言えば王宮に行って俺が王妃の弟だと言ってすんなり会わしてくれるのか???

幾ら黒髪黒い目だからと言って無理かも

普通に考えたらそんな不審人物は門前払いが妥当だよな

そこまで考えてなかった……

こんな事なら事前に手紙でも出しとけば……っと言っても送り方なんて分んねー！

なんて初歩的なミス

此処は自分の素姓をばらし姫様に連れて行って貰うしかないだろうか  
信じて連れて行ってくれるかな？

タイミング悪く、さっき機嫌を損ねてしまったのは拙かった。

此処はなけなしのイチゴミルクのアメを一袋を貢ぐしかないだろうかと腹を括る。

残り少ないんだが

「ケント殿、お食事の用意が出来ましたのでおいで下さい」

ギククーー！！

変態従者の声が扉の外から聞こえる。

声を聞くだけで背筋が寒くなるのはどうしようもない

「はい、今行きます」

そう言えば今日は碌な物を食べていないので宿屋なら腹の足しになる物が食べれるだろう

恐る恐る扉を開けるとニツコリと胡散臭く微笑むナメクジ男

一応警戒しつつ一定の距離を持つ

「お待たせしました」

「これはケント殿 良くこちらの衣装がお似合いですよ。とても愛らしい」

愛らしい！！！？？

こいつ目が腐ってるのか？

まだ不細工だと罵られた方がましに感じられるぞ

「俺は男ですよ」

ムツとして答えてしまう

「御不快に感じられたなら申し訳ありません。ミョンミョグウィ様が別室でお待ちですから急ぎましょう」

全く意に介していない感じで相手にされてない？

くそーーー ナメクジ変態男のくせに少しは反省しろ

廊下を案内されて通された部屋には既に姫様が不機嫌そうに席に着いておりテーブルには湯気を立てた美味しそうな料理が並んでいる。

美味そう〜

ゴクリと唾を飲む。

「こちらにお掛け下さい」

「ありがとう」

ナメクジ男が椅子を引いてくれるので姫様の向かいの席に腰を下ろしてさっきの事を詫げる。

「姫様 食事に招待してくれてありがとうございます。それとさっきは悪かったな、代わりと言っては何だがこれをやるから機嫌を直せ」

そう言ってアメの袋を差し出す。

「それはあのアメか！」

差し出した袋を見た途端顔を輝かせる姫は素直に可愛いと思えた。

「そうだ、イチゴミルクのアメで俺も大好きなんだが受け取つてくれ」

「ケントがそこまで言うなら受け取ろう」

そう言って受け取り大事そうに膝に乗せる。

「なんですかそれは？」

「ケントの国の菓子じゃ」

「それは珍しい、私にも一つ分けてくれませんか」

「嫌じゃ！ これは妾が貰ったのじゃからそちにはやらん」

「いいですけど……さあそれより料理が醒めない内にお召し上がり下さい」

料理を勧められたので、手を合わせて早速頂く事にする。

「頂きまーす」

箸をとって肉団子の様な物を最初に食べれば甘酸っぱく中華風の味付け

「美味しい！」

それから片っ端から料理を食べ始めると箸が止まらず姫様が呆れて見ているのも気にせず粗方食べてしまう。

「御馳走様でした。なんか俺ばかり食べて悪かったかな…」

お腹が空いていてついガツついてしまった。何しろリユーリンさんの家の食事は質素で物足りない。何処の世界でも貧富の差は仕方がない事。地球でも栄養失調でお腹の膨れた子供達や餓死する子供達は悲しいけど存在している。

「ケントは体の割に良く食べるのじゃな」

「そうか？　うちの家族は良く食う方だから」

「王妃様もそうなのですか？」

「そうそう　姉ちゃんは痩せの大食いの典型……　エッ！！」

ジーツと二人が俺を見ているその顔はヤッパリと言う物知り顔

「矢張りケント殿は王妃様の弟君でしたか」

「どうじゃ！　妾の言う通りであろうが」

俺の正体ばれてたの！？

まさか姫様は初めから気付いてたのか

俺は間抜けな顔を晒すしかなかった。



## 異世界トリップ二日目その六

「ケント殿の黒髪と目を見てもしやと思いましたか」

薄気味悪い秀麗な笑みを浮かべるナメクジ男

「何故素姓を隠しておったのだ？ 王妃様の弟を名乗ればどこでも手厚い持て成しを受けるであろうに」

ニコニコと上機嫌な姫様

何か不気味さを感じるが気のせいだろうか

「俺は普通の庶民だし、なんか堅苦しいのが苦手なんだ」

「確かに王妃様の弟君となればこぞって亀族どもが取り入ろうと擦り寄って来るじゃろうな」

「やっぱりそうなるのか、面倒だな…」

はっきり言って俺の望むのはロリ顔巨乳娘であってじじいが擦り寄って来ても嬉しくない！

しかし貢物として女性を宛がわれたらどうしよ／／／

受け取ってもいいのか!?

一晩のアバンチュールなんて具合に何人もの美女とウハウハかか

3P、4Pも夢じゃない！！

酒池肉林じゃー！

うっ!!

想像しただけで頭に血が昇り鼻血が出そうで急いで鼻を摘まむ。

「何をしておるのじゃケント？」

「チョツと妄想」

「一体何の妄想じゃ?!」

「男のロマン」

「訳が分からんぞ？」

子供は分からなくていいの

「男のロマンも良いですがこちらを見て下さいませんか」

ナメクジ男がそう言う俺の前に1枚の絵を見せてくれる。

それには艶やかな黒髪を高く結び愛らしいピンクの花を差し零れん



ばかりの黒い瞳に小さな赤い唇の美少女だが胸はあまり無いようだ。

まさか姉ちゃん！？？

訳ないよな……

「綺麗な人ですね」

正直な感想を言う

「変ですね？　巷でこれが王妃様の絵姿として出回っているんですよ」

「えっええー！ー！ー！ー！」

思わずもう一度その絵を見るが、見れば見るほど全くの別人

共通点と言えば黒い髪に目と膨らみの無い胸ぐらい

姉ちゃん…詐称するにも程があるぞー！これは既に犯罪に近い

「姉ちゃん整形でもしたのか？？？」

「整形？」

「俺の世界では外科手術で綺麗な顔に造りかえるんだけど、こちらの世界なら不思議な力で顔をかえられるのか？」

「確かに不可能では無いですが」

「そうか…あの顔で超絶美形な王様と結婚したなんて可笑しいと思っただ。この顔なら納得　きっと異世界に落ちた時に何らかの特典で変化したんだな」

実の姉だがそんな大層な顔で無いのは事実。

かく言う俺も姉ちゃんに似た顔で少し小さめの丸い目のふっくらとした唇に低い鼻でやや童顔だが決して不細工では無いと思う。偶に合コンでは可愛い弟キャラだねと言われてたし（男として見られてね〜）

「クッ…クックッククククク　本当の絵姿はこちらですよ」

笑いをこらえるように別の絵を差し出す。

「？」

どういう事だとその絵を見れば美しく着飾っている以前より少し綺麗になった姉ちゃんが描かれていた。

そして相変わらず胸はないようだ。

「えっえ???」

「騙して申し訳ありません。最初のは王妃様を想像して描かれたもので今のは亀王陛下が自ら筆をとられお描かれた姿絵なのです」

おおー　王様なのに絵まで上手いんだなっと思心してしまう。

「試したのか……」

つまり本物かどうか

「何しろ偽物の弟君をお連れしてはこちらの身が危うくなりますのでお許し下さい」

そう言って頭を下げるので何も言えなくなる。

「別にいいよ。胡散臭い人間が王妃の弟だって言って直ぐ信じる方が問題だし」

「ご理解戴き有難うございます」

「ケントは絵姿を見れば王妃様に良く似ているのじゃな」

「そりゃあ兄弟だからな。姉ちゃんも俺も母親似だ」

上に兄貴もいるけど父ちゃんに似て背が高く182?で（俺は171?しかない）顔も両親の良いところりで地味目だがそれなりに整い頭も良くなってモテル！ 性格は温厚で無口だが母ちゃんに似て時々ま意味不明な行動をとる事があるのが少し怖いぐらい。しかも最近超可愛い上に胸の大きいお嫁さんを貰い女性の趣味が俺と被っているのを見てヤッパ兄弟だと改めて思った。

「それで態々異界から姉である王妃様に何しに会いに来たのじゃ？」

「姉ちゃんが幸せかどうか心配で家族を代表して見に来てただだよ」

まさか嫁を捜しに来たなんて言えないので適当な理由を言う。

本当は家族の誰一人心配していない、姉ちゃんならどこでもしぶとく生きるだろうし代わりの姉ちゃんも居る所為か居なくなった気がしないんだよね

「しかしケント殿は普通の人間に見えますがどうやってこの世界に來られたのです？」

「妾でも界を裂く瞑道など開けれんぞよ」

そうなのか？

向うの姉ちゃんは簡単に穴を開いていたが

「俺も詳しい事情は知らないが此処の偉い神様と姉ちゃんが入れ替わってるんだ。その姉ちゃんに化けた偉い神様がこの世界に落してくれたんだ」

アレは正に落されただよな

準備万端で立っていると向うの姉ちゃんが突然床に直径2mの穴を出現させたと思ったら問答無用で付き落され心の準備もへったくれもない感じ

ドン！

『！！』

『深雪に宜しく』

『姉ちゃんのドSーーー！』

叫ぶ俺に、にこやかに手を振っているのを確認した後は真っ暗な空間をただ落下して行きズボリと何かを付き破ったかと思うとこの世界の上空で急いでパラシュートを開いたのだ。

姉ちゃんも俺と同じように落ちて来たんならパラシュートも無く良く無事に降りられたと不思議だ、会ったら聞いてみよう。

「この世界の偉い神だと…一体誰じゃ？」

「瞑道を開けるのは並みならぬ神力を有する王かそれに準ずる者、もしくは崑山の高位の神しかおりませんが」

「うむ… その神は名乗らなかったのか」

「名は無いと言ってたかな… 姿形は姉ちゃんそのままだし俺は姉ちゃんと呼んでいた」

「訳が分からぬ。ケントの世界に何の用があるのじゃ？」

「私にも計りかねます」

そう言えば何の目的で俺の世界に居るのか聞いてない。

「俺には普通の人間ライフを楽しんでいるようにしか見えなかったけど」

ある意味酷いよな… 他人の人生の全てを奪って本人に成り済まして暮らしてるんだから

……

もしかして姉ちゃんて酷い目に遭ってる????

俺的には異世界トリップなんて憧れだけど平凡を愛する姉ちゃんには大災難だったのではないかと改めて思い至る。

それに姉ちゃんはどちらかと言うと美形を拒否していた。

大学のサークルの劇を見に行き打ち上げに連れていて貰った時

何時の間に姉ちゃんが打ち上げの席から姿を消しているのに気が付き置いて行かれたのかと思い辺りを捜すと裏路地で口論する男女

一人は姉ちゃんでもう一人は主役をしていたイケメン

『好きなんだ深雪 付き合ってくれ』

『無理、私イケメンアレルギーなの』

そんなアレルギー俺知らないぞ？ 普通にイケメンタレントにキヤーキヤー言ってたはず。

『二股は嫌だって言うからあいつとは別れたんだ』

『ゲッ！ あんな綺麗な人振ったの』

『俺はあいつより深雪が……』

『女を泣かすな!!』

ドス!!

『姉ちゃん……』

あろう事か告白男の股間を蹴りあげる姉ちゃんはそのまま股間を押え息絶え絶えの男を置いて路地から出てくると俺の腕をとり

『健斗! 丁度良かった。 帰るぞ……!』

『帰るって…良いのかあの人を振って!?!』

姉ちゃんには勿体ないくらいのカッコいい男、これを逃せば二度と無いのを理解してるのか

『あんなイケメンを彼氏にしたら人生お終いよ! そもそもあいつにはミスカンパスの彼女がいるのよ』

お終い????

どちらかと言うとこの世の春だと思うが??

『でもその彼女を振ったって言ってたぞ』

『そんなの嘘に決まってるわよ 本当だとしても許せない! あんな綺麗な子を振るなんてー。大体1回寝たいって言うお誘いならOKだって言ったのに真面目に付き合いたいなんて言うのよ。信じられる!?!』

『はあ? 誠実な良い奴だろ??!』

姉ちゃんの方が信じらんねよー！

『私はね彼氏にするならこの顔に合う地味ーな顔がいいの！ あんなイケメンでしかもミスカンパスを振ってまで付き合うのが私だと大学中に知れ渡ったたらどんなやつかみや嫌がらせを受けるか考えてみなさいよ。しかもミスカンパスの彼女が居ながら女が常に寄って来るモテ男、あんなのが彼氏じゃ平穏な生活を過ごせなくなるのは明らか、しかも彼の実家は会社経営をするセレブ！ 信じられる通学するのに高級外車に乗って来るような奴なの。親の脛かじりのくせに電車使い！ 電車！ 私程度の女なんか1回寝れば十分じゃねー！ 私の夢は自分に合った地味な男と結婚して地味な子供を産んで育て、夫婦で酒を飲みながら教育談義をするのよ！』

などと同じような話を家に帰るまで延々と聞かされたのだ。

姉ちゃんが此処まで平穏な生活を望むのは母ちゃんの所為が大きいだろう。あの母ちゃんの所為で色々大変な目に遭ってるから俺達俺ならロリ顔の巨乳少女がお付き合いを申し込んできたら周りなど気にせず、何らかの罰ゲームで騙されていても即OKをだすのに勿体ない

自分の変なポリシーを曲げずあんなイケメンを振る姉ちゃん

それが超絶美形の王様と結婚……

そんな姉ちゃんだからきつと色んな葛藤があったんだろうと推測する。

ゴメン姉ちゃん……もしかして苦労してた？



自分の事ばかり考えていたと心の中で謝った。

一通り俺の事情を説明してから明日には姉ちゃんの元に連れて行って貰う事になる。

何でも姉ちゃんは王都の宮殿では無く郊外にある大きな湖のある離宮で暮らしてるんだと

普通は王都の後宮かと予想してたんだが違った。

一人で王宮に乗り込まなくて良かった！

取敢えず明日は姉ちゃんに会えるので先に休む事にした。

「それじゃ、姫様お休み」

「／／／ おっお休みなのじゃ……」

微妙に囁む姫様

なんか言い慣れて無い感じ。小さい頃から挨拶はちゃんとしないと駄目だぞ

そして変態従者が部屋に送ると言う申し出を速攻で断り部屋に戻るがパジャマがないので持って来たTシャツとジャージで寝る。

明日はきっとパラダイスが俺を待っていると信じ豪華な部屋で眠りに着くのだった。

## 異世界トリップ三日目その一

翌朝は日が昇ると同時に起こされる事は無くゆっくりと寝る事が出来て壮快に目覚める。

「ふわ〜〜〜 良く寝た……」

欠伸をしてボー———としていると

「お早うございます。 ケント殿 こちらで顔をお洗い下さい」

「イツ!!」

声のする方を向けば変態従者が水差しを持ち洗面器の中に水を注いでいる姿

「何故 あんたがそこに居る!!??」

「どうか私の事は親しみを込めウェアーと呼び下さい」

そう言いながら微笑む姿は美形だけあって男でも見惚れそうだが俺にはナメクジ男にしか思えない。

「勝手に部屋に入るなよ」

確か鍵は掛けて寝た筈なのに油断も隙もない。何しろ神様だから何

でもありなのか

「そのように警戒されなくても何も致しませんから御安心を」

胡散臭く微笑む

「本当に？」

「王妃様の弟君に手をだす程愚かでは御座いません」

そうか：姉ちゃんは王妃だからそう簡単に手出しは出来ないかと思うが

問題は姉ちゃん

確か少し腐女子の気があるのでこの事を知れば反対にこいつを焚き付けそうで恐ろしい

高校生の頃はオタクの腐女子の友達もいたが思考が可笑しい！

自分の恋愛より近場の男子達で妄想を繰り広げた上にそれを漫画や小説化して楽しんだ上に実際にくっつけようと画策する恐ろしさ

俺の唯一のイケメンの友達の吉田も彼女の小説の主役を勤めその毒牙にかかる。

『健ちゃん これ読んでみて感想聞かせて 』

と言って彼女に渡された小冊子。俺は純文学は無理だがBLは好きではないが相手役を女だと思えば読む事は出来た。

しかし読み進める内にその本を破り捨てたい衝動にかられる。

一応名前は変えられているがその設定が正に俺と吉田

『なんじゃこりゃー！ 何で俺が受け！』

『最近美少年飽きちゃって健ちゃんみたいな子ブタちゃんも良  
かな〜って。 因みに吉田君にも同じ本を上げておいたよ』

そう言って微笑む彼女は小悪魔のように可愛いく小説のネタに使わ  
れてもつい許してしまう。

しかしそれから吉田の様子が可笑しくなり最初は避けられるようにな  
ったかと思うと次は嫌にボディータッチが頻繁になりその目が怪  
しく獲物を狙うオオカミ

だが気の所為だと俺は思った。

『健ちゃん 私 吉田君に相談されちゃった』

『何をかな……』

『吉田君 健ちゃんを好きになっちゃたんだって〜 だからアド  
バイスしておいたから気お付けてね！』

一体何をアドバイスしたんじゃ！

しかし 一応忠告してくれたのは彼女の最後の良心だったかもしれ  
ない

それにアホな俺はその忠告を無視して吉田の部屋に遊びに行ってしまった。

だって有り得ねだろ〜 リアルで男に襲われるなんて！

しかも吉田はイケメン！ 隠れオタクではあるが可愛い彼女が数人いるモテ男

吉田が手に入れた18禁のエロアニメにつられ行ったところ見事襲われ必死に抵抗して命からがら逃げ出しそれ以来友達を辞めた。

だが彼女とは友達が続ける。

何故かって？ 彼女は胸も大きくって結構タイプだったんだよ付  
き合って貰えないが友達のパポジションは捨てがたい

オタクな俺には貴重な女友達なんだ。

彼女には襲われた事を話すと嬉しそうにしていたが二度と俺をネタに書かない事を約束させ、自衛隊に入ってから頻繁に会うけど恋愛には発展しない。

俺はネタには使わないが自衛隊の話を良く聞きそれをネタに自衛隊ものの同人誌を書いて結構売れてプロになる話も出てるらしい

腐女子の恐ろしさを身にしみて分かっている俺

絶対に、こいつの事は姉ちゃんに悟られてはいけないと心に決める。

そして俺は変態従者に用意した水で顔を洗いそして服を着替える時  
流石に嫌で昨日の宿の従業員の少年を呼んで着せて貰いながら着方  
を覚えるが今回は割かし簡易な服

ズボンも裾の窄まった物に上着も膝下辺りで動きやすい

朝食は部屋で一人で簡単に済ませて貰いリュックの中を整理して  
出掛ける用意を済ませると例の如く変態従者が呼びに来る。

「ケント殿 出立の用意はお済ですか」

「ああ 何時でも出られます」

「先程聞くのを忘れたのですが乗馬はお出来になりますか」

「一応乗れる程度なら出来るけど」

姉ちゃんのアドバイスで乗馬クラブに入っていたので馬なら乗れる。

「ならば大丈夫ですね。馬を用意しましたので早速出立しましょう」

馬で行くなんて風情があっという間と最初思っていたのだが

奴に連れられ宿屋を出ると二頭の馬の前で待つ姫様

それを遠巻きにする街の住民達

「何おしておるケント！ 遅いではないか妾を待たせるなど言語同断」

俺達に気付いた姫様は朝からテンションが高い

しかし女の子の方が支度に時間が掛かる物だが姫様は違うらしい

「姫様お早うゝ 待たせて悪い。 今朝もとっても可愛いな」

一応誉めておく

「フン！ 妾が可愛いのは当たり前じゃ」

プイと横を向く

どうやらお気に召さなかった様だが俺にはこれが精一杯だぞ

そして姫様の背後の馬を見て慄く

何??? この馬???

はつきり言ってデツカい

正に北斗の拳のラオウ様に乗っている馬のように普通じゃない

肉食系の馬って感じで俺食べられるんじゃないかと言う迫力

「これ馬?」

「当たり前じゃ 馬でなくなんじゃと言うのじゃ」



姫様は当然の如く言うが俺には恐ろしい猛禽類に見えるぞ！

馬は優しい目をしてるんだ！

決してこんな恐ろしい猛獣の目はしてねー

「この馬は天馬といい普通の馬と言う訳ではありませんよケント殿」

「天馬？ 空でも飛べるの」

「いいえ 流石に空は飛べませんが走る速度は凄まじく一瞬で山を越えるほど」

「それって振り落とされない」

それってバイクより早いの？

通常の乗馬もそれなりに体力がいるのに更に早いつて体が持つだろうか

「人間には無理ですが我々亀族なら乗りこなせます」

「それじゃあ俺どうするんだ……まさか……」

「ケント殿は私と同乗して貰い背後から確り支えますので御心配なく」

ひえーーーーー！

そんなねっとりとした目で俺を見るな!!

真っ青に怯える俺を更に不穏な眼差しで見て来るのでマジ怖えー  
ー

絶対無理~~~~

俺は断固拒否する!

「安心いたせ 妾と乗るが良い」

「有難う姫様!!」

思はず拝んでしまう。

それから馬に乗ろうとするが普通より高い位置に鞍があり男の意地で何とか一人でよじ登ると結構高く見晴らしが良く、普通乗用車とダンプ程の違いはある。

そして姫様は空中を舞うように飛び上り俺の前に簡単に跨ると手綱を俺に寄こす。

「そなたが操縦いたせ」

「えっえー 俺は普通の馬しか走らせた事無いんだけど」

「操縦は普通の馬と変わらん」

「それでは出発致しますよ」

変態従者がそう声を掛けて来ると周囲のギャラリ―達が更に後ずさり広い道を歩く人々も両脇に下がり始める。

??

「サッサと走らせよ」

「ああ……」

姫様に急かされて足の腿で馬の腹を押えるとフット体が浮いたかと思っただけ瞬間に視界が変わり麦畑を走っており後を向けば街が見える。

「なっ なっ なんだ???」

高速で風景が変化して行き街道を歩く人々が制止する横を避けながら走り去る馬

振り向けば突風に飛ばされ倒れそうになる旅人達が見て取れる。

かなりのスピードで走っているはずなのに何故かそんな気がしない

「どうしたのじゃ」

「何で風圧を感じないし風を切る音もない???」

全く体には空気抵抗など感じず少し揺れる椅子に座っているだけ様に感じてしまう

「妾が神力で消しておるのじゃ」

自慢げに言う姫様

「すげー 小さくっても神様なんだな」

ナデ ナデ

俺は感心して頭を撫でてしまう

「子供扱い致すな！ ケントより年上ぞ」

いやだって見た目十歳だし

俺的に胸も無いのに大人扱いは出来ないぞ

何時の間にか前を変態従者が馬を走らせている姿は正に優美で絵になり俺とはえらい違い

女なんてよりどりみどりははず

「因みにあいつは男が好きなのか？」

暇つぶしに聞いてみる。

「ウェアーか まさか興味があるのか？」

何故かムツとする。

「いや 被害に遭わない為の調査」

「それなら教えても良いぞよ。 あ奴は男色家で女は全く受け付けぬので側に寄らぬ方が良い。好みは美少年で特に生意気な少年を従

順に調教するのが趣味じゃ」

「げっ……最悪な趣味」

美少女なら調教したい気もするけど調教なんて人間としてどうなんだろう

「しかし 美少年なら何故俺が狙われるんだ??」

「妾にも良く分からぬが何でもケントの怯えた表情が加虐心をそそるそうじゃ」

「はあ?」

俺のおびえた顔

よくわからないが奴の前でやたら怯えるのは止めておこう

「一応 妾が牽制しておいたが腹黒い男じゃから油断するでない…  
ウェアに食われると男なしではいられに体にされるらしいぞよ」

「うっ それはエグイ」

十歳ぐらいの少女から語られる内容ではないがより一層おぞましさが増すのは何故だ

「あんなのが従者で良いのか?」

教育上良く無いような気がするんだが

「美しい妾には手をださない男として信用置けるし、アレで有能な男ゆえ重宝しておる」

嫁入り前の姫様に悪い虫が付かない為の虫よけでもあるのかも

反対に食われる男達が憐れすぎる

そして天馬が走るに任せていると街道から逸れて森に入って暫らく走らせ抜けると大きな湖に出る。

湖は美しい緑の湖面に太陽の光で輝き遠くに大きな平安時代の貴族の王宮のような建物が見えて来た。

「アレが離宮？」

「妾も此処に来るのは初めてじゃ。 亀王陛下の許しがなければ近づくことすら許されん」

「エッ!? 俺達大丈夫」

「何の許可も無いのだから結構危ない橋じゃ。 ケントには感じられぬかも知れぬが湖全体に結界が張られておる」

「そんなんで俺は姉ちゃんに会えるのか??」

俺はてっきり亀族である姫様に付いて行けば簡単に会えるものと考えていた。

「亀王陛下の溺愛する王妃に会うにはそれなりの手続きやら色々時間が掛かってまどろっこしいのじゃ。 そもそもケントを他の亀族

どもに会わせては奪われて妾は放り出され蚊帳の外。折角天帝様が妾に遣わしてくれた切り札、おめおめ渡せぬわ」

「切り札？ 姫様は何か目的があったのか」

「妾の目的も王妃様に会う事。ケントと同じなのだから別に良いである？ お互い利害が一致しておる」

確かにそうだが十歳位の少女に言われると軽くショック

穢れを知らなそうな可愛い顔からこうまで世俗にまみれた言葉が発せられると夢が壊れると言うかなんというか……

「でもどうやって結界を抜けるんだ？」

「結界の入り口を守る門番に直接交渉する。ケントの顔があればイケると思うのじゃが」

「門前払いされたらどうするんだ」

「強行突破じゃ！」

「マジですか……」

なんて無計画な

ヤッパリ子供の所為か???

此処は有能な変態従者が頼りだ

奴の後姿を見ながら姫様よりましな案をだされるのを願うばかりだった。



## 異世界トリップ三日目その二

湖を回り込むように走らせて行くと大きな木造の門が見えて来る。

そしてその両脇を守る様に厳つい鎧を着た屈強な兵士が立っており、俺達を確認すると長い槍を突き立て静止するように促す。

「お前達は何者だ！ 此処を王妃様の離宮と知っての狼藉か」

「許可無き者は直ぐに引き返すが良い！」

怖えーーーーーーー！

きつと俺なんて息を吹きかけられるだけで吹っ飛びそうな程の大男達

まるでオンラインゲームの武将キャラ張りにカッコいい！

何食ったらあんな立派な体になるんだ？

小柄な俺には羨ましい……あんな屈強な体なら男に襲われずに済むんだろうか

だが今時は筋肉ムキムキはあまりモテない

俺のように細マッチョが受けがいいのだがそれを披露するチャンスが一度もなかったのが悲しいぜ

しかしこの世界ではきつとその機会が訪れるはずだ！

「妾は呈州の州知事の娘ミヨンミヨグウイ。王妃様の弟君をお連れ致したのでお目通りを願いまする」

姫様は馬上から衛兵に視線を合わし臆することなく堂々とした口上を述べる。

俺なんか姫様の後ろで衛兵達の眼光にビビって陰に隠れたい衝動にかられるが男として何とか視線を外して堪えていると

「王妃様の弟君だど！！ このうつけどもめ」

「王妃様の弟君を騙るとは 何たる大罪！ この場で討ち取ってくれよう！」

ひえーーーーーっ やっぱ信じね

「黙れ！！ このお方を良く見るがよい。 王妃様と同じ黒い髪に目に顔立ち よく吟味致せ」

グイ！

そう言って俺の襟元を掴み顔を前に突き出させるお姫様

その途端、恐ろしい眼力で俺を睨みつける衛兵達

「……」

あまりの恐ろしさに涙ぐむ俺

信じて貰えなければ殺されるのか……

衛兵達は少し離れてこそこそ二人で話し合う

通して貰えるんだろうか？

暫らくすると一人がこちらに来る。

「確かにその人間の若者は王妃様に似ておいでだがそれだけでお通し出来ぬ。王都に行き然るべき手続きを踏んで陛下の許可書をお持ち下さい」

普通それが妥当だよな…… 容姿だけで通れるなら警備として問題

「姫様 やっぱり……」

「致し方ないようじゃ」

そうそう、此処は素直に王都に行って王様に会ってからに

「やれウェアー」

エッ 何を言ってるんだ姫様????

姫様がそう命令すると変態従者は馬上から飛び降りて一人の衛兵に瞬間で飛びかか眉間に指を突き立てたかと思うと衛兵の巨体が倒れ

て渾沌してしまう

何をやったんだ??

まさか殺して

俺が驚いていると姫様が何処から取り出したのか短剣を俺の顎の下に突き付ける

「!??」

「門を開けよ! さもなくば弟君の命は此処まで。 王妃様が愛する弟君を亡くされ嘆き悲しめば妾の一族は愚か、そなた達の一族もろとも道ずれに陛下の裁きでうち滅ぼされようぞ」

姫様!!

その無茶ぶりは何だ???

俺が姉ちゃんに会うだけでそこまで命を張らなくてもいいぞ―――  
しかもそんな大事なのか!?

「おのれ―――!」

悔しそうに姫様を睨みつける衛兵

変態従者はそれを涼しい顔で見ているだけ

止めろよ!

従者なら姫様の暴挙をどうかしてくれ……

もう俺はマジ泣きたい……

「それとも妾達を通せばそなた達の首だけで済まそう。このお方は紛うこと無き王妃様の弟君、王妃様にお会い出来れば弟君様より恩情を願おう」

その間俺の首には姫様の短剣が突き刺されられ緊張状態

まさか本気じゃないだろうな

しかし此処までして姉ちゃんに会いたい理由って何だ???

どうやら唯の家出娘では無いらしい

衛兵さんは顔を青褪めさせながら暫らく思い悩むが自らその門を開く。

ギーーーーーーーーーーーー

門を開けるとガクリと膝を付き思いつめた様に剣を置く

まさか自害……!!!

姫様と横を通る時に声を掛ける。

「衛兵さん、早まるなよ。俺が姉ちゃんに頼んで誰もお咎めを受けないように頼むから」

俺の所為？で人が死ぬなんて目覚めが悪すぎる！

全部姫様の暴挙が悪い。

「弟君様！」

衛兵は感極まったように土下座し俺を見送る。

門を抜け一気に離宮の玄関まで掛け抜けると姫様はヒラリと馬から飛び降り俺も降りようとするがずり落ちてしまう

ギャー！落ちる！

ズドンと落ちるかと思いきや何の衝撃も受けない

「あれ？」

「大丈夫ですか」

「ヒエーッ！直ぐ降ろせ〜」

落ちた俺を受け止めてくれたらしい変態従者だが生理的に受け付けね！

「つれないお方だ」

そう言いながら静かに俺を降ろされ急いで姫様の背後に隠れる。

「俺は女が好きなんだ！」

「私の恋人達は皆、最初そう言いますよ」

こらー！ 健全な青少年を不道德な道に引き摺りこむな！

なんて恐ろしい奴

「無理！ ……取敢えず落ちなかった事には礼を言っとく…ありがとう」

「いえいえ どういたしまして」

俺が礼を言くと初めて普通の笑みを見せると少しドキリとする。

くそーこれだから美形は困る。

「ケント 何時までへばり付いておるのじゃ      ／／      サツサと  
王妃様にお目通りを願うぞ」

そうだった！

さっきの事で姫様に文句を言わないと

「姫様 さっきのアレは何だ！ 衛兵さんが罪を問われるなんて聞いてないぞ」

「仕方がなかろう。何事にも犠牲が必要じゃ」

恐ろしい

あまりにも自分本位な考えにカツとしてしまう

「あの人達に何の落ち度もないだろ！ 真面目に職務をこなしているだけなのに俺達が無理やり通ったせいで責任をとらせるなんて酷過ぎる。 幾ら亀族の姫様で身勝手すぎるぞ」

声を荒げつい怒鳴ってしまうが姫様なら言い返すと思ったのだが

意外な事に無言で俺を見ていると思ったらポロポロと涙を流して泣き始める。

「えっええゝゝ?!」

大きな莖色の瞳から零れる涙はとめども無く止まらない

「うっう…… 妾とてこんな事したくないが こうでもしないと亀族の爺と無理やり婚姻を結ばされ純潔も寿命さえも奪われるにじや…… ビィエーン エンエン……」

こんな子供の内から結婚

なんか可哀想な話

しかも女の子に泣かれるなど初めての経験で慌てふためきオロオロしてしまう

どうすればいいんだと変態従者を見れば面白い物でも見ているように他人事

なんて職務怠慢だ、あんたのとこの姫様だろう



泣かしたのは俺だけど

「悪い姫様、俺が言い過ぎたから泣かないでくれ」衛兵さんの事は俺から姉ちゃんにお咎めなしにして貰うし、その姫様の縁談も姉ちゃんに相談して見るから」

あやすように頭を撫でながら言うのと漸く涙が止まり涙で潤んだ目で俺を見上げる。

おおー！ー！ー 萌えるぞー これは妹萌え？

「本当に？」

小首を傾げて聞き返す姿は究極の可愛さ

この可愛さの前ではどんな我儘を許してしまうのは男として仕方がない

なんか道を踏み間違えそう

「大丈夫！ 俺に任せておけ」

思わず安請け合いしてしまった途端

「聞いたかウエアー」

涙も乾かぬ目をニツコリとさせる??

「はい ミヨンミヨグウイ様 確かにケント殿は婚約の破棄を王妃

様に掛け合うと確約して下さいました」

「はぁ〜？？」

「ケントは妾の救いの神じゃ。くれぐれも約束を違わぬようにのー そうしなければ王妃様に襲われたと泣きつくぞよ」

今の嘘泣きーーーーー！

信じらね……

なんて姫様だ

俺は口をパクパクと啞然とするしか無く後の二人はどこ吹く風

騙された……っと項垂れていると

「そなた達か狼藉者は！」

玄関先で立ちつくす俺達にするどい女性の声が飛ぶ

一斉にその女性を見ると姫様と変態従者は跪き俺はタイミングを逃し立ち続け慌てるが、此処で姫様達任せるととんでもない事を言いそう

社会人としてもちゃんと自分で言おうと腹を決める。

「俺は橘健斗と言い…王妃様 橘深雪の弟です。 姉に会いに来ました」

しかしこのお姉さん綺麗だけど迫力があり隙がない

銀の髪に姫様と同じ紫の瞳だが切れ長で身長も百八十以上は確実に凛々しい女性

俺なんか子供っぽくて相手にされない感じ

「私は王妃様の侍女を勤めるフーラングウィ 真偽はさておきこのような乱暴な訪問は感心致しかねぬ」

そう言って俺を睨むがさっきの衛兵さんとはまた違う眼力

背筋が凍り付きそう

侍女と言うよりは王妃を守る騎士のイメージだな

「その件は俺も悪いと思っているので謝ります。どうか姉に健斗が訪ねて来たと取り次ぎだけでもお願いします」

ペコリと頭を下げてフーラングウィさんの出方を待つと誰かが近づいて来る気配がする。

「王妃様なりません。 害をなす危険な者かも知れないのでお下がりです。」

「えー だって久しぶりの来客じゃない。 偶には新鮮な顔を見たいわ」

ピック！

この声は姉ちゃん!!

「姉ちゃん!! 俺 俺 俺だー!!」

思わず大声で離れた場所に居る姉ちゃんに急いで呼び掛ける。

「俺? オレオレ詐欺???」

違う———— 流石姉ちゃん、相変わらずいいボケだぜ

じゃ無く

「姉ちゃん! 弟の健斗だー!」

「エッ!?? 健斗!!!」

ドタドタと駆け寄る音と共に現れたのはピンクの可愛い衣装を着て黒髪を結いあげた少し綺麗になった姉ちゃん

しかしフーラングウィさんが俺の体を突然拘束するように俺を取り押さえられ跪かされる。  
ダン!

「グウ……」

「控えおろう。王妃様の御前では誰もが跪いて貰う」

容赦ない侍女

「貴方が健斗?」

目の前に来た姉ちゃんの声に顔を上げる。

「久しぶり〜 姉ちゃん！ 元気だった？」

次にあるのは感激の再会かと思いきや

不思議そうに俺を見る姉ちゃん

「…………… あんた誰????？」

「えっ????？」

それって何時ものボケ？

途端に侍女が俺の首に腕を回し締め始める。

「くっ苦し……」

「王妃様をたばかる不届き者！ この場で首をへし折ろうぞ」

ギャーーーーーッ

死ぬーーーーー

姉ちゃんのそのボケは洒落にならないぞ！

直ぐさま訂正して欲しく必死に姉ちゃんを見詰めるしかなかったのだった。



## 私と弟

一年もあと三日で終わろうとしている中、王妃であるミュキはマツキーに新年の祝賀の儀について教えて貰っていた。

「新年の祝賀の儀を陛下自ら執り行い天帝様に国の安寧を祈願した後に謁見の間で国の重臣や各州の州知事から祝賀をお受けになります。通常はそのまま宮殿の大広間に集められた亀族達に賛礼を受けた後に祝賀会が開かれて終わるのですが私は一度も参加して無いのでどの様な雰囲気かは教えられません」

「基本私はチョンマゲの横に居るだけでいいのよね」

「はい。受け答えは陛下がなさいますのでそれで宜しいのですが、翌日には王都を馬車で祝賀の行列を執り行い、三日目には王宮での宴が催されてかなりお忙しくなります」

いよいよ王妃デビューかと思うと気が重い

何しろあの超絶に美しい夫の横に居るのは普通顔の私には一種拷問  
今さらながらに自分の絵姿を事前に公表しておいて良かった。知っていればあからさまな落胆の顔を見ずに済むだろうから…

我ながら姑息だけど心のダメージは減らすのに越した事は無い・

「それと午後より衣装合わせをしたいのですが」

「うっ またあの重い衣装を着せられるの。マッキーが代わりに着て」

「滅相も御座いません。 王妃様の衣装に袖を通すなど」

相変わらず真面目なマッキー

そもそも身長は同じだけど胸のサイズが天と地の差があるからどう考えても無理だよ

「冗談よ冗談」

「王妃様 お茶を淹れますので休憩を」

「有難うフーラン」

ワゴンに乗ったお茶のセットで優雅にお茶を入れ始めるフーラン

考えて見れば二人共とても真面目で堅物

私にはもう少し碎けた突っ込みとボケが出来るような侍女も欲しいかも

最初は色んな綺麗どころを集めてハーレムでも造ろうかと考えていたのに王妃の侍女となると人選が色々難しいらしく中々新人さんが来ない。



別段人手不足ではないが少し寂しいのも事実

王妃として公の場に出る機会が増えれば面白い人達にで会えるかとその点は期待している。

そう言えば新年の祝賀の儀には深紅の薔薇の君に会えるかな？

久しぶりにあの女王様プリを堪能したい

フーランに深紅の薔薇の君の事を聞こうとすると

「ねえ…」

ガシャ！

フーランらしく無く何故か乱暴にお茶碗を置く。

「？」

「申し訳ありません。どうやら侵入者のようですので奥の部屋にお下がりください」

「侵入者?!」

私には何時も通りの静かで何の音もしない

「マツキー 王妃様をお部屋に。 私は確認をします」

「はいフーランさん」

フーランがそう指示すると疾風のように部屋を出ていく

「誰が来たのかしら：マツキー分る？」

「私も何も感じませんでした。王妃様とりあえず奥の部屋に参りましょう」

「ねー 柱の陰から少しだけ覗きに行きましょ」

「なりません王妃様」

青い顔をして止める

「少しだけ見たら奥に行くからお願い」

押しに弱いマツキーを連れて長い廊下を渡り玄関に向かうと何やら声が聞こえて来るとマツキーはハツとしたように私を押しとどめる。

「王妃様なりません。害をなす危険な者かも知れないのでお下がりを：」

「えー だって久しぶりの来客じゃない。偶には新鮮な顔を見たいわ」

本当に他人に飢えているのよ。

こんな引き籠りの様な生活は性に合わない

すると若い男性の声が聞こえる。

「姉ちゃん!! 俺 俺 俺だー!!」

姉ちゃん? なんか懐かしいフレーズと声

「俺? オレオレ詐欺???」

まさか異世界にもオレオレ詐欺があったのかと感心していると

「姉ちゃん! 弟の健斗だー!!」

「エッ!?? 健斗!!」

健斗の名を知るのはこの世界で誰も居ないはず。チョンマゲにすら家族の事を話していないのを今さらながらに気付く

だから本当に健斗が来てる?

どうやって?

疑問は尽きないが取敢えず本人かどうか確認する為にも駆け寄るとフーランに取り押えられ土下座させられている人間は確かに黒髪だが少し印象が違う

「貴方が健斗?」

声を掛けて見ると顔を上げる男

「久しぶり〜 姉ちゃん! 元気だった?」

声は本人の様な気がするが顔が

「…………… あんた誰?????」

「えっ?????」

健斗らしき男は信じられない物でも見るように私を見るが、フリーランによって苦痛に顔を歪ませる

「くっ苦し……」

フリーランに首を絞められ真っ青な顔

「王妃様をたばかる不届き者！ この場で首をへし折ろうぞ」

その言葉を聞いて慌てる。

「フリーラン 私の前で殺生は禁止！」

しかし止めるのが遅かったらしく男は墜ちた後で気を失っている。

「この男が健斗？」

フリーランは取敢えず床に横たえさせてジックリと男の顔を眺めると小さい頃の健斗の面影が被さる。

「フリーラン お尻を捲って見て」

私のとんでもない命令にも顔色を変えずに男をうつ伏せにすると何の躊躇いもなくズボンを下ろしてくれる。

うゝん 私的には恥じらうフーランを見てみたかったのに残念  
下ろされたズボンから現れたのは白いお尻で右側の中央にハートの  
痣が見てとれる。

こんな所にこんなふざけた痣がある人間がこの世に二人というだろ  
うか

いや…いないだろう

どうやら本物らしい

久しぶりの来訪客が弟だったとは！

しかも凄く痩せているので別人かと思うよ——一体何が弟を此処ま  
で変えさせたの？

恐らくあの天帝が裏で糸を引いていそう

このままケツ出しで晒すのも可哀想

「フーラン」

「はい 王妃様」

「それ私の弟みたい。悪いけど運んでくれるかしら」

「御意」

そしてフーランが健斗をお姫様抱っこをして立ち上がるとその後ろに二人の亀族が跪いているのに初めて気が付く

「あら…… 貴方達は誰？」

ピンクの髪少女と紫色の髪青年

どうやら今日は退屈せずに済みそうだ。

「酷くく 弟が分からないなんてそれでも血の繋がった姉か」

「だから何度も謝っているでしょう」

「感動の再会を期待してたのに」

ブチブチ文句を言う弟

アレから気絶した弟を運び直ぐに意識を取り戻して今は姉弟水入らずで再会にはなを咲かせている。一緒にいた亀族の二人は取敢えず別室に控えて貰い後で事情を聞く事になっている。

「だってそんなに痩せたら別人よ！ あの大福のような気持ちいいホッペちゃんは何処に行っちゃたのよ、アレを揉むのが私の癒しだ

ったのにー」

体型も太ってもっちりしていて私より胸がでていた弟はすっかり痩せてスマートに変貌

まるでダイエット食品の宣伝のビフォアとアフター写真を見ているよう。

「向うの姉ちゃんが自衛隊で3年辛抱したら異世界トリップさせてくれるって約束してくれたから俺頑張ったんだ」

そう自慢げに言うバカな弟

そんな事で将来を決めるなんてばか過ぎて笑えない。

「げー ヤッパリあいつの所為なのね…… あいつは私に成り済ましてちゃんとやってるの？ そもそも私じゃないって正体をばらしたの？」

「いんやー 久しぶりに実家に来た姉ちゃんに最初俺は全く気付かないのに母ちゃんが一目で貴女は誰って？ 最初は母ちゃんの何時もの遊びかと思ったんだけど『深雪を何処にやったの、正直に話さないと刺すわよ』 てキッチンから包丁を持ち出して振り回し始めたらあっさり認めたんだ」

母さんが……きっと野生の本能で分るのかしら？ 絶対母性からじゃ無いのは断言出来る。

「それで信じたの？」

「俺と母ちゃんは信じたけど父ちゃんと兄ちゃんは最初半信半疑だけど信じた」

「どうやって」

「姉ちゃんが勤めてた会社の社長に就任したから」

「社長？？ 私が？」

「違うよ…向うの姉ちゃんがだ」

どっちでもいいじゃない。ややこしいー

「どうやったら三年で女性社員が社長に就任できるのよ！」

あそこは典型的な同族経営で株を取得しようにも誰も売らないだろうし私にそんな預貯金は無い！二十代の一般社員の小娘を社長にしようとするれば他の者達が承認などするなんてあり得ない。確か社長と専務の派閥に分かれており会長が絶対権力を持っていたはず。

会長の養女にでもなった？ まさか愛人！？

それでも有り得ない

どんな裏技を使ったのよ？？

「向うでは五年経ってるから姉ちゃんは二十八歳だよ」

「えっ そうなの？」



それでも二十八才で社長！ 世界征服されるよりはましか？

「因みに俺は二十三歳」

あんたの年齢はどうでもいいと言いたいが止めておく

「そう： あいつが家族に酷い事してないならそれでいいわ」

「酷い目？ どちらかと言うと父ちゃんはリストラされたけど姉ちゃんの会社に再雇用して貰ったし、兄ちゃんは可愛い嫁さんを貰うし どちらかと言うと恩恵を受けてるよ。 まあ……母ちゃんは相変わらずだけど」

父さん： 一応一流企業に勤めうだつの上がない万年課長だと思っていたけど：日本経済はかなり切迫しているのかも

それより兄さんが結婚かゝ昔から結構モテル人だった。

「兄さん結婚したんだゝ結婚式出席したかったな」

「ああ 羨ましいくらい可愛いお嫁さんで今度赤ちゃんが生まれるってさ」

「私もとうとう伯母さんかゝ」

一度お嫁さんと赤ちゃんに会いたくなる。

などと話をしているとマッキーがお菓子とお茶を持って来てくれる。

「失礼します」

そう言って入って来たマツキーを見た途端顔を真っ赤にさせる健斗  
そして食い入るようにマツキーの胸を見る目は既に血走っている。

我が弟ながら分り易い――マツキーは、もろ健斗のストライクド真  
ん中だから仕方ないだろうけど

マツキーが健斗を好きになる可能性は無いだろう

何せ元が男性だし

お菓子とお茶を出すのに側に来られた途端に体を固くさせ微動だに  
させず顔は更にゆでダコのように赤い

この様子では今だ童貞だな

自衛隊なんて女気なさそうだし

「マツキー 弟の健斗よ。 暫らくこっちにいるみたいだから宜し  
くね」

「はい王妃様」

それからマツキーは健斗に向き直り微笑みながら挨拶をする。

「私は王妃様の侍女を勤めますマツキーグウィと申します。 健斗  
様宜しくお願い致します」

すると突然立ち上がって敬礼をして挨拶を始める。

ガバ！！

「私は橘健斗 二十三歳独身 以上です」

それだけ言うと直ぐに着席して相変わらず顔を紅潮させて固まつて  
いる。

面白！

面白すぎる弟に心の中で大爆笑

戸惑うマツキーに声を掛ける。

「だそうよ。それよりあの亀族の二人を連れて来て頂戴」

「はい王妃様」

そう言つて部屋を出て行くや否や

「ねっねっねっねっねっ姉ちゃん…… マツキーさんに夫とか恋人はいるの!!??」

「いないわよ」

「そっか〜〜〜」

今弟が考えている事がありありと分ってしまう

やった！俺のハーレム構成員だ  
ロリ顔巨乳娘は絶対に俺の嫁に

するぞ〜

などと妄想している。

この分だと異世界トリップすればハーレム野郎になれると今だに信じているのは間違いない。

今だに夢見る少年らしい困った弟を眺めるが、この世界にやって来る根性だけは認めてあげよう。

ハーレムは無理だろうけど一人くらい捕まるだろう

まっ……私の方は捕まった方だけだね。

童貞の弟に恋人が見つかる事を切実に願うのだった。

せめて脱童貞？

## 異世界トリップ三日目その三

美味しいお茶を飲みながら姉ちゃんを見やる。

久しぶりに見る姉ちゃんは全然変わらないと言うより少し若がえた？

人妻と言う淫美な響きが全く似合わず色気と言うものが皆無で相変わらず洗濯胸の姉ちゃん

そもそも胸って揉むと大きくなると言うのは都市伝説だったのか？

もしかすると既に旦那との間に隙間風

何しろ相手は王様だから後宮に美女をわんさか囲っているはず。

ヤッパリ胸が無いのが長続きしなかった敗因だろうな

それよりさっきのマッキーさんの豊満な胸は正に巨乳！！！！

しかも小さな顔におさまる大きな瞳に小さな口はロリ顔美少女そのもの

正に理想が二次元から飛びだしたかのよう

今思い出しただけでも心不全を起こしそうな胸を抑える。

絶対あの人を俺の嫁にする！

この際ハーレムよりマッキーさん一筋だと心に決める。

「顔を赤くしてマッキーで妄想してるの？」

ギククーーーーッ

流石に姉ちゃん 見抜かれている。

茶化されるのが嫌なので此処は誤魔化そう……ゆくりとマッキーさんとは親睦を深めたいからな

「そっそうだ！ 姉ちゃんにお土産があったんだ」

「えっ 何？」

急いで足下に置いていたリュックから先ずどら焼きを取り出す。

「ジャーン どら焼き！」

途端に目の色を変えてテーブルの上のどら焼きを直ぐさま手に取り涎を垂らさんばかりに見詰める。

「こっこっこっこれは……夢にまで見た風香堂のどら焼き！！！！！」

姉ちゃんはドラえもん並みにどら焼きを愛しておりこの風香堂のが

常日頃世界一美味しいと豪語するほど

そして感極まったように突然立ち上がり俺に抱きつく

ガバ！

「健斗！ 愛してる」

はつきり言って姉ちゃんに抱きつかれても嬉しくもなんともない！！

せめて少しは胸があたれば嬉しく無くもないなどと考えていると

ドゴーゴゴ  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
ー  
ン！

背後で並みならぬ殺気で背筋がゾクゾク

なんだこの恐ろしい気配は

何時の間にかこの部屋に誰かが入り込んで来ている???

確認するのが恐ろしくて振り向けず固まる。

「アツ…… チョンマゲお帰りなさい！」

すると姉ちゃんが背後に居る誰かに声を掛けるや否やその人物に飛び付く勢い

「ミユキ この間男は何だ!!」

「違うわよ！ 弟！ 弟だから落ち着いて！」

振り向かなきゃいけないのに振り向けない　凄まじい殺気が俺の背中に感じるぞ!!

「この場で髪の毛一筋残さず焼き殺してやろうぞーーーー!!」

「駄目ー　テーブルにはどら焼きがあるのよ!」

俺はいいのかーーーー姉ちゃん!?

どうやら相手は姉ちゃんの旦那の王様らしいが、俺を浮気相手と勘違いしている。

ヤバイ!!

考えろ　考えるんだ

こういう場合ラノベではどういう展開だ

相手は逆上しているから生半可な手では嫉妬深いヤンデレキャラは懐柔出来ない

「チョツと健斗も固まっていなくて逃げなさい!!」

人間の俺が神様から逃げ切れる訳ねだろー

姉ちゃんの声を無視し俺は急いでリュックを漁り王様用の土産を取り出す。

まさか此れがこんな風に役にたつとわ



「ミュキ離すのだ！ この男の首を搦じり切ってから細切れにして  
くれよう」

ヒエーーーーー

「だから弟だってば！」

どうやら姉ちゃんの声すら耳に届いて無いほど嫉妬に狂ってる？！

姉ちゃんが今だに愛されているのを思い知るがそれどころじゃない  
俺はリュックの底から一冊のアレを取り出し適当にページを開き悪  
霊退参張りのようにそれを盾にしてそれを背後の王様に突き付ける。

「お義兄さん！ 御土産です。 お受け取り下さい——」

ありったけの声を張り上げる。

この手が無効だった場合俺は八つ裂き決定

童貞のまま異世界の地の露となって消えるだろう

「「「……」」」

そして静寂

一瞬時が止まったのかと錯覚するほど

？

恐る恐る目を開くと持って来たアレを顔にくっ付かんばかりに凝視している姿

お陰で顔が見えないが輝かんばかりの金髪だけは分る

ガバ！

そして俺から奪うようにアレを取り上げ次々とページを捲っていくがそんなに顔をくっ付けて見えるのかと疑問だが取敢えず命拾いをしたようだ

ホッとしていると

「健斗何を渡したの？」

姉ちゃんが聞いて来るのでニヤリと笑って答えてやる。

「俺が特別監修した姉ちゃんのアльバムだ」

「はぁゝあ？」

「母ちゃんが嫁に行った娘の写真は向うの家を持って行くもんだとか煩いからパソコンに取り込んで姉ちゃんの写真集風に編集加工したんだ」

俺が何時間も掛けて作成した力作

素材が姉ちゃんなのが残念だが親愛を込めて作ったら百ページを超える大作

王様も気に入った様なので苦労が報われた。

うんうん

しかし何故か姉ちゃんが怒りだす。

「このバカちゃんがー！ー！」

ガッツン！

姉ちゃんの拳が俺の頬を殴ると勢いで尻もちを付く程の威力

「グウワツ！ 痛ってー！ 何するんだよ…」

しかし既に姉ちゃんは次の王様に向かう

「ぎゃー！っ チョンマゲ見ちゃ駄目！ 返してよ！」

姉ちゃんは王様をチョンマゲと呼んでるが本名か？

チョンマゲってあの侍のチョンマゲ？？

背の高い王様にピョンピョン飛び上がりアルバムを取り上げようと奮闘する姉ちゃん

「それ以上見たら口効かないから！」

まるで小学生のような事を言う

「ミユキ……それはなкаろう……余はこの絵姿集が欲しい」

物欲しそうに姉ちゃんを見やる王様

「それは私の物　それとも私よりそんな過去の私の写真の方が大事なのね！」

「違う！　断じてそんな事はないが……」

漸く王様の顔が現れるが

すげー……人外の美しさとはこの事か……

今まで見て来た中で断トツ一位

こんな超絶美形の王様を射とめた平凡顔姉ちゃん

流石に異世界トリップの成せる技だなど関心している時でも二人の攻防は続いている。

「さあ　そのアルバムを返して」

姉ちゃんも何がそんなに嫌なんだ??

「せめて十枚ぐらい許してくれ」

王様は目を潤ませ普通の女なら一瞬で許しそうな色気を漂わせ姉ちゃんに頼み込む

「無理！　そんなの全部焼却よ」

おおー 姉ちゃんに美形の色気は効かないのか？

「ならば一枚でも良いから」

なんだか王様が可哀想に感じるが姉ちゃんも頑固者だからな

それにこんな事であろうかともう一冊用意してある俺

伊達に赤ちゃんの頃から一緒に暮らしていない

初めからアレは囷なのだ

俺はリュックからコッソリメモとペンを取り出してメッセージを書く、勿論日本語だが神様なら大丈夫だろう

「今 渡さないなら暫らく牡丹の君の所に行くから」

「ミユキ~~~~」

情けない声を出す王様

「姉ちゃん別にいいじゃん。変な写真なんか入って無いんだし旦那に見せてもいいだろ？整形してんならヤバイけど」

「健斗は黙ってなさい！ あんたの恥ずかしい話をマッキーに話すわよ」

「ごっつゴメンなさい……」

姉ちゃん相変わらず最強

「弟が折角土産として余にくれた物だから 余の物だ」

何時の間にか弟として認識してくれたらしい

「健斗の物は私の物なの！だから譲渡権も私にあるの！」

なんですかそのジャイアニズムな発言！

「ミュキの意地悪……」

どうやら王様も諦めたらしく未練たらしそうにアルバムを姉ちゃんに渡し完全に尻に敷かれていた。

姉ちゃんももう少し分を弁えないと王様に捨てられるぞ

「あゝ すみません。 俺が余計な物を持って来たようで」

「よいのだ…… 僅かとは言えミュキの幼き日々の愛くるしい姿を見ただけでも余は幸せ」

憂いに満ちた美しい姿を側で見ているだけでドギマギ

姉ちゃんこんな美しい人によくあんな態度をとれると感心してしまう。

「改めて挨拶もなんですが深雪の弟で橘健斗と言います。 これ、家の両親からの預かって来たお菓子です」

「ミユキの御両親から それは有り難く受け取ろう」

王様の土産に持たされた東京名物「ひよ子」

偉い人にこれは無いんじゃないかと思うが母ちゃんには逆らえない

「それはひよ子！ きゃー嬉しいー」

そう言って王様が受け取る前に強奪する姉ちゃん

なんか王様が憐れ

だけどそんな姉ちゃんを愛しそうに見詰めているので本人は気にして無いらし

かなりの病み具合だな……

そして姉ちゃんがひよこの包装を外すのに気をとられている内にコツソリと王様に囁く

「あの……おにい 王様 コレ」

王様を義兄と呼んだらヤツパリ拙いかと思いい言い直してメモを渡す。

「?…!!」

それを受け取った途端、更に顔を輝かせ美しさをアップさせるので直視不能

美しさで一瞬目が麻痺

美形過ぎるとそれだけで凶器になると初めて知ったぞ……

「弟よー水臭い！余の事は兄と呼んでくれー」

「それじゃあ遠慮なくお義兄さんと呼ばせて貰います」

最初の頃の殺されそな雰囲気はどこえやら一気にフレンドリーな王様

どうやらメモを読み取る事が出来たらしい

メモには『もう一冊あるので後でコッソリ渡します』だ

「良く見ればミュキに似ておる。可愛い弟が出来余も嬉しいぞ」

姉ちゃんの顔に似ている事も功を奏したようで気に入られたようでホッとする。

もしマッキーさんと結婚するとしたら色々お世話になるだろうから取り入っておかねば

「俺もこんな立派な義兄を持て嬉しいです」

本気でそう思う

日本だったら結婚しても此処までの男を捕まえるなんて不可能

大学時代に振ったイケメンを遥かに飛び越えたレベル



畏れ多すぎるよな……

「そんな所で立ってないで皆でひよ子を食べましょう」

そう言って声を掛けて来る姉ちゃん

テーブルの上には可愛く並んだひよ子達

しかしどら焼きが一個も無い？

恐らくひよ子の箱に隠したな……相変わらず意地汚い姉に安心

本当に変わらない

王妃様なんかになって嫌な女になっていたらどうしようかと思って  
いたが

姉ちゃんはヤッパリ姉ちゃんだった！

王様と仲睦まじそうな様子を見て俺も早くマッキーさんところなり  
たいと願わずにはいられなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5196t/>

---

玄武国物語 「私と王様」

2011年12月2日13時47分発行